Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-15

人新世における人間と非人間との関係に関する考察 ーティモシー・モートンと石牟礼道子を手がかりとしてー

張，凌霄

(Degree)
博士（学術）
(Date of Degree)
2022-09-25
(Date of Publication)
2023-09-01
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲第8412号
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100477838

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

博士論文

人新世における人間と非人間との関係に関する考察

―ティモシー・モートンと石牟礼道子を手がかりとして―

令和 **4** 年 **7** 月 **8** 日
神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程

所属専攻	文化構造専攻
教育研究分野	倫理学
主指導教員	中 真生 教授
副指導教員	茶谷 直人 教授
	原口 剛 准教授
学籍番号	**162L039L**
氏名	張 凌霄

目次

序章 3
Ⅰ　世界の終焉と人間的尺度を超えたもの..... 6
Ⅱ　本論文の構成 9
第一部　ティモシー・モートンの「ダークエコロジー」思想に関する試論 14
第一章　バウンダリレスネス―共存の哲学..... 14
第一節　「ダークエコロジー」による自然の消滅..... 14
Ⅰ　アンビエント詩学における自然..... 14
Ⅱ　ロマン主義時期における自然..... 18
Ⅲ　自然の消滅..... 23
第二節　「ダークエコロジー」における非人間―アンビエンスから奇妙なよそ者、そしてハイパーオブジェクトへ..... 25
Ⅰ　アンビエンス..... 26
Ⅱ　奇妙なよそ者からハイパーオブジェクトへ..... 30
第三節　小括..... 37
第二部　「人類の時代」―人新世 39
第二章　ようこそ、人新世へ 39
第一節　我々が人新世にいる！..... 40
Ⅰ　統合の時代―限界を乗り越えて..... 40
Ⅱ　絶滅への道を生き抜く..... 45
第二節　人新世は本当の地質時代なのか？..... 49
第三節　小括..... 52
第三章　ヒト種の代わりに「――新世」の空欄をめぐる人新世概念への批判 54
第一節　クトゥルー新世―ダナ・ハラウェイの「共生創造」（symbiogenesis）を中心に 55
Ⅰ　クトゥルー新世の語り..... 56
Ⅱ　テラポリス（Terrapolis）における「共生創造 」（symbiogenesis）を作ろう！.. 63
第二節　資本新世？..... 68
Ⅰ　自然の営み..... 69
Ⅱ　生命の網における資本主義..... 71
第三節　小括..... 77
第三部　人間は何をしていたのか？..... 80
第四章　石牟礼道子と水俣病事件..... 80
第一節　対等の目線と本心からの詩的な言葉..... 82
Ⅰ　境界線のない世界へ..... 83
Ⅱ　心を読める巫女..... 87

第二節　非人間との共存は簡単なことであるのか？ 88
Ⅰ　有毒物質を愛することは可能だろうか？ 88
Ⅱ　理想的な均衡ではない共生 90
第三節　末世に希望を見つけて 94
Ⅰ　知性と感情 94
Ⅱ　夢と希望 96
第四節 埃の中に咲いた花 99
Ⅰ　失意の底から立ち上がる 99
Ⅱ　やむをえない妥協 100
第五節 『苦海浄土』はロマン主義文学作品なのだろうか？ 103
第六節　小括 105
第五章　生物多様性と文明の進路 108
第一節　生物多様性―人間と人間を除く生き物がつながる網の中で生きている 109
Ⅰ　生物多様性とは何か？ 109
Ⅱ　生物多様性の価値 111
Ⅲ　人間の責任 114
第二節　野蛮と並行する文明―生物多様性の喪失 116
Ⅰ　自然の破壊 116
Ⅱ　文化のあり方の模索 118
第三節　文明の進路 122
Ⅰ　トップ・ダウンの力 122
Ⅱ　ボトム・アップの力 125
Ⅲ　進行中の活動 127
第四節　小括 128
終章　人間と非人間との錯綜した関係 131
補論 137
Ⅰ　核放射線との共存 137
Ⅱ　神戸における地エネと環境の地域デザイン事業 143
Ⅲ　水俣の環境復元事業 146
初出一覧 151
参考文献 151
謝辞 159

序章

今まで人間は地球に何をしてきたのか。

産業革命以来、人類の力が時代の進歩と発展を推進する過程において果たした積極的な役割については言うまでもない。人類の版図が拡大することに伴い、一八世紀末から一九世紀初頭にかけて「工業主義」という言葉が登場した。この言葉は、人類活動により地球を開発することを肯定した。人間の需要を満たすために、人間は地球環境を変化させてきた。しかし、それと同時にまた別の声が生まれた。その声は、悲観的な傾向を示していた。つまり、柔らかな緑の代わりにコンクリートが地球の硬くて冷たい殻になったというものである。蒸気機関の改良と化石燃料の普及により、温室効果ガス、特に二酸化炭素の蓄積が加速し、人間の飛躍的な発展が生態系に地球規模の物理的な変化を引き起こし始めている。特に近年は、人類活動による災害が多発している。例えば、二〇一一年の福島第一原子力発電所の事故で、日本の東北地方が壊滅的な被害を受けたことは記憶に新しい。さらに、二〇一九年に勃発した新型コロナウイルスのパンデミックによって、人類は人類活動による生存危機に直面することになった。この一連の深刻な事態は、「絶滅」という刺々しい言葉を人々の視野に入れた。人類による環境危機が絶滅をもたらすのではないかという直面せざるを得ない問題は人間の神経を緊張させた。

二〇一八年一〇月、IPCC（Intergovernmental Panel on Climate Change 気候変動に関する政府間パネル）は、世界の平均気温上昇を産業革命前のレベルと比較して 1.5℃以内に抑えるべきであると警告する特別報告書を発表した。IPCC によると、気温上昇が 2℃に達すると世界のサンゴの 99%以上が消え、夏の北極海の海氷は昇温が安定した後、少なくとも約一〇年に一度の可能性で消滅する[1]。気温が 2℃以上に上がる場合の悪影響は想像を絶するであろう。しかし工業化以降、地球規模の気温上昇は約 1℃に達している。この状況において、地球は将来ますます多くの災害に見舞われるであろうと推測できる。過去五〇年間ないし一〇〇年間で、人類が地球を変えた程度は、歴史上のどの時期よりもはるかに大きかった。人類による開発はもはや地表に限らず、様々な資源の開発は地下、海底などに浸透している。これは生態系や気候変動に予測不可能な影響を与えている。さらに、人類による資源の略奪と地質構造の大きな転換により、人間と地質学が高度に統合された時代になったと言えるだろう。このような背景の下、「人新世」（Anthropocene）という新しい言葉が生まれている。非常に若い地質概念として、地球の直近の地質年代を表すものである。

「人新世」とは、一九八〇年代にアメリカの生物学者 E.F.ストーマーによって創造され、二〇〇〇年にノーベル化学賞を受賞したオランダの大気化学者 P.クルッツェンが普及させた地質学的概念であり、完新世に続く新たな地質時代である（ボヌイユ、フレソズ 2018）。

---

[1] 環境省：『IPCC「1.5℃特別報告書」の概要』（2019 年 7 月版、pp.38-39）。本資料は気候変動がもたらす潜在的な影響とリスクについて詳細に分析している。
（http://www.env.go.jp/earth/ipcc/6th/ar6_sr1.5_overview_presentation.pdf において 2022.6.24 閲覧）。

地質変化と人間の力を結びつける人新世は、人類の痕跡が地球の隅々にあり、それらが地球システムに衝撃を与え、人類の力がこの惑星内の強大な力に変化した時代を指している。この言葉が世に出てきたことにより人新世概念を引用した一連の文章が一瞬にして大衆の視野に入ってくるようになった。賛否を問わず、さまざまな分野の学者たちが、人新世を背景に環境問題について考え始めている。人新世において、気候変動は自然科学者の議論だけではなく、人文科学の議論にも回帰してきた。哲学者である B.ラトゥールがインタビューで述べたように、「科学研究者として私たちが何をしているのかを理解していない人たちは、私たちを必要としていることに気がついたのである。ロビー活動の攻撃に過ぎないという同僚たちの非難に、彼らは知能の面においても政治的にも哲学的にも抵抗できない」[2]。換言すれば、人新世は歴史の転換点であろう。人新世の到来をきっかけに、ポストヒューマニティーズエコクリティシズム思想家である T.モートンは「ダークエコロジー」(dark ecology)を提唱した。

モートンはライス大学の名誉教授であり、食生活や環境人文学、哲学に関する研究を進めている。長年イギリス文学の知的薫陶を受けたモートンは、文学や芸術に造詣が深い。彼の作品は、ロマンティックで詩的なものである。だからこそ、モートンの思想を読解することは非常に難しい。筆者はモートンの抽象的な思考を整理して要約することで、モートンのエコロジー思想の流れをより明確に描き出したい。

モートンは非常に多作な研究者で、十数冊の本を出版している。モートンは研究の初期に、主に食生活および文学を出発点として、一八世紀ヨーロッパの社会的・政治的思想を再考していた。しかし、二〇〇七年以降、モートンは地球温暖化などの環境危機が喚起した人間的尺度を超えたものへの新たな思考に目を向けた。

モートンは、二〇〇七年に刊行された『自然なきエコロジー』において、一九世紀ロマン主義環境文学に対する批判を通じて、自然を排除してこそ人間と非人間の関係をよりよく考えられることを主張し、環境人文学者の注目を集めた。この著書は芸術、美学と哲学など多岐にわたる領域に関与する。モートンは自然に取って代わる非人間的な「とりまくもの」を中心に論じている。彼は雰囲気や感覚に着眼し、自然のないエコロジー思想を作り上げることに力を注いで、『自然なきエコロジー』の最後に自分のエコロジー思想を「ダークエコロジー」と名付けた。モートンは世界が死に向かっていることを認識しており、人間と死につつある世界との共存を強調している。不幸からの迅速な脱出や汚染の除去を望むのではなく、その中に深くはまり込んで、奇怪千万な「とりまくもの」と切り離せない自分を認めることはモートンが唱道している主題である。

---

[2] de Vrieze, Jop. “Bruno Latour, a veteran of the ‘science wars,’ has a new mission”. 2017. フランスの哲学者で社会学者の B.ラトゥールは、大企業と気候変動を否定する一部の科学者による科学技術への長年の批判が、科学と気候変動に対する不信と疑問を深めたことを認めているが、科学への信頼を取り戻す手助けをしたいと考えている。そこで科学ジャーナリストである de Vrieze, Jop. がラトゥールにこの問題についてインタビューした。(https://www.sciencemag.org/news/2017/10/bruno-latour-veteran-science-wars-has-new-mission において 2022.6.24 閲覧)。

その後、モートンは『エコロジー思考』（2010）において、人間は非人間よりも特別な存在ではないということを検討している。モートンは、種の起源を突破口にして、人間と動植物の生物学的な類似性を通じて、人間と非人間の関係が切り離せない絡み合いであることを力説する。彼は、『エコロジー思考』の最後で、未来のエコロジー思想に関わる展望に言及した。エコロジー思想を把握するために、我々が不気味さを感じるものを考えなければならない。モートンの視点では、このようなものはある種の毒物（toxic things）である。モートンは、G.ハーマンの「オブジェクト指向存在論」（Object Oriented Ontology=OOO）の影響を受け、人新世における目に見えない有毒物質を視野に入れて、大胆に「ハイパーオブジェクト」（hyperobject）という独自の概念を打ち立てた。モートンがハイパーオブジェクトを有毒物質のイメージと関連付けるのは、ハイパーオブジェクトが「地球温暖化とともに、我々の永続的な遺産になるであろう」（Morton 2010：130）と考えるからである。ハイパーオブジェクトは人々の理解が到達することできない何かである。

ハイパーオブジェクトの議論が深まるにつれて、二〇一三年に出版された『ハイパーオブジェクト』において、モートンは地球が放射性物質の堆積物に覆われており、その堆積物は人新世の到来を象徴していると述べている（Morton 2013：15）。人新世の忠実な擁護者であるモートンは、人新世概念をかけがえのないものとして肯定した上で、環境危機や世界の終焉の恐怖の中で、人間的尺度を超えたハイパーオブジェクトの概念を中心に人間と人間以外のものとの間にどのような関係が維持されているのかをさらに追究している。二〇一六年、モートンはついにダークエコロジーをテーマにした『ダークエコロジー』を出版した。この著書では、ダークエコロジーにおける人間の無知と無力さについて詳細に述べられている。無知なのは、人間が非人間に対して何も知らないようだということである。人間による環境へのダメージと再構築はいつも一知半解の状態で行われるようである。この活動は自発的に、あるいは受動的に人間の依存する世界を傷つけている。人新世がついに私たちを目覚めさせたという事実は、モートンにとって朗報である。一方で、無力なことに、大多数の人々は自分たちが世界を死に追いやっていることを知っていることは否定できず、私たちは何かの手段を通じて死にゆく世界を救おうともがいて試みているが、その効果はほとんどないように思われる。それは、人間の有限性を反映したものでもある。

『ヒューマンカインド』（2017）においてモートンは人間と非人間の共存のあり方を論じた。親密な共存がモートンの主張であり、非人間との連帯は、人新世における人間と非人間の密接な関係の再生である。その後に続く『エコロジカルになること』（2018）においては、モートンはこれまでの議論を踏まえて、再び彼のエコロジー思想を読者に展示している。モートンの言葉には、絶望的な雰囲気が去来するのではなく、活気ある未来への思いが込められている。モートンは世界の終焉を恐れず、一種の解放と捉えている。モートンは、世界の終末が、人間中心主義を捨て、非人間と絡み合う共生体になるための勇気を与えてくれることを願っている。

Ⅰ　世界の終焉と人間的尺度を超えたもの

モートンのエコロジー思考は多くの学者たちから注目されているが、モートンに関わる先行研究は相対的に少ない。筆者は、これらの先行研究を、日本国内と国外という両方から総括する。

まずは国外の状況についてまとめる。国外においては、モートンの思想の起源には関心を持たず、モートンのハイパーオブジェクトに焦点を当てて今日の環境問題を論じている研究者が多い。彼らはモートンのアイデアを肯定する一方で、彼の思想の矛盾も見つけている。しかし、これらの学者たちは、モートンの考え方の限界を詳しく探究せず、モートンの思考が希望を打ち砕くのではないかということを概説するにとどめている。例えば、E.G.ボールトンはモートンのハイパーオブジェクトを中心に気候変動を論じて、モートンの文章は極めて難解で、矛盾も少なくないと指摘した。ボールトンによると、モートンは、人間は地球温暖化のような環境危機を受け入れて生きていくべきだと提唱した。これは人間への警鐘である。しかし、モートンが唱えた自然の不在や人間の限界は、環境保護主義者の希望を粉砕するかもしれない[3]。また、モートンがハイパーオブジェクトの開示者の位置にどのように入ったかを説明していないと M.シュミートと K.コデンブロックは指摘する。どこにでもあって底が知れないのがハイパーオブジェクトの特徴である。では、モートンはどのようにしてこれらの問題を認識したのか。モートンはこれには応じなかった。しかし、シュミートとコデンブロックは、モートンの考察が認識論への新たな挑戦となる可能性は否定できないと考えている[4]。

次に日本国内でいえば、モートンの研究範囲が最も広く、解読が最も透徹しているのは哲学者の篠原雅武である。二〇一六年に出版された『複雑性のエコロジー　人間ならざるものの環境哲学』においては、篠原は『自然なきエコロジー』においてモートンが提出した「とりまくもの」を中心に論じている。この著作はモートンの環境思想の読解と解釈を目的としているが、むしろ篠原がモートンに触発されて、モノに関する議論を用いて現代のさまざまな社会問題を考察するものである。たとえば、境界の設定、生存空間の閉鎖による都会人の孤独、自殺、無差別殺人などである。篠原はモートンの環境哲学に心酔を示しており、本書の内容はモートンが篠原にどれだけ影響を与えたかを示している。篠原によれば、モートンの思考する対象は感性の知覚の上に詩のような雰囲気を感じること、すなわち「アンビエンス」（ambience）と呼ばれる意識状態である。この感覚的な意識は、目の前で明示されているのではなく、無意識の状態の中にある。「アンビエンス」は形もなく、触れることもできないが、物の周囲にあふれている。この感覚的な意識が限界の桎梏を突き破ることで、先に

---

[3] Boulton, Elizabeth. “Climate change as a ‘hyperobject’: a critical review of Timothy Morton’s reframing narrative” In: *WIREs Climate Change* **7**（5）. 2016. pp.772-785. p.781.

[4] Schmids, Mario. & Koddenbrock, Kai. “Against Understanding: The Techniques of Shock and Awe in Jesuit Theology, Neoliberal Thought and Timothy Morton’s Philosophy of Hyperobjects” In: *Global Society* **33**（1）. 2019. pp.66-81. p.79-80.

挙げた社会問題に取り組むことができる。たとえば、この本には「千葉県精神科医療センター」という空間が何度も出てくる。物事を画一化し、秩序を整えようとするために、人間は物事を分類し、それを配置するためにいろいろな区画に分ける。篠原から見れば、精神医療センターは正常な秩序を維持するために設けられた、整然として無矛盾な空間である。篠原は精神疾患者の中にはこの秩序に馴染まない人が必ずいると考えている（篠原 2016：164-165）。なぜなら、閉じこもりを望んでいない精神疾患者から発する雰囲気が訪問者の中に刻々と入り込んでくるのが感じられるからである（同書：166）。すなわち、整然として矛盾がないように見える空間の中にも、実は矛盾がある。さらに、篠原はモートンの影響を受けて、世界の終わりについて新たな知を得る。篠原によると、「世界の終わりは、地球という惑星の物理的な消滅を意味しない。それは、『世界』『環境』『自然』『空間』といった、人間に限定される領域を境界確定し意味のあるものとして実在させる概念的構築物が、消滅するということを意味する」（同書：228）。篠原は災害の発生、世界の崩壊は従来の境界を崩壊させ、それは「とりまくもの」に触れる好機をもたらすという。具体的には、篠原は、放射能汚染などの事象が、世界や場所の概念を消滅させ、不思議さ、大変さ、脆さといったものについて思考することに寄与していると考えている（同書：226）。

これに続いて、篠原は『人新世の哲学　思弁的実在論以降の「人間の条件」』（2018）においてモートンに言及している。しかし、前著とは異なり、この著書は H.アーレントの人間の条件をめぐる考察を、現代の革新的な思想の潮流に照らして再検討したものである。篠原は人新世の到来を発端として、近年頻発する各種の災害が人間の力が環境に与える影響を示していると説明する。つまり、人間と自然との間には、すでに密接な関係がある。同時に、人間の有限性はまたこれらの災難の中で徐々に現れている。予想外の巨大で、完全に把握できないほどの大災害は人間に地球から離れて生存の永続を求めることが極めて困難であることを意識させる。篠原は時代の相違により、アーレントの考えと人間と自然の関係に関する現代の最先端の思考との間に明らかな乖離があることを否定しない。政治学者であるアーレントは、人間が孤立、迫害、不安定感から突発的な暴力を避けるためには、安定した人間世界を作ることが重要だと考えたと篠原は指摘する。「一方には人間が自分たちの手でつくりだす人工的な世界があり、他方には、人間がただの生物学的な生き物として属することになる自然環境がある。そしてアーレントは、後者の自然環境を、人間世界を脅かす荒々しいものと見なして忌避している」（篠原 2018：153）。アーレントに言わせれば、世界を創造する過程で自然を傷つけることがあっても許される。すなわち、自然はアーレントの思想の枠組みの中で材料を提供する背景にすぎない（同書：151）。言い換えると、アーレントにとって、事物とは人間存在を条件づけるものに過ぎない。人間は人間世界の領域でしか事物を認識することができない。人間世界の外側にある事物は人間世界とは何の関係もない（同書：152-153）。しかし、人新世において、自然破壊の代償として維持されている人間世界は安定したものではない。あなたが揺るがないと確信しているものはすべて人新世で変わる可能性がある。篠原はモートンの環境哲学を用いてアーレントの考察を検証している。篠原

はモートンが提唱するものが完全に独立しているわけではなく、他のものと相互につながり、絡み合いながら存続していくことを指摘する。いかなる事物も恒常不変のものではなく、特に人新世において、事物の脆さは明らかになる。篠原は次のように述べた。

> モートンは、事物の領域を語るとき、そこではただ諸々の事物が存在し、人間的なものも人間ならざるものもフラットに連関するということを言おうとしているのではない。彼の場合、事物は不変の恒常的な現前の状態で存在するのではなく、壊れつつそして消えつつあること、消滅しつつあることの途上において偶々存在しているのにすぎないと考えている。しかも、この偶々というあり方は、人間的な領域にありながらそこと溝を隔てた状態で接しつつ、それでも人間的な領域のなかに完全には包含しえずむしろ人間的な領域をその一部分として含み持つ広大なひろがりにも属しているという、事物にそなわる奇妙な性質のためである。（同書：159-160）

モートンが主張する不定、脆弱、あちこちに散らばっている性質こそが、ものの本質なのである。これらの性質はいずれも、アーレントが唱える人間世界とは無関係の事物に反発したものである。すなわち、「散らばった事物は、アーレントのいう世界ならざる領域に追放されたのではなく、人間的な世界から解放され、それをとりまくエコロジカルな領域において存在している」（同書：162）。

篠原の著書『人間以降の哲学　人新世を生きる』（2020）でモートンは再び登場する。篠原はこれまでの研究を基に、さらに人間の消滅という問題を昇華している。篠原は人間不在の世界に視線を絞り、二〇〇〇年以降それぞれの学者が人間的尺度を超えたものをどう捉えるかを論じた。篠原はモートンの「私たちは世界の終わりの後の状況を生きている」（Morton 2013：7）という一文から啓発を得て、人間の制御範囲を超えたものとの関係を探究しようとして、モートンの「とりまくもの」の定義に強い関心を持っている。不安定で脆弱な「実在感覚」は、モートンのすべての主張の根底にある。すなわち、私たちは周囲の「とりまくもの」と「相互連関的な網の目のなかで共存している」（篠原 2020：5）。人新世を背景に、形も音もないが、痕跡を残すという今まで注目の範囲に入っていなかったものを考えざるを得ないからである。例えば、絵画とメロディが発する「アンビエンス」、地球温暖化などである。感覚のレベルでは感じ取ることはできても、目に見えない、壊れやすい、体の中や周りに浮遊しているが完全に把握することはできない無形なものである。これは篠原に人間のいない世界にも人間の痕跡が残っていることを連想させる。人間的尺度を超えたものは人間と深く絡んで関わっているが、人間の生活世界に埋められる。人間はこの機会に、人間的尺度を超えたものへの関心を示し始めるのかもしれない。

篠原は『人間以降の哲学』の中で大量のハイパーオブジェクトという人間的尺度を超えたものの特徴をくみ取って生活世界と人間のいない世界の差異を探究する。なぜなら、ハイパーオブジェクトは、直接触れることのできない人間的尺度から外れたものであるからだ。世界の終わりは、生活世界に隠されていた多くの意識しないものを浮かび上がらせる。それ

は、過去の自己完結していた閉鎖的な空間が徐々に開かれ、「とりまくもの」と人間がつながっていくことを意味する。篠原はこれを都市空間や建築などと結びつけ、都市や建築の原初的衝動は安定の追求にもとづくと指摘している。これらの空間で生きている人間は、自分のコントロールを超えているものに気づいていない。しかし、戦争、災害などが起こり、建物は破壊され廃墟と化す。これらの廃墟は虚無ではなくて、建物に内包されている漂う不定形のものを顕在化させる絶好の機会である。これらのものが露出するにつれて、安定していた人間世界はついに破綻していく。とくに『人間以降の哲学』の第三章において、モートンが主張する不安定な世界を篠原は多くの言葉を用いて再現している。篠原は人間世界の脆さと不安定さを議論の立脚点とし、線引きされた空間の崩壊や歪みが世界の原風景であることを擁護する。

篠原の著書においてはモートンがかなりの分量を占めているので、篠原がモートンに共感していることは明らかである。篠原は、モートンの考察を解釈し、分析する努力を惜しまない。そして何よりも、彼はモートンの環境思想を日本の学者に紹介したいと考えている。篠原は、モートンのエコロジー思想が、閉鎖的な空間から生じる社会問題と、世界の終焉にある人間が環境とどう関わるべきかという問題の両方に積極的な影響を与えると考えている。しかし、この三作はいずれもモートンの思想の欠点には触れていない。

以上の先行研究から明確なことは、モートンのダークエコロジーやハイパーオブジェクトの概念が広く注目されているにもかかわらず、モートンに関する研究はあまり行われていないことである。また、モートンの思想の系譜を体系的に整理し、モートンが提唱する人間と非人間との共存の限界を見出すことを通して、人間と非人間の関係の複雑さを抽出することもほとんどなされていない。

Ⅱ 本論文の構成

本論文の目的は、モートンのエコロジー思想の特徴と意義を見出し、水俣病事件と生物多様性の保全を手がかりとしてモートンのエコロジー思想の限界を明らかにすることにある。モートンの考えでは、この世に純粋無垢な自然は存在しない。人新世の時代という文脈の中で、人間の有限性と人間的尺度を超えた非人間の不確実性はモートンの関心の焦点である。モートンの考える非人間には、植物や動物などだけでなく、肉眼では見えない有毒物質も含まれる。人間は人間的尺度を超える非人間を完全に認識し、コントロールすることができないため、環境を元の状態に戻すことはできないとモートンは考えている。だからこそ、モートンは人間が、世界がもはや純粋ではないという事実を受け入れ、非人間と親密かつ非調和的に共存することを望んでいる。しかし、モートンは、人間と非人間との共存が非常に複雑な問題であることを見落としている。このため、筆者はモートンの主張を極端であると考えている。

筆者は、人間と非人間との共存という課題を、人間側と非人間側の両方から考察すること

が必要であると考えている。モートンは、すべての人間が非人間と切り離せない存在であることを受け入れるべきだと提唱している。しかし、今日の環境危機は全人類の責任なのだろうか。第二に、地理的、経済的、政策的、医療的、職業的、年齢的など多くの要因によって、直面するリスクとその対処能力は個人によって異なる。人間の間の差異を無視して、すべての人間が非人間と共存すべきだと主張するのは、公平と正義の原則に反する。さらに深刻なことは、有毒な非人間と大量に共存する人々が、健康や精神にダメージを受け、愛する人を失い、差別を受ける可能性があることである。一方、モートンの提示する非人間とは、動植物や有害物質など、人間以外のあらゆるものを指している。人間と有毒物質の共存は本当に可能なのだろうか。また、その場合、有毒物質の量はどの程度なのか。有毒物質と人間の共存を許せば、環境を犠牲にして生産性を上げようとする経済発展モデルに貢献し、環境破壊を悪化させ、社会的不公正を拡大させることにならないか。このような疑問を持ちながら、水俣病事件と生物多様性の保全を丁寧に考察していくことで、人間と非人間との共生という問題の複雑さが明らかになると筆者は期待する。本論文は六つの章で展開される。

第一章では、モートンの主要な著作である『自然なきエコロジー』から、ダークエコロジー思想の起源、具体的な内容およびそれが示唆する意義について詳しく述べていく。「ネイチャーライティング」（nature writing）による自然環境や雰囲気から啓発を得て、モートンは非人間の考察を始める。モートンは、非人間的なものは人間を取り囲む「アンビエンス」のようなもので、つかみどころがなく、逃れがたいものだと考えている。同時に、モートンは、ネイチャーライティングで描かれた自然は、実は現実には存在しないことを発見した。 一九世紀のロマン主義時代における消費主義の影響で、自然も商品になっていた。それゆえ、モートンは、自然を取り去るという文脈で、人間と非人間との非調和的な共存を促したのである。これはダークエコロジーの本旨でもある。モートンの非人間的な概念も、思弁的実在論と OOO の影響下で、アンビエンスから奇妙なよそ者、そしてハイパーオブジェクトへと三段階の変化を遂げている。特に、ハイパーオブジェクトは、地球温暖化や核放射線といった環境危機と結びついている。

第二章では、人新世という地質概念に焦点を当てる。人新世はモートンが強く擁護している地質学的な概念である。モートンは、地層に人間の力が入り込んだ人新世が、人間と非人間の絡み合った関係を適切に表していると考えた。しかし、モートンが人新世を唱えたからといって、人間の中心性を認めたわけではないことを筆者は強調しておきたい。むしろモートンは、人新世において、人間活動が引き起こした、人間の手に負えない一連の環境危機を通じて、人々が人間の限界を認識し、それによって地球がもはや純潔ではないという事実を受け入れることを期待している。一方、モートンは、人新世の始まりは新石器時代にまでさかのぼることができると考えている。そしてモートンは、人新世の環境危機は、世界中に広がった農業のあり方という「アグリロジスティクス」（agrilogistics）によって引き起こされたと指摘している。しかし、他の学者による人新世の開始時期に関する考察を検討すると、人新世の原因はモートンが提案するような単純なものではないことが明らかにする。人新

世は、人間に関する地質学的な概念以上に、歴史、文化、社会、経済の発展と密接に結びついているものである。

第三章では、D.ハラウェイによるクトゥルー新世と J.W.ムーアによる資本新世という人新世に代わる言葉を詳細に検討し分析する。ハラウェイは、人新世は人間の力を誇張しがちだと考えている。ハラウェイの考えでは、他の種の生物と比較して、人間には特別なものは何もない。人間は、他の生物との結びつきの中でしか機能し、生存することができない。人間の力を強調しすぎると、人間と人間以外の生き物との密接な関係を見失いがちになる。ムーアは、人新世によって人間の区別が曖昧になり、環境危機の責任は我々全員にあると思い込んでしまいがちだと主張する。この点についてモートンは、植民地主義が人新世の環境危機を引き起こしたことは認めるが、極端な話、すべての人間が消費主義の影響を受けていると主張する。つまり、モートンは、環境危機の責任は先進国の富裕層だけでなく、すべての人間にあると唱えている。しかし、ムーアは、資本主義的生産様式のもとでは、先住民や奴隷とされたアフリカ人などが人間の領域から排除され、安価な自然の一部となったことを指摘する。人新世の環境危機の責任は、特定の人物ではなく、資本主義的生産様式全体にあるのである。筆者はクトゥルー新世と資本新世が示唆した意義からモートンのダークエコロジー思想の限界を見出したい。

第四章では、第三章の主張を受け、ダークエコロジー思想を現実世界の枠組みの中に置き、水俣病事件に対する石牟礼道子の議論を手がかりとしてダークエコロジーの欠点を補うことを試みる。石牟礼は日本の詩人であり作家である。環境文学における石牟礼の功績は、近代日本の文壇において画期的なものである。近代工業化の急速な発展は、日本に莫大な利潤をもたらすと同時に、環境汚染による悲劇を引き起こした。水俣病事件はその悲劇の一つである。石牟礼は、『苦海浄土』において、俊逸で浪漫的な筆致を用いて、人間と環境の相互依存の関係を描き出し、水俣病に苦しむ人間像を描いた。

水俣病事件で露呈した政府、社会、医療の問題と教訓を提示する石牟礼や宇井純らの議論、リスク社会における有毒物質の許容値に関するドイツの社会学者である U.ベックの考察、川本輝夫および緒方正人らの水俣病被害者と加害企業との闘争などを徹底的に分析して、筆者は人間と非人間との共生の複雑さを提示する。水俣病患者と有機水銀の関係は、まさにモートンの提唱する人間と非人間との非調和的な共存の姿である。モートンとは対照的に、石牟礼は水俣病事件を通して、人間と非人間との共存の複雑さを見抜いている。具体的には、水俣の住民と自然との相互依存関係を見る一方で、水俣病患者と有機水銀との痛ましい共存を見出したのである。水俣病の被害者は有機水銀との共存を素直に受け入れることができなかった。モートンは、被害者の健康や心の傷を無視し、生き延びようとする本能を無視する。工業化によって引き起こされた環境汚染が、自然に依存する水俣の住民に致命的な影響を与えることは無視されている。モートンの提唱する非調和の共存は、金銭と利益が最優先される産業文明の価値観を促進するものである。著者は、ダークエコロジーの最も暗い意味は、すでに汚染された部分が修復されないことであると考えている。

第五章では、「生物多様性」という非人間との関係において最も顕著な問題を取り上げ、生物多様性の価値および生物多様性の大量喪失の原因を見出し、生物多様性の保全の意義を提示する。筆者は生物多様性に関する科学的事実を通じて、自然環境が抵抗力と回復力を持っていることを示し、生物多様性の保全が人々の努力に値する事業であることを提唱する。モートンは自然の存在を否定し、環境保護事業は自然を健康な状態に戻すことはできないと主張した。しかし、科学によって明らかになったのは、自然が大きな抵抗力と回復力を持っているということである。農業と工業の過度な開発は自然の回復時間を無限に延ばし、環境破壊現象を好転させない。スウェーデンの環境学者である J. ロックストロームと他の約二〇名の研究者は科学誌『ネイチャー（Nature）』の二〇〇九年九月号に掲載された「人類にとっての（地球の）安全な機能空間（A Safe Operating Space for Humanity）」という論文において、「プラネタリー・バウンダリー（地球の限界）」という概念を紹介した。彼らは継続的な計測や監視によってそれぞれの生態系の閾値の境界がどこにあることを知る必要があると提唱している（ロックストローム、クルム 2018：2）。安全な範囲内で発展すれば、地球は健全な状態に保たれ、自然に取り返しのつかないダメージを与えることはない。一方、筆者は、種多様性が最も高い陸上生態系の熱帯雨林を例に、熱帯雨林の森林が大量に失われる原因を生態学者である J.H.ヴァンダーミーアと I.ペルフェクトの議論を参考にしてまとめる。熱帯雨林の破壊の原因は、不合理な農業転換による技術的・環境的問題だけでなく、その最も根本的な原因は、社会における不平等な発展と貧困の問題である。ラテンアメリカや南アメリカに分布する熱帯雨林は、国際的な経済的・政治的な不利から、先進国の商品作物のプランテーションになっている。作物の市場価値が下がると、プランテーションで雇用されていた現地の人々が失業し、貧困の問題が深刻化する。小作農に復帰した失業者は熱帯雨林に土地を求めざるを得ない。その結果、熱帯雨林の環境問題はさらに悪化する。同じ意味で、環境保護を目的に始めた不買運動も、南側の貧しい国々では失業者を出すことになりかねない。環境危機の完全な解決には、科学技術の合理的な利用だけでなく、社会の公正と貧困の撲滅が必要である。そのためには、筆者は行政、メディア、教育、地域レベルの変革など、さまざまな取り組みが不可欠であると提唱する。このような提唱は、既存の社会構造の中で実現することは難しいが、少なくとも環境危機を解決するために、どのような方向に進むべきかを明らかにすることに役立つだろう。

終章では、以上の検討を通じて明らかになったことをまとめる。モートンのダークエコロジーが提唱された背景とその意味を明らかにし、モートンの非人間の定義の変化の過程を整理することが、本論文の一部の作業に該当する。簡単に言えば、モートンは、人間と非人間との非調和的な共存を提唱している。人間は、汚染された自然は元に戻らないという事実を受け止め、汚染物質と共存していかなければならないのである。これは環境危機の深刻さを反映する一方で、人間と非人間との複雑な関係を無視したものである。モートンにとって、生と死の問題よりも重要なのは、人間の意識の変化である。つまり、人間は自分の認識の有限性を受け入れて、人間的尺度を超えた世界を考えるべきだということである。しか

し、水俣病事件や生物多様性が激減した事実などから、人間と非人間との共存という課題は、モートンが語るほど単純ではないことは明らかである。モートンは、人間と非人間の二つの概念を包括的に二つの集合名詞にまとめ、両者の内部にさまざまな違いがあることを無視した。環境問題を放置すれば、工業化による汚染、国際経済と政治の不均衡による貧富の格差、政府の社会医療メディアの改善、一般市民の権益などの問題が無視される可能性が高い。しかし一方で、SDGs のような持続可能な開発戦略は、資本主義が生産を拡大するもう一つの方法なのではないかという疑問もある。本論文では、人間と非人間の錯綜した関係を明らかにしながら、次のような問題を提示する。環境保全と社会的公正を実現するために、持続可能な開発戦略をどのように機能させるかは、依然として非常に難しい問題である。これは人新世が我々に与えた課題であるだけでなく、筆者が今後研究すべき方向でもある。

第一部　ティモシー・モートンの「ダークエコロジー」思想に関する試論

第一章　バウンダリレスネス—共存の哲学

本章では、モートンのエコロジー思想を読解し、解説することを目的とする。そのエコロジー思想の中で、最も革新的で代表的な概念は「ダークエコロジー」（dark ecology）と「ハイパーオブジェクト」（hyperobjects）であろう。この二つの概念の由来、意味、特徴が明確に分かれば、モートンのエコロジー思想の最も核心的な部分を捉えることができると思われる。ここで強調しておきたいのは、詩および散文のような芸術作品は、モートンにとって非人間を認識するための重要な道具であり、手段であるということだ。それゆえ、モートンにとっての芸術の重要性は、本章で議論することでも明らかになる。

本章は三部で構成されている。まず、モートンの考えでは、自然という言葉は新しいエコロジー観念を発展させるための大きな障害となっており、自然を取り除かなければダークエコロジーは語ることができない。というのは、純粋で美しい自然の後退と汚物との非調和的な共存がダークエコロジーの一貫したテーマであるからだ。したがって、モートンがなぜ自然を排除しようとしたのかを明らかにすることは、彼の思想を理解するために必要である。次に、モートンは、「ネイチャーライティング」（nature writing）による自然環境や雰囲気の描写技法に啓発を得て、非人間を議論する道を歩み始めた。非人間を探究する過程で、モートンの注目する対象は「アンビエンス」から「奇妙なよそ者」へ、そして「ハイパーオブジェクト」へと変化した。モートンの推論は、思弁的実在論とオブジェクト指向存在論（OOO）から深い影響を受けているが、独自の特色を持っている。したがって、ハーマン、メイヤスーと関連させながら思弁的実在論と OOO を参照してハイパーオブジェクトの革新性を明らかにする。最後に、これまでの検討を踏まえて、モートンのダークエコロジーの基本的主張をまとめる。

第一節「ダークエコロジー」による自然の消滅

Ⅰ　アンビエント詩学における自然

モートンは、人新世の時代特性および絶滅をもたらす環境危機と向き合うにあたり、その危機の中で人類があるべき姿を見つけようとしている。殺虫剤[5]にしろ放射性物質[6]にしろ、モートンは同じサイン、すなわち自然がすでに静かに歪んでいる様子を読み取っているようだ。

しかし、モートンは今日の環境危機から自然の消滅に気づいたのではなく、ロマン主義文

---

[5] Morton, Timothy. *Dark Ecology: For a Logic of Future Coexistence.* Columbia University Press, 2016. pp.49.

[6] Morton, Timothy. *Hyperobjects: Philosophy and Ecology after the End of the World*. University of Minnesota Press, 2013. pp.120.

学作品を精読する過程で啓発を得た。具体的に言えば、ロマン主義文学作品にしばしば見られるネイチャーライティングとその言語的特色が、モートンが人新世のエコロジーについて考えるきっかけとなった。モートンは、ネイチャーライティングが描いた自然が完全に真実でもなければ、完全に偽りでもないと考えている。自然のイメージは、あるような、ないような、きわめて不安定な形をしている。『自然なきエコロジー』(モートン 2018)の訳者である篠原雅武によると、モートンは自然よりも「とりまくもの」に注目した。篠原は『自然なきエコロジー』の訳者あとがきで「とりまくもの」を適切に定義している。「とりまくもの」は、「私を外からとりまくものでありながら、私の内的空間で抱かれる思考や想像と明確に区別されるともかぎらず、そのあわいにおいて生じている」(篠原　モートン 2018 の訳者あとがき：451-452)。そこで本小節では、モートンがそのように考える理由を明らかにすることを目的として議論する。

一般にネイチャーライティングとは、自然環境の描写をテーマにしたノンフィクション、詩歌、散文などのことで、一九七〇年代以降、アメリカで特に盛んになった。文学のジャンルとして、ネイチャーライティングは様々な異なるタイプをカバーしている。それは通常、『ウォールデン――森の生活』のような散文と結びついているが、自然小説、自然詩、自然報道、自然テレビドキュメンタリーなども含んでいる[7]。ネイチャーライティングは、単なる自然界の観察ではなく、一人称「私」で表現された個人的情念と深い哲学的な思考が込められていることが多い。ほとんどのネイチャーライティングは「従来の人間中心主義的自然観の徹底批判を介して、自然と人間の関係の再定義へと向かおうとしている」[8]から、アメリカ社会はもちろん、世界的にも強い関心を集めているのかもしれない。一九八四年のニューヨーク・タイムズはネイチャーライティングについて次のように評価していた。「それはまるで疎林の小川のように、時には砂に埋もれて見えないが、さらに下流で滝に溢れ出す。見過ごされがちだが、常に岩盤を侵食し続けている」[9]。これはネイチャーライティングの影響力の深さと巨大さを反映している。ネイチャーライティングの先駆者としてアメリカの自然主義作家の代表的人物である H.D.ソローはネイチャーライティングの特徴をよく表現している。彼が作成した日記体の書き物『ジャーナル』について文学者の伊藤詔子(2017)は次のように記述している。

> 他の作品にない『ジャーナル』独自の特質として、コンコードの自然、丘や川や畑や植物や生きものの連続した観察描写と、その後に続く哲学的瞑想や人々の動静、また社会批判の記録が、一日ごとに一枚の完成した絵のように描かれていることが挙げられます。この一枚の絵の

---

[7] Wallace, David Rains. “The Nature of Nature Writing” In: *The New York Times*（Section 7）. July 22,1984. p.1.（https://www.nytimes.com/1984/07/22/books/the-nature-of-nature-writing.html 2022.1.28 閲覧）。

[8] 野田研一『交感と表象　ネイチャーライティングとは何か』、松柏社、二〇〇三年、二二四頁。

[9] Wallace, David Rains. “The Nature of Nature Writing” In: *The New York Times*（Section 7）. July 22,1984. p.1.（https://www.nytimes.com/1984/07/22/books/the-nature-of-nature-writing.html 2022.1.28 閲覧）。

様式は、やがて「ネイチャーライティング」という新しい文学ジャンルの創始ともなり、それが『ウォールデン――森の生活』に発展していきました。

ネイチャーライティングとは、「場所の物語」とも言い換えられます。『ジャーナル』でソローは、特定の場所あるいは野生の生きものの動静を、その芽吹きから結実、散花から散種、繁殖から消滅まで、場所と種ごとに綿密に日々追跡し、それらを一つの自然として、また自然を感受する意識のドラマとして記述していったということがあります。[10]

二十四年の歳月をかけて完成した『ジャーナル』は、四季折々の自然環境の移り変わりを、膨大な言葉で描いている。しかし、それは単に自然についての記述ではなく、自然風景の中に、人間と自然が一体となっていることについての、個人的な感性を織り交ぜた総体的な物語である。自分が感じた自然を鮮やかに再現するために、作者は一連の適切な言い回しと修辞的戦略を用いて読者を納得させる真実らしい環境を作り、読者に自分が誠実であることを信じ込ませようとしなければならない。モートンが注目したのは、まさにこの点だった。

モートンは環境文学の創作には常に多くの修辞戦略が含まれていることを発見した。作者たちは多くの修辞手法を通じて、読者の周囲をめぐる説得力がある真実らしい環境を作り出すことを意図している。つまり、芸術的に加工されたものは存在せず、すべてが真実である。言い換えれば、作者たちは「言語の魔力」（モートン 2018：59）を駆使して、フィクショナルな世界ではないことを読者に確信させ、もしくは読者にそのような環境を体験させようとしている。その好例として、モートンはソローの『ウォールデン――森の生活』を挙げている。ソローは『ウォールデン』の冒頭で、一人称「私」として、この文章を書いた当時、自分が森の中で一人暮らしていたこと、そして自分が建てた家の地理的位置、自給自足の生活様式を明らかにしている。読者は本文を読む前に先入観を持ってしまうに違いない。ここで読んでいたのは著者の実体験であると。しかし、モートンはこのとき、大きな矛盾に気づいた。この矛盾は自然を描写することとネイチャーライティングで描かれる自然との間のずれについてのものである。モートンによると、「語り手が、周囲をとりまく世界を再現すればするほど、不透明な走り書きと修辞と比喩的表現の潜在的に尽きることのない流れを読者はいっそう消費することになる」（同書：60）。簡単に言えば、現実の環境を表現しようとすればするほど、レトリックに頼ることになる。それゆえ、多くのエコロジーに関する文章には修辞手法が頻繁に登場する。以下は修辞的戦略についてのモートンの見解である。

この修辞的な戦略は、さまざまなエコロジーの文章の中に、ものすごく頻繁に表れている。自然の現実感を再現しようと試みる多くの文章は、しばしば明らかに、(1) この現実は固形的で真正で独立している（とりわけ書くという過程そのものにおいては）といい、さらに (2) 読者は

[10] 伊藤詔子『NHK カルチャーラジオ　文学の世界　はじめてのソロー　森に息づくメッセージ』、NHK 出版、二〇一七年、二六～二七頁。

ただそれについて読むだけでなくむしろそれを直接経験したほうがいいという。だが、これらの文章は、おのおのの主張を展開しつつ、それが述べていることをはっきり意味することもなければそれが意味していることをはっきりいうこともないという、つかみどころがなくてトリックスター的でもある性質をそなえた、書くことの軌道内へと戻っていく――「めくる、その暗黒のページを」。多くの文化にとって、自然はトリックスターであり、文学的な幻想は、その絶え間なく変化するとらえどころのない「本質」を適切に召喚する。しかし、こうしたことはさほど重要ではない。修辞上の仕掛けは、多くの場合、あきらかにテクストの「外部」にあり、「本当に」起きていることを真正でありかつ真正にするものとしてはっきりさせるという役割を果たしている。（同書：60-61）[11]

まずモートンは、エコロジーの文章は自然の真実性を示すために、常にこれらの現実を不動の独立した存在として描かなければならないと考えた。そして作者は、読者にこれは語り手の体験だと納得させるよりも、読者の実体験の舞台として文章を作ることを好む。この修辞によって、読者は文章に没頭し、これが今目の当たりにしている自然の光景であると信じるようになる。しかし、迫真の効果を出そうとすればするほど、より多くの修辞を用いなければならない。これらの描かれた自然は読者が体験した真実ではなく、文章が呼び起こす幻想である。モートンはこれらの文章に描かれた自然がいつも真実と儚さの間で跳躍するのは、修辞技法の多様性が再び自然に不確実のベールを覆いかぶせたからであると考えている。私はこのような自然を実際に見たことがあるような気がするが、テキスト以外にある修辞技法は自然を幻のようにする。つまり、ネイチャーライティングは曖昧で変化に富む。モートンにとって自然という概念の本質は、幻想のように不穏でつかみどころのないものだった。この不穏な本質がモートンに、自然の代わりにとりまくものを使うように促したのである。

続いてモートンは「エコミメーシス」（ecomimesis）という「美的な次元を超えた」（同書：61）ものに視点を移した。モートンは、現代アートの鑑賞には常に視線の範囲を超えた存在が感じられると指摘している。たとえば美術館で展示されている絵を考えてみる。絵をとりまく額縁および周囲の空間なども絵の一部であり、アーティストが利用できる道具である。この一連の道具は、特定の場所の雰囲気を作り出すことができる。これは、実はネイチャーライティングと関連がある。ネイチャーライティングが提唱する「読者へ」（To the reader）はレトリックによって読者に実在的な臨場感を与えることができる。語り手をとりまく環境は裸眼では見えないが、感じることができる。つまり、「この意識的で反省的でポストモダンな表現は、そのことゆえにいっそうエコミメーシス的である」（同書：62）。モートンは一般的なネイチャーライティングよりも「前衛的なエコミメーシス」（avant-garde ecomimesis）に着目した。一般的にネイチャーライティングというのは、森や湖といった固

[11] 日本語の訳文について、既存の邦訳を参照したが、一部引用者が変更した箇所がある。

定的な読者が知っている範囲に限られていると考えられている。しかし、前衛的なエコミメーシスは、不慣れな環境にも既視感を持たせる技法である。前衛的なエコミメーシスによって、読者は読んでいるものが今まさに自分の回りで起こっているかのように感じ、テキストから発せられる雰囲気と融合していく。文章に出てくる環境は、あなたが行ったことのない異国かもしれないが、そこの温度や気候などは、あなたがこれまで経験してきたものと同じである。これは読者が訪れることができる世界であり、エコミメーシスの特徴でもある。エコミメーシスは「私たちを、読むことと語ることの、共有された潜在的な現在時へと導いてくれる」（同書 : 64）。この効果を得るために、エコミメーシスは単一ではなく、複数の要素が絡み合う重層的な雰囲気を作り出す必要がある。すなわち、「エコミメーシスは圧点（pressure point）である。自然世界についての考えの中にあるだけでなくその周囲にもある、信念と実践と過程の広範で複雑なイデオロギーのネットワークを結晶化させる圧点である」（同書 : 65）。

感性的な意識のレベルにとどまっている裸眼では見えない雰囲気のような「とりまくもの」をよりよく認識するために、モートンは「アンビエンスの詩学」を提示する。モートンによれば、「アンビエンスは、ラテン語の ambo『どちら側にもある』に由来する」もので、「周囲のもの、とりまくもの、世界の感覚を意味している」（同書 : 66）。アンビエンスはアクセスできないが、それでも実在する。「アンビエンスはきわめて特殊な表現を生じさせるが、それはエコミメーシスによって演出された自然である」（同書 : 67）。一言でいえば、「エコミメーシスには、アンビエンスの詩学が含まれている」（同書 : 66）。モートンはアンビエント詩学は文章を書くだけでなく、彫刻、音楽、演劇にも適用されると考えた。音楽やパフォーマンスで醸し出される雰囲気は、自然ではなく人工的なものが多い。アンビエンスは幻想でありながら現実でもある奇妙な「とりまくもの」であるから、モートンは自然の概念を「とりまくもの」に置き換えて未来のエコロジー思想を検討する。ネイチャーライティングは、モートンにアンビエンスのような非人間的なものを意識させるが、モートンは環境文学を全面的に肯定しているわけではない。なぜなら、モートンは純粋な自然だけを追求したロマン主義時代の作品は環境問題を解決できないと考えたからだ。多くの作家がネイチャーライティングの陣営に加入し、近代産業化発展の追及を批判したが、実際には近代化の歩みは止まらず、むしろ拡大し続けている。

Ⅱ　ロマン主義時期における自然

十八世紀末の産業革命と、物質消費の急激な拡大を原因とした排気ガスや廃水による汚染は、当時の作家や詩人たちの不満と心配をかき立てた。これらの作家たちは、工業への批判を通じて自然の純潔と崇高さを際立たせて描き、読者に自然への畏敬を訴えている。

たとえばアメリカの詩人 R.W.エマーソンは、処女作『自然』（*Nature* 1836）の中で、過去を振り返るよりも、自然と向き合って直接語り合ってこそ、真実が得られるという人文的な

精神を表現している。ソローは、自然の善と美を極めようとした。ソローはウォールデン湖で森を友とし、自然回帰の新しいライフスタイルを実体験として謳歌し、当時の物質消費主義が盛んだった潮流を批判した。ソローは後に『ウォーキング』（*Walking* 1862）で、荒野の価値を提唱している。すなわち荒野は野生的であり、野生とは自然の本質と善と美の集合である。ソローは野生の荒野を抱いた原生自然の理想社会を創造すべきだと主張した。それ以前の幾人かの哲学者の主張からも、自然崇拝の叙述を見出すことができる。たとえば、イギリスの哲学者 J.ロックは『統治二論』（*Two Treatises of Government* 1689）の中で、自然状態ではすべての人が平等で自由であるとしている。また、人間の自由は無秩序な状態ではなく、人間の権利は自然法に基づいて保障されるべきだとしている。ロックの書いた自然法は理性の代名詞であり、逆らうことができない公正である。そして現代でも、自然は人間を超えた偉大な存在であると考える学者がいる。例えば、日本の哲学者の河野哲也も自然に偉大さを見出す。フランスの哲学者である B.パスカルの「人間は考える葦である」という名言では、宇宙に比べて人間は脆弱な存在だが、自分を含めた宇宙を認識することができる人間が偉大な存在だと指摘されている。しかし、河野はそれに同意しない。彼は自然を霊的な存在と見なすことにさらに賛成した。言い換えれば、「むしろ自然は、人間をはるかに超えた偉大な精神であるかのように感じるのだ」（河野 2016：132）。

人新世の到来によって、モートンは自然の偉大さと公正さを疑問視するようになった。さらに彼は十九世紀のロマン主義芸術作品に見られる自然は、一種の幻想であると考えた。これらの著者たちは「ネイチャーライティング」という「エコミメーシス」を通して、美しい自然を理想的な社会の姿として描き、読者に完全に現実とかけ離れた自然に身を置いているような錯覚を抱かせるが、モートンはこのような修辞を認めない。モートンは「ネイチャーライティング」という修辞手法を強く批判している。というのも、これらの自然に関する描写は往々にして大袈裟に誇張されており、高すぎる境地を求めているからである。少なくともモートンの考え方の枠組みでは、これはもはや人新世には適用できないものであった。

中国の学者王韜洋は環境保護運動がロマン主義文学の自然概念を受け継いでいると指摘している。つまり、「純然とした自然を環境に対する客観的で唯一の正しい想像とみなし、自然の意味を精神的象徴という意味で把握することで、現実世界における生活と生存の観点から理解した自然を無視しているのである」[12]。モートンが批判したように、美しい自然は理想の境地であるが、現実に直面することこそがエコロジー思想に必要なのである。モートンによると、「近年の環境運動には、ロマン主義の名残がある。問題は、これらの遺産が不明瞭だということではない。むしろ、あまりにも多くの関連がある」（モートン 2018：161）。現在、ほとんどの環境運動は、ロマン主義文学の影響を受けており、純粋な自然への回復をその主張の中心としているが、現実を無視している。たとえば、二〇二〇年七月一日

[12] 王韜洋. 有差异的主体与不一样的环境“想象”—“环境正义”视角中的环境伦理命题分析［J］. 哲学研究，2003 (3)：27-34. p33.（王韜洋「差異がある主体と違う環境「想像」—「環境正義」の視点における環境倫理命題の分析」、『哲学研究』第三期、二〇〇三年、二七～三四頁。三三頁。引用者が訳出した。）

に日本全国でレジ袋の有料化がスタートした[13]。この政策はプラスチックごみの規制と国民の生活様式の変化を目的として導入された。この政策は実施されて以来一定の効果をあげた。例えば、日本チェーンストア協会の調査によると、二〇二一年三月時点で、レジ袋の辞退率は 75.33%と過去最高を記録する[14]。確かにマイバッグを使う人は増えている。しかし、レジ袋有料化で本当に環境負荷が軽減されるのか。この問題を分析した「エコバッグやマイカップは本当に環境に優しいのか？ 「エコ」な行動に隠された 6 つの真実」という記事がある。この記事は次のデータを紹介している。英国環境庁が二〇一一年に発表したライフサイクル・アセスメント報告書によると、レジ袋を繰り返し使用しない場合、コットンのバッグを少なくとも 131 回使用した場合にレジ袋より環境への影響が少ない[15]。換言すれば、エコバッグの交換頻度が高すぎると、レジ袋以上の二酸化炭素が排出されてしまう。したがって、環境運動が本当に地球にやさしいという目標を実現できるかどうかは疑問である。

モートンがロマン主義時代に注目するもう一つの理由は、この時期が奇妙な時期であったからである。現代の疲弊する生活環境を前に、モートンは「現代」（contemporary）が私たちにとって何を意味するのか、いつから始まったのかを考えた。ここでいう現代とは、主に現代社会における環境やアンビエンスに対する共通認識のことである。具体的には、モートンは、現代社会において、アンビエンスが意識にとどまる神秘的な存在から、消費される商品へと変化しつつあることを発見した。例えば、レストランで流れる音楽およびインテリア、食器なども、その場の雰囲気を出すことができる。モートンは「その出現の時期が、商業資本主義の台頭のとき、つまりは消費社会の台頭のときであると推定する」（モートン 2018 : 161）。この時期は、資本主義経済の高度成長とともに人々が反省に陥っていく矛盾の多い時期である。そして「消費主義の誕生はロマン主義の時代と一致している」（同）。従って、ロマン主義時代に出現した消費主義について、モートンは論証する必要があると考えたのである。モートンは、ロマン主義時代から資本主義が自らの安定と主体性を守るために、「場所」、「ローカルなもの」、「ネーション」などの概念を盛んに規定してきたが、これらの概念がエコロジー思考に大きな障害になっていると指摘した。モートンはマルクスに言及して、資本主義の空間形成と影響を批判している。資本主義の生産様式では、利潤を生む建築物と容器などはすべて価値を生み出す機械として捉えられる。機械は日々働き続け、最終的には残骸となってゴミとして捨てられていく。工場を建設し、農地を囲い込み、すべては利益のために行われる。資本主義の論理において、利潤の最大化は一貫した追求目標であり、利潤が一番高いものは水、森林、鉱物などの自然資源を占拠することである。モートン

---

13 「レジ袋有料化について」（総務省：https://www.soumu.go.jp/kouchoi/substance/chosei/rejibukuro.html 2022.2.6 閲覧）。

14 「日本チェーンストア協会の環境問題への取り組み」（https://www.jcsa.gr.jp/topics/environment/approach.html2022.2.6 閲覧）。

15 Turk, Victoria. 「エコバッグやマイカップは本当に環境に優しいのか？ 「エコ」な行動に隠された 6 つの真実」、『WIRED』、二〇一九年一月二日。（https://wired.jp/2019/01/02/climate-change-myth-busting/2022.2.6 閲覧）。

は「資本主義がその産業をもたらし、『脱産業化』の風景という最近の幻想を生じさせるところならどこであろうと、全ての社会が影響を受けている」（同書：165）と主張した。モートンの考えではこれは皮肉なことである。彼は放射能が拡散した一九八六年（チェルノブイリ原発事故）には、すでに汚染が隅々まで広がっていたと指摘する（同）。つまり、空間の区切りが崩れていた。

ロマン主義時代の影響はそれだけでなく、消費主義の猛威にもあった。モートンがここで強調しているのは、消費主義とは消費という行為ではなく、消費のもう一つの新しい様式であるということである。ロマン主義時代の人々は、社会階層別に特定の種類の商品を消費していた。たとえば、下層階級の人たちは生活必需品しか消費できないし、社会の上層階級にいる人たちは、ショッピングをして精神的満足を得ようとしている。消費には、モノを買うだけではなく、アンビエンスを買うことも含まれる。つまり、アンビエンスにも価値がつくのである。距離を置いて商品を鑑賞する美の体験は、技術の発達によって自然にも広がっていった。「原生自然」は次第に行政化され、人々の心を癒すリゾート地となり、環境も消費主義の範疇に入るようになった。原生自然は「いつも『あちら側に』、隔絶された美的経験のショーウィンドウの後ろ側にある」（同書：219）。モートンによれば、この原生自然は「未開発の資本の備蓄物としてのみ存在しうる」もので、「資本主義のイデオロギーの基盤である、決定論からの自由を体現する」（同）。モートンは環境主義および緑の消費は一般的に消費主義の産物であると指摘した。環境に関わる言説が工業化の苦痛を緩和する場所として自然を描いていることは、ショーウィンドウの中の自然をいっそう荘厳で神聖なものにしているようなものだった。環境正義の批判もモートンにとっては消費者主義の改良版にすぎない。なぜなら、環境正義の批判は「世界を消費する今のやり方を否定し、なにか別のものを――この別のものが明快に説明されているかどうかはともかく――提唱する」（同書：222）からである。消費主義は消費者に選択の自由を与えると考える人がいるかもしれない。私たちは買わないことも、オーガニックの食材を買うこともできる。しかし、「オーガニックな食材を買うことが本当に惑星を救うのか」（同書：226）。モートンによれば、消費者主義は選択の自由を与えているように見えるが、同時に偏狭である。言い換えれば、「私たちには『選択肢』があるという気分は、ユートピア的な欲望を高めていくが、可能性だけでなく社会的な隘路の徴候でもある」（同）。したがって、モートンに言わせると、不買や抗議運動は、実際には消費主義が人間に与える影響を変えていない。「不買も抗議行動も、アイロニカルで内省的なかたちでの消費主義である。特定の製品を買うことを拒否し、企業やグローバリゼーションのような抑圧的な社会的形態を疑問視することによって、このような活動は現状の変革の諸々の可能性を指し示してはいるのだが、実際に変えることはない」（同）。

モートンはこのような偽りの「美しい魂」（beautiful soul）を拒絶する。彼は自然を歪ませるような定義は現在の状況にとって間違いなく障害であり、それを脱して日常生活の穢れに直面した姿で生きるのが人新世の真の姿だと主張する。「美しい魂」は、もとはヘーゲルの『精神現象学』に登場した言葉である。モートンによると、多くの環境保護活動には実際

には美しい魂というラベルが貼られている。先に述べたレジ袋有料化のように、これらの活動のスローガンは、モートンに言わせれば、例外なく偽善である。例えば、資源循環型の経済モデルは利益から脱却し、環境危機を解決することができるのだろうか。モートンはこの課題に懐疑を呈している。日本の哲学者である斎藤幸平もこの問題に対応している。斎藤の考えを取り入れる前に、次のことを明確にしておきたい。モートンも斎藤も、環境保護政策に疑問を持っていることは確かだが、両者の切り口や立場は食い違っている。というより、斎藤はモートンを強く批判している。しかし、いずれにせよ、この二人は地球を守るための資源循環型の環境保護政策に疑問を提起している。

斎藤の考えでは、環境問題の解決や環境にやさしい社会の実現は、資本主義の支配下では不可能なことである。しかし、資本主義は環境問題を完全に放置することはできない。斎藤は、環境の急速な悪化はもはや無視できないものであり、環境を守るための一連の政策が各国の議題に徐々に現れてきていると指摘する。持続可能な発展と節約型社会の実現を目指すSDGsは、最も広く語られている思潮と言える。各国際組織や企業はSDGsをスローガンに「緑の経済成長」を推進しようとしている。言い換えれば、SDGsは環境問題を解決するというよりも、経済を活性化させる道を見つけたようなものであろう。斎藤の述べたように、「『緑』と冠をつけたところで、成長を貪欲に限りなく追求していけば、やがて地球の限界を超えてしまうのではないか」（斎藤 2020：62）。地球の限界を超えない限り、安全な範囲で活動することがSDGsの信条である。しかし斎藤もモートンと同様に、「緑の経済成長」は「現実逃避」（同書：68）でしかないと考えている。まず、先進国の投資や技術支援によって二酸化炭素の排出量を相対的に減らすことはできるが、相対的に減らすだけで、地球の気温が上がらないわけではないということを肝に銘じなければならない。次に、斎藤によれば、「経済成長が順調であればあるほど、経済活動の規模が大きくなる。それに伴って資源消費量が増大するため、二酸化炭素排出量の削減が困難になっていく」（同書：69）。

モートンと斎藤の批判する自己欺瞞的な緑の経済政策は、経済発展を維持しながら自然の清浄な状態に戻ることを希望しているが、現段階では実現できないことは明らかだ。モートンの考えでは、自然状態への回帰を社会における最良の理想とすることは、歪んだ自然という現実に抵抗するための手段に過ぎない。産業革命以来の急速な資本蓄積は、商品化された「第二の自然」（second nature）（ムーア 2021：269）の出現の温床となった。人新世の自然は次第に巨大な力で人為的に矮小化されていった。篠原雅武（篠原 2018）もまた、科学技術の発展が崇高な自然を引きずり下ろしたと考え、ドイツの哲学者 W.B.S.ベンヤミンが述べた「アウラの崩壊」を考察の範囲に入れた。ベンヤミンのいう「アウラ」は霊的で神的な意味合いがある。霊性を帯びたアウラは簡単に見ることができないので、とても貴重で疎遠な感じがする（篠原 2018：42）。壮麗な自然景観、例えば果てしなく広がる広野と高くそびえる山々は人間にとって、特に都会に住む人にとって崇高で神秘的である。しかし、科学技術が発達し、印刷製品や映像が流行したことで、人は山を越えずに簡単な手段で風景を見ることができるようになった。つまり、人間と自然との距離はどんどん近くなっており、自

然の神性は利潤に駆られた復刻技術によって、他の種と変わらないものに失墜させられている。

Ⅲ 自然の消滅

ラトゥールもまた自然の概念を再考していた。『自然の政治学』（Latour 2004）でラトゥールは「自然の消滅が迫っている」と叫ぶ狂信的なエコロジストたちに賛同し、「自然の死」を宣言した（ibid. : 25）。これはラトゥールが社会から切り離された普遍的・純然的な自然観は、新たな時代には当てはまらないと主張しているからである。さらに、ラトゥールは「ガイアを待ちながら」（Latour 2015）で、十九世紀以降、人々は自分の弱さを利用して自然の崇高さを楽しむことに耽溺してきたが、人新世の到来によって、私たちを幸せにしてきた「断絶」（disconnect）[16]が逆転したと指摘している（ibid. : 22-23）。気候変動や環境破壊は、人間がちっぽけではなく、大きな力を持つ自然を超えた存在であることを証明している。自然も偉大な象徴ではなく、傷ついた存在である。環境危機によって私たちは責任を負うべきことを思い知らされる。しかし、誰が今日の状況を引き起こしたのか、正確に答えられる人はいない。従って、誰も自分に責任があるとは認めたくない。しかし、地球温暖化などの環境問題に直面し、私たちは確かに悪いことをしてきたと認識している。つまり、自然を傷つけたのに、自分には何の責任もないと感じるのが罪悪感である（ibid. : 24）。罪悪感を持っていると崇高さは味わえない。人間が天と地を滅ぼす大きな力を持っていることに気づくと、自然の概念が歪んで行く。ラトゥールによれば、自然の歪みを否定するのは、人間が崇高な快楽を享受することを失いたくないということと、自分の行為に責任を負いたくないということの具現である（ibid.）。したがって、ラトゥールはラブロックのガイア理念を借りて、自然という崇高な概念を転覆しようとする。

アメリカの環境科学者である E.C.エリスはラブロックのガイア仮説は「地球上の生命について全く新しい考え方を生み出した」（Ellis 2018 : 20）と考えている。ガイア仮説は過去のものだが、それがもたらした長期的な貢献は確かだとエリスは指摘する。エリスによると、「その最も重要な長期的貢献は、地球の機能を圏層間のフィードバック相互作用によって安定した複雑で動的なシステムとして説明する基本的な枠組みであったと思われる」（ibid.）。ラトゥールの描くガイアは、地上に回帰する存在であり、予見不可能なあらゆる存在形態と環境を含んだ総体である。ラトゥールのガイアは自然に比べて非常に敏感で、私たちの一挙手一投足を察知して感じ取ることができるので、複数の絡み合った関係に素早く対応することができる。一方、自然は、権威的で、無関心で、感性に乏しい。その冷酷さは詩人の感

---

[16] ラトゥールが指摘する「断絶」（disconnect）は、十九世紀の文学作品における人間の微小さと自然の偉大さの大きな格差である。しかし、人新世において、この「断絶」は別の意味になりつつある。というのは、人間は自然を鑑賞すると同時にいつも心配と罪悪感を伴って、崇高な道徳感もだんだん消えていくからである（Latour 2015 : 23）。

情をかき立てる。そのため、読者は文学作品の中でいつも自然が崇高なことを発見することができる（Latour 2017：141）。I.スタンジェールもまたガイアは「超越的な侵入」であり、「巨大な未知を作り出している」（Stengers 2015：47）と述べている。ラトゥールはフランスの哲学者 M. セールの見解を参考にしながら、古代法や近代科学における自然観に反対している。セールによると、「自然は古代の法律にとっても現代科学にとっても、準拠をなしていた。なぜなら、自然に対してはいかなる主体も存在していなかったからだ」（セール 1994：143）。セールの考えでは、科学的な客観性も法的な客観性も、人間に依存しない空間で生じる。つまり参照点としての自然は絶対的に客観的である。しかし、自然はすでに人間と深く結びついている。人間のいない空間はない。地球温暖化のような環境危機は、人間が肥大化したことを暗示している。人間は自然を揺り動かし、不安に追い込んできた。ラトゥールの述べたように、「かつては強固な自然法則（ナチュラル・ロウ）の基盤であったものを振り返ると、どこもかしこも私たちの行為の目に見える痕跡で埋め尽くされている」（ラトゥール 2017：62）から、今の地球の変容は我々が想定する安易さからすでに逸脱している。

ラトゥールは現在の状況を「新気候体制」（the New Climate Regime）という言葉で説明しようとしている。現代人が当然と思っていた物理的枠組み、背景板と思われていた安定した自然がざわつきはじめ、人間と環境との関係にこれまでにない突然変異が生じている（Latour 2017：3）。ラトゥールは「もう久しく前から、私たちが打ち立てた国境線などものともせずに、『新気候体制』が世界中で吹き荒れている。吹きすさぶ風に私たちはつねにさらされている。どのような壁もこの侵入者を防ぐことはできない」（ラトゥール 2019：25-26）と述べている。このような事実を前にして、人は無関心でいることが多い。ラトゥールはその理由について近年の気候急変、環境汚染などの災害が人々の集団的苦難であるからだと考えている（同書：20）。もう一つの重要な理由は、自然という概念を語るとき、人々は何となく自然が私たちの上にあり、遠くにあるものだと感じているということである。というのも、いわゆるエコロジー政党が「自然を大切にしよう」、「自然を守ろう」と呼びかけると、誰もが無意識のうちに、何の根拠もなく自然と宇宙を同一視してしまい、その自然は「私たちの身体細胞に始まり、遙か遠くの銀河にまで続くあの自然である」（同書：113）と考えるからである。

ラトゥールは、われわれは科学技術を信頼する必要があるが、イデオロギーに左右される自然概念は必要ないと主張している。ラトゥールが取り除こうとしている自然の概念は、硬直的であり不安定でもあると言えるだろう。硬直とは自然が常に単一の運動様式を示すことを意味する。ラトゥールが語ったように、「『自然な』という言葉は『世界の外側から見た単一の運動』を指すのみとなっている」（同書：107）。特に自然科学における自然はこの意味を踏襲している。不安定とは自然が口実のような特徴を持っていることを意味する。なぜなら、原因の説明ができない時、あるいは衝突を鎮められない時、自然は一部の人の道具になってしまうからである。例えば自然法である。「私たちが『自然法』に訴えるとき、『自然』は一連の疑似法的な規則（quasilegal regulations）として想定されるという考えをより直接的

に表現している。この場合、奇妙なことに、『自然』という形容詞は、『道徳的』『法的』『尊敬できる』の同義語になる」（Latour 2017 : 20）。しかし、ラトゥールはこのような自然を前にして、その規定に従う義務はないと考える。自然と不自然を評価する基準を明確にすることは難しく、自然は非常に議論の多い概念である。従って、ラトゥールは「自然の新たな不安定性」（new instability of nature）を定義している。新気候体制の下で「自然世界」に希望を注ぎ込み、自然が私たちの不安や恐怖を癒してくれることは明らかに役に立たない（ibid. : 35）。不安定な概念がどうして安らかに感じられるのか。そのため、「新気候体制は、自然法の新たなバージョン、あるいはいずれにせよ自然と法との間のつながりを再構築することにかかっており、『自然の法則』という表現――その作動様式はあまりにも性急に単純化される傾向がある――を再生させることができるだろう」（ibid.）。

モートンは『自然なきエコロジー』において、自然は把握しがたい概念であり、その定義は周囲の環境の変化に従って容易に変化することを示唆した。ラトゥールもモートンも「自然の死」を認めた。そのため、両者は自然よりはむしろ「非人間」に視点を向けるべきだと主張する。モートンの思想の中心はダークである。つまり汚染された世界は純白ではなく、暗く憂鬱なものである。モートンは暗闇から完全に逃れようとする考えを批判し、人間は「非人間との連帯の中にある存在」（being in-solidarity with nonhumans）（Morton 2017：138）であると唱えた。このような仕方で非人間と関わることを、モートンは「エコグノーシス」（ecognosis）と呼ぶ。モートンによれば、「エコグノーシスとは、一つの謎である。エコグノーシスは、知る作用のようなものであるが、それよりも知らされる作用に近い」（Morton 2016：5 強調は原文より）。非人間は、まるでベールをかぶっているような存在で、私たちはそれがそこにあることを知っているけれども、やはり「一つの謎」である。そこでの人間と非人間との関係は、「共存しているというような事態であり、奇妙な何かに慣れ親しむようになるというような事態でありながら、慣れることによって奇妙でなくなるわけでもない奇妙さに慣れることでもある」（ibid.）。モートンの観点では、「エコグノーシス」は、奇妙な円環として表象される。なぜなら、モートンによると「人間の干渉は、円環的形式を有している」（ibid. : 6）からだ。モートンは人間をモンスターのような存在と見なし、「数多くの不穏な存在者たちのなかでも、人間は最も不穏な存在である」（ibid. : 41）と指摘し、人間は罪と救済の無限ループの中に埋め込まれていると主張する（ibid. : 39）。この無気味な領圏の中では、どんな些細な行為も破滅につながりかねない。人間という不安を持つ獣は、自分たちの存続を維持するために混乱と不穏の永久機関となり、六度目の生物大絶滅の主な要因となりかねない（ibid. : 8）。

そこで、モートンは「ダークエコロジー」を提唱するようになった。

第二節　「ダークエコロジー」における非人間　― アンビエンスから奇妙なよそ者、そしてハイパーオブジェクトへ

Ⅰ アンビエンス

これまでの議論からもわかるように、エコミメーシスは真実らしい自然を作り出すことに重点を置いており、読み手が文字に触れながら語り手の描いた環境に没入できるようにしている。換言すれば、「エコロジカル・ライティングは、自然と私たちのあいだの習慣的な区別を無効にしようとする」（モートン 2018 : 125）。こうして見ると、ネイチャーライティングが主体と客体の二元論を解体しようとしていることは明らかである。しかし、モートンは、ネイチャーライティングがそのような目的を達成したとは考えていなかった。ここで、モートンの主張に対する誤解を避けるために、二つの点を明確にしておく必要がある。一方で、モートンは東洋的自然観に代表される主体と客体の融合という思想を認めていない。主体と客体の融合とは人間と自然との調和的な共存を意味する。しかし、以上の議論から明らかなように、モートンにとって自然は決して調和していないことであるように見える。簡単に言えば、モートンは人間と非人間との非調和的な共存を提唱している。他方で、モートンは西洋におけるデカルトに代表される主客二分法を認めていない。なぜなら、人間と非人間との関係はあたかも読者とアンビエンスとの絡み合っている関係のようであるとモートンは主張しているからである。だが、モートンは東洋的自然観およびデカルトに代表される主客二分法を完全に否定したわけではなく、むしろ彼の提唱する新しいエコロジー思想は、ネイチャーライティングが提供する「美的な経験」の中に見出す必要があると考えた。

モートンが言及する美的な経験は、通常に文学や音楽、絵画の中で体験されるものである。簡単に言えば、雰囲気およびアンビエンスとは、美的な経験を伝える媒介であり、それら自体が美的なものであると考えることができる。エコミメーシスは創作者の人工的な手法を通じて読者に幻想的な空間を提供する。読み手は、自分と文中の環境との間に距離があることはわかっていても、その幻想的な空間が圧倒的に魅惑的であるため、ついつい魅力的な「重力場」（gravitational field）（同書 : 128）に飛び込んでしまう。すなわち、語り手は読者が逃れられない魅力的な空間を作り出しているのである。そして、読者がそのような環境を現実的な視点から受け止めようと、非現実的な視点から受け止めようと、すでに雰囲気という大きな網に張りついていて、語り手の言葉を信じるようになる。そんな美学的魅力を持つものがアンビエンスであり、モートンの言う「不整合的なもの」である。モートンが語ったように、「もしすでに論じたように内部と外部の解消が厳密にいって不可能であるとするなら――エコミメーシスがそれをシミュレートするために多大なる努力を払うとしても――エコミメーシスはイデオロギー的な幻想の形態である。アンビエントな修辞が内部と外部をぼやけさせたりあるいはそれらを消し去ったり積み重ねようとしたりするとき、それは不整合的な『もの』を生じさせる」（同書 : 131）。「不整合的なもの」は「あいだ」と理解することができる。こういうものは厳密にはどちらの側にも属さず、「つまりそれは、主体を客体と融和させたり区別をなしにしたりすることで主体と客体の二元論を本当のところは

崩していないと主張する」（同書：131-132）。そのため、モートンはアンビエンスを「美的なものの『新しい改良』版」（同書：132）と呼んだ。

この不整合の特徴は、主体と客体の曖昧な関係だけでなく、アンビエンスとエコミメーシスとの間のずれにも現れている。モートンはこの不整合を「美的な距離」という視点でとらえている。モートンは、距離があってこそ対象への憧れが残ると信じていた。モートンによると、「イデオロギーは、私たちがこの幻想的な対象に対して設ける距離に宿る。その距離を壊すことで、私たちはイデオロギーの場の効力を無効にする」（同）。この距離が知覚の遅れに表れている。モートンの言葉を引用する。

> 自然にかんする著書において、不整合なものが見出されるだろうか。エコミメーシスの作用としてのアンビエンスとエコミメーシスそのもののあいだには深い不整合が存在する。たとえば反響音（エコー）の詩学は、エコミメーシスは直接的であるという幻想に抵触する。この直接性は語り手がなんとかして達成しようと努めねばならない幻想だが、その成功の度合いはさまざまである。そしてたとえ首尾よくいくとしても、その幻想は環境を適切に演出したものではない。私たちが事物を知覚できるのはそれらが生じた後であって、その前でもなければまさしくそれと同時でもない。この意味で、全ての経験は過ぎ去っていく記憶でしかない。この質を増幅していくアンビエント詩学は不気味なもので満たされているが、この点でエコミメーシスとは分岐する。エコミメーシスは、不気味なものが「自然」であるとみなされないならそれに抵抗する。知覚する者の意識、心、あるいは欲望といったものに「穢されて」いない、原型的で清浄な自然を提示しようという試みにおいて、抵抗する。エコミメーシスは自然を生なものとして表すことを欲するが、自然はいつも燃焼のわずかな残り香とともに到来する。
>
> 反響音（エコーズ）は、アンビエンスなものに不可避の特質である。自然について書く人の中には、実際は心の鏡を見ているときでも、以前から直接に伝達されたものを受け取っていると考えている人がいる。正直になることと偽善的になることのあいだでの選択がある。私たちには、自然から感覚できることの全てが、私たちがそこに「探りを入れる」ところに生じる反響音であると認めることができる。私たちは自然を事後的に推定する。（同書：134-135）

この引用から、エコミメーシスの最も重要な目的は、環境の直接性と迅速性を伝えることであることがわかる。語り手は読者に、遅れる時点でそういう雰囲気を感じてほしいとは思わない。しかしモートンは、エコミメーシスとそれが放出したアンビエンスとの間に不一致があると考えた。ネイチャーライティングの中の自然を読者が体験するとき、その自然は原生的なものではなく、加工処理された一種の幻想に違いない。そして、私たちが感じるものは、その場ですぐに生まれるものではなく、文字を読んで初めて感じるものなのである。モートンの述べたように、「過去は幻想でしかない。未来はまだ到来していない。現在を掘り下げよ！　だが私たちがそこに到達するとき、ここも今もいずれも存在していないことを発見する」（同書：140）。だから、読者が感じる雰囲気は、人間と自然との距離を極力解消

しようとするエコミメーシスとは相反する。つまり、「ネイチャーライティングが自己と自然を崩壊させるとき、崩壊が起きているのとは別の水準では、自己と自然の二つを別個に賞賛するのだ」（同書：136-137）。

モートンは「事後性」（retroactivity）という言葉を使ってアンビエント詩学のこの特質を明らかにした。モートンによると、「事後性は私たちに後ろを振り向かせ、もう一度聞くように仕向け、時間をおいてから新しいなにかを定めるよう仕向け、私たちが知覚していたものを組み立て直すか変更するよう仕向ける」（同書：143）。モートンがこのように言うのは、私たちは自分が詩の世界とは別の存在であることを知っているにもかかわらず、詩を読んでいると、つい主人公の視点に立って体験してしまうからだ。最後まで読んでみると、これは主人公の話にすぎないことがわかる。つまり、自分が主人公と同一化された空間にいることに気づくのは、事後になって初めてなのである。このような気づきは、モートンには見慣れない不思議な体験だった。モートンは次のように説明している。

> アンビエント詩学では、不気味なものは、テクストの時空間がほとんど知覚されることなく変化していたことが明らかになるというようにして、作用する。私たちは、テクストが読まれる前に、それが始まる前に、この質に感応している。ゆえにその意味は、変化は起きてしまっていた、というものである。この前未来の性質は、作品に組み込まれている。すなわちそれは、不気味なまでに予見的な振り返りである。私たちにおいて生じる不気味な感覚は、テクストの展開におけるどこかの時点で私たちは後方を見ることになり、すべてが変わってしまっていたことをそのときになって初めて知る、というものだ。（同書：148-149）

テキストの中の時空が知らず知らずのうちに変化していくことは、読む前から予見されているが、ネイチャーライティングには時空を錯乱させる能力があるので、はっきりと意識することはできない。しかし、その文字を振り返ってみると、作品から遊離していながらも、そこに巻き込まれている現実の自分が目につく。すなわち、「顕在的な『瞬間』は事後的に顕在的になるのにすぎない。そのため、もしこの瞬間が完全にあるとしても、それは空白である」（同書：149）。そこでモートンはさらに、アンビエント詩学は「哀悼の質感」を持つと指摘した。ここでの哀悼は、アンビエント詩学の主題が悲しみであるという意味ではなく、「しっかりとした消化」（proper digestion）と「そうでない消化」（improper digestion）の違いに帰結する。モートンによると、「『しっかりとした』哀悼はいつも、ものすごく遅れる。失われた対象を十分に消化してしまうと、私たちはそれをふたたび味わうことができなくなる」（同）。私達はいつも対象の消滅中に対象に接触するから、私達は永遠に完全に対象を所有しあるいは対象を感じることができない。しかし、私たちはそういう相手と始終関わり合っている。これもモートンが美的な経験から掘り起こそうとした、人新世の新しいエコロジー思想である。私たちは汚染物質から逃れることはできないが汚染物質を完全に認識することはできない。これがのちにモートンが提唱するハイパーオブジェクトという概念の

前奏となる。モートンはさらに次のように説明した。

> 接触の瞬間は、いつも過去において存在している。この意味で、私たちはそれを実際に所有することはないし、そこに住みつくこともない。私たちはそれを、事後的に定位する。音が媒質を振動させたあとにのみ、こだまは私の耳へと達することができる。相対性理論によると、すべての知覚現象は過去において存在し、私たちの感覚器官には後になって到達する。ニュートンが瞬間的なものであると考えた、光と重力でさえもがそうである。それゆえに、アンビエント詩学にある、不気味で前未来的で事後的な――さらに憂鬱な――質感は、皮肉にも的確である。それは、事物が生起するやり方にある、必然的な遅延を追っていく。なにゆえに環境ライティングが直接性の感覚をそれほどまでに苦心して伝えようとするかを検討するとき、この点はとても重要になる。（同書：149-150）

これは、エコミメーシスが直接的な効果を得ることが不可能であることを示している。どのような手段を駆使しても、エコミメーシスが伝えようとするリアルな自然は読者には伝わらない。従って、自然環境の真実性を最大限に確保するために、アンビエント詩学は直接に自然環境に崇高なイメージを与えるあるいは語り手の掌握した知識で自然を豊かにすることを避ける。読者と自然との距離を縮めるために、アンビエント詩学は単に詩人としての目で環境を眺め、最適な表現で自然を描写しようとする。つまり、誇張しすぎたり、平たく語りすぎたりすると、エコミメーシスの狙いが損なわれてしまうのである。モートンは、エコミメーシスは不可能だと信じていた。彼は次のように述べている。

> エコミメーシスは、自然についての幻想を、触ることができるが形のない周囲をとりまく雰囲気として発生させる、特殊な修辞である。この経験を定着させるアンビエント詩学は、徴候的な幻想の事物になりうる、統一されていて超越的な自然を設定しようとする試みの妨げになる。批判的な精読（クロス・リーディング）は、このアンビエント詩学にある一貫しない特徴を明るみに出す。アンビエンスはエコミメーシスを危険にさらすが、というのも、直接性と自然さの幻想を伝えようとするまさにその過程がこれらの幻想を内から追い払おうとし続けるからだ。（同書：152）

エコミメーシスは、それ自体が非常に矛盾した概念である。というのは、ありのままの独立した自然を形作ろうとすればするほど、多くの修辞を駆使しなければならないからである。自然を書くこと自体が、原始的な自然を表現しようとしている本来の意図とはかけ離れている。次に、エコミメーシスによって描かれた環境の発する雰囲気が、表現しようとした直接性を再び破壊する。読者が雰囲気に触れる瞬間は、必ず事後に生まれたものである。簡単に言えば、アンビエント詩学には本当の現在時が存在しないし、そこに示されていることを完全に認識することは不可能である。そして、読み手が雰囲気と関係するプロセスは明確に存在する。つまり人間から完全に独立した自然環境は存在しない。目に見えない環境であ

っても、感性や意識のレベルで確実に自分とやりとりしている実在の存在なのである。エコミメーシスが作り出そうとしている完全に本物の自然が存在しないことが改めて示された。最後に、多彩な修辞手法と不安定的な言語によって描かれた自然は確かに不安定的であることがわかる。モートンが示したように、「明瞭で明確に現実的である自然を『外側』や『あちら側』に定めようとすることへの主な不満の一つは、それが説得力のあるものになることがとにかくできない、というものである。信憑性の欠如は、自然の感覚を定着させるのにもっとも力ある修辞の方法であるエコミメーシスのまさにその核心に浸透している。言語と、人間および人間ならざるものの世界に固有の定まらなさは、エコミメーシスは伝達するのに失敗するということを確実にする」（同書：153）。従って、モートンは自然よりも周囲に漂う「とりまくもの」と人間との曖昧で把握しがたい関係を提唱したいと考えているのである。

Ⅱ 奇妙なよそ者からハイパーオブジェクトへ

モートンは自然を取り払ってこそ、自分のエコロジー思想をきちんと語ることができると考えた。亡霊のような非人間を愛し、その不気味なものと結びついて互いに織り成すことこそ、ダークエコロジーが私たちに語りたいことなのである。モートンが人間よりも非人間的な存在に注目していることは、私たちも知っている。具体的には、その非人間的な存在は不安定で、つかみにくい脆弱な「とりまくもの」である。モートンは「私たちは、有限性と脆弱性の宇宙に住んでいる。この世界では、オブジェクトは神秘的で解釈学的な無知の雲によって満たされ、取り囲まれている」（Morton 2016 : 6）と指摘した。その意味で、それは「暗くて無気味」（dark-uncanny）である。しかし、「暗くて無気味」（dark-uncanny）であることは、「暗くて甘い」（dark-sweet）こととも不思議な仕方でつながっている。つまり、ダークエコロジーは対象を認識する新たな意識を育もうとしているのである。非人間的な存在は、見慣れないものであり、馴染み深いものである。見知らぬものだからこそ、私たちは非人間を暗いと考えてしまう。しかし、非人間的なものも私たちの身近にある。モートンが繰り返し論じているアンビエンスと読み手の関係を考えてみよう。魅力的なアンビエンスは読者を包み込み、読者の肌にまで染み込んでいく。それゆえ、アンビエンスのような非人間と人間との距離は非常に近い。これはまた、非人間的なものが暗くて甘い理由でもある。深い無知の雲のその暗さの奥に隠された甘さとは何なのだろうか。『エコロジー思想』においてモートンは「奇妙なよそ者」と回答している（Morton 2010）。「奇妙なよそ者」とは私たちを取り巻く、認識できない、不穏で邪悪な汚れたものである。モートンは、「奇妙なよそ者」が自分に近いことを知ってから逃げ出す態度に反対し、私たちはそれらを愛し、親密に共存していくことを学ぶべきだと主張した。ダークエコロジーとは「奇妙なよそ者」との偶然で運命的な出会いのことである。

人新世が訪れるにつれて、これらの「奇妙なよそ者」は次第に自分のベールを脱いで世間

に察知されるようになる。人類がそれらについて知っているのは氷山の一角としか言いようがないが、モートンにとっては大きな進歩だった。事実上すべての人間が地球温暖化、核汚染などの環境変異の影響を受けているが、人類は一貫して全面的にこれらの現象を制御することはできない。世界は、これまで私たちが想定していた安定の居住地ではなく、もっと大きな不安定空間の一部にすぎない。そこでモートンは、より大きな領域を探るために、人間的尺度から遠く離れたハイパーオブジェクトを公衆の視野に入れた。ハイパーオブジェクトとは、モートンが、人間のいない世界にも存在する、人間的尺度を超えたものを形容するために用いた用語で、つねに脆く、不安定で、流動的で、全面的に認識できないという一連の形容詞と結びついている。序章で言及したとおり、ハイパーオブジェクトという構想は OOO に由来する。OOO についてモートンは次のように述べる。

> オブジェクト指向存在論がしていることは、そこかしこで実在における亀裂を増加させることである。諸事物が存在するのと同じだけ実在には亀裂が存在する。なぜなら、実在とはまさに諸事物であり、そして諸事物は、それらがそうであるところのものと、それらが現れ出る仕方のあいだにおいて、内部から引き裂かれており、諸事物それ自身に対して現れ出るときでさえ引き裂かれているからだ。人間－世界のあいだにはギャップがある。（モートン 2017：157）

モートンの言う通り、オブジェクト指向存在論は、物事それ自体とその現れの間に亀裂があることを指摘する。物事には直接に見えない部分が存在するが、この部分は意識することはできるが思考することはできないのである。では、ハイパーオブジェクトと OOO の間には、どのような関係や相違点があるのだろうか。まず、ハーマンの考えを考察する。

ハーマンはアメリカの現代哲学者で、思弁的実在論の哲学思潮運動の代表的な一人であり、OOO の創始者でもある。ハーマンの考えでは、哲学は対象に関わる学問であり、対象の意味を説明することはハーマンの長年の仕事である。ハーマンはモノを実在の範囲に限定することに反対している。陽子のような小さいものから、宇宙のような大きいものまで、さらには意識にとどまる国家、同盟などの概念さえもハーマンの吟味する対象に含まれている。従って、ハーマンの主張は「全ての対象が等しく実在的であるということではなく、全ての対象は等しく対象であるというものである」（ハーマン 2017 : 13-14）。ハーマンは「おおかたのところ、哲学における実在論は常識か自然科学のどちらかに奉仕すべく採用されてきた」（ハーマン 2020：151）と考え、このような停滞している実在論に抗議する。つまり、ハーマンに言わせると、実在論はこのように単純に定義されるべきではなく、ある意味で実在論は常に奇妙さと関連付けられている。なぜなら、哲学は怪奇的なものから始まることもあるが、結局は科学の正統性に転落してしまったからである。例えば、ハーマンが批判した「下方解体」（undermining）はその好例である。「解体」という概念について、ハーマンは『四方対象』（ハーマン 2017）の中で詳しく解説している。物事は一つの要素ではなく、

要素の組み合わせである。つまり、「一見自立的な対象であるかのように思われるものも、実際には、より小さな部分の寄せ集めにすぎない」（ハーマン 2017：19）。ハーマンは対象を最終的に物理的な要素に分解することを批判している。というのは、ハーマンの提唱するOOO は怪奇に関するものであり、「実在とその明白な顕在化のあいだの裂け目を捉えようと努めている」（ハーマン 2020：151-152）からである。そのため、ハーマンはフッサールとハイデガーを読み直すことでOOO を創った。

すなわち、フッサールとハイデガーはOOO に生命の種を与えた。では、ハーマンの主張を考察するために、ハイデガーから始めよう。ハーマンはハイデガーが世界を認識するために用いた「四方界」（das Gerviert）の概念――大地・天空・神々・死すべきものども――を参照してはじめて対象の四つの極を探究している。この四つの極は感覚的対象、感覚的性質、実在的対象、実在的性質である。ハーマンはまさにハイデガーの有名な道具分析を援用して実在的対象の存在を説明したのである。

ハーマンは、多くの人がハイデガーの道具分析を誤読していると指摘して、ハイデガーの道具分析を再解釈することによって、OOO を発展させた。ハーマンによると、誤読する人たちにはハイデガーをよく知っていると自負する学者もいるし、ハイデガー自身もそうである。ハイデガーは、多くの場合において人は無意識のうちに単純にあるものに依存し、そのものが壊れたときにはじめてその存在に気づくといっている。この理由についてハイデガーは「手許に備わる設備（手許性）」（ready-to-hand equipment）と「手前に現前する存在体（手前性）」（present-at-hand entities）という互いに異なる概念を考案した。すなわち、ハーマンによると、「道具分析は、あらゆる理論と知覚は、実践的行動というそれまで気づかれていなかった背景に根拠づけられるということを意味していると受け取られる。私たちが個々の物に気づく以前に、私たちはすでに、相当に無意識的な仕方で、実践的目的の全面的システムのうちに絡め取られているのだ」（同書：153）。ハーマンの考えでは、対象にアクセスするという点では、理論と実践の間に違いはない。理論も実践も対象に直接アクセスすることはできず、対象を発見することも、行動によって対象物と相互作用することも、対象をすべて取り込んで把握することもできない。対象のもっと深いところには我々がアクセスできない部分がある。次に、手許性と手前性という対立する区別の定義はOOO にはやや浅薄な見方である。ハイデガーは、物体は壊れたときにしか気づかれないと考えているが、現前というのは、それまでの関係から切り離された存在、つまり関係のない実在なのである。簡単に言えば、ハーマンは手許の設備は関係的実在であり、手前の存在体は非関係的実在であると考えている（同書：154）。ハーマンはこれが矛盾していることを発見した。ハンマーを例に挙げ、ハーマンは自分なりの解釈を示した。

> 第一に、手前に現前する存在体にも、非関係的なものなど一切ない。なぜならば、それらの存在体は、それらが目に見えるものとして相対している現存在（人間存在）との関係においてのみ、存在しているからである。孤立状態にありながら、人を驚かせる壊れたハンマーなどな

い。なぜなら、私や他の誰かに対してこそ、それはいつも驚かせるものだからだ。この理由のために、手許の備えと手前の現前のあいだに想定された割れ目は、それほど広くはない。両者ともに人間存在との関係においてのみ存在するからだ。そして私たちはすでに、道具分析の真の教訓とは、理論や実践よりも深い対象の存在であることをみた。つまり、手許性と手前性の両方について普通に理解されていることと比べて深いのである。しかしこれが意味するのは、対象は人間存在に対してそれらが持つ関係のどれよりも深い、ということだ。（同）

ハーマンは、手許の設備も手前の存在体も、どちらも人間との関係の中でのみ成り立つという。私たちのものごとに対する感覚、たとえばハンマーが驚くべきものだという感覚も、人の目の前にしか生まれない。ハンマーも、周囲の環境にさらされているから壊れているのではなく、ハンマーそのものの性質が原因なのだ。そこで、これはハーマンが創った OOO 版ハイデガーの道具主義とも考えられるだろう。ここでハーマンは、カントによる人間の認識の有限性および物自体の認識不可能を援用して、モノと人間との関係を解説した（同書：155）。すなわち、「理論も実践もただ、私たちとの関係のなかには決して十全に広がり切らない、諸物のより深い存在を翻訳しているに過ぎない」（同）。ハーマンの思想枠組みでは、直接アクセスできるものはなく、あらゆるものは間接的にアクセスするので、このような間接的因果関係をハーマンは「代替因果」（vicarious causation）ともいう。ハーマンは、理論的にも実践的にも到達不可能な物体を「実在的対象」（real objects）と呼んでいる。この物体の最も顕著な性質は、現前のいかなる領域においても、それが後退し隠匿されているということである（岡嶋　ハーマン 2017 監訳者あとがき：228）。明らかにモートンのハイパーオブジェクトはハーマンの影響を強く受けており、このような直接アクセスできない、隠れたり後退したりするものに極めて近いといえる。

モートンによると、私たちがハイパーオブジェクトに対する観察を試みると、一つの移動しているレンズが工場の生産プロセスを追うときのように「撮影がいつ終わるか分からない」（Morton 2013：72）状態に陥る。レンズには工場の一部しか映らないからである。「ハイパーオブジェクトを超次元的な（transdimensional）実在的事物として考えることには価値がある」（ibid.：73）。モートンが強調したいのは、「ハイパーオブジェクトは、我々の頭の中の概念的な彼岸やあちら側にあるのではない。それらは、他の物体に影響を及ぼす実在的な物体である」（ibid.）ということだ。それゆえ、ハイパーオブジェクトには、位相（phasing）という特徴がある。この位相は月相のように、「ある特定の満ちた状態から出発して、近づいて、それから小さくなる」（ibid.：74）プロセスである。つまり、「ハイパーオブジェクトは行ったり来たりするように見えるが、この行ったり来たりは、それらに対する制限された我々の人間的アクセスの機能なのである」（ibid.）。

ここでモートンが強調するのは、多くの場合、私たちが考えている道理は人間の解釈に過ぎないということである。全体は私たちには見えないので、その存在を感じた時、人は、普通の理解にしたがってそれを翻訳するしかない。そのため、ハイパーオブジェクトの位相性

は、オブジェクト指向存在論の強調する物事そのものとその現れの間に埋められない割れ目があることに対応する。それではハイパーオブジェクトの位相性はどのように形成されるのか。モートンは JPEG の例を通してこう述べる。

> JPEG が作られるとき、チップ上の光感受性電子装置が光子と衝突し、光子のいくつかが画面上のピクセルという形で可視的な情報に翻訳される。一連のツールが、結果として生じる画像に対する背景へと隠退しつつ、機能を果たす。システム全体を精査すると、互いに作用しあう多数の装置が見いだされるが、それらは、光子や音波などの登録イベント（inscription events）を電気的ないし電気化学的な信号に変換するか、そうでなければ変容させる。（ibid.：77）

ハイパーオブジェクトの位相の現象は、圧縮された JPEG の場合と同じである。変換された情報を知覚する時、ハイパーオブジェクトが実際に存在することが分かる。生活の中でたまに感じられる何事かの兆しと同じように、私たちがいくつかの現象を感じているとき、そこにあるのは、すでに翻訳されたハイパーオブジェクトの兆しだけである。ハイパーオブジェクトそのものではない。それゆえ、「物体はそれ自身であると同時に、それ自身ではない」（ibid.：78）のである。本質とイメージとの間には割れ目がある 。

しかし、モートンのいうハイパーオブジェクトは、ハーマンの OOO とまったく同じものではない。その理由はフッサールから始めよう。ハーマンは、フッサールが対象が何であるかを考える過程で反対したのはイキリス経験論であると指摘している（ハーマン 2020：159）。経験論において、対象は私たちの心によって形作られた一連の性質にすぎない。したがって、経験論者から見れば、対象は固定的な統一体をもたない。しかし、フッサールはそれに共感できなかった。フッサールは、対象をどのような仕方で体験しても、その対象は不変の形で私たちの前に現れると考えた。つまり、対象には本質的な性質がある。筆者はビルの観察を例にとりあげておきたい。違う角度で、違う距離で、違う時間にビルを観察すると、そのビルはきっと違った姿を見せてくれるはずである。しかしいずれにしても、このビルがずっと観察してきたビルであることはわかっていた。従って、フッサールにとって対象には本質的な性質がある。しかし、対象は状況によっては特定の形で目の前に現れ、我々が見るのは対象の射影（Abschattung）にすぎない。強調すべきは、フッサールがいう対象は、ハーマンがハイデガーを読み直すことによって導かれた実在的対象ではなく、意識の範囲に内在する志向的対象である、という点である。私たちが日常から意識している見慣れたモノ、たとえば、本や机などである。ハーマンは志向的対象を感覚的対象と表現し、射影を感覚的性質と定義する。フッサールは対象とそれが現れるイメージとの間に裂け目があることを認識しているが、ハーマンはフッサールの考えに完全に同意しているわけではない。なぜなら、「フッサールにおいて、対象は人間のアクセスから退隠しているのではなく、あまりに多くの取るに足らない装飾と表面的な効果とで飾られているにすぎないからだ」（ハーマン 2017：46）。

ハーマンは感覚的対象の中に実在的性質があると考えている。実在的性質も直接アクセスできないが、これが物体同士を互いに区別できる原因でもある（同書：227）。一方、モートンのハイパーオブジェクトは、不安定で壊れやすく、固定された性質を持っていない。ハーマンとモートンの相違点について、篠原は次のように説明している。篠原はモートンが思索するものは不安定なだけでなく、「消えてしまうものとして存在する」（篠原　2020：18）と考えている。モートンは恐竜を用いてこの消失の性質を説明した（Morton 2013）。もし恐竜が存在する時代に生きているとすれば、その時に見る恐竜の足跡は、恐竜自体に比べて恐竜だけの過去である。私が今見ている恐竜の足跡は、その恐竜自体にはすでに過去になっている。この過去と未来の概念は、人にとってのものではない。恐竜の足跡の時間は、恐竜の時間よりずっと遅い。そして、我々は永遠に恐竜自体を見ることができない。恐竜の足跡を見た時にすでに恐竜自体は離れていってしまったのである。恐竜は、私たちにとってとても遠い存在である。私たちが捕まえられるのは恐竜の痕跡だけである。この痕跡も、恐竜自身が他の物体と相互作用して生じたものであり、完全に恐竜に属するものではない。

しかし、モートンはなぜモノには一定の性質が存在しないと主張したかについて、篠原の思考は不十分だと思われる。篠原が指摘した理由に加えて、もう一つ重要な理由はハイパーオブジェクトのもう一つの特徴、「時間のうねり」（temporal undulation）である。モートンは、ハイパーオブジェクトが「私たちが慣れ親しんでいる人間的スケールの時間性とはまったく異なる時間性に関わっている」（ibid.：1）とする。ハイパーオブジェクトが体現している時間性は、私たちが普段理解している時間性より深いものだと言える。例えば、地球温暖化の影響は長い間続くが、その果ては人類には見えない（ibid.：58）。ハイパーオブジェクトの時間スケールは、それらの影響が非常に長い時間続くので、無限大であるとさえ言える。少なくとも、それは人間の寿命よりははるかに長い。ハイパーオブジェクトの時間スケールは、無限にも等しいほどの長さである。しかし、ここで強調しなければならないのは、「ハイパーオブジェクトは永遠ではない。そう　ではなく、それらが提示するのは、非常に大きな有限性（very large finitude）である」（ibid.：60）ということである。従って、ハイパーオブジェクトは、非常に小さい範囲だけではなく、非常に大きな有限性をも代表する。それが代表する時間次元は、私たちの普通の日常生活の中では想像することもできない。例えばあなたの机の上にコップがある。それは固定的で、硬直した存在である。しかし、ハイパーオブジェクトの観点から言えば、これは単なる「偽の直接性」（false immediacy）（ibid.：62）である。非常に大きな有限性という観点から言えば、このようにコップを理解するべきではない。それは固定的で硬直した存在ではなく、「流れの中の乱れ」（turbulence in a stream）（ibid.）である。我々の目の前にある固定的で硬直した物体は、実は流れるものである。つまり、新しい見方によって目の前のものを考えるべきで、目の前に現れた姿は実はある種の仮相に過ぎず、宇宙的観点から見れば、それは一種の流動である。目を信じる必要もなく、好きな方法で目の前のものを解読できると言っても過言ではない。これも、物事そのものとその表象との間に埋められない割れ目が存在していることを証明する。

「奇妙なよそ者」という論点に戻ると、モートンは、「奇妙なよそ者」が、「未来の未来」(future future)、「他の場所とは別の場所」(elsewhere elsewhere)(ibid. : 67)にいると指摘した。この未来の未来は、何年以降といった特定可能な未来ではなく、「予測可能性、タイミング、あるいはいかなる倫理的もしくは政治的な計算を超え時間が存在する」(ibid.)。他の場所とは別の場所も、私が大阪にいて、あなたが東京にいるというような、互いに他の場所にいるという意味ではなく、「どこでもないが実在的な場所が存在する」(ibid.)ということなのである。つまり、ハイパーオブジェクトの視点では、時間と場所の区別はない。すべてのものが明確でも固定的でもない。

それゆえ、ハイパーオブジェクトの観点からいえば、「対象は決して現在ではない」(ibid. : 93)のである。つまり対象は固定的な性質をもたず、いつも流動的である。従って、モートンは物体に一定の同一性があるとは考えなかった。しかし、モノの本質は、人間の認識から遠く離れたどこかの深いところに潜んでいるということで、モートンもハーマンも一致していた。注意しなければならないのは、篠原が述べたように、ハーマンは「世界を社会構造や権力関係といった人間中心主義的な構築物とは独立に存在するものとして考える」(篠原 2020 : 127)、ということである。一方、モートンはモノが独立に存在するのではなく、人間と絡み合っていながら、完全に認知されていないと主張した。しかし、ハーマンとモートンの思考は相関主義によってモノを考えることへの大きな挑戦ともいえる。

相関主義は、思弁的実在論のもう一人の代表人物であるフランスの哲学者メイヤスーの思考の出発点ともいえる。メイヤスーは、相関主義はデカルトから始まっており、カント以降、哲学的思考の中心を占めるようになったと指摘している。相関主義はものと人間とのつながりを強調する。つまり、ものは人間とのつながりの中にしか存在しないのである。「感覚的なものは、単純に『私のなかに』、夢と同じようなふうにあるわけでもないし、単純に『事物のなかに』、内在的性質のようにあるわけでもない。感覚的なものとは、事物と私のあいだにある関係そのものだ。事物そのもののなかにはなく、事物と私との主観的な関係のなかにあるこれらの感覚的性質は、古典哲学において二次性質と名づけられたものに相当する」(メイヤスー 2016 : 10)。メイヤスーは相関関係を根本的に否定するわけではないが、対象は人間から独立した性質を持つことができ、人間がいてもいなくても、対象は人間から独立して存在することができると提案する。メイヤスーによれば、「対象について数字的用語で定式化されうるあらゆるものを、対象それ自体〔邦訳者注 : 即自としての対象〕の固有の特性として考えることは有意味である」(同書 : 12)。メイヤスーは感覚的なものが人間との関係の世界の中にのみ存在するという命題においても、数学的に解釈可能な客体がこの関係の制限を受けないことを提唱した(同書 : 12-13)。

相関主義は、対象を実体化することを拒否する。つまり、相関主義は対象が人間の外に独立して存在することはありえないと考えた。人間がその場にいなければ、あるいはその物体と関係しなければ、対象は発見されない。このような疑問に直面したメイヤスーは、議論の対象を人間以前の世界に移し、人間の手の届かない世界が存在することを証明した。メイヤ

スーはこのような実在を祖先以前的（ancestral）と呼んでいる（同書 : 24）。メイヤスーは、祖先以前のものは時間の長さや空間距離とは関係がないとしているが、これも意識の時間問題ではなく、科学の時間問題である。祖先以前のものもすべての生命の前に出現しているので、完全に相関主義に先立って、思考を離れた独自の存在である。科学はこの世界を数字で測定するが、その数字は正確なものではなく、おおよその計測である。その世界を直接経験できる人はいないからである。言い換えれば、物自体は相関主義の外に存在する。消えずに亡霊のように残っている（同書 : 223）。それ以外、メイヤスーは、世界は変化しやすく、すべての安定は偶然に基づいていると考えていた。彼は、科学理論は常に反論できるものであり、自然法則の不変性は偶発的なものに過ぎないと指摘する。メイヤスーの述べたように、「たとえこれまで自然法則が恒常的であり続けてきた（そうした法則の本質的実在性ではなく、それを対象とする理論のみが発展してきたにせよ）としても、経験――再び、やはり現在または過去の――において、それがいつまでも同じであるとわれわれに保証できるものは何もありません」（メイヤスー 2018 : 105）。そして、一つの理論が何度検証されても新しい結論に置き換えられる可能性があるので、未来がどうなるかは誰にもわからない（同書 : 107）。人間のコントロールから独立して常に変化していくものは、モートンのハイパーオブジェクトにとても似ていると言える。

だが篠原は、モートンとメイヤスーの間には相違があると指摘する。篠原は「メイヤスーは、人間と世界の相関性の外部に出ることを目指し、ゆえに人間の有限性そのものの外を思考しようとするのに対し、モートンは、人間の有限性を突き破ることよりもむしろ、人間の有限性を人間の他の存在の有限性との関連のなかで認め考え直そうとしている」（篠原 2016 : 221）と述べた。いずれにせよ、モートンはハーマンとメイヤスーの思想を参照しながら、人間的尺度を超えたハイパーオブジェクトを発展させた。翻訳の一部でしか認識できないハイパーオブジェクト（Morton 2013）は、モートンが人新世で守ろうとした非人間的な存在である。

第三節　小括

モートンが自然を排除して、人間と非人間の関係を考えようとした理由が、第一節で判明した。言い換えれば、第一節では、なぜ芸術およびネイチャーライティングがモートンにとって重要なのかを詳しく論述していた。まず、ネイチャーライティングが醸し出す真実らしい自然のようなアンビエンスは、モートンが非人間を認識するきっかけとなった。具体的に言えば、非人間とアンビエンスは似たようなものである。ネイチャーライティングで出現する自然は幻想のようで、不安定で御しがたいがまた人間と相互に織りなすのである。そのため、モートンは自然というよりも、人間と非人間の関係を「とりまくもの」という視座で考えた。次に、芸術作品における理想的で純粋的な自然はモートンの批判対象である。自然は純粋で崇高なものの代名詞ではなく、逆に工業化や科学技術の発展によ

って完全に純潔なものではなくなった。つまり、偉大で綺麗な自然がすでに死んでいることはモートンのエコロジー思想の根幹である。モートンは、自然がもはや純潔ではないという事実を、ネイチャーライティングによって形成された偉大な自然像の虚偽を指摘することによって論述した。最後に、ラトゥールも自然の概念自体が不安定で定義しにくいものであると考え、自然の概念を捨てて自らの考えを論じた。すなわち、ラトゥールとモートンは「自然の死」を提唱している。脱け出せない汚染物質との非調和の共存はモートンが唱えたダークエコロジーの真意である。

第二節では、主にモートンの非人間に関する思考と議論を考察した。モートンの非人間的な考察は、主に三つの段階を経る。まず、アンビエント詩学における雰囲気のような「アンビエンス」である。二つ目はダークエコロジーでの「奇妙なよそ者」との出会いである。最後に、汚染物質と結びついた、人間の認知範囲を超えたハイパーオブジェクトである。ハイパーオブジェクトという概念はモートンが思弁的存在論および OOO の影響下で発展させた独自的な非人間に関する理論である。近年頻発する環境危機は、このような存在を大衆の視野に引き入れている。モートンは、私たちがそれを恐れるのではなく、私たちがそれと切り離せない共存を受け入れることを望んでいる。これは、人新世がモートンに与えた示唆でもある。人新世については次章で詳しく述べる。

第二部「人類の時代」―人新世

第二章　ようこそ、人新世へ

人間活動が地球に与える影響が大きくなるにつれ、環境危機や種の絶滅といった言葉がニュースで取り上げられることが多くなっている。例えば、地球環境や自然、歴史に関する知識の普及を目的とした雑誌『ナショナルジオグラフィック』（*National Geographic*）では、生物種の絶滅に関するニュースが掲載されている[17]。このニュースによると、現在の生物種の絶滅は、以前の数千倍のスピードで起きているという。これまでの小惑星衝突による恐竜の絶滅とは異なり、現在起こっている絶滅は、気候変動、土壌の酸性化、魚の乱獲など様々な要因によって引き起こされている。これらの問題の張本人は、間違いなく人類である。朝日新聞の記事も、環境汚染や生態系の破壊は、人間が戦争を起こし、天然資源を開発しすぎたことによるものだと報道した[18]。注目すべきは、これらの記事において、最も若い地質時代である「人新世」（Anthropocene）は一夜にして流行語となったようで、今や各学問分野で広く議論される話題となっていることである。人新世は、完新世に続く地質時代であり、人類の痕跡が地球の隅々まで広がったことを表している。すなわち、人新世は人類の時代である。

なぜ人新世という概念をここで導入するのかは、次の二つの理由による。まず、人新世はモートンがエコロジー思想を考える背景であるからだ。人新世の意味と人新世をめぐる論争を理解することは今日の環境問題の現状を正しく捉えるために必要であると思われる。これは、人間と環境危機との直接的な関与という現在の環境問題の最も顕著な特徴を把握するのにも役立つ。一方で、人新世という用語はモートンが強く擁護した概念であるからだ。人新世の概念とそれがもたらす論争を探究することは、環境危機に関するモートンの立場が何であるか、モートンの文脈における人間と非人間とはどういう関係なのかをより深く理解することにも欠かせない。なぜなら、モートンにとって人新世の出現は、日常に無視された人間と非人間との絡み合う関係を学者たちに考えさせているからだ。そのため、本章では人新世をめぐる議論を中心に展開していく。本章では、二部に分けて論述する。

第一節では、まず、人新世という用語の起源、意味および注目される理由について説明する。人新世という概念は、人類の時代と簡単に要約できるが、その意味するものはそれだけではない。自然環境の激変は人類の力の強さを証明すると同時に、人間と自然、自然と歴史、自然と社会の関係に関する伝統的な観念に一連の巨大な衝撃をもたらした。簡単に言えば、

---

[17] エリザベス・コルバート「『人新世』が動物たちを追い詰める　人間を中心とする時代がもたらしてしまうものとは」、二〇一九年九月二七日。（https://natgeo.nikkeibp.co.jp/atcl/news/19/092400547/において2021.12.27 閲覧）。

[18] 朝日新聞「『人新世』地球の限界を考える」、二〇二一年八月二日。（https://www.asahi.com/articles/DA3S14996013.html において 2022.1.7 閲覧）。

人新世の到来は、これまでの世界の見方を覆した。人間と自然、人間と人間を取り巻く万物は、二つに分かれて独立しているわけではなく、人間の力はすでに地層の中に深く埋もれており、地質変化の最大の原因となっている。次に、人新世がもたらす絶滅への懸念について議論する。地球温暖化、種の絶滅など一連の出来事が発生し、絶滅の二文字が注目の焦点となっている。大量の絶滅を目の当たりにすると、未来の世界が気になり始める。しかし、人間のいない世界は想像もつかないし、ますます手に負えなくなる環境の激変は人々をさらに心配させる。この心配は人間と周囲のものとの境界線を取り払った。言い換えれば、人新世が示唆する終焉的な意味も、人間と自然との関係を再考せざるを得ないことを示している。

第二節では、人新世の開始時期について考察する。人新世の開始時期については諸説あるといっていい。本節では、これらの主張を整理し、まとめる過程で、地球環境への人間的介入の大きさを実感することができる。振り返ってみると、人間の痕跡が環境に残っているのは想像以上に古いことであり、その規模も時を経るごとに広くなっていった。人新世の始まりの時間をたどることで歴史と自然との切り離せない関係を回顧することができる。しかし、人新世がいつ始まったかにかかわらず、環境を変えてきたのは人類である。人新世は、「私たちが目を覚ます時が来た！」と言っているようである。

第一節　我々が人新世にいる！

Ⅰ　統合の時代―限界を乗り越えて

人新世という言葉は一九八〇年代にアメリカの生物学者E.F.ストーマーが使い始めた。彼は、人間の活動が地質の変化を左右するようになったらしいことを、完新世とは別の時代区分で説明する必要があることに気づいた[19]。二〇〇〇年にノーベル化学賞を受賞したオランダの大気学者P.クルッツェンはメキシコで開催された地球圏・生物圏国際共同研究計画（IGBP）の会議で人新世という地質学的概念を正式に提唱した（橋爪 2020：4）。この言葉は惑星範囲にまで拡大した人類の力を形容し、人類の巨大な天と地を滅ぼす能力こそが環境破壊の元凶であることを説明するための用語である。言い換えれば、人間こそが人新世の創造者であり、人新世という用語の核である。

人類活動が地球に深刻な障害をもたらしたという人新世のアイデアは新しいものではない。すなわち、人新世の起源は一九世紀末にさかのぼる。イタリアの地質学者A.ストッパーニはすでに一八七三年にホモ・サピエンスを「自然の主人であり」、「この人工生物圏において脅威となっている」と位置付ける、Anthropozoicという人新世の初期概念を提唱した[20]。し

---

[19] 人新世誕生の経緯はクリストフ・ボヌイユ、ジャン＝バティスト・フレソズ『人新世とは何か〈地球と人類の時代〉』野坂しおり訳、青土社、二〇一八年を参照した。

[20] Gilebbi, Matteo. “Antonio Stoppani and the teleological interpretation of the Anthropocene”. 2017. 本論文はオ

かし、クルッツェンが「人新世」を正式に発表してから、多くの学者がこの言葉に注目するようになった。特に近年、人新世という用語は、環境危機をテーマにした研究会議や学術誌に頻繁に登場し、各分野の学者たちの間で瞬く間に広まった。

なぜこのような一つの斬新な地質時代が各分野の学者の注目を受けて、世界の新しい気風と議論の話題になったのかというと、人新世は人間世界や歴史に対する見方を変えつつあるからである。特に人間自身と世界、さらには宇宙とのつながりについての見方は、人新世が進むにつれて大きく変わるかもしれない。アメリカの環境科学者である E.C.エリスは著書『人新世：非常に短い紹介』（*Anthropocene: A Very Short Introduction* 2018）の中で生物学、地質学、環境科学、人文学など様々な観点から人新世を徹底的に紹介、考察している。この本は、人新世を全面的に見通す格好の作品と言える。エリスが本の冒頭で述べたように、「人新世では、私たちの視点を大きく変える必要がある。地質学者や他の人々が人新世についての様々な提案を正式に決定するために戦っている間に、彼らの努力は、自然界における人間の役割、さらには人間の意義についての古代世界観と現代の議論にからんでいても不思議ではない」（Ellis 2018：2）。したがって、人新世という用語が各学問にもたらした衝撃は決して軽視できるものではない。

自然科学者の中には、人間は豊富な知識と先進的な技術を利用して生態系の機能を回復できると考えている者もいる。例えば、人新世という用語の発案者であるストーマーとクルッツェンが代表的な人物である。ストーマーとクルッツェンは人新世を産業革命以来の二酸化炭素の過剰排出と結びつけ、人類が気候変動をもたらしたと主張している。地球温暖化、オゾンホール、水汚染、プラスチックの濫用、種の急速な大量絶滅などが、この言葉の裏に隠されている人類の力の最も有力な証明である。大量の人為的環境の変化が人新世における人間は当然のことながら「自然の偉大な力」（a great force of nature）[21]となっていることを示唆している。つまり、人類の力は環境変化と不可分であり、人間は環境悪化の責任を負うべきだということだ。一方、クルッツェンは、人間は気候工学を利用して気候変化を制御できると信じており、人新世と気候工学の間には深い関係があると主張した。クルッツェンは遠い未来に、人類は大気に人工温室効果ガスを添加して氷河時代の発生を防ぎ、温室効果ガスが低すぎて農業生産量が減少するのを防ぐことができると考えている。人類は大量の先進技術と科学的管理によって地球資源を合理的に利用し、自然環境を過去の状態に戻すことさえできる[22]。イギリスの生物学者 R.T.コーレットも『新たなエコシステムへの新し

ハイオ州コロンバスで開催された二〇一七年 AAIS/CSIS 会議で発表されたものであり、https://www.academia.edu/32673194/Antonio_Stoppani_and_the_Teleological_Interpretation_of_the_Anthropocene において 2021.5.18 閲覧した。（本論文は全部で五頁であり、引用は三頁目にある）。

[21] アメリカの環境科学者である E.C.エリスによれば、クルッツェンの提案と多くの科学的証拠により、人類の出現が「自然の偉大な力」になっている（Ellis 2018：2）。

[22] Crutzen, P.J.. “The ‘Anthropocene’”, In: Ehlers, Eckart, & Krafft, Thomas, eds. *Earth System Science in the Anthropocene: Emerging Issues and Problems.* Springer, 2006. pp.13-18. p.17.（http://ndl.ethernet.edu.et/bitstream/123456789/74935/1/Eckart%20Ehlers.pdf#page=25 において 2021.12.23 閲覧）。

いアプローチ』（*New Approaches to Novel Ecosystem* 2013）で、常に更新される生態系の状況を把握した上で、新たな管理行動をとるべきだと主張している。しかし、新しい生態系を想定される歴史的な状態に回復させたいという願望がある一方で、気候変動への適応の重要性や、生態系が回復不可能であることも同様に認識されている[23]。人新世が引き起こす生態系の劇的な変化が、地球環境を完全に無垢な理想の状態に戻すことを不可能にしていることは明らかであり、これもモートンの主張である。

自然科学者とは違って、人文学者は人新世が哲学思考の根幹にもたらした変化について考えることが多い。具体的に言えば、多くの人文学者が、人新世が人間と地球環境の間の垣根を取り払い、種の分類までも破ったということに同意している。

アメリカの環境哲学者J.ジェンセンが言うように、「これらの境界の定義に頼ることで、世界の複雑さを把握することはできるが、多くの現実を無視する傾向がある。今、私たちは多様でありながら国境のない世界に住んでいることを受け入れる必要がある」[24]。文化人類学者の奥野克巳は、地球環境への人間の影響の大きさに言及すると同時に、人間が地球環境に深く依存していることを強調している。さらに、彼は人新世では、自然と人間の二元論が消えただけでなく、自然科学と人文科学の二分法も消えたという[25]。インドの歴史学者D.チャクラバルティは『歴史の気候 四つのテーゼ』（*The Climate of History: Four Theses* 2009）で、人新世の地質時代が人間と自然を密接に結びつけていると主張した。チャクラバルティは自然科学の領域だけで人新世を論じているのではなく、自然科学と人文科学の壁を突き破り、歴史と社会にかかわる人文領域にまで視点を投げかけている。気候変動や地球温暖化がもたらす危機は、人々に過去を振り返り、現在を考えさせ、未来を描くようにさせている。歴史も自然も、過去、現在、未来にかかわっている。人間が気候を変えるほどの巨大な力を持つようになれば、人間の歴史と自然は切り離せなくなる。歴史と自然が絡み合うことで「自然と社会が一体となった」（Ellis 2018：131）。

人文学者の飯田麻結は D.ハラウェイの思索を切口として人新世の特徴を語っている。飯田によれば、ハラウェイは『霊長類の見方』（*Primate Visions* 1989）において、「自然と文化の境界に対する監視ではなく、むしろ両者をめぐるトラフィックによって彼女〔引用者注：ハラウェイ〕自身は触発されると述べています」（飯田 2017：116）。つまり、人新世をめぐる議論の射程は文化的な次元にとどまらず、物質的あるいは生物学的な側面にも及んでいるのである。そして飯田は、人新世は始まりと終わりが見える物語だと考えている。人新世の終わりは、人間が存在しない世界を意味する。私たちはそのような終わりを予期すること

---

[23] Corlett, Richard T.. “New Approaches to Novel Ecosystem”, 2013. In: *Trends in Ecology & Evolution* **29**(3). Elsevier, 2014. pp.137-138. p.137.

[24] Jensen, Jon. “Cutting Nature at the Seams: Beyond Species Boundaries in a World of Diversity” In: Brown, Charles, & Toadvine, Ted, eds. *Nature's Edge: Boundary Explorations in Ecological Theory and Practice*. SUNY Press, 2006. pp.61-82. p.79.

[25] 奥野克巳「明るい人新世、暗い人新世：マルチスピーシーズ民族誌から眺める」『現代思想』第四五巻二二号、青土社、二〇一七年、七六〜八七頁。七八頁。

はできても、そのような世界を正確に認識することはできない。そのような想像力を提供するのが人文学の役割ではないだろうか[26]。このような背景の下で、モートンは、想像を絶する、脆く、定まらない非人間に狙いを定めている。

人新世を提唱した人文学者の一人であるモートンの理解では、「人新世は、われわれが普段別々のものだと考えている二つの次元、すなわち、地質学（geology）および人間のあり方（humanity）を指している」（Morton 2016：7）。モートンを研究する哲学者である篠原雅武の説明によれば、「自然界にはほとんど存在しないストロンチウムなどの物質は、人間の活動の所産である原発の結果として出現したのであり、それだけでも、人間が地球のあり方を変えているのはあきらかである」[27]。モートンの説明によると、人新世の段階では、それ以前には存在しなかったものも数多く出現しているが、世界の隅々を埋め尽くす汚染がその最も明白な兆候である。そしてモートンは、人間と地質を結びつける人新世の特徴を好んで、人間はもはや地質の外に排除されるものではなく、地質構造の変化に影響を与えるものであり、独立した存在ではないと提唱する。より正確に言えば、人間と自然（非人間）の関係が見直されている。モートンは、この時代の環境問題を人間と非人間に分けて考えることは、現在の非常に厄介な問題に適切に対処することではないと考えている。人新世は、境界線を破り、人間と周囲のすべてのものを結びつけて考えなければならないことを示唆し、モートンが自分の主張を発展させる絶好の機会となっている。

第一章で述べた思弁的実在論およびオブジェクト指向存在論にもう一度戻る。モートンによれば、人新世の環境危機は確かに認識論と存在論の革新を刺激し、人間中心主義も大きな挑戦に直面している。人新世による六度目の絶滅への危惧が人間を不安にさせている。人間はもはや強い自己防衛力をもたず、いつ消滅してもおかしくない。つまりモートンにとって、人新世は人間中心主義を意味するものではなく、環境危機の脅威のもとで人類が脆弱になったことを意味する。文化人類学者のC.B.イェンセンも人新世への非人間中心主義的な解釈について発言した。彼は、「人新世は人間中心主義を意味する」という多くの非難に直面し、人新世に対する非人間中心主義的な解釈を提示することが必要であると指摘する。イェンセンによれば、「私たちが作り出した世界においては、以前よりも人間の力ははるかに不確かであり、おそらく減少しつつあります。これが意味するところは、人新世が非人間の力とエージェンシーのより深い理解を要請するということです」（イェンセン 2017：51）。このことはモートンが人新世を肯定した理由でもある。

---

[26] 飯田麻結、北野圭介、依田富子「誰が人新世を語ることができるのか：人新世・人文学・フェミニズム」『現代思想』第四五巻二二号、青土社、二〇一七年、一一〇～一二一頁。一一九頁。

[27] 篠原雅武による議論を引用した。（篠原雅武、「訳者解題」：一六七頁、ティモシー・モートン、「涙にくれ、異国の畠中に立ちつくした：アグリロジスティックスを通して考える」、小川緑・篠原雅武訳、『現代思想』第四三巻一三号、青土社、二〇一五年、一四四～一六七頁。）

エリスの述べたように、「人新世は、人間と自然に関する新しい物語であると同時に、『第二のコペルニクス革命』（Second Copernican Revolution）[28]とも呼ばれる大胆な新しい科学的パラダイムであり、人間であることの意味についての考え方を根底から覆す可能性を秘めている」（Ellis 2018：4）。つまり、人新世を第二のコペルニクス革命と呼ぶことは人新世の提起が順風満帆ではないことを意味する。人新世が唱える人類、動物、植物、汚染物質、科学技術、宇宙のつながりは、無数の数字や図表で証明されているが、このような証拠は反対者の反論の難易度を高め、彼らをさらに激怒させている。というのも、人新世は古代からの毅然とした物語を揺り動かしたからである。この問題について、エリスは次のように示している。「人類、地球、宇宙の役割と関係を再定義することによって、現代科学の起源の物語は、世界各国の社会における最も深い伝統的信仰に挑戦する」（ibid. ：6）。というのは、「万能の神やその他の神秘的な力の役割はない。人類は宇宙で中心的な役割を果たしていない。人新世はさらに進んで、これらの伝統的な信念に立ち向かうだけでなく、現代科学の古典的な起源の物語を修正している。人新世では、人間は地球上の中心的な役割、つまり惑星の形成者としての役割に戻される」（ibid. ）からである。

モートンもエリスもダーウィンの生物進化論に目を向けた。しかし、ここで言っておきたいことは、二人の目的は違うということである。モートンは、人間が人間以外のものとあまり変わらないことを証明しようとしている。つまり、遺伝子的な類似性や、多くの美的観想（aesthetic contemplation）などで人間が動物から学ばなければならないという事実さえも、人間の非特異性を指し示しているのである（Morton 2010：70）。このことは、モートンが脱人間中心主義の考えをより発展させるのに役立った。ダーウィンの過去の記述では、人間は神によって作られたのではなく、自然選択の結果であるとされている。人間は動物や植物と同じように種として地球上に生きているだけで、遺伝子的にはチンパンジーに似ていて、特別な種ではない。しかし、人新世という言葉が登場してから、人間は再び特殊な存在になったかのように、舞台の前面に押し出されている。この特殊さは褒め言葉ではなく、むしろ人間の「深刻な破壊力」（profoundly disruptive force）（Ellis 2018：12）を風刺している。一〇〇年近い歴史の中で、人間が主人公のように見えていたという事実はダーウィンによる種の言説に衝撃を与えた。つまり、人新世という言葉の影響で、ダーウィンが他の生物と同じように特別ではないと言っていた人間は、他の種よりも強力な種になってしまったのであ

[28] ルネサンス時期のポーランドの天文学者 N.コペルニクスは、一五一三年に地動説を唱えた。地動説は古代ギリシア時代に台頭し、中世ヨーロッパで支配的だった天動説に挑戦し、自然や宇宙に対する認識を覆した学説である。古代ギリシャでは、アリストテレスや天文学者プトレマイオスが、地球は宇宙で静止した中心にあり、他の星は地球を中心に動いていると考えた。この学説は、神が世界を創造したという教会の趣旨に合致する。従って、神学者や教会で長年唱えられてきた。しかし、一五四三年に出版された『天体の回転について』では、コペルニクスが長年の観測計算から天動説の弱点を発見したことが明らかになっている。コペルニクスは地球の中心地位を否定しており、宇宙に絶対的な中心は存在しないと提唱した。つまり、地球は太陽の周りを回っている。この学説は、当時の教会支配に大きな痛手を与えただけでなく、天文学的宇宙観にも革命を起こした。その後の自然科学や哲学の発展にも大きな影響を与えた。（トーマス・クーン、『コペルニクス革命』常石敬一訳、講談社、一九八九年。）

る。そのため、人新世が注目され、論争を巻き起こしているのだとエリスは考えている。モートンとエリスは異なる目的を持っているが、進化論における人間の非中心性と、人新世における人間の中心性とにかかわらず、二人は人類の力の巨大さを肯定している。さらにエリスは環境保護主義者の中には人新世を排斥する人もいると指摘する（ibid.：129）。なぜなら、人新世が示唆する地球の隅々まで広がる汚染は環境を保護したいという環境保護主義の主旨を損なうからである。言い換えれば、このような深刻な環境問題を解決することは非常に困難である。したがって、人新世概念の影響で、環境保護主義は無用の印象を与えやすいのである。つまり、人新世は人類の力を誇張するだけでなく、環境保護主義者に絶望的な喪失感を感じさせる。また、地球にはまだ「自然性」（naturalness）が残っていると信じている人々もいる（ibid.）。これは環境保護を難しくしているが、環境保護の価値を高めている。

主体と客体の二分法と環境保護主義者の希望を破壊した人新世は、大きな罪を犯したと言えるが、それ以上に恐ろしいのは、世の中に絶滅をもたらしたことである。

Ⅱ　絶滅への道を生き抜く

地球圏・生物圏国際共同研究計画（IGBP）は二〇〇一年にアムステルダムで開催した会議で「アムステルダム宣言」[29]を発表した。エリスはアムステルダム宣言に基づいて、人為的な環境変化が極めて顕著であり、自然変動の合理的範囲を超えていると確信している。すなわち、「人間は、システムとしての地球の機能に前例のない変化を引き起こしている」（Ellis 2018：32）。それ以外にも、人間が起こす変化の速度はより速く、規模はより大きく、予測は困難になるかもしれない。「これらの人為的な変化は、より迅速で驚くべき、そしておそらく壊滅的な結果をもたらす可能性がある」（ibid.）。モートンと同様に、エリスも地球の表面は人間の足跡で覆われていると指摘する。化石燃料の燃焼と窒素肥料の普及は、すでに気候を変化させた。このような広範囲で大規模な気候変動により、汚染がどこにでもあるようになっている。その結果、「地球の気候はすでに不可逆的に前例のない状態に傾いている可能性があり、人間社会に未知の、そしておそらく壊滅的な影響を与えている」（ibid.：72）。

これらの予測不可能な災難によって、人間による大規模な生物種の絶滅が起きているということに言及せざるを得ない。「生息地の喪失、狩猟、採食、汚染、種の侵入、その他の人間による圧力により、脆弱な動植物種の個体群が絶滅の危機に瀕しており、生物多様性が地球規模で急速に失われている」（ibid.：58）。種の絶滅は捏造ではなく、根拠がある。六回

---

[29] この宣言は二〇〇一年の Global Change Open Science Conference で発表された。この会議の目的は、当時の最先端の地球科学研究の成果と今後十年間の地球環境科学の方向性を報告することであった。この宣言は、人間と自然が運命を共にすることを社会に宣言したものである。二酸化炭素の過剰排出、水質汚染などは、人間活動によるものである。環境状況は前例のないスピードで変化しているが、このような危機的状況に新たな科学的対応方法を導入する必要がある。
（http://www.igbp.net/about/history/2001amsterdamdeclarationonearthsystemscience.4.1b8ae20512db692f2a680001312.html において 2021.11.5 閲覧）。

目の生物大絶滅はまだ遠いと考える人が圧倒的に多いだろうが、人類の力による巨大な環境の変化の予測不可能性は軽視されるどころか、人類が考える重大な課題の中に含まれるべきである。エリスが語ったように、六回目の大絶滅は実際に到来していないが、脊椎動物の絶滅は前例のないスピードで加速している。それだけでなく、人間による海洋生物の大量乱獲により、海洋生物の多様性は激減し、食物連鎖は急速に変化している（ibid.：113）。抑制しなければ、エリスが懸念していたように、人新世で六回目の生物種絶滅が起こるかもしれない。

科学者たちは、六回目の生物大絶滅が人新世の時代に起こることを懸念している。 その原因は人間活動によって形成され、未曽有の方法で現世に現れている。そしてこのような環境被害が日々発生し、続いて進行している。人間の痕跡が物質循環の中に入り込んでいることも注目に値する。例えば窒素肥料の使用による湖沼汚染や一連の二次災害が相次いでいる（例えば：日本の公害事件―水俣病）。あるいは過去一〇〇年間に、地球には存在しなかった新たな物質が人間によって生み出された。地質学者らによると、過去に形成された堆積物や化石から、様々な人工化学成分（殺虫剤や放射性同位体などの化学合成物質）およびプラスチック粒子が発見されたことはもっとも説得力がある[30]。中国科学院会員の安芷生は、実際に地質学はすでに人新世の層位を発見しており、その地層にも明確な標識元素があることと述べた。例えば、鉛 210、プルトニウム 239、セシウム 137 とヨウ素 129 である。また、二酸化炭素やメタンの排出も、プラスチック、セメント、窒素肥料などの「技術化石」の使用も、一九五〇年以降に急増した[31]。いずれにしても、人間活動の影響は岩石圏だけではなく、水圏生物圏、惑星範囲にまで及ぶことは否定できない。というのは人新世は地球システム内の変化を反映している[32]からである。

モートンは私たち全員が知らず知らずのうちに六回目の生物大絶滅の共謀者になっていると考えていた[33]。驚くことではないが、多くの学者が似たような見方を提出する。例えば W.ステッフェンなどの学者たちは「世界はおそらく六回目の大絶滅イベントに突入している。これは生物種によって引き起こされる最初の大絶滅イベントである」（Steffen 2011：850）と言った。C.コールブルックも絶滅に言及した。コールブルックによると、「私たちは私た

---

[30] Issberner, Liz-Rejane, & Lena, Philippe. *Anthropocene: the vital challenges of scientific debate.* UNESCO Courier, 2018.（https://en.unesco.org/courier/2018-2/anthropocene-vital-challenges-scientific-debate において 2021.5.19 閲覧）。

[31] 冯丽妃. 迎接“人类世”，你准备好了吗？：定义新地质时代在争议中前行［J］.中国科学报，2019 (3).（馮麗妃「人新世を迎える準備はできているのか？ 議論の中で進む新しい地質時代の定義」『中国科学報』（第三版）、二〇一九年。http://news.sciencenet.cn/sbhtmlnews/2019/8/348903.shtm において 2021.5.20 閲覧）。

[32] Suckling, Kieran. “Against the Anthropocene”, In: *IMMANENCE: ecoculture, geophilosophy, mediapolitics.* 2014.（http://blog.uvm.edu/aivakhiv/2014/07/07/against-the-anthropocene/において 2021.5.20 閲覧）。

[33] モートンは自動車と蒸気機関を例に人類の罪を説明した。一人で車のキーを回したり、石炭を掘ったりしている間は、何の影響も感じない。しかし、その行動が数十億回に拡大したとき、地球への被害が発生する。すなわち、モートンは、地球温暖化は誰もが責任を持つべきだと提唱している（Morton 2016：8-9 を参照した）。

ちに未来があるかどうかを訊ねはしないし、また訊ねることもできない。なぜならそこで言われる『私たち』とは生命を定義したものであり、そしてそれは本質的に自らの絶滅に向かって突き進んでいるものだからである」（Colebrook　2014：204）。この自分で指導した悲劇の中で、私たち一人一人が劇作家である。あなたも私も、少なくとも破壊者の役はやりたくない。誰も世界に生息する怪物や悪魔になりたくなく、未来の物語や伝説でそのように知られることを望んでいない。人新世の出現によって、私たちは多くの危機に直面している。知識の危機、人類の危機、環境の危機、地球の危機、未来の危機。しかし、人新世の出現は、危機を転機に変える契機を与えてくれた。

様々な危機の中、アメリカの学者 J.マクブライエンは「死新世」（Necrocene）という概念を提唱する。危機を代表する人新世の到来によって、死新世の扉が開かれたのだ。マクブライエンは、人新世という話題性のある用語の代わりに死新世という言葉を使うことで、人新世の背後に隠された壊滅的な真実を明らかにしようとする。マクブライエンは資本主義を絶滅と結びつけている。彼は、資本主義による資源の収奪と生産の過剰がもたらす諸危機は、死を作り出す機械であると考えた。言い換えれば、資本主義は「惑星全体を壊死させてしまう」（McBrien 2016：116）。人新世は、良いとも悪いとも言えないが、死の気配を帯びていることは否定できないだろう。この気配は、無数の死を犠牲にした長期の積み重ねの結果ともいえる。マクブライエンによれば、「資本とは、六回目絶滅を具現化したものであり、死者を食べ、そうすることですべての生命を食い尽くすものである」（ibid.）。つまり、「資本主義的蓄積の根底にあるのは『絶滅』である」（ibid.）。人新世よりも、マクブライエンは資本新世の提唱者である。しかし、より正確には、彼は自分の議論を通じて読者が「死新世」あるいは「新たな死」（New death）を理解できるようになることを望んでいる。マクブライエンは「死新世は、資本主義の拡大の歴史を、消滅の過程を通して再構成している」（ibid.）と考えている。死新世の視点では資本主義は「過去の絶滅を利用して、現在の大量絶滅を引き起こす」（ibid.：117）。簡単にいえば、資本主義が機能しはじめた時点で、絶滅が最終的な結末であり宿命であるかもしれないということを示唆していた。「絶滅は、資本による地球の実質的な支配の即時の成功と究極の失敗の両方である。資本のエコロジーは、既存のエコロジー（人間を含むエコロジー）の消去を試みることによって構築される」（ibid.）。資本主義と絶滅は切り離せない。危機、災難、絶滅などの言葉は、化石燃料の燃焼、汚水の海への排出、森林の無制限な占領、かつてないほど急速な種の消滅、原爆の投下、あるいは数え切れないほどの戦争などの際に、人類につきまとう影のようなものになった。「絶滅は資本主義の長期の存続時間との関係で概念化されなければならない」（ibid.：118）。

フランスの科学技術史学者 C.ボネイユと J.B.フレソズは『人新世とは何か　〈地球と人類の時代の思想史〉』（ボネイユ、フレソズ　2018）という著作の第六章を死新世と名づけた。ボネイユとフレソズの説明では、死新世と戦争を結びつけている。一九世紀まではヨーロッパの富裕国はあまり戦争を起こそうとはしなかったが、第一次世界大戦以降、多くの国が戦争に積極的に、あるいは強制的に巻き込まれるようになった。戦争を維持するためには、各

国が大量の資源を開発しなければならず、これらの国も戦争によって他国から大量の資源を奪っていた。第二次世界大戦を例にとれば、アメリカは戦争中に膨大な資源を消費し、終戦時には二〇〇〇万トンの航空燃料を生産していたから、必然的に大量の二酸化炭素を排出していた（同書：181）。ボネイユとフレソズの理解では、死新世は人新世の一段階であり、戦争による技術の飛躍的な進歩と無数の死傷者の発生の段階である。すなわち、死新世は人新世の一部である。この二人とは違ってマクブライエンは、死新世は長い一六世紀（一四五〇～一六四〇年）、より正確には「コロンブス交換」（Columbian exchange）（McBrien 2016：118）の頃からすでに芽生えていたと考えている。この時期から、資本主義の食欲はますます満たされなくなった。そのため、マクブライエンは、資本主義システムによる人類の行為と人類を混同している人新世を批判し、人類が人新世によって引き起こされる絶滅の可能性を認識すると同時に、今の難局をもたらした張本人が誰なのかを明らかにすることを求めている。

まず、マクブライエンはプランテーションの開発が劇的な環境変化をもたらし、その結果、病気が蔓延し、多くの労働者や先住民が死亡したことを懸念している。その後、一八世紀に大量の未知の化石が発見され、これは私たちが知っていると思っていた世界の前に未知の過去が存在していたことを意味する。マクブライエンはフランスの博物学者 G.キュヴィエがこの奇妙な空白のために創造した革命的な概念―「絶滅」に注目している。この絶滅は、種自体が引き起こしたのではなく、外の力からの介入によるものである。進化論の提唱者の多くは、適者生存の基準を否定する絶滅の概念を歓迎しなかった。しかし、資本主義が資源環境を大量に収奪するにつれて、絶滅という概念は、埃をかぶった棚からとりだされ、議論せざるをえないものになっていったようである。天変地異説（catastrophism）も戦争で頂点に達した。原子力の使用と原爆という破滅的特質をもった兵器は、人類を死の淵に追いやらねばならなかった。モートンと同様に、マクブライエンもストロンチウムなどの本来存在しない物質が人間を傷つけることへの憂慮を示した。これも日本の物理学者である高木仁三郎の語る「天上の火」であり、原子力は人間が天から盗んだ火である。彼は「今度は地上の自然の模倣ではなくて、天上のものを模倣するようになった。地上の生命には、地上の生命の原理がある」（高木 2012：51）と考えている。高木は「その原理と全く異質なものを、人間の頭脳の発達によって天上から盗むことができるようになった。これが広島、長崎の悲劇、それからそれ以降我々を悩ます原子力問題という形でつながってきているわけです」（同）と述べた。もちろん放射能汚染だけでなく、第四章で述べる DDT の大量広範囲な使用や日本の水俣病事件は、死新世の最も有力な証明である。このような長く残酷な災害に見舞われた人類は、すべてがうまくいくと自分を納得させることが難しくなっている。したがって、マクブライエンは「『私は死になった』と『地球を救え』はコインの両面になっている」（McBrien 2016：128）と感嘆した。

いずれにせよ人類は生物種絶滅の最大の主役であり、「絶滅による蓄積が主流になっている」（ibid.：134）絶滅の危機に直面したマクブライエンは、人類に向けて真摯なアドバイス

をする。「蓄積の論理は絶滅を凌駕することはできない。なぜなら、蓄積と絶滅は同じ過程であり、切り離すことはできないからである。しかし、人間は資本から切り離すことができる。資本が絶滅する。我々はそうではない」（ibid. ：135）。

第二節　人新世は本当の地質時代なのか？

人新世は自然科学と人文科学の区分的定義を超え、人文学、哲学、人類学などの人文社会学分野でも脚光を浴びるようになっている。近年この言葉はむしろこれらの分野でよく知られるようになった。しかし、人新世がいつから始まったのかについては、学者たちの間でも議論が絶えない。まず明らかにしたいことは、クルッツェンがこの用語を提唱した当初の目的は、地球が人類の巨大な征服の下でこれまでにない形に変化していることを人類に警告するところにあったということである。その中で最も顕著なものが気候と環境の変容である。ボネイユとフレソズが述べたように、化石燃料の大量使用によって、一九世紀半ばに大気中の二酸化炭素の量が完新世の最大値（284ppm）を超え、「人間活動は化石エネルギーの威力をもって根底から地球システムの生物学と地質学を変容させていった」（ボネイユ、フレソズ 2018 : 33）。このような事実に基づいて、クルッツェンは一八世紀末の産業革命から人新世が始まっていると提唱する。多くの地質学者と人文社会科学者もクルッツェンの考え方に賛同しており、これらの学者の目には、全世界の二酸化炭素とメタン濃度の迅速な上昇は人類が地球にもたらした極めて象徴的な影響だというように見えている。しかし、これらの学者はまた、人新世の始まりを産業革命の開始時期と厳密に定義することは独断的であることを否定していない。

例えば、一部の科学者、特に地層学者[34]は現在の環境の大きな変化が主に人為的要因によるものであることを認めているが、彼らは依然として人新世という地質学的時間尺度に疑問を示している。地層学者にとっては、新しい地質学的時間尺度を定義するためには、岩石の記録の中に明確な識別可能な地層マークを見つける必要がある。つまり、世界各地の様々な場所の岩石の記録から、人類の活動が地層構造を変化させ、地球規模にまで拡大したことを確認するには、十分な地層の証拠を集めなければならない。この調査研究の仕事量は明らかに複雑で巨大である。しかし実際には、岩石の記録から人間の痕跡が発見されている。従って、厳密な時間境界を代表的で標識的な影響の観点からのみ定義する場合、一部の地質学者は第二次世界大戦の終了を人新世の始まりとみなしている。例を挙げると、二〇世紀半ばの核爆弾の爆発で発生した放射性同位素が大気圏や岩石圏で発見されている[35]。それだけで

---

[34] アメリカの環境科学者である E.C.エリスは著書 *Anthropocene: A Very Short Introduction*（2018）中で、地質学者が地質学的時間区分を構築する際に用いた方法を詳しく説明している。「地質時代は、層あるいは『地層』の中から推定されるものである。時間の経過とともに、一つの層がもう一つの層の上に長期間にわたって堆積し、層状的な『層序』の記録が生じる」（Ellis 2018 : 34）。このような地層記録を研究する地質学者を地層学者という。

[35] *Humans versus Earth: the quest to define the Anthropocene.* 2019.（https://www.nature.com/articles/d41586-019-

なく、二〇世紀半ばごろには、莫大な資源が消耗され、人口が急増し、窒素肥料が広範に使用された、そのためこの時期は大加速時代とも呼ばれる[36]。地質学者らは、最初に堆積物から様々な人工化学成分とプラスチック粒子が発見されたのは一九五〇年代だと指摘している[37]。また、安芷生は一九五〇年代という「世界的な経済発展の時代は、人類活動がある程度自然を超えていることを最もよく示している」[38]と主張した。さらに、二〇〇四年に発表された全世界変動と地球システム（Global Change and the Earth System）に関する報告書では、産業革命による発展・拡大の結果によって環境はあまり変化していないことが明らかにされたが、一九五〇年以降、地球環境が驚くべき速さで変化していることに研究者は驚いた（Ellis 2018：52-53）。というのは、「彼らの研究では、調査したほぼすべての人類活動と地球システムの変化において、一九五〇年頃に顕著な変曲点があることが明らかになった。その後、変化の速度ははるかに急で、場合によってはほとんど指数関数的になる」（ibid.：53）からである。エリスにとって一九五〇年は、人新世への移行という転換点だったと言える。彼は次のように説明する。

> 「大加速」は、人類の社会的、政治的、経済的変化、およびそれらの様々な環境的結果を地方から地球規模まで織り交ぜ、スケールを超えたこれらの変化の相互作用も含めて、複雑で複数の因果関係の物語を通じて人新世の移行を説明する。人類の変化がかなり前から始まっていることを認めるが、「大加速」は、人類が二〇世紀までに環境を変えることは、一部の地域で顕著であるにもかかわらず、地球規模では「完全に環境の自然な変化の範囲内」に留まっていたと断言する。産業革命前の社会では、「自然界の偉大な力に匹敵する」ために必要な人為的な環境変化の規模と強度を生み出したことはなかった。人新世は農業の勃興から始まったのではなく、産業革命からさえ始まったのでもなく、一九四五年以降の大規模な産業社会の台頭と、地球環境を世界的に加速するそれらの前例のない能力によってのみ始まった。二〇世紀半ばには、人類の圧力は、地球システムの機能に人為的レジームシフトを生み出すことができるレベルに達し始めた。（ibid.：73）

以上の理由から、二〇一九年五月中旬に国際層序委員会（ICS）の人新世ワーキンググル

02381-2 において 2021.12.23 閲覧）。

[36] W.ステッフェンは *The Anthropocene: Conceptual and historical perspectives*（pp.849-853）で大加速時代における人口、交通、温室効果ガスなどの変化をグラフで詳細に記載した。

[37] Issberner, Liz-Rejane, & Lena, Philippe. *Anthropocene: the vital challenges of scientific debate.* UNESCO Courier, 2018.（https://en.unesco.org/courier/2018-2/anthropocene-vital-challenges-scientific-debate において 2021.5.19 閲覧）。

[38]冯丽妃. 迎接“人类世”，你准备好了吗？：定义新地质时代在争议中前行［J］. 中国科学报，2019 (3).（馮麗妃「人新世を迎える準備はできているのか? 議論の中で進む新しい地質時代の定義」『中国科学報』（第三版）、二〇一九年。引用者が訳出した。http://news.sciencenet.cn/sbhtmlnews/2019/8/348903.shtm において 2021.5.20 閲覧）。

ープ（AWG）が二〇世紀半ばを人新世の起点とすることを評決した[39]。ただしこの結果はまだ国際層序委員会（ICS）と国際地質科学連合（IUGS）から正式に発表されていない。人新世ワーキンググループの調査結果は、大加速時代以降の人間活動による環境破壊が空前絶後の状態に達していることを示している[40]。しかし、クルッツェンを支持する学者たちには、大加速時代を開始時間とした場合、その背後にあるさらに深い原因が抹消されていると考えられている。というのは産業革命期の化石燃料の大規模な使用によって、大加速期における人工合成物質の割合が爆発的に増加したからである。この点に関しては、地質学者、古気候学者と社会学者からの反発もある。例えば中国の地質学者劉嘉麒は、一九五〇年を人新世の始まりとすれば、数十年しか経っていないため、堆積物が固定層位を形成しにくいと述べている[41]。彼は一九五〇年を出発点にするのは明らかに無理だと指摘した。すなわち、一九五〇年以前の時代は人新世ではなかったのか。次に劉嘉麒は、人新世の中の「人」の概念も曖昧だと考えている。彼によると、「猿人、ホモ・サピエンスから現代人に至るまでは長い道のりであり、自然界と密接に関わり、自然環境に影響を与えてきた。この関係と影響を切り離してはならない」[42]。古気候学者 W.ラディマンは、人間は五〇〇〇年前からすでに農業の発展によって大気に大量のメタンを排出していたと指摘している（Ruddiman 2003 : 265）。また、モートンは、新石器時代には人類活動はすでに地球環境に大きな影響を与え始めていたと考えている。モートンは人新世における危機的状況の起源を農業のあり方にまでさかのぼり、それを「アグリロジスティクス」（agrilogistics）と呼んでいる（Morton 2016 : 42）。アグリロジスティクスは大きな成功をおさめた農耕プログラムで、今では惑星規模で農業技術を支配しているものでもある。人間は、世界の偶然性に対処し、未来に対する不安と恐怖を取り除くために、狩猟採集生活から農耕生活への転換を選択した。人類が農業を強力に発展させた目的は、食物が絶えず確保できる状態を維持することである。この目標を達成するために、ラディマンの叙述どおり、人間が森林を切り倒し、栽培や灌漑技術を発展させたことが、当時の大気中の温室効果ガス濃度を大きく上昇させ、気候に影響を与えた。

ここで強調したいのは、劉嘉麒とラディマン、およびモートンが一つの問題を無視していることである。新石器時代の人類は大気中に温室効果ガスを排出していたが、その量は安定していた。しかし産業革命後から現在に至るまで大気中の二酸化炭素濃度は急激に増加している[43]。それにしても、人新世の具体的な開始年代について、どのような基準から出てき

---

[39] 【新聞智庫】地球進入人類世. 2020.12.11.（『ニュースワイズ：人新世を迎えた地球』という報道を参照した。https://news.now.com/home/international/player?newsId=416255&catCode=125&topicId=552&main=y において 2021.11.10 閲覧）。

[40] 同上

[41] 冯丽妃. 迎接“人类世”，你准备好了吗？：定义新地质时代在争议中前行［J］. 中国科学报，2019 (3).（馮麗妃「人新世を迎える準備はできているのか？ 議論の中で進む新しい地質時代の定義」『中国科学報』（第三版）、二〇一九年。http://news.sciencenet.cn/sbhtmlnews/2019/8/348903.shtm において 2021.5.20 閲覧）。

[42] 同上、引用者が訳出した。

[43] 産業革命以前、大気中の二酸化炭素の含有量は約 280ppm（すなわち、百万単位のガスに 280 単位の二酸化炭素が含まれている）に維持されていた。産業革命後、二酸化炭素の含有量は急速に増加し、1950

た結論であれ、人間が決定的な役割を果たしていることは否定できない。さらに重要なことは、人新世の開始時期を検討する過程で、人新世が単に人間に関する地質学的な専門用語ではないことが明らかになったことである。むしろ人新世は様々な学科を横断して、歴史、文化および社会の側面と密接に関連している。イェンセンは人新世が意味する様々な学問の連携について、次のような考察を行った。イェンセンの解説によると、S.ルイスと M.A.マスリンによる雑誌ネイチャーに掲載された論文「人新世の定義」を精読することを通して、H.スワンソンは「人新世の科学的『定義』が、植民地史や考古学、人類学や地理学といった大量の社会科学の学識に依拠したものである」ことを明らかにした（イェンセン 2017：55）。具体的には、ルイスとマスリンは「人新世の定義」の中で大量の歴史的、地理的証拠を用いて人新世の開始時刻を厳密に科学的に分析した。しかし、イェンセンに言わせれば、人新世の開始時期についての論証が正しいかどうかにかかわらず、スワンソンが強調したいのは、人新世は決して非政治的な概念として解釈されてはならないということである（同）。より正確に言えば、「人新世が層位学的な事象であると同時に政治的な事象であり、植民地主義や、世界規模の貿易、権力関係に関わっている」（同）ということである。そのため、筆者は次章において人新世をより深く具体的に検討する必要があると考えている。つまり、人新世は必然的に人間を不安定な状態に追い込んでいくと確信できる。

人新世の熱烈な擁護者であるラトゥールは、人新世の存在を可能性という言葉で表現することを好まず、われわれは完新世には生きていないと宣言することを望んでいた。なぜなら、完新世にとどまる限り地球は私たちとは関係のない穏やかな背景版だからである。しかし、完新世の終焉が宣言されれば、それは地球が新たな不安定な時代に突入したことの証明になる（Latour 2017：113）。人新世は地質時代の科学用語というより、むしろ巨大な力を代表した人類活動に対する疑問であり、人類が地球を破滅に追い込み、自らも絶滅に向かっているという警鐘のようなものである。

第三節　小括

第一節では、人新世が、人間自身と自然との関係を見直すうえで決定的な役割を果たしていることがわかる。現在のさまざまな環境危機、特に近い将来に六回目の生物大絶滅が起こるかもしれない状況に直面して、人間と自然などの非人間的な存在との独立した二分法では、複雑で巨大な世界を認識することはできない。人類のすさまじい破壊力は、人新世の誕生後、科学者や他分野の学者たちを驚愕させるが、その伝統的な考え方への洗礼こそが、人間と非人間の関係のさらなる可能性を生み出したのである。

第二節では、人新世の開始時期が主に次の四つの段階で論じられる。最初はモートンが提唱した約一万年前の新石器時代である。次に、五〇〇〇年前から農業の発展が大気環境を変

年代以降、増加速度は更に速くなり、1995 年の 358ppm まで増加した。
（http://gis.geo.ncu.edu.tw/gis/globalc/chap0304.htm において 2021.5.18 閲覧）。

え始めていたとラディマンは主張する。そして、クルッツェンをはじめとする学者たちの見解である。彼らは産業革命の始まりが人新世の開始であると考えた。最後に、直近でますます認められるようになってきた大加速時期である。学者たちの意見はまちまちだが、これらの議論は人類の力が環境を激変させるという事実を認めている。

しかし、人新世は人間の影響力の大きさを強調しながら、今日の環境危機をもたらした多くの要因を見落としているのではないだろうか。人間が集合名詞であることは否定できない。人間とは、様々な方向に散らばった人々の集合の総称である。それはまるで一部の人の責任を隠して、一部の人の罪を弱めて、一部の人の影響力を大きくしているようにも見える。具体的にどのような人間が今日の状況を作り出したのかというと、ラディマンやモートンが言うように新石器時代から徐々に現れてきた農民なのか。クルッツェンが言うように産業革命後の消費主義の影響下にある過度消費者だったのであろうか。それとも、大加速時期に広島と長崎に二つの原子爆弾を投下すると決めた意思決定者なのか。それとも人間ではなく、長い一六世紀以来人類の陰に隠れ、社会と歴史の深層に刻まれた複雑な世界の生態系の網なのか。人新世が何を表しているのかを深く考えれば、これらの問いは巨大な渦のようにあなたと私の思いを巻き込んでいくに違いない。そこで、この疑問を念頭に置き、次章では、ハラウェイとムーアの人新世への批判を考察しながら、上記の疑問を明らかにしようと試みる。間接的にも、モートンの主張の狭さと不十分さが指摘される。

第三章　ヒト種の代わりに「――新世」の空欄をめぐる人新世概念への批判

人新世という概念が提唱されて以来、地質学、考古学、気象学、人文学などの学問分野ではさまざまな議論が提起されてきた。議論の出所は膨大かつ混迷しているといえるため、これらの議論に一つずつ詳細に言及することはほとんど不可能であろう。しかし、人新世をめぐる議論は、一般に次の三つの側面を中心に展開される。すなわち、(1) 人新世は地質的時間スケールとして認められるのか、(2) 人新世はいつから始まったのか、および (3) 人新世に代わる言葉はあるかということである。前章で述べたように、人新世を地質年代と定義できるか否かおよび人新世の開始時期についての問題は、一般的に地質学者のような自然科学の専門研究者にとっての関心事である。人新世に代わる言葉に関する論争は人文学の分野において、環境思想や既存の社会システム全般に対する見直しや検討の新しい波を起こしたと言える。学者たちがこの過程で提起した議論は非常に斬新で示唆に富んだものであり、現在の厄介な環境問題を解決するために間違いなく好機である。したがって、本章では、人新世に代わる言葉を丁寧に分析する考察を行いたい。

人新世では、人間と環境、人間と人間を取り巻くすべてのものとの関係に再び注意が向けられていることは否定できない。しかし、人新世という言葉を好まない学者は多い。エリスが指摘したように、「哲学者や自然保護主義者、さらには地質学者の中には、人間のエポックを指定する行為は、科学というよりも人間の傲慢さや人間中心主義を物語っていると考える人もいる」(Ellis 2018：128)。例えば、生命誌の研究者である中村桂子は人新世が地質年代として公式に定義されているかどうかは気にしていないと思われる。というのは、中村は、人新世の誕生が人々の思考や行動を変える可能性を否定しないが、核兵器禁止への願いは叶わないと考えているからである。さらに、中村は、科学者や政治家などが、近い将来人類が滅亡するかもしれない危機を前にして、新しいアイデアやコンセプトを発想するのではなく、常に経済や技術の面から考えていることに失望している。中村は、一三八億年の歴史を持つ宇宙で三八億年生きてきた生物の一つとして、人間のアイデンティティの二重性を認識することは極めて重要だと考えている。人間は文明を創造する存在であると同時に、宇宙の中では平凡な生物である。このような世界観を持つことこそが中村が望んでいることであり、人新世はそのような変化をもたらすことができないようである（中村 2017)。

マクブライエンは人新世が資本主義の陰謀であると考えている。なぜなら、資本主義は人新世の陰に隠れて、自分が少しでも長く生きられるように、より多くの新鮮な食べ物や腐った食べ物を見つけようとしているからである。具体的に言えば、マクブライエンは「人新世の議論は、技術的な繭だけが、生命に内在する自己破壊的な傾向から私たちを守ることができるという考えに何度も私たちを導いているように見える」（McBrien 2016：134-135）と指摘し、資本主義が無数の死を犠牲にして生き延びており、必ず種の絶滅を加速させると考えている。しかし、人新世を支持する一部の学者は、気候工学の発展によって絶滅を遅らせることができると提唱している。マクブライエンがこの主張に強く反対していることは明ら

かである。技術に依存したり環境を保護したりすることは、資本主義が依然としてより多くの資源を蝕むことを隠す行為にほかならないからだ（ibid. : 135）。マクブライエンの批判した科学技術は、高木の註釈ではより悪意に満ちたものになっている。高木によれば、「人間の営みの一部ではあるけれども、非常に大きく膨れ上がった科学技術というのが、一部の政治権力や資本というものによって戦争の道具に使われたり、金儲けの道具に使われたりというようなことが非常に顕著になってきた」（高木 2012 : 9-10）。具体的に言えば、高木は人間の作り出した物は恐ろしい物になってきたと考えていた。さらに、「人間が自分で作り出したものが自分の首をしめているという状態が、今まさに起こってきている」（同書 : 10）。つまり、高木やマクブライエンにとって、科学技術は資本が成長し続けるための手段であり、人類そのものを害する恐ろしいものである。したがって、マクブライエンにとっては、人新世は資本の馬鹿げていて、かつ滑稽な茶番劇なのだ。

このように多くの疑問が提起されている中で、D.ハラウェイのクトゥルー新世と J.W.ムーアの資本新世は、人新世の代替案として最も有力視されている。ハラウェイとムーアでは、人新世を考える出発点は一致していない。一方でハラウェイは、人間と自然、そして動物との境界を破ることによって、人間という概念を再定義しようとしている。他方、ムーアは、人間と自然の関係を資本主義の歴史の中に位置づけ、環境危機の社会的、歴史的原因を再検討している。しかし、両者とも人新世という言葉に強く反対している。そのため、ハラウェイとムーアがモートンの思想に言及していなくても、人新世をめぐって、なぜ彼らがモートンと対立する立場をとるのかを問うことによって、モートンの思考の長所と限界を見出すことは可能であろう。したがって、本章では、ハラウェイとムーアの思想と主張を参照しながら、人新世という地質学的概念と人間の意味を批判的に再考し、モートンの提唱を再検討する。それと同時に、環境危機という難題の解決のためにより多くの理念と思想を提供したい。

第一節　クトゥルー新世―ダナ・ハラウェイの「共生創造」（symbiogenesis）を中心に

人新世という用語を肯定して、人間の想像力が制限されてしまうことを、生物学者でポストモダン・フェミニストの科学哲学者でもあるアメリカの著名な学際的研究者、D.ハラウェイは恐ろしいと考える。ポストモダン・フェミニズム思想界を代表する一人であるハラウェイは、フェミニズムの視点を出発点として、固定観念、たとえば男女の対立、人間と機械、人間と動物、理性と感情などの二分法の解体と痛烈な批判に取り組んでいる。ハラウェイは女性のアイデンティティに対する従来の単一の定義を打破することによって、身体、科学技術、社会組織に関する混ざり合った多様な新しい認識論を提唱している。一言でいえば、ハラウェイは男性中心主義による存在の単一性や境界の線引きに反対し、複数の差異の結合や立場の不確実性を重視している。すなわち、ハラウェイは万物を固定化したアイデンティティから解放し、伝統的な科学哲学による自己同一性に挑戦した。ハラウェイの射程は、性

別の意味を考えることだけにとどまらず、地球全体に関する諸問題にまで及んでいる。『伴侶種宣言――犬と人の「重要な他者性」』（*The Companion Species Manifesto: Dogs, People, and Significant Otherness* 2003）および『犬と人が出会うとき――異種協働のポリティクス』（*When Species Meet* 2007）などの著書で、ハラウェイは、犬と人間の親密な友情や共在関係を浮き彫りにすることで、人間という概念を再定義する。人間は犬を駆使する中心的な役割ではなく、犬との連帯の中に存在する。ハラウェイは、伝統的な人間中心主義を想像力に満ちた言葉で果敢に攻撃することを常に心がけており、現代社会の多様で複雑な要素を自分の叙述の中に統合することを提唱しているが、この統合は閉鎖的ではなく、開放的で流動的で結合的な共存である。

人新世はハラウェイにとって思考することを放棄することである。ハラウェイは、人間種という概念は主として人間例外主義（human exceptionalism）と限定された個人主義（bounded individualism）に由来すると考えている（Haraway 2016 : 30）。人間だけが最も重要な生き物であることを強調する、他の種をないがしろにする傾向は、私たちに他の種を理解し、他の種との相互感受性を養う機会を失わせ、あまりにも多くの前例のない特殊な、人間の統制を超えた存在や災いを、不可知の物体と見なすようにさせる（ibid. :33）。そのため、ハラウェイは人新世ではなく、人間中心主義を離れたクトゥルー新世で自分の見ている世界を表現したいと考えている。

本節では、人新世という地質学的概念を批判的に再考しながら、ハラウェイの思想と主張を考察し、その革新性と私たちへの啓発を明らかにする。その目的は、環境人文学の分野における人間存在のモデルと革新的な言説の代替可能性を探り、環境崩壊、種の絶滅、地球危機など、今日の世界が直面している重大な問題に対処するための、より多くの次元の想像力と考え方を提供することにある。本節では、まず、ハラウェイのクトゥルー新世という言葉の由来、意味および特徴を紹介する。これはハラウェイの説く万物の共存をより深く理解するためには不可欠である。次に、クトゥルー新世の理解に基づいて、ハラウェイの共存創造を考察しながら、モートンの主張の長所と問題点を発見する。最後に、環境危機に直面して、人新世をどのように生き延びるのかという問題について、ハラウェイの思想の脈絡を手がかりとしてより多くの可能性を見出すことを試みたい。

Ⅰ　クトゥルー新世の語り

ハラウェイの考えでは、人新世の流行は悪い現象であり、ある意味暴力ともいえる。人新世では、生命のネットワークの中での人間の位置だけが気になっているようで、それは人新世という言葉の暴力とも言えるかもしれない。E.クリストが言うように、人新世は「人類中心の行動可能な世界観の反映と強化である」（Crist 2013 : 129-130）。具体的に言えば、人新世が体現する人間の強大な力は人間を偉大な崇拝の位置に置く。つまり、人間は全知全能の神に取って代わったようなものであり、人間が起こした禍もまた人間が自分で解決するこ

とができる。ハラウェイはこれを滑稽なことと考えている。なぜなら、ハラウェイは「和解や回復には興味がないが、部分的な回復と共同生活のより緩やかな可能性に深く取り組んでいる」（Haraway 2016：10）からである。私たちは人間優位の歴史の中で育ってきたが、ハラウェイは、最先端のバイオテクノロジーの影響下で、自分を人間として絶対的に定義することは実は難しく、批判と想像を可能とする新たな言語環境が必要であると考えている。つまり、ハラウェイは、人類が自分の力だけで今直面している苦境を乗り越えることができるとは考えておらず、人間は単独で存在するのではなく、無数の他の種とのつながりの中で共存していると考えていることがわかる。なぜなら、ハラウェイは既存秩序における規範よりも、断片的で、異質なものが絡み合った分析を志向し、境界定義の曖昧さ、境界を越えた認識を提唱するからである。その絡み合いがハラウェイの世界のトラブルを生み出しているのである。

このような背景の下で、ハラウェイは多種間の世界をトラブルと表現しており、この世界ではトラブルと共存することが彼女の思想の中心になっている。ハラウェイは、トラブル（trouble）を興味深い言葉であると思っている。一三世紀に生まれたこの動詞は、「かき乱す」（to stir up）、「濁す」（to make cloudy）、「雑乱にする」（to disturb）と訳される。ハラウェイの解釈では、私たちは不安で、混ざり合っていて、面倒で、混乱している時代に生きている。私たちの任務は、それらのトラブルを急いで安全にしたり、未来に悪いことが起こらないように、現在と過去のトラブルを取り除いたりすることではない。トラブルと共存するためには、「場所、時間、事柄、意味など、無数の未完成の構成に絡め取られた死すべき生き物（mortal critters）[44]として」、「真に存在することを学ぶ」（learning to be truly present）（ibid.：1）必要がある。ハラウェイは産業革命が世界を大きく変えたことを認めているが、人間はその役割の一つにすぎず、人間が神性を与えられる根拠にはならないと主張している。彼女は『トラブルと共にあること』（*Staying with the Trouble* 2016）でこう述べている。

> 人新世の代理人として、人間の種の物語はほとんど偉大な「男根の人間化」と「近代化の冒険」の滑稽な再演であり、そこでは、消えた神のイメージによって作られた人間は、その世俗的–神聖的な上昇（secular-sacred ascent）の過程でスーパーパワーを獲得したが、最終的に再び悲劇的な消滅で終わった。（ibid.：47）

ハラウェイが人新世で強調されてきた人種の惑星範囲への拡散という強力な作用を拒否したのは、人間の主体的な位置を再び神格化することになったからである。そして、彼女は人間の特殊性を回避しないポストヒューマニズムにも満足しているわけではない[45]。そのため、ハラウェイは、人新世の代わりにクトゥルー新世を提案したのである。

---

[44] 生き物（critters）とは米国の日常的な慣用語で、害虫全般を指す。ハラウェイはこの言葉を微生物、植物、動物、人間、非人間の代わりに使っている（Haraway 2016：169）。

[45] ポストヒューマニズムは伝統的ヒューマニズムへの批判を主とし、脱人間中心主義を主張する。古典的

ハラウェイはクトゥルフの概念を利用して世界のあらゆる存在をも形容する。ハラウェイの記述では、ここでのクトゥルフは「SF作家H.P.ラブクラフトの手になる怪物――性についても人種についても差別的で、悪夢としか言いようのない怪物クトゥルフ」（ハラウェイ 2017：101）ではなく、ソノマ（Sonoma）郡とメンドシーノ（Mendocino）郡のレッドウッドの森に生息する、何かを巻き付けたピモサラグモ（pimoa cthulu）のような存在である（Haraway 2016：31）。ハラウェイは地獄の鬼神を意味するケトニック（Chthonic）のイメージを借りて、どこにでもある大地（Terra）からの鬼神の力を構築した。このようなクモに似た生物は、自分で形成されるわけではなく、多くの未知な他の種族を触手で巻き付けている。つまり、このようなクモに似た生物は他の種との連帯の中において存在している。

なぜクモの一種を語源としたのかというと、ハラウェイは人間の存在と他の存在との関係を、触手という言葉で表現することを好んだからである。しかし一般的なクモとは違って、ハラウェイの提唱するクモの触手は数えきれないほどで、無数の感覚と生命についての線である。それらの線が絡み合い、複雑なネットワークを形成している。この関係は一本の線のような血統論的なものではなく、複数の、もつれた、さまざまな要素に満ちた、常に変化する、定義不能なものである。これらの触手は遮断されたり、結び付けられたりして、関連する要素が一定の時間空間に断片化された形で現れる。ハラウェイによると、「人間も含む様々な種が混淆する豊饒なアッセンブラージュ」をなすために、悪夢のような怪物の概念ではなく、「地球に生息する触手様の多様なパワーやフォース、そしてナーガ、ガイア、（水に満ちたパパから生まれ出た）タンカロア、テラ、植安姫、スパイダー· ウーマン、パチャママ、オヤ、ゴルゴ、ワタリガラス、アークルウジュシといった名のもとに集まったものたち」のような概念を使用すべきである（ハラウェイ 2017：101）。

以上の理由によってハラウェイはSF言語に満ちた完全なフィクションを作り出し、その無数の触手が私たちをSFの世界に巻きこんでいく。簡単に言えば、SF言語は閉鎖的なシステムに反対する。フィクションの物語の叙述では、SFは架空の小説またはその他のものである可能性がある。ハラウェイは未来世界の立脚点に立って、幻想的、詩的、きわめて諷刺的、多彩な言葉を書いた。その難解な言語体系の中で、ハラウェイはSFをサイエンス・フィクション、スペキュラティブ・ファビュレーション、スペキュラティブ・フェミニズム、サイエンティフィック・ファクトやストリング・フィギュアと理解した（同）。彼女は「思弁的寓話小説（speculative fabulations）や思弁的現実主義（speculative realisms）でもあるリアルなストーリーを探す」（Haraway 2016：10）。つまり、ハラウェイはアイデンティティの固

なヒューマニズムは通常、人間の意志と価値に焦点を当て、人間の理性、尊厳、権利などを強調する。ポストヒューマニズムは、人間が自然を支配する権利を持つことを拒否し、人間は自然界の一種に過ぎないと主張している。ポストヒューマニズムは、人間、非人間、動物、環境、技術などを同じレベルで思考することを提唱する。人間の力や認知には限界があり、特別なものではない。したがって、ポストヒューマニズムは差異と他者を尊重し、多様な種が並行する哲学思潮を導いてきた。ハラウェイは『トラブルと共にあること』で、自分がポストヒューマニストではないことを何度も明らかにしている。彼女は、伴侶種が、ポストヒューマニズムを唱えることなく、人間の例外主義を否定する助けになることを願っている（Haraway 2016：13 を参考にした）。

定された同一性を拒否し、物語を語ることに焦点を当てる。すなわち、ハラウェイは物語をどのように語るかが議論の焦点であり、問題の理解は、物語をどのように語り、解釈するかに基づいていると指摘している。ハラウェイの物語では、無数の触手を持つクモのような姿が、彼女が描く虚構と現実が交錯する世界へと私たちを導いてくれる。

モートンとハラウェイは怪物のイメージを借用しているが、立場は真逆である。モートンは、怪物を使って人間の不安定性と破壊をもたらすランダム性を強調している。第一章でも述べたように、モートンによれば、人間は不安を作り出すと同時に、自分自身を不安に陥れる。大混乱を起こす人間の能力が、人間を怪物のような存在にしてしまった。モートンの記述では、怪物という言葉はある程度軽蔑的で否定的な意味合いを持つことがある。つまり、怪物のような人間は破壊力が強く、自業自得の存在である。モートンが人間中心主義を拒否したことは、人間の力の巨大さを否定したことを意味しない。言い換えれば、モートンは人間の力の巨大さを認めながら、そのような状態からの脱却を望み、人間と非人間のより緊密な関係を求めたのである。ここで注意しなければならないのは、モートンは人間の力が強大であることを認めながらも、人間の力が強大になると同時に、人間の力も衰えていくことを察知しているということである。これは矛盾しているように見えるかもしれないが、合理的なところもある。人間の力の強さは、地質層から化学物質を発見することからも理解できる。人間の強さを示すのは、科学技術の発達である。しかし、人間が自分たちに便利と利益をもたらす人工物を発明したことで、人間が知らなかった新しい化学合成物が多く生まれた。無数の新しい合成物が、ある条件下で化学反応を起こして、人間が知らない別の新しい物質を作り出すかもしれない。このような馴染みのない物質には不確実性があり、いつでも人間の生存を危うくしかねない。それこそが、人間の力が大きくなると同時に衰えていく原因なのである。従って、「人新世」という時代において徐々に自覚されてきたものは、非人間的なもののある種のとらえがたさである。つまり、モートンは人間の巨大な力を認めながらも、人新世における人間には限界があることに気づいた。モートンは人間が地球からの脱出速度に達したが、実は逆に、「非人間的なもの」によって構成される「メッシュ」状態の環境の奥深くに取り込まれている（モートン 2017：163）[46]と考えていた。モートンの考えでは、私たちは自分の認識の尺度を超えた非人間と共存している。「有限な知性を持った三次元的存在では、これらを直接見ることはできない。むしろ、それらは数学的かつ論理的に推論されうるものであり、理性そのものが厳密には人間風のもの（human-flavoured）ではないこと、そして、我々が考えているよりもずっと大きな、そしてより御し難い実在に我々が住んでいるということを強調する事実でありうる」（同書：152）。

モートンはエコロジー思想を探究する過程で、非人間に注目し、非人間的な存在の形を探る際に、亡霊・怪物という形容詞を使っている（Morton 2016）。人間の体は、無数の小さな

[46] モートンは「人新世の到来以来、多くの奇妙な諸存在が人間によって思考可能となっている」と考えている。簡単に言えば、地球温暖化や放射能などに直接触れることはできないが、人間はそれらの現象から完全に脱却できないことを自覚している（モートン 2017：153 を参考にした）。

穴が満ちている漏斗のようなもので、亡霊のように浮遊する非人間が穴を通して体に染み込んで人間と交わる。つまり、怪物は非人間の流動的で把握しにくい性質を意味する。それゆえ、怪物という言葉はモートンの世界の中で人間と非人間の両方を形容しているが、ただ力点が異なっているだけである。モートンは、万物の存在は怪物のような混成状態であり、混成こそが自分の主張する存在論の本質であると考えている。

しかし、ハラウェイの文脈における怪物はいかなる立場をも表していない。それは良いものでも悪いものでもない。それは良いことでもあり悪いことでもあると言える。彼女はいかなる性質の主体の地位も認めないので、この怪物の概念もいかなる他のものの上に君臨する神権のような地位を持たない。ハラウェイは、人間が世界の中心に立ったことは一度もないし、人間の力は絶対的に巨大なものではないと考えている。つまり、人間自身が地球環境システムを乱すことはありえない。ハラウェイの言うクトゥルフは大地（Terra）から来る鬼神のような力を象徴し、万物の不安定な存在の形をも代表している。ハラウェイは、不安定が人間によって引き起こされたものであることを認めることを拒否し、不安定は大地の生物の特徴であり、騒乱は環境の天性のものであって、外部からの圧迫や絶対的な力によって決定されるものではないと強調した。彼女はアメリカの人類学者である A. ツィンの「不確定な時代を生きる」という主張を借りて、この時代において、不安定はすべての地球上の動物の生死の特徴であると指摘する（Haraway 2016：37）。ハラウェイはこのような概念はラブクラフトに対して「想像も受容もできない」ものだと指摘した（ハラウェイ　2017：101）。以上の理由に基づいて、怪物概念の使用をめぐって、ハラウェイとモートンは根本的に異なると筆者は考えている。ハラウェイはラトゥールの地面へ回帰した「地上に縛りつけられた存在」（earthbound）思想を肯定し、大地に回帰する万物共生のユートピアの世界観を作りあげた。すなわち、我々の存在の実体は万物の上に君臨する神に似た人種ではなく、我々は「物質－記号」（material-semiotic）の混合体である[47]。ハラウェイの言うとおり「我々はヒト（Homo）、アントロポス（anthropos）ではなく『腐植』（humus）である。我々はポストヒューマンではなく『堆肥』（compost）である」（Haraway 2016：55）。

ハラウェイはインタビューの中で、ポストヒューマンは役に立たない言葉であり、自分はこの用語が好きではないと述べている。その理由は、ポストヒューマンは宇宙での競争を画策したり、最終的には地球を離れて自分の道を探したりする人々とつながっているとハラ

---

[47] カテゴリーへの還元を避けることは、ハラウェイが関心を持つ問題といえる。彼女はインタビューでこう述べている。「わたしの本能は、つねに同じことをすることです。それは、物質性と記号作用の接合を主張するということです。遺伝子が物ではないのと同様に、肉も物ではありません。けれども、肉の物質化された記号作用は、親密さ、身体、出血すること、苦しむこと、肉汁性といった意味合いをつねに含んでいます。肉は、つねにどこか湿っています。弱さや痛みを理解せずに、肉という言葉を使うことができないのは明らかです」（ハラウェイ 2007：112）。そのため、物質は常に記号作用による形象を通して私たちの前に現れる。人間という種の定義はいつも陰に隠れている多くの要因を無視する。たとえば、その時の具体的な環境、状況など。対象を認識する際には、私たち自身の環境の限界から直接観察されていない隠れた要因が多くある。従って、ハラウェイは、知とその置かれた状況、物質と記号との複雑な関係は、孤立しているのではなく、不可分であると考えている。

ウェイが考えているからである。ポストヒューマンは根本的に目的論的な用語である。しかし、ポストヒューマニズムは、ポストヒューマンとは意味が異なる。ポストヒューマニズムが批判する人間中心説はハラウェイが反対したものであり、ハラウェイはポストヒューマニズムが人間を再考することに変革をもたらしたことを認めている。そのため、ハラウェイはポストヒューマニズムを批判するつもりはない。だが、ハラウェイはポストヒューマニズムより「堆肥」という言葉を好む。ハラウェイは、ヒト(Homo)という言葉を、根本的には人間(Man)の同義語であり、きわめて男性的なものであると捉えている。以下、ヒト(Homo)、堆肥、腐植に対するハラウェイの説明を引用する。

> ‘homo-’の根っこにあるものはなんというか……、わたしは人間例外主義のことを言うために‘homo-’を使うんです。つまり、経験する偶発事がどんなものだろうが、お構いなくその〔訳者注：人間という〕カテゴリーに回収してしまうような、根本的に男らしさに基づいた人間の単独性ですね。‘homo-’の根底にあるのは、言語や民族性、肌の色がなんであろうがことごとく一緒くたにするヨーロッパ（Euro）ですし、基本的には、そこにあるあらゆる言葉の響きからして植民地化の用語なんですね。わたしは‘homo-’にそういう役割を担わせています。
>
> 翻って、‘homo-’と同じぐらい簡単に、いや実際‘homo-’よりも簡単なんですけど、土の人・・・＝腐植・・(humus）や土壌のほうへ、大地に属する生物／非生物の作用である多種共生（multispecies)のほうへ、つまり大地のなかにいて、大地の一部であり、大地のために存在する、地に足のついたものたち（the earthly ones）のほうへ、人間的なもの(the human)を向かわせることもできます。腐植は土壌と堆肥のなかでつくられるものですし、それは大地を育むことになる生物のためにあるものです。
>
> だからわたしが「堆肥体」というときは、もちろんジョークではあるんですけど、ジョークにはとどまらない。「堆肥体」は、いろんなカテゴリーにあんまりとらわれすぎないようにし、いろんなカテゴリーが世界の複雑怪奇と気軽に折り合ってしまわないようにするための用語です。でもわたしがとても愛着をもっている「腐植」という用語のほうは、わたしたちが一緒につくるものであり、堆肥のなかのときと同じように、わたしたちが一緒に生成していくなにかなんですね。わたしたちは本当に、一緒に存在している。[48]

つまり、ハラウェイが提唱する堆肥はどのカテゴリーにも属さず、共生万物と複雑につながった、最終的に大地に還る存在である。腐植とは、大地と土壌が共に作り出すものであり、あらゆる生命体の産物である。なお、ハラウェイのいう堆肥や腐植は不老不死ではなく、それらも生死を経て土に帰還するのである。

---

[48] ダナ・ハラウェイ、サラ・フランクリン、「マニフェストと共にとどまること　―ダナ・ハラウェイを迎えて―」逆巻しとね訳、二〇一九年。（https://hagamag.com/uncategory/4293 において 2022.1.5 閲覧）。

ハラウェイのこの議論は、何もないところから始まったのではなく、彼女が二〇世紀末に提唱し、大きな反響を呼んだサイボーグ理論[49]に遡ることができる。ハラウェイの考えは一貫性を保っていたといえる。彼女はサイボーグ宣言の中で、未来の人類像に空想を加えた完全に架空の概念――サイボーグを作り上げた。宣言でハラウェイは「サイボーグ――サイバネティックな有機体――とは、機械と生体の複合体であり、社会のリアリティと同時にフィクションを生き抜く生き物である」（ハラウェイ 2000：287）と述べている。彼女は人間と機械の境界を無くすことに努め、人間が機械と相互に浸透する過程で人間の主体性が空虚化し、再形成されることを肯定した。それゆえ、ハラウェイは「私は、女神ではなくサイボーグとなりたい」（同書：348）と宣言した。例えば、メガネをかけてパソコンの前に座って文字を打っている私や、美容整形を受けた人たちはサイボーグと言える（陳静 2019）。このような見方から、中国の学者である陳静は次のような疑問を提起した。「現実のサイボーグには依然として境界がある。私は自分の身体を改造しているが、私の体はまだ人間である」[50]。私たちはまだ自分が人間であることをはっきりと認識しており、境界の曖昧さは、ハラウェイが作り出す仮想世界の中でしか実現できない。境界の曖昧化を徹底し、物質と記号の結合を達成することは、現時点で実現不可能であろう。モートンのエコロジー思想は、この疑問にある程度答えられるのだろうか。

言うまでもなく、モートンは人間と非人間の絶対的な分離という二元論を認めず、人間と非人間の混成状態という新たな概念を再定義した。モートンは、自分が人間であることを肯定したうえで、自分の体にも他のものが混在していることを否定できないという共存を提唱した。モートンとハラウェイは、非人間を極めて重視している。ハラウェイは科学技術の産物との関係に注目し、人間と人間、人間と動植物との関係も強調している。モートンは限定されたカテゴリーにとらわれず、人間以外のあらゆるものを非人間の範囲に網羅した。そういう意味では、モートンの提唱する人間と非人間の絡み合う関係は、ハラウェイの万物間

---

[49] サイボーグという用語は、ハラウェイが考案したものではなく、一九六〇年、アメリカ航空宇宙局（NASA）の二人の科学者、M.E.コリンズと N.S.クランが、当時の宇宙進出ブームの中で、サイバネティク・オーガニズム（cybernetic organism）という用語から作った新しい用語である。環境の変化に迅速に対応し、予期せぬ困難を乗り越えるために、人間が機械を使って宇宙に進出できるようにすることがコリンズとクランの目的だった。「この自己調節は、身体自身の自律的恒常制御（autonomous homeostatic controls）と協調するために、意識なしに機能しなければならない。意識を持たずに統合された恒常性システムとして作動する、外部に拡張された組織複合体に対して、我々は『サイボーグ』という用語を提案する。サイボーグは意図的に外因性の成分を取り込んで自己調節制御機能を拡張し、新しい環境に適応させる」（Clynes, Manfred E. & Kline, Nathan S. “Cyborgs and Space” In: *Astronautics*. 1960. pp.26-27. & pp.74-76. p.27.）サイボーグは、身体の器官の一部が機械に置き換えられた人間-機械統合体であり、その有機体の身体と機械との間には複雑で安定した相互作用が保たれていると簡単に理解できる。ハラウェイは、もともと技術的な次元に限定されていたサイボーグの意味するところを、より広い領域に押し広げる。（陈静. 人人都是赛博格的未来，性别有没有可能真的会消失?. 2019.（陳静「誰もがサイボーグになった未来では、性別が消滅する可能性もあるのか？」、二〇一九年。）https://new.qq.com/omn/20190725/20190725A07JJI00.html において 2021.10.31 閲覧）。

[50] 陈静. 人人都是赛博格的未来，性别有没有可能真的会消失?.2019.（陳静「誰もがサイボーグになった未来では、性別が消滅する可能性もあるのか？」、二〇一九年。（https://new.qq.com/omn/20190725/20190725A07JJI00.html において 2021.10.31 閲覧）。

のつながりと同じかもしれない。しかし、ここで強調しておきたいのは、モートンの非人間に対する考察の射程は無限に広がっているということである。モートンは地球温暖化や放射能など、目に見えない汚染された非人間を自分の考えに盛り込んでいる。ハラウェイは、人間の主体的地位の排除に努め、動植物の考察に基づいて自分の考えを論じている。非人間に対して、モートンはより開放的な考察をしていることは明らかである。これについては次の節で説明する。

Ⅱ　テラポリス（Terrapolis）における「共生創造 」（symbiogenesis）を作ろう！

ハラウェイは万物のつながりを重視している。したがって、彼女はストリング・フィギュア（あやとり）についてかなりのページを割いて記述している。ストリング・フィギュアは人に伝達する必要があり、独立した個体では完成できないゲームである。

> あやとりのゲームをするということは、パターンを与えたり受け取ったり、糸を落としたり失敗したりすることが、時には以前にはなかった機能的なもの、結果的でおそらく美しいものを見つけることもある。重要なつながりを伝えること、手と手、数字と数字、アタッチメント・サイトとアタッチメント・サイトで物語を語ること、そして大地（terra）で、地球で有限の繁栄のための条件を作ること。（Haraway 2016：10）。

ストリング・フィギュアゲームは持続的で伝達的な静止と移動が絡み合う豊かな世界を見せてくれる。より具体的に言えば、「自然、文化、主体、対象は、それらの絡み合ったワールディング（worldings）に先立って存在するのではない」（ibid.：13）。ハラウェイは、南カリフォルニアにおけるハトの生と死の実践（practices of living and dying）をあやとりの遊びだと考えている。このハトたちは、テラポリス（Terrapolis）[51]と呼ばれるn次元ニッチ空間（n-dimensional niche space）に住み、テラポリスの市民である。ハトが持っている能力は、ハラウェイの視点を表現する上で極めて重要なものである。ハトは地図感覚を持っているので、帰り道を見つけることができる。そのため、ハトファンと科学者、そして小説家はハトが大好きなのである。まず、ハラウェイは、アメリカの沿岸警備隊がハトと協力して水中の偵察目標を見つけた例を用いて、ハトと人間が訓練や交流を行う際に、ハトを使って作業の精度を大幅に向上させることができることを示している。次にハラウェイは、ハトは鏡で自分を認識することができ、これは二歳児に匹敵する能力だと述べた。これはハトと人間の類似性を示唆している。ハラウェイはそれ以外にも、ハトのレースでは、ハトと訓練者の間

[51] テラポリス（Terrapolis）とは、ラテン語の terra（大地）とギリシア語の polis（都市、市民）を組み合わせたハラウェイの造語である。テラポリスは共生する万物の連繋の中に存在する、孤独で紐帯のないものではなく、豊かで多種共生に適したものである。テラポリスは、人間中心的で男根的なイメージを排除し、腐植質であり、土壌と結びついた万物の住まう場所としての役割をする（Haraway 2016：11 を参考にした）。

にさまざまな内的・外的関係があることを指摘している。訓練者は視点を変えて、ハトの立場になってハト同士の交流や付き合い方を知り、ハトの能力を育てる。ハトとハトの愛と競争、ハトと人間のアイデンティティの相互変換、そこには「非常に複雑な関係性のシーンがある」（ibid. ：20）と言えるだろう。

その後、ハラウェイはドイツのインターディシプリナリーアーティストB.D.コスタのピジョンブログ（Pigeonblog）プロジェクト[52]に注目した。このプロジェクトはスポーツ用のハトを大気質データ収集活動に取り入れ、科学者、研究者、芸術家とハトを結びつけ、種を超えた協力を通じて大気質情報を大衆に発信する。この過程において、各プレイヤーは相互信頼のもとに何度も訓練を受けていた。つまり、「すべてのプレイヤーがお互いを可能な状態にし、思弁的寓話小説の中でお互いに『一緒になった』（became-with）」（Haraway 2016：22）。ハラウェイがこのプロジェクトを賞賛したのは、単に複数種の結合を達成したからではなく、コスタがこのプロジェクトを科学的進歩の枠組みや支配下に置かなかったからである。言い換えれば、「もしかしたら、遊びの領域でこそ、目的論や定型的なカテゴリーや機能の外側で、深刻な世界性や回復が可能になるのかもしれない。それがSFの前提であることは間違いない」（ibid. ：23-24）。

ハラウェイが語るハトの物語は、実は伴侶種の物語でもあり、彼女は「伴侶種が常にお互いに伝染し合っている[53]」（ibid. ：29）と指摘する。人間とハトは、一緒に食事をするような関係であり、お互いが成就する関係である。ハトの多くの異なった身分、例えばメッセンジャー、演者、環境労働者などの各種類の役はすべて他の種と総合的に作用して一緒に形成されたのである。そこでハラウェイは思わず「もつれた問題を追跡し、最初は奇想天外に見えたが結果的に織物に重要な糸を加えるたびに、複雑なワールディング（worlding）でトラブルを抱え続けることが、テラポリス（Terrapolis）における、大地（Terra）での生存と死を共にするゲームの名前であることを私はよりはっきりと認識するようになった」（ibid.）と感嘆した。

生物学史の出身者であるハラウェイにとっては、ハトに限らず、動物や植物といった人間以外のものが、彼らの共生創造の物語として語られている。たとえば、『トラブルと共にあること』の第5章*Awash in Urine: DES and Premarin in Multispecies Response-ability*において、ハラウェイは自分のパートナーで、不妊手術を受けた年老いた雌犬が尿漏れのためDESを服用しなければならなかったことから、自分も閉経のために女性ホルモンのプレマリン（Premarin）を服用しなければならないことを連想する。プレマリンの物語には多くの参加者がいる。例えば、実験には動物の臓器を使う必要があり、プレマリンの製造では、女性の

---

[52] ピジョンブログ（Pigeonblog）についての情報は https://nideffer.net/shaniweb/pigeonblog.php において2021.11.1 に閲覧した。

[53] 伝染はハトのような生命体が多くの他のものと連帯しているという特徴を形容する。つまりハトは世界の旅行者として、実は多くの異なる種とつながり、関係を持ち、影響を与え合っている。ここでは伝染という言葉は、他の存在に及ぼす影響を意味すると考えられる。それぞれの種は、それ自体が他の種と結びつき、影響し合い、構成し合う性質を持っている（Haraway 2016：29 を参考にした）。

尿から馬の尿の抽出に移行した。ハラウェイの考えでは、開発に携わった研究者、製薬会社、消費者である女性、原料の調達元としての雌馬、農家、馬を救おうとする人々、エストロゲンを摂取することで別の病気になることを恐れる女性などのすべての役割が相互に関連している。そこでハラウェイは「プレマリンを食べて、牧場主、北の草原の生態系、馬、活動家、科学者、乳がんを患っている女性の福祉に対して、私は以前よりも責任感を持つようになった」(ibid.：116)と述べた。ものが単独で存在することはなく、さまざまな要素の相互作用によって形作られている。というのは、「私たちは皆、恐ろしい歴史に直面しながらも、多種多様な生物が繁栄するための条件を整える責任があるが、その方法は同じではない。その違いは、生態系、経済、種、生活などに影響する」(ibid.)からである。無数の物語は、複雑に絡み合った関係、お互いに与える能力、一緒になることを語っている。

以上の議論からハラウェイは共生創造(symbiogenesis)という言葉を作った。ハラウェイによると、「シンポイエーシス(*Sympoiesis*)[54]は簡単な言葉で、『共に作る』(making-with)を意味する。自分で作るものはない、本当に自生的で自己組織化されたものはない」(ibid.：58)。ハラウェイの物語では、何でも他の諸種の協力によって生成されるものであり、孤立した自己生成は共生の大地では生きていけない。「生物はお互いに浸透し、回り合い、絡まり合い、食い合い、消化不良を起こし、部分的に消化し、部分的に同化していく」(ibid.)、これが SF の物語の万物の付き合い方である。ハラウェイは、自分の世界を一個体よりも共生で表現することを好んでいる。なぜなら、トラブルこそがクトゥルー新世の最大の特徴であり、共生によってもたらされるすべてのことがトラブルの原因であり、一個体ではトラブルにならないからである。ラトゥールが言うように、生物は実際にはこの世界の極めて活発な一部であり、「テリトリーはあらゆる動的存在の全体に開かれている――遠くの動的存在と近くの動的存在を含めればそうだ」(ラトゥール 2019：147)。

文化人類学者の奥野克巳はハラウェイと共鳴している。彼は人新世の議論が盛んになる中で、文化人類学は人間の世界だけにとどまらず、人間の範囲を超えた学問へと拡大していると指摘する。人新世がもたらしたものは光か闇かという問いについて、奥野は「マルチスピーシーズ民族誌」を援用して追究している。奥野にとって、人新世は天使であり、悪魔であると思われる。奥野によれば、「他の生物種は、人間や他の生物種と関わりを保ちながら、絡まりあって生きてきた」(奥野 2017：79)。これは人間中心主義に対する挑戦であり、人

---

[54] ハラウェイによると、「シンポイエーシス」(sympoiesis)という用語はカナダの環境学大学院生 M.B.デンプスターが提案したものである。シンポイエーシスとは「自己定義された空間的・時間的境界を持たない集団的生産システム」(Haraway 2016：61)を指す。「情報(information)および制御(control)は構成要素間で分散されている。このシステムは進化的であり、驚くべき変化の可能性を持っている。対照的に、オートポイエティックシステム(autopoietic systems)は、『自己生産する』自律的な単位であり、『自己定義された空間的または時間的境界を持ち、中央制御、恒常性、予測可能である傾向がある』のである。共生(symbiosis)がオートポイエーシス(autopoiesis)にトラブルを引き起こし、共生創造(symbiogenesis)が自己組織化する個々のユニットにとってさらに大きなトラブルメーカーになる。生物のダイナミックな組織化プロセスにおいて共生がユビキタスであればあるほど、大地(terran)のワールディング(worlding)はループし、編み込まれ、広がり、錯綜し、シンポイエティック(sympoietic)になるのである」(ibid.)。

新世が我々に与えた万物との関係を再検討する機会でもある。一方、複数種が絡み合っているからこそ、人間活動は他の生物種の絶滅を招きながら、自らを絶滅の淵に追いやることができるのだ。このような終末の予兆を、奥野は「暗い人新世」と呼んでいる。しかし希望の存在も否定できない。奥野は A.ツィンのマツタケへの思考を取り上げる。ツィンはマツ林に農民が介入することで、菌根菌とマツと人間が相互に関わり合いながら、マツタケを育てたのだと考えている。そして、マツタケは人間の社会的関係を維持するための貴重な贈り物として利用することができる。つまり、マツタケは人間社会で消費される商品であると同時に、人間と自然が絡み合った産物でもある。奥野は希望に満ちた期待を「明るい人新世」と呼んでいる。従って、ハラウェイにとって、人新世はもっと明るいものだと思われる。

一九八〇年代にハラウェイは「サイボーグが地球を救う！」（Cyborgs for Earthly Survival!）というスローガンを掲げた。今、ますます壊れていく地球環境に彼女は思わず「トラブルと共に！」（Stay with the Trouble!）と叫んでしまう。ハラウェイの考えでは人新世とは、現在の環境汚染などの苦境が過去の状態に戻ることは不可能であり、つねに絶望的であることを意味する。しかし、ハラウェイは人新世で人類が絶滅に向かうとは考えていない。私たちは絶望するのではなく、勇気を持って、より多くの種の繁栄の世界を作成する必要がある。この絶滅を背負った時代のトラブルを継承し、つながりを創造し続ける（Haraway 2016 : 130）。「回復はまだ可能だが、自然、文化、技術、生物、言語、機械の殺伐とした区分を超えた、複数の種の連合でのみ可能である」（ibid. : 117-118）。このような回復は人間主導の人新世では不可能である。われわれはクトゥルー新世にこそ森羅万象との共振を感じることができる。

では、どの程度の回復をハラウェイは望んでいたのか。ハラウェイは、すべてを過去の豊かな状態に戻すことは明らかに不可能だと認めているが、それ以上を失わないことは我々にできることだと提唱する。つまり、「生物・文化・政治・技術の部分的な力強い回復と再組成をできるかぎり可能にする」（ハラウェイ　2017 : 102）。どのように回復するかについて、ハラウェイはツィンの考えを参考にして次のように答えていた。ツィンは、完新世には避難先となるレフュジア（refugia）が残されており、豊かな文化や生物多様性が長く続く時代を支えていたと考えている（同書 : 100）。しかし、人新世において多くの避難場所が損なわれている。そして、ハラウェイは人新世が単なる「境界的出来事」であり、「白亜紀と新生代第三紀の境目に位置する K-Pg 境界にも似た存在だ」と考えている。人新世という区分が時代の連続性を断つ。そしてその時期で地球上には人間と人間以外の難民が溢れている。従って、ハラウェイは「人新世をなるべく『短く』『薄く』し、手に手をとって、あらん限りの方法を動員し、次の時期を、避難場所を再び増やしていけるような時代とする」（同）ことを提案する。

次に、どうやって復興を始めるかというと、ハラウェイは、私たち全員がトラブルに立ち向かう想像力を訓練して物語を考えてほしいと言っている。すなわち、私たちは、先にも述べたように、この混沌とした困難な時代に、トラブルを取り去ったり、逃げたりすることを

急ぐべきではない。むしろ、私たちは周囲の雑多な存在との間に、複雑な共生関係が生まれていることを受け入れることを学ぶべきである。人間も、動物も、植物も、機械も、結びついている。私たちの本体は私たち自身を代表しているだけではなく、無数の他の種から構成された断片的な存在でもある。それゆえ、一見非現実的なことを考える勇気を持って、共生相手と共振できるように心を鍛える必要がある。そのような提案をここでやめてしまうと、自分と周囲の複雑で混沌としたものとのつながりを見つめる機会が失われてしまう。「生き物も人間も、継続的で好奇心に満ちた実践の中で、お互いなしでは存在し得なかったし、耐えられなかった。進行中の過去に付着している彼らは、分厚い現在とまだ可能な未来の中でお互いを前進させ、スペキュレイティブ・ファビュレーションの中でトラブルと共にある」(Haraway 2016：133)。

ハラウェイは、このような考えから、人新世における人間という言葉を捨て、深刻化する環境危機を迎えるに際してクトゥルー新世を使うようになった。人類と他の種はクトゥルー新世で手を取り合うことで、助け合うことができるのかもしれない。

以上の考察を踏まえると、ハラウェイの思考は動物や植物からの示唆に基づいていることが多いことがわかる。ハラウェイは人工的に作られたプレマリンのような薬物が人体に影響を与えることも意識していたし、人間と他の存在とのつながりも重層的な時間と空間を超えていることも認識していたが、モートンのように人間の想像を超えるような非人間的なものを自分の考慮に入れなかった。また、ハラウェイはダークエコロジーが見せる憂鬱や悲哀を好まないかもしれない。すなわち、環境問題がこのように深刻な状況において、モートンの汚染から逃れられないというやや悲観的見方は、人々が苦境から抜け出すためにはあまり役に立たないということだ。モートンは災害からどうやって脱出すればいいのか教えてくれないが、ハラウェイが提唱する避難所の再建も容易ではなさそうである。そのような点を考慮すれば、ハラウェイが作ったサイエンス・フィクションに満ちた共存のユートピアの実現は困難である。

しかし、ハラウェイのクトゥルー新世の探求は人新世という衝撃的な思想の波に対して、地質学や自然科学を超えた別の思考の扉を開いていた。ハラウェイは人新世が見落としていたものを反省し、その意味を豊かにした。クトゥルー新世の出現は、人新世という概念はまだ議論の余地があることを証明している。ハラウェイは、様々な文脈における人新世の概念のますます独占的な表現への関心と懸念を示している。彼女は人新世への疑問を提起して、自分なりの見解を論述しながら人新世という用語の主流の地位を動かす異色のクトゥルー新世を提案した。それは人新世概念を考え直す意識を喚起し、人新世の権威でますます硬化した土壌を緩めるだけでなく、人間と非人間との関係に関する思想に新鮮な血を注入し、抑圧のない環境で想像力豊かな思考が自由に育つことを可能にしたのである。束縛を脱ぎ捨て、想像を解き放ち、世界のあらゆるものが連携して難局を乗り越えていく。ハラウェイとその抽象的で先鋭的な思考は、現時点では実現が容易ではないことは否めないが、彼女の革新的な思考は、人新世の発展に新たな可能性を提供している。

第二節　資本新世？

ハラウェイのクトゥルー新世を除けば、人新世に対する最大の挑戦は、アメリカの社会学者 J.W.ムーアの資本新世に他ならない。人類活動が地球に与えた強い影響を強調することが人新世の主な核心であることは、これまでの議論ですでに知られていた。その中で最も非難されているのは、絶対的な主人公である人間である。これに対してハラウェイは、大胆にも革新的で神話的な言葉を用いて人新世が示唆する人間の力の巨大さに反論しようとしている。想像力の可能性をほとんど抹殺してしまった人新世における人間の絶対的な力は、ハラウェイの思想の成長にはあまり有利ではない。エリスが主張しているように、地球を変える人々を単なる区別のない群体と見ることはできない。「人によって環境の使い方や変え方が異なり、異なる結果を生み出し、人によってその結果を経験することも異なる」（Ellis 2018：132-133）。というのも、「ホモ・サピエンス全体が急激な地球の気候変動を引き起こしているというのは正しいのだろうか？　明らかに違う。富裕国や裕福な人々は、貧しい人々よりもはるかに多くのエネルギーを使用し、はるかに多くの二酸化炭素を排出している」（ibid.：133）からである。人新世という名称は、人間の間の差異を曖昧にし、地球を傷つけた責任をすべての人間に負わせるものである。

愛やケア、他の種との絡み合いを唱えるハラウェイ（Haraway 2016）とは異なり、ムーアは人新世がもたらす歴史的・政治的な性質により関心を寄せている。ムーアは、誰に責任を問うべきかということに焦点を当てておらず、今の状況が個人や集団によって引き起こされているとは考えていない。もっと長い目で見て、もっと深く考えてみる必要がある。ムーアは、人新世が指し示す人間の広大な範囲が、人々の視線を曖昧にし、一部の集団の責任を弱めていると考えている。環境史学への造詣の深さから、自然環境と資本との関係について歴史の枠組みにおいて取り組むようになったムーアにしてみれば、人新世よりも資本新世を使って、その忌まわしい過去を記憶すべきだと考えられたのである。ムーアはモートンとハラウェイの想像力あふれる言説とは違って、資本主義の発展の歴史において、人間と自然の関係を探ろうとしている。従って、本節の目的は、人新世をより現実的な資本主義の発展の歴史的枠組みの中に置き、ムーアの思考を手がかりに環境危機の社会的・歴史的原因を検討することにある。

本節ではまず、伝統的な緑の思考（Green Thought）に対するムーアの批判を議論した上で、自然の定義についての彼の考え方を導入する。この自然とは受動的に改造される存在ではなく、人間の活動を生み出す母胎である。これもムーアのエコロジー思考を理解するためには欠かせない。次に、資本新世の背後にある資本主義が自然を組織する方法についてより詳細に探究し、人新世が抱えている問題の本質を発見する。最後に、これまでの議論に基づいて、ハラウェイ、ムーア、モートンの激しい思想のぶつかり合いの中に、今日の人間と非人間とのより解放的な関係を見出すことを試みる。これらの関係がどれだけ実現可能である

かにかかわらず、これらの学者がもたらす議題は貴重なものである。

Ⅰ　自然の営み

ムーアの理論を導入する前に、他の学者が環境危機の元凶を探す際にどのように考えているのかを知っておく必要がある。先に述べたように、人新世に関する最も主流の疑問は、環境危機の責任を人間という集団に帰属させるべきかどうかということである。

ボヌイユとフレソズは「地球の新たな地質学的秩序を生み出した要因として、個体差のないアントロポスを考察するのは少しばかり短絡的だろう」（ボヌイユ、フレソズ 2018：91）と考える。従って、ボヌイユとフレソズは人文諸学の理論を用いて次のように述べている。

> マルクス主義の階級概念、クロード・レヴィ=ストロースの文化人類学、フェミニスト理論やポスト・コロニアル理論といった思想はそれまでの古い「人間」の普遍主義を非難し、平等な尊厳や文化、社会、社会階級、性的アイデンティティの多様性が重要であること〔原文ママ〕強調してきた。これらの人文諸科学は多様な集団に属する人間が不平等な社会関係において他者を滅ぼし、搾取し、服従させてきた支配のメカニズムをすでに明るみにしてきたのである。（同書：91）

すなわち、ボヌイユとフレソズから見れば、人間の差異は存在している。人新世における人間はヒト種を指しているが、本当にそれを区別しなくていいのか。というのは「人新世は、人為的な環境変化の真の犯人から目をそらしている」（Ellis 2018：135）からである。ボヌイユとフレソズは資本主義の歴史は人新世の起源と不可分であり、「人新世はホブズボームが言う『資本の時代』の産物であり、『人間の時代』という我々の思考を支配してきたものの産物ではない」（ボヌイユ、フレソズ 2018：272）と主張した。そのため、我々は「富の略奪」と「不平等交易」に答えを求められるかもしれない。人新世における「人」はいったいいかなる人を指しているのかを考えると、多くの学者が一様に先進国の少数の富裕層を挙げる。世界の上位 1%の富裕層は、人類の最も貧しい三一億人の二倍以上の二酸化炭素を排出している[55]。またブラジルなどの国家は森林伐採による温室効果ガスを大量に排出する。しかしこのような状況を招いたのは「富の略奪と『不平等交易』」（ボヌイユ、フレソズ 2018：274）である。富裕国は周辺国の環境を犠牲にして自らの繁栄を享受し、世界経済の激しい競争的な貿易パターンはこの行為を継続させるに違いない。国連の「世界経済社会調査 2009」（World Economic and Social Survey 2009）で明らかになったように、気候変動は「二世紀以上にわたる空前の成長と生活水準の向上の結果であり、エネルギーサービスの量と質

---

[55] OXFAM. *Carbon emissions of richest 1 percent more than double the emissions of the poorest half of humanity.* 2020.（https://www.oxfam.org/en/press-releases/carbon-emissions-richest-1-percent-more-double-emissions-poorest-half-humanity において 2021.10.31 閲覧）。

の向上がその動力を提供している」[56]。富裕国は高い発展水準に達しているが、残りの国は環境汚染の弊害を甘受せざるを得ない。つまり、人間活動によって引き起こされる悪影響は人類の責任であるが、それでも人間たちの間には差異がある。

A.マルムと A.ホアンボーは「人類の地質学？：人新世ナラティヴ批判」という論文において、「人類の地質学」を意味する人新世が人間を非常に特別な位置に置いていると指摘する（マルム、ホアンボー 2017：143）。具体的には、マルムとホアンボーは理論家が人新世に関する問題を扱うとき、産業革命以降の蒸気機関の隆盛によって生じた二酸化炭素の過剰排出には言及するものの、その現象の根本原因についてはほとんど言及しないことを発見した。このようなアプローチは、問題を「人間の本性」に帰するものであり、斎藤幸平の言う「物神崇拝」である。斎藤が述べたように、マルムは「人新世という概念を無批判的にもちいることで、現代の環境危機を『人類』の危機として非歴史的・非社会的な『物神崇拝』にもとづいて把握してしまうことを避けるために」（斎藤 2017：134）、資本新世という概念を提唱する。マルムとホアンボーの考えでは、人新世の議論はホモ・サピエンス人口のごく小さな一部にしか関係ない。その中には一部の白人イギリス男性か、あるいは先進資本諸国の特権階級が含まれているかもしれない。つまり、「人間を生物学的進化に決定された単なる種的存在として扱うことはもはやできない」（マルム、ホアンボー 2017：147）。

ムーアは、人新世の根本的な原因は、一部の人間にまでさかのぼることができることを認めている。しかし、ムーアはその背後にある巨大なネットワーク、すなわち一四五〇年以来力を蓄え、現在も拡大し続けている資本主義の陰謀のほうに関心を寄せている。ムーアはマルムと同じように、人新世を資本新世という呼び名に代えることに力を注いでいる。なぜなら、ムーアは人間と自然だけに注目する物語は、先住民、奴隷にされたアフリカ人などを人間から排除することに基づく資本主義の秘密を隠すことになると考えていたからである（Moore 2016：79）。

ムーアは、一九七〇年以降に出てきた緑の思考（Green Thought）の多くが「人類は確かに自然の一部である」という鍵概念を中心に展開されてきたと指摘している。これはデカルトの二元論を否定し、自然と人間は切り分けられたものであることを否定しているように見える。しかし、ムーアの考えでは、これらの緑の思考は、より深いデカルト的二元論の罠にはまっている。つまり、人間が自然の一部であるという説は、互いに独立した二つの個体の相互作用に基づいている。ムーアは二一世紀以降の学者たちが環境変化を重視していることを肯定的に評価しており、それは望ましい現象に違いないと考えている。しかし、ムーアは、緑の思考は単なる社会と自然の足し算であり、この足し算は自分が探求しようとしていた、人間と自然のネットワークの弁証法的関係を不明瞭にしていると主張した。ムーアは、先に述べた多くの学者と同様に、デカルトの二分法が現在の厄介な危機を解決できないだけでなく、問題解決の過程で大きな障害になると考えている。そこでムーアは、社会と自然

---

[56] World Economic and Social Survey 2009: *Promoting Development, Saving the Planet*. UN, 2009. pp.6.（https://www.un.org/en/development/desa/policy/wess/wess_archive/2009wess.pdf において 2021.11.10 閲覧）。

を独立し、かつお互いに影響し合う概念として捉えるのではなく、新しい考え方を構築しようとしている。ムーアによれば、「私たちの関心は、ごちゃごちゃに束ね合わされ、互いに浸透し、相互に依存する人間と人間以外の自然とのあいだの関係に向かうだろう。換言すれば、必要とされているのは、人間と自然を前提とする語彙ではなく、自然内存在としての人間をめぐる語彙を増加させるような考え方なのである」（ムーア 2021：74）。

ムーアはまず、自然の定義についての自分の理解を提示した。ムーアの見解では、自然は「資源や前提条件としてではなく、母胎としての自然」（同書：76）である。彼は、自然は人間と社会が共に作用するものであるが、同時に文明を生み出す母体でもあると指摘した。言い換えれば、自然条件の善し悪しは文明の進行にも影響を与える。つまり自然の関与なくして文明は生まれなかった。そのため、歴史を解釈する際には、環境要因の影響を考慮しなければならない。人間の営みも、自然の残りの部分と結びついていなければ機能しない。従って、ムーアは社会が自然を排除することに反対し、「生命－制作（life-making）、種や環境の創造的で、生成的で、そして多層的な関係」がある「オイケイオス」（oikeios）の生態系である「世界＝生態」（world-ecology）（Moore 2016：79）を、資本主義を観察するための新しいパラダイムとして提示した。ムーアの理論的枠組みでは、オイケイオスは人間と非人間の間をつなぐものであり、「オイケイオスは人間と人間以外の自然とのあいだの、そしてまたつねに両者の内部での、創造的で、歴史的で、そして弁証法的な関係を名指す表現である」（ムーア 2021：75）。具体的には、「オイケイオスとは動植物相のみならず、この惑星の多様な地質学的・生命圏的な布置、循環、そして運動を構成する多層的な弁証法である。人間の協調と対立からなるモザイク――一般には、これが『社会』的組織と呼ばれる事象であるわけだが――を創造し破壊する関係性と条件が、このオイケイオスを通じて繰り返し形成される。そうするとオイケイオスとしての自然は、文化や社会や経済と並ぶような追加的な要素としては提供されるものではなくなる。これに代わって、自然は人間の活動がその内部で展開する母胎であり、歴史的なエージェンシーがそのうえで作用する場になるのだ」（同書：76）。

自然と人間の境界を越えたオイケイオスが作動したからこそ、資本の原始的蓄積と今日の環境・社会問題が生じたのである。新たな視点が生命の網の中で歴史変遷を捉えるシステムを呼び出し、世界＝生態が誕生した。

Ⅱ 生命の網における資本主義

世界＝生態が提示したのは、人間が生命の網の中でどのような位置を占めているかという問題である。ムーアは世界＝生態の中で最も重要な概念、つまり「自然内存在としての労働の抽象としての価値／資本」（同書：87）に着目した。資本が自然に直接作用して発展するという考えは、ムーアにとっては捨て去るべきステレオタイプである。彼は資本主義を生命の網から独立させて考えることを批判した。なぜなら、このように考えると、社会と自然

の関係は、単純に社会が自然に影響を与えるということになるからである。ムーアはこのように社会と自然を、足と足跡の関係として捉えている。土や汚れにたとえられる足跡を残した自然は、ムーアにとって生命の網に適した確かなメタファーではない[57]。足跡という言葉は、自然が能動性を失った受動的な存在であるかのような誤解を招く印象を与え、生命の網の中で「人間と人間以外の自然とのあいだの複雑かつ偶有的な関係」（同書：91）を抹殺する。ここで強調しておきたいのは、ムーアの観察では、自然は動的な概念であり、環境作りの過程であり、人間組織は自然のなかにおけるひとつのプロジェクトであるということである。ここの「自然は保護されもしないし破壊されもしない、ただ変容しうるのみである」（同書：92）。オイケイオスの作用で、生命の網における「あらゆる生命は環境をつくる。あらゆる環境は生命をつくる」（同書：93）。

ムーアは、環境作りというダイナミックな変化を、歴史の変化へと拡張している。彼は環境だけを研究の対象とするのではなく、研究の焦点を「歴史的変化のなかにおいてたえず変化し、浸透し合い、互いにやりとりし合う人間と環境の弁証法」（同）に移すべきだと考えている。つまり、歴史の発展は人間と非人間的な自然の営みとの相互作用に深く根ざしている。従って、ムーアは生命の網の中の資本主義についての課題を探りたいのである。具体的には、この課題は「私たちが『資本主義』と呼んでいる様々な関係のモザイクがいかに自然を通して作動しているのか、また逆に自然がいかに資本主義という限られた領域を通して作動しているのか」（同書：2-3）に関わるものである。そのため、ムーアは歴史に大きな特徴――「歴史的変化の二重の内部性」（the double internality of historical change）――を与えた。ムーアがいう歴史的変化の二重の内部性とは、「自然内存在としての人間」と「人間内存在としての自然」の双方を指す。この二重の内部性によって、「資本主義のような特定の人間組織は生命の網の生産者でありその生産物である、ということが明らかになった」（Moore 2016：79）。人間が環境に与える影響は大きいと言えるが、人間は外から自然とつながっているのではなく、内から自然とつながっている。この問題を単純化すれば、地球は人間が依存する環境だと考えることができるが、同時に人間は他の種の環境変化を作り出す動因でもある。

このような考えから、ムーアは、文明および資本主義は生命の網で展開されるとくりかえしている。資本主義は自然と社会の境界の上で台頭したが、資本主義は大文字の自然――「自然として扱われた人間に満ちた自然」――を創造した（ibid.：87）。つまり、自然は物質化され資本化された「二次的自然」である。歴史の変遷で多くの人類開発計画は、自然を資源や宝物として価値づけてきた。ムーアの叙述では、自然の価値は「市場」、「価格」、「権力」、そして「金銭的蓄積」と結びついている。自然の作用過程こそが計画を完成させ、歴史を構成するのである。温室効果ガス排出量を基準にする観点と異なるのは、ムーアが人間

---

[57] Moore, Jason W.. “From Object to Oikeios: Environment-Making in the Capitalist World-Ecology”. 2013. pp.6.（http://citeseerx.ist.psu.edu/viewdoc/download?doi=10.1.1.691.5540&rep=rep1&type=pdf において 2021.11.1 閲覧）。

と自然との関係を、「景観転換の規模、スピード、範囲の画期的な変化」（ibid. : 96）という観点から考えたことである。彼は中世から近代への転換期に目を向け、人間が自然を変えたのはずっと以前だが、一四五〇年以降の環境変化が特に深刻だと主張している。具体的には、「安価な自然」（cheap nature）を価値法則とする初期資本主義の生産様式は、長い一六世紀の間に「環境－制作の新しいパターン」（new pattern of environment-making）によって、それまでになかった環境変化を加速させた（ibid. : 97-98）。資本主義の発展は人間と自然をしっかりと縛り付け、人間と自然はオイケイオスの作用を通じて生命の網の中に資本主義を生み出した。世界＝生態の複雑で不規則な動きが生んだ矛盾や危機は、人間だけの責任ではない。そのため、ムーアは人新世の代わりに資本新世を提唱している。

斎藤は、人新世という破局の原因を環境危機と資本主義の関係に求めている。ただし、斎藤とムーアの立場は必ずしも同じではないことに注意しなければならない。マルクス主義哲学の専門家である斎藤にとって、「物質代謝の亀裂」は人新世における環境危機を考える立脚点になっている。物質代謝論はマルクスが『資本論』の中で唱えたものである。自然の一部である人間は、当然ながら物質循環の一環である。人間が地球上で生きていくには、絶えず自然と協力し、様々なものを摂取し、排泄していく必要がある。これもマルクスのいう「人間と自然の物質代謝」である。しかし、資本主義は短期間で利益を極大化しようとするため、労働を通じて人間と自然を限りなく利用し、莫大な価値を手にする。したがって、物質代謝の亀裂も生じていく。マルクスが、人間と自然を完全に分離した二つの要素として見ていたわけではないことがわかる。しかし、斎藤の解説によれば、資本主義の野放図な収奪は、自然が耐えうる限界を超えて、人間と自然の物質代謝のバランスを攪乱しているのである（斎藤 2017 : 138）。したがって、斎藤は、環境危機は、人新世が示唆する人間と自然の結合というハイブリッドとは関係なく、人間と自然の関係の分離という観点から分析されるべきであると考えている。この点に関しては、マルムとホアンボーは斎藤と同じ陣営に立っている。気候変動などの環境問題は、人間社会と自然が混在する区別のつかない関係を証明しているとマルムとホアンボーは認めているが、「自然と社会の物理的な意味での混交は、両者の分析的な区別の放棄を正当化するものではない」（マルム、ホアンボー 2017 : 142）。しかし亀裂という表現は、ムーアが批判したデカルト的な二元論にほかならない。より正確に言えば、ムーアが提唱した人間と自然が融合する世界＝生態は、自然と社会の亀裂とは相容れない。斎藤は、物質代謝の亀裂が資本主義の生産様式を変革させると考えている。言い換えれば、自然の限界を尊重しつつ、革新的な社会生産のあり方を探るべきである。斎藤に言わせると、自然は過去に戻らないという一元論は、資本主義の再興隆をもたらす可能性が高く、人間と科学技術の融合が進み、科学への依存度が高まることは、一元論の必然的な帰結点である。しかし、斎藤の発言はあまりにも極端なものである。

斎藤の懸念にムーアが配慮しなかったわけではない。実は、ムーアの議論には、物質代謝の亀裂に関する見解が見て取れるのである。ムーアが物質代謝の亀裂という考えを拒絶しているのは、「資本主義による資本、権力、そして自然の物質代謝は価値蓄積の論理に支配

されており、それによって世界は、（剰余価値の）搾取と（対価の支払われないはたらきの）収奪のもろもろの領域へと還元されているからである」（ムーア 2021：157）。具体的には、「価値というものが、その手の届く限り生命のフローの再/生産の論理の中心としてはたらくことを正面から捉えるべく物質代謝の概念を理解するならば、資本主義がこれまでに繰り返し、限界を生み出しては、それを乗り越えてきたことが理解できるだろう」（同書：157-158）。つまり、人間と自然の分離を堅持すれば、資本主義の安価な自然戦略は際限なく発展し、次から次へと自然の限界を突破していく。自然の限界で生産をコントロールできると盲信することは、自然の限界を物神化することである（同書：156）。

また、文化人類学者の C.B.イェンセンは D.チャクラバルティによる「ポストコロニアル・スタディーズと気候変動の課題」という論文を読み解くことを通して、人新世の環境問題に対する二元論的なアプローチが不十分であると指摘した。チャクラバルティは今最も大事なことは、資本主義の生産様式を批判することでも、環境変化の歴史を再検証することでもなく、現在のジレンマからどう抜け出すかを考えることだと考えている（Chakrabarty 2012：217）。この思考について、イェンセンは次のように解説している。

> 歴史上誰が過ちを犯したかについて批判的な診断を行うことより大事なのは、逃れがたく私たち全員を巻き込むこの混乱をどのようにすれば切り抜けられるか考えるという、これからについての未来志向の仕事なのです。しかし、そうした未来へと向かう仕事は、資本主義に対して洗練された批判をすることによってはなしえません。その理由は、混乱が資本主義的ではない場所、あるいは資本主義と交わらない場所を含め、どこにでも広がっているから、というだけではありません。それは、私たちが今や、資本主義者であってもなくても、誰も予見することも制御することもできない状況にあるためです。（イェンセン 2017：50）

従って、イェンセンの理解において、チャクラバルティは「今や私たちは人新世の影響を制御できない状況にある」（同書：51）と主張している。人新世にいる人間は、多くの偶発的な災難に直面している。自然災害や核兵器への懸念で、人間は不安定になるのは周囲の環境だけではなく、人間そのものも不安定になっていることを認めざるを得ない。言い換えれば、人間の認知の尺度を超えた非人間的な影響力の増大に伴って、人間の力は相対的に以前ほど強くなくなった。すなわち、イェンセンに言わせれば、「二元論の帰結は、人新世という問題が資本主義者に帰責される場合であれ、その解決が気候科学者の手に委ねられる場合であれ、人類に不相応な力とエージェンシーが認められてしまうことにある」（同）。同時にイェンセンは、多くの地域で暮らす住民の意識には、人間と自然の区別は存在しないことに気づいた。イェンセンは M.D.L.カデナが提唱する「顧みられなかった人々」（*anthropo-not-seen*）という概念を取り上げる（同書：53）。この概念は人間と非人間の区分がない世界で生きている人間は、このような区分で物事を考えないことを示している。彼らはこの区分に強制的に進入させられ、またこの区分を超えている（Cadena 2015）。カデナによると、ペル

ー北部のアマゾンの先住民族アワフン・ワンピス族（Awajun-Wampis）は自然を兄弟として扱い、自然を傷つけようとしない。水俣病事件で注目される村人たちも、そのような集団のひとつである。従って、斎藤の思考はそのような集団の存在を考慮していない。

しかし、ハイブリッドの世界観は亀裂を生じさせないと斎藤は考えているが、ムーアも斎藤も資本主義的な生産様式に反対する積極的な発言をしている。斎藤は視点をグローバル・サウス[58]に向けた。斎藤は、多くの国や企業が経済発展を模索する中で、環境に深刻なダメージを与えていると指摘する。斎藤に言わせれば、これらの被害は「人災」であって「不運な出来事」ではない。というのは、「国や企業はコストカットを優先して、有効な対策を取らず放置してきた」（斎藤 2020：27）からである。「グローバル・サウスからの労働力の搾取と自然資源の収奪」（同）によって、先進国の人々は豊かな生活を享受できるようになった。このような生活様式、つまり「帝国的生活様式」[59]には、他の地域や人々の利益を犠牲にすることが必須である。そのため、略奪は先進国の豊かさを実現する手段である。大量の生産と消費は、収奪の進行をより速く、より広範囲にした。グローバル・サウスは被害を受けているにもかかわらず、このような生産モデルに依存せざるをえない。いわば、「帝国的生活様式による生産と消費に依存しているグローバル・サウスも、グローバル資本主義の構造的理由から、この平常運転に依存せざるを得ない」（同書：29）。先進国の資本主義では、労働者や自然環境が搾取の対象となり、不平等な交換が莫大な利潤を生む。ムーアと同様に、斎藤も「安価な労働力」と「安価な自然」に基づく「採取主義」（extractivism）を厳しく批判している。斎藤の所見では、資本主義は非常に狡猾で、自分の略奪と侵略行為をすべて外部の不可視地域に移して、周辺の利益を犠牲にして自分の繁栄を獲得する。一部の人間や自然は高い利潤にかられて資本主義の搾取の対象となっている。従って、人新世は、周辺に転嫁された危機が顕在化する時代だと斎藤は考える。この時代は資本主義の終焉を告げているのかもしれない。斎藤が述べた通り、「資本の力では克服できない限界が存在する。資本は無限の価値増殖を目指すが、地球は有限である。外部を使いつくすと、今までのやり方はうまくいかなくなる。危機が始まるのだ。これが『人新世』の危機の本質である」（同書：37）。ムーアも同じ発想を表した。彼は「今日の問題は、人新世の行進ではなく、資本新世の終わりである」（Moore 2016：113）と主張している。つまり、安価な自然の終焉は、もはや資本主義の発展を維持しない。そこでムーアは新しい存在論の誕生に期待を寄せている。それは「単に富を再分配する方法ではなく、すべての生命の解放を約束する方法で、自然の中での私たちの居場所をどのように作り変えるかを問うもの」（ibid.：114）である。こ

---

[58] 斎藤はグローバル・サウスの意味を解釈した。「グローバル・サウスとは、グローバル化によって被害を受ける領域ならびにその住民を指す。グローバル・サウスの抱える問題は、以前なら『南北問題』と呼ばれていた事態だ。ただ、新興国の台頭や、先進国への移民増大によって、『南北』格差は地理的位置との関係が必然ではなくなりつつある」（斎藤 2020：24-26）。

[59] 斎藤は帝国的生活様式の意味を説明した。斎藤によると、「ドイツの社会学者ウルリッヒ・ブラントとマルクス・ヴィッセンは、グローバル・サウスからの資源やエネルギーの収奪に基づいた先進国のライフスタイルを『帝国的生活様式』（imperiale Lebensweise）と呼んでいる」（斎藤 2020：27-28）。

こで注目に値するのは、ムーアの考えが楽観的だと斎藤が指摘していることである。安価な自然の終焉が資本主義の終焉をもたらすとは限らず、気候工学や新しい科学技術への新たな資本の投資を呼び起こすからだ。「つまり、環境破壊は、廉価な自然の終焉によって時代的転換をもたらすどころか、一部の資本家にとってのさらなるビジネスチャンスを生み出すかもしれないのである」（斎藤 2017：139）。

モートンもこの問題に対する自分の主張を提起した。人新世という言葉に代わる言葉は数多く存在することをモートンは認めている（Morton 2016：23）。特に、人新世という用語の代わりに資本新世を使うことを提案する人は多い。だが、資本新世に含まれる範囲はあまり狭すぎるとモートンは考える。というのは、「資本と資本主義は問題の徴候を表しているが、直接の原因ではない」（ibid.）からである。例えば、モートンが指摘したように、中国やソ連の炭素排出も地球温暖化に影響を与えた。また、生物学者の中には、コロンブス交換以降の時代を「均質新世」（Homogenocene）と呼ぶ人もいる。現代を生きる私たちが、世界各地で驚くほど同じものを食べ、同じ病気に苦しむようになったことに見られるように（マン 2016）、人間の生活が均質化した時代であるからである。しかし、モートンによれば、「均質新世」について論じる人々の前提にある立場が人間中心主義的である点には問題がある。彼らは、人間の歴史過程における均質化プロセスだけを強調し、人間の生活の変化の状態を強調するが、非人間的な存在も危機に直面していることを十分考慮してないからである。

もう一度、第二章におけるモートンが人新世を支持する理由についての議論に戻る。モートンにとっての肝要な問題は、誰かに責任を押し付けることではなく、六度目の大絶滅への懸念を考慮し、人類が全能の存在でないことを自覚することである。モートンは人新世が単に人間の強すぎる力に注目するものではないと考えている。人新世において、モートンは人間と非人間とが絡み合って切り離せない関係にあることを意識すべきだと提唱している。イェンセンが解説したように、「人新世が元々は人間に起因していたとしても、人新世において人間は他の生物種の上に置かれるというより、現在は他の生物種と同じように脆弱なものとして立ち現れている」（イェンセン 2017：52）。つまり、「この概念において人間の持つ力の大きさではなく、その根本的な脆弱性が強調されている点をきちんと踏まえれば、人新世は傲慢な考え方ではない」（同）。少し極端な言い方をすれば、モートンは人間よりも、汚く、醜く、受け入れられない非人間的な存在に目を向けたがる。

ここでは主に二つの点を明確にしておきたい。まずモートンは、人新世は突然の地質時代ではなく、連続的な出来事の蓄積の結果であると考えている。人新世の始まりを検討したときにも述べたように、すでに新石器時代から人間活動の影響は始まっており、歴史は連続しており、イベントは原因なしに突然発生するわけではない。プロセスの絶え間ない蓄積が最終的に歴史の激変を推し進めた。したがって、モートンは人間活動の積み重ねが現在の深刻な環境危機をもたらしていると認識している。しかし、資本新世に対するモートンの理解は表面的であったといえる。モートンは西洋の経済モデルはほとんどの天然資源を消費しているが、残りの国には完全に責任がないとは言えないと考えている。なぜなら、モートンの

見解では、人新世の原因は植民地主義にさかのぼることができるが、今は誰もがエアコンを使いたがるので、人新世の問題は単に植民地主義の責任だけではない（Morton 2014）。資本主義富裕国に限定されるのではなく、いかなる経済システムにある国家にも責任があるはずである。しかし、資本新世は単にグローバリゼーションの発展不均衡としての資本主義を批判するものではなく、一八世紀の蒸気機関を閉鎖しようとするものでもない。資本新世は、長い一六世紀から形成されてきた人間と自然を含む世界＝生態の話を語っている。その問いかけは、「資本主義がどのように惑星の自然を介して働き、積極的に創造しているのか」（Altvater 2016 : 138）に関するものである。資本新世が扱う問題の範囲は狭いものではなく、むしろ巨大なものであり、一四五〇年から始まった長い歴史の変遷である。モートンは、資本主義国だけでなく、社会主義国も環境破壊に責任を負うべきだと主張した。しかし、真実はそんな単純なものではないのかもしれない。

ムーアは人新世が示唆する環境危機の責任を負うのは「人類（Anthropos）、つまり差異化されていない全体としての人間」（ムーア 2021 : 317）であるということに反対している。実際には、人間の集団行動だけでなく、資本、技術、資源などの共同作用が今日の状況をもたらしている。すなわち、人新世において「欠落しているのは、近代世界史の中で権力、資本、自然が絡み合った実際の全体である」（Moore 2016 : 88）。そしてムーアは、人新世の致命的な問題点を発見した。人新世は結果志向で考えている。「経験的考察の焦点は人間の活動の結果に絞るということである。この点で、人新世論は環境思想の結果主義的バイアスを体現している」（ムーア 2021 : 320）。人新世はその復雑な歴史の変遷を人類が地球にもたらした悪い影響に単純化していた。これは疑いなく生命の網の人と自然の相互製造の関係を無視する。結果に注目しすぎると、直近の二〇〇年に目を奪われてしまうだけである。人間が自然を過度に消費することは、長い一六世紀からの計画である。自然を極めて安価な資源と見なすことは、資本主義が自然を組織する方式である。そして、そのために人間と自然は切り離されず、お互いに浸透し、作りあっている。ムーアは、今日の環境問題を、人間と他の自然との弁証法的な関係から捉えるべきだと訴えている。「人間は、生命の網のなかで、特定の（しかし特別ではない）力を与えられて環境－制作を行う一つの種としてそこに生きているのだ」（同書：329）。

第三節　小括

現在の段階で人新世という用語を公式に認めることはそれほど重要ではなく、それぞれの提案者が議論する視座が意義深いものだと思える。人間の力の大きさは否定できない。しかし、人類全体に責任を負わせるのは明らかに不合理である。

まずハラウェイは、クトゥルー新世には中心となる人間は存在せず、万物は大地（Terra）に還る「腐植」（humus）であると主張した。彼女は、人間と非人間との連帯を促し、それが人類を絶滅の危機から救うと信じている。危機を避けて生き延びるにはどうすればいいか、

ハラウェイはその解決策を提案する。類縁関係を作る（make kin）ことが、ハラウェイの考える今最も緊急なことである。ハラウェイの考えでは、人新世と資本新世は境界期であり、「まごつき期」である。今の時代、さまざまな種と団結することは非常に困難である。そのため、ハラウェイは他の種との関係を築きたいと考えている。「類縁関係をつくることは、必ずしも個体たち（individuals）や人間たち（humans）ではないかたちで、個員たち（persons）という存在をこしらえるということだろう」（ハラウェイ 2017：103）。血縁という前提条件なしに、異化（defamiliarize）する馴染みのない存在と類縁関係を結ぶハラウェイの願望に、ムーアは柔軟な姿勢を示した。ムーアは「人間と人間以外の自然の関係の融合ないし結合を目指す概念を遠くまで求めることを禁ずる理由はない」（ムーア 2021：75）と考えている。というのは、ムーアは文化と自然の境界を打破するハラウェイのサイボーグ理論を画期的な成果と捉えているからである。ムーアによると、「ハラウェイの主張は個別的なものの尊重を強く押し出すものであるが、だからといってその議論がもつ世界＝生態学的含意から目をそらすべきではない」（同書　原註：17）。従って、ムーアは「種と自然のあいだの創造的かつ生産的な関係」（同書：75）を前提としてオイケイオスというアプローチをもって人間と自然との関係を分析している。つまり、人間と自然はオイケイオスの作用によって相互に浸透し、相互に製造している。

モートンのダークエコロジーから引き出される限界と参考になる意義は、ハラウェイとムーアの考察に関する議論を通して非常に明確になると考えられる。モートンは、人間中心主義というヘゲモニー的な言葉をくつがえすことを意図しているが、人新世における人間の絶対的な力を認めている。ハラウェイは人間の中心地位を決して認めず、人新世で強調される人間の力を否定した。ムーアは、環境を変えるという人間のユニークな能力を肯定しているが、生命の網における人間の力も特別なものではないと提示した。しかし、モートンが人新世を擁護する積極的な発言をしたからといって、人間中心主義の支持者というわけではないという点を強調しなければならない。逆にモートンは、人間の力の大きさを目の当たりにすると同時に、人間の尺度を超えた一連の環境危機が、人間の力が弱まっていることを示していることを認識している。また、モートンには他の人新世に代わる語彙についての思考が明らかに不足していた。モートンが人新世という地質時代を肯定した最大の理由は、人間の力が地質構造に影響を及ぼしているという事実に直面せざるを得なかったからである。人新世という言葉は、モートンの非人間的な概念の拡張に役立っている。モートンは、環境の回復不能を大量の汚染物質と結びつけ、脱け出せない破損の世界をつくろうとしている。彼の指す非人間はすでに動植物の範囲を突破して一連の人工的な汚染物質に広がっている。ハラウェイは、すべての種が関係していることを提唱しながらも、プレマリンのような人工的な薬品を自分の考察の範囲に入れていた。しかしハラウェイがモートンのように、核汚染のような人間にとって猛毒である非人間的存在を類縁関係の範疇に入れなかったことは明らかである。ハラウェイは心の底では、すべての非人間との共存に賛成していないのだろう。一方、モートンは、人新世の危機が植民地主義時代から始まったとしても、今日の環境

問題は誰もが責任を負うべきだと独断的に考えている。しかしモートンは、人間という大集団の間の差異を無視した。斎藤とムーアが語るように、資本主義の略奪的な生産様式のもとでは、多くの人が略奪された自然の一部になってしまっている。プランテーションで搾取された奴隷も、有機水銀に苦しめられた水俣市の住民も、富裕国の少数階層と同じように環境危機の責任を負うべきなのか。モートンは、そのような疑問について深く考えていなかったようである。

実際、ラトゥールは、人新世において人間の役割が強調されすぎているのではないかという独自の見解を示している。ラトゥールによると、人間は統一的な能動者ではなく、仮想的な政治的実体でも、普遍的な概念でもない。人新世における人間はすでに分解されており、統合されることはない。人新世は人間中心主義の拡張ではない（Latour 2017：122）。

人新世という言葉はまだ確定的ではないが、それは人々に人の力を見直させる。人新世はもはや環境と非人類を辺縁化しない、自然科学と人文科学の境界を超える思春期にある語彙であると言える。エリスは人新世を「反省的な時間帯」（reflexive time period）と表現するのがふさわしいと考えている。「このような反省は、人新世の最初の提案者の想像をはるかに超える、広範な思想と芸術表現の発酵を刺激している。ワークショップ、会議、その他の会合が学会の内外に突然現れ、人間と自然の再想像に参加する学者、思想家、創造者のコミュニティを拡大している」（Ellis 2018：141）。篠原は、人新世の到来は世界の終わりが始まっていることを意味するという。彼は「世界の終わりは、近代的な世界像の終わりを意味している。人間が世界の中心にいて、自分たちの生活条件を完全にコントロールできている、という考えを支える世界像の終焉である。人間を中心とする世界が終わるということは、人間を中心としない世界、人間的尺度を外れた世界が始まることだと考えられるのではないか」（篠原 2020：39-40）と考えている。人新世において、世界についての創造的なアイデアがますます刺激され、人間が何を意味するのかを考える時間が増えていく。環境人文学の参加と探求は、地質学と自然科学に加えて、人新世という衝撃的な概念に、一風変わった思考の扉を開いた。つまり、環境人文学は人新世によって見過ごされていたかもしれない漏れを反省している。

第三部　人間は何をしていたのか？

第四章　石牟礼道子と水俣病事件

第一章の議論から明らかなように、モートンは著書の中で、人間が目に見えない汚れたものを受け入れ、鑑賞することを望んでいると繰り返し述べている。モートンによると、人間は未知に直面する時にはパニックになるが、未知がついに水面から露出すると人間は慌てて逃げていく。彼はこのような態度に反対し、エコロジー思想の課題は「根本的に奇妙で危険で、『悪』でさえあるもの」を「亜・美的レベル」（subaesthetic level）で愛することだと主張する（Morton 2010 : 91-92）。モートンの目には、純粋な自然は存在しなくなっている。世の中のすべてが、不浄な非人間的なものと絡み合い、共存しているように見える。しかし、筆者は非人間を区別しないこのようなアプローチは過激すぎるのではないかとも考えており、実際の事例を分析することで、その欠落を補っていきたい。

そのため、本章では、ダークエコロジーを現実の出来事――日本の歴史に刻まれた水俣病事件――の背景に置き、水俣病の悲劇を広く社会に訴えかけた詩人であり作家である石牟礼道子の作品と水俣病事件に関する彼女の議論を手がかりとして、モートンの主張の限界を補うことを試みる。

その前に、水俣病事件の経緯を知ることは欠かせない。水俣病事件は、熊本県水俣市で発生した重大な公害事件である。この事件の発端は、現地のチッソ水俣工場が有機水銀を大量に含む未処理の工業廃水を水俣湾に排出したことである。廃水の排出によって、海中の魚介類が汚染された。周辺住民は汚染された魚を食べた後、食物連鎖反応により有機水銀を吸収して病気になった。神経系などを侵食された患者は、歩行がおぼつかなくなり、痙攣や麻痺、五感を喪失し、苦痛を極めた。さらに、有機水銀は母体から胎児に伝播し、胎児性水俣病患者として生まれた乳児も多かった。さて、ここで取り上げなければならないことは、水俣病患者と、この悲劇を引き起こしたチッソ株式会社（以下「チッソ」という）との、半世紀近くに及ぶ闘争である。水俣病が発見された一九五六年から、水俣病の原因がチッソの廃水であることが判明する一九六八年まで、一二年の歳月が流れた。そして、責任主体をチッソと認め、被害者に金銭的な補償をすることになったのは一九七三年のことである。しかし、認定制度の厳しさから適切な補償を受けられない被害者は多く、未認定患者とチッソとの間で訴訟が続いていた。一九九五年に二度目の和解が成立するまで、多くの原告は訴訟を取り下げることを決めなかった。その間にも、政府や国の責任を求める声は止まなかった。二〇〇四年の国・熊本県の責任認定、二〇〇九年の水俣病特措法の制定によって、多くの水俣病患者が救済された。しかし、そうは言っても、水俣病の問題はまだ終わらなかった。胎児性水俣病による世代間の苦悩、厳格な認定基準による多くの死者への補償の欠如、差別された

水俣病被害者の精神的ダメージなどの問題が残っている[60]。そのため、水俣病事件がもたらした代償の重さは、非常に貴重な参考になる。

そこで、水俣病事件の経緯を理解してから、本章では、石牟礼の作品の特徴を基点にして水俣病事件の影響と教訓を検討していきたい。具体的には、本章では、水俣病事件を石牟礼の作品の文学的価値および社会的影響という二つの側面から分析する。石牟礼の作品は、文学的価値が高いだけでなく、近代日本の歴史の模索の中で戦後日本の工業化発展への抗争および未来の工業化発展のあり方に対する石牟礼の思考が凝縮されている。したがって、本章は次のように展開していく。

第一節では、石牟礼の執筆の出発点と彼女の作品の言語的特徴に焦点を当てる。具体的には、石牟礼の著作に対する多くの学者の議論を参照しながら、石牟礼の著書における生き生きとした描写、巫女のように人の心を読める言葉を分析し、『苦海浄土　わが水俣病』という作品を多次元的に理解していく。

第二節では、『苦海浄土』に登場する幽霊のような有機水銀を切り口に、人間と非人間との共存という複雑なテーマを取り上げる。石牟礼は『苦海浄土』において、有機水銀の毒害で激痛に苦しむ被害者の姿を描いている。有機水銀のように目に見えないものは、非人間との共存という抽象的な表現に、より具体的な事実の根拠を与えることができると思われる。そこで筆者は、石牟礼による毒の描写と社会学者の U.ベックのリスク社会論を照らし合わせながら、「心地よいとはいえない」[61]共存を考察する。

第三節では、死者との共同闘争の中で死者の利益を追求し、被害者の生を肯定する中で希望を求めるという石牟礼の論考を通して、絶滅の恐怖の中にあっても人間は善の希望を持つべきことを示したい。モートンと石牟礼は異なる時間と空間にいるが、「終末」や「絶滅」に何度も言及している。モートンにとって、人間と汚物が切り離せない混成状態は、世界の終末の最も顕著な具現であり、石牟礼の描いた神様のような海も猛毒に汚染され、帰れない故郷となってしまった。しかし、このような状況に直面するとき、二人の態度は全く異なるものになると言える。モートンは、この終末論的な世界をどうやって平和に乗り切るかという問いに答えを出すことはない。しかし、石牟礼の作品は行間に美しさへの渇望と生の追求を諦めていないことを匂わせている。石牟礼は、人間を含む自然万物の魂を愛した。工業化の汚染に抵抗する過程において、生霊と死霊の正当な権益を回復させることが不可欠である。そして生の願いは必ず私たちに希望を持ってこの世を救済することを要求する。悲観して闇に堕落するよりも、希望を持ち続けることが絶体絶命の際に助けられる生き方なのかもしれない。

---

[60] 水俣病事件の経緯については、『水俣病：その歴史と教訓 2015』（水俣市立水俣病資料館、二〇一六年）を参考にした。

[61] 山本太郎は、共存の道を探る中で、文明の流れの中での人と感染症の関係や、社会で起こる伝染病について、さまざまな角度から考察している。彼は、共存とは理想的な均衡ではなく、あまり快適ではない、どうしようもない妥協であることと考えている（山本 2011：195）。

第四節では、水俣病事件に関する文献に記載された水俣病事件の被害者の所感を紹介する。これらの文献において、被害者たちは半世紀近くの闘争を経て、加害会社や工業化の生産様式、自然との関係について回顧した。彼らは、解脱を求める苦難の道のりの中で、自分の居場所を見つけた。対立的な闘いもすべてを許した和解も、被害者たちに求められていた答えである。

第五節では、以上の議論に基づいて、石牟礼の作品の特色をまとめる。第一章においてモートンがロマン主義文学を厳しく批判していたことがわかった。ロマン主義文学として石牟礼の作品を挙げる読者や学者が見られる。読者の中には、モートンの主張を検討するために石牟礼の作品を用いることに、いささか違和感を抱く方もいるかもしれない。この疑念を解消するために、石牟礼の作品がロマン主義文学なのかどうかをめぐる検討を行う。この分析の過程において、石牟礼が見ている人間と非人間との共存は、人間とあらゆる自然との相互関連だけでなく、人間と汚染物質との共存が示唆する産業文明の弊害でもあることが明らかになる。つまり、人間と非人間との関係は複雑で多様なのである。

最後に、これまでの議論を踏まえて、モートンと石牟礼のエコロジー思想を対比させることで、ダークエコロジーの限界を明らかにする。

第一節　対等の目線と本心からの詩的な言葉

アメリカの作家 R. カーソンは『沈黙の春』（*Silent Spring* 1962）で化学農薬製品の広範な使用を批判し、特に殺虫剤が害虫を殺すと同時に他の生物や周囲の環境、さらには人間の健康を脅かすと指摘した。カーソンは、人間が介入して自然のコントロールを破壊したために、DDT[62]の使用によって害虫は死なず、むしろ多くの害虫を生み出したと述べている。耐性を持った害虫は、問題解決のためにもっと進んだ化学試薬を作らなければならないと人間に迫る。人間がこうして破壊と修復を延々と繰り返すというのが、モートンの言う奇妙な円環である。しかし、カーソンが『沈黙の春』を書いた目的は、モートンが言ったように有毒な化学試薬とともに終わりのない暗闇に沈むことを読者に提示するのではなく、人間と環境に対する有毒物質の害からできるだけ脱する方法を示すことである。

暗さから脱出することは、石牟礼が模索したポイントでもある。作家の高田宏が語るように、彼は『苦海浄土』を読むとどうしてもカーソンの『沈黙の春』を思い浮かべてしまう。高田は『沈黙の春』も『苦海浄土』も「人間と自然について真正面からの問いかけと警告を発している作品だ」（高田 2004：212）と考えている。石牟礼は熊本県天草市で生まれ、三ヶ月後に水俣市に移った。海とともに生きてきた石牟礼は、小学校では小説や詩を好んで読んでいて、不知火海への愛と短歌への情熱を持って水俣で幼年期を過ごした。小説家の佐多

[62] DDT（Dichloro Diphenyl Trichloro ethane）はかつて害虫を駆除するために使われていた殺虫剤、農薬である。（大阪健康安全基盤研究所「有機塩素系殺虫剤 DDT の歴史と未来」、二〇一七年三月三一日、http://www.iph.osaka.jp/s010/030/020/040/010/20180107112000.html において 2022.5.17 閲覧）

稲子は、石牟礼が『苦海浄土』を書いた動機を運命と定義したくないが、石牟礼と水俣の土地とのつながりを運命としか表現できないと語っている。石牟礼との対談で佐多は「石牟礼さんはご自分とその現実との運命的な結びつき、できるならそういうことに結びつけられたくなかった現実を、それをちゃんとご自分の生きていく道で、ほんとうに正しくあるような関係で表現をなさったということを感じます」（石牟礼、佐多、土本 2013：66）と述べた。そんな縁が石牟礼に、幼い頃から水俣の自然に対して、人並外れた奥深い考えを持たせたのかもしれない。

佐多が語った運命に加え、石牟礼も『苦海浄土』で、なぜ水俣について書いたのかを明らかにしている。

> 水俣病の死者たちの大部分が、紀元前三世紀末の漢の、まるで戚夫人が受けたと同じ経緯をたどって、いわれなき非業（ひごう）の死を遂げ、生きのこっているではないか。呂太后をもひとつの人格として人間の歴史が記録しているならば、僻村といえども、われわれの風土や、そこに生きる生命の根源に対して加えられた、そしてなお加えられつつある近代産業の所業はどのような人格としてとらえられねばならないか。独占資本のあくなき搾取のひとつの形態といえば、こと足りてしまうか知れぬが、私の故郷にいまだに立ち迷っている死霊や生霊の言葉を階級の原語と心得ている私は、私のアニミズムとプレアニミズムを調合して、近代への呪術師とならねばならぬ。（石牟礼 1972：65）

近代産業の侵略によって、水俣病の被害者は言葉を失い、生ける屍と化してしまったのである。被害者の悲惨な姿を見て、石牟礼は被害者の心の叫びを世に伝える呪術師としての役割を担うようになった。石牟礼の呪文は、善意であれ悪意であれ、誰かを祝福したり災いをもたらしたりするものではない。彼女はただ、隠してはならない真実を語っている。

Ⅰ　境界線のない世界へ

アメリカの環境文学研究者 B.アレンは「彼女〔引用者注：石牟礼氏〕の子供時代は、彼女に自然文化の世界に対する極度の敏感さと認識を与えた。石牟礼氏にとって、この自然と文化の世界には二元論はない」（Allen 2016：4）と述べている。石牟礼は主客二元論を超えて、自分を含む森羅万象を網羅している視点で広大な世界を描いている。つまり、石牟礼が描く詩的な世界には、流れるような境界線のない絵巻物が見られるのである。

文芸評論家の伊藤典洋が石牟礼と語り合った際、伊藤は幼い頃から肉体が邪魔だと感じることがあったと吐露した。というのも、伊藤は自然の生命とのつながりを感情的に切望しているにもかかわらず、肉体がそのつながりを遮断するからである（石牟礼、伊藤、岩岡、宮本 2013：126）。そのため、伊藤は石牟礼の文章を読むと、そこに描かれている自然界とつながりたいという気持ちがより強くなる。もしかしたら、人間は何かの経験をしている

と、身のまわりのものとのつながりを普段は触れないところに埋めてしまうため、積極的に自然界とつながりたいとは思わないのかもしれない。しかし石牟礼は依然として非常に敏感な感性を持っていて、彼女が描写した一草一木、花鳥魚虫は彼女と密接に結びついており、しかも一度も肉体という物理的な障壁によって切断されることはない。石牟礼は外界の人や物を自然に自分の内面に取り込んでいて、そしてこの天然の悟りは石牟礼の内面から自然に流れてくる。

『椿の海の記』という作品は石牟礼の幼少期の思い出であり、水俣病事件のない時代を描写する。石牟礼も「心優しかった時代の山川や海、いわば精神性を保っていたふるさとを描いてみたかったのだとおもう」（石牟礼全集第八巻：388）と述べていた。石牟礼は自分の家族群像とそこに織り込まれる無垢な神話のような自然を、幼女の心という視点で描く。商売に失敗した祖父の松太郎、財産を使い果たした父の亀太郎、狂女の姿で登場し「神経殿」と呼ばれる祖母、家の近くで売買されている天草の少女たち。それぞれの姿が生き生きとしていて、一人一人の骨、肉、血、筋が肉体の束縛から解き放たれて、読者の前に現れる。そのため、読者は、石牟礼が幼い頃に世の中の不幸や悲惨さを目の当たりにし、人生の暗い淵に触れたことを知ることになる。無意識の日常の中で、石牟礼は魅力的な文章力を身につけた。すなわち、石牟礼が描く風景も、人間と一定の距離を置いた絶対的他者ではなく、自分の運命に関わる無視できない存在である。自然万物には魂があって、悲しみと歓びがある。それらは絢爛でまた無常で、同じく漂っている運命のため塵に戻り、生まれ変わりの輪廻を求めることになる。これらの自然風景はまるで西洋鏡のように、道は異なるが行き着くところは同じであるという人々の運命を映し出している。詩人の大岡信によると、石牟礼は「人間だけではない。物もまた、それぞれの存在の仕方において、ある奥深い世界を語る」（大岡 2004：170）と考えている。

石牟礼の作品は「写実性と抒情性」を兼ね備えている。たとえば、『椿の海の記』の第四章では、石牟礼は幼女である自分と狂女の祖母であるおもかさまとのやりとりを絶妙に表現した。二人の会話に混じった切ない優しさと温かさ、そして周辺自然の美しさが躍動する文字でページから飛び出してくる。

> 水のほとりを求めて住みついた村々の形が、まだその頃の水俣の、ゆく先々の陽光の中に営まれていた。洗濯川にあそぶあひるのうしろから坂橋を渡れば、蓮根畑である。畑と云っても、蓮根を育てているからには、川から水をひき入れた沼田で、七夕の頃になると、水の面にゆらゆらと重なっている広い丸い葉の間から、あの、睡って合掌しているような蓮の蕾が、夢のように風の根元に立っているのを見ることがあった。
>
> 「仏さまのお花の咲いとったばい」
>
> わたしは、納戸や縁のすみに坐ってときどきしゃがれた声でしわぶくばかりの、気違いのおもかさまの背中にあまえていう。
>
> 「みっちんかい」

……中略……

わたしは彼女の背中にもたれて頬をつけ、

「おもかさま」

と小母さんたちが称ぶようにいう。するとこのおもかさまは、白い蓬髪をかしげ、

「あい。なんかにゃあ？」

というのだった。

おもかさまの声は、ときどき心の中が激していて、声が内側にひき割れてしまうため、ひびのはいった笛のようなあんばいだった。ただこの祖母の、「あい」という返事は一種独特のもので、狂女であればなおさらとくべつ、しおらしい可憐な返事に聞えていた。

「仏さまのお花の蕾ば見つけて来た」

「どこにかえ」

「川のはたに」

「蓮の蕾かえ」

「まだ、こぎゃんしとった」

「どのよに、どら？」

わたしは蓮の蕾の合掌しているさまを両掌でしてみせて、おもかさまにひと膝ずついざり寄る。

「ほら、このよに、ほら」

……中略……

おもかさまはぺんぺん草の鈴のような声になって、わたしの耳に言う。

「あしたの朝ひらくばえ」（石牟礼全集第四巻：74-76）

差別され、異常な人と見なされていた祖母は、幼女の純粋な目には異様な存在ではなく、影のように寄り添う家族だった。つまり、石牟礼は社会の世俗規定の正常と異常の定義を気にしない。しかし、石牟礼も祖母との出会いを通じて人間の冷たさを知り、人間の現実の厳しさや残酷さを目の当たりにした。この経験が石牟礼に壮大で独特な世界観を与え、のちに生涯水俣病患者に寄り添って、水俣病に関する作品を書くことになる伏線となったのである。石牟礼の描く自然風景は、常に登場人物の日常生活の中で極めて自然な形で現れている。俊逸な詩的な文章の中で、波打つ水の波、人を酔わせる清風、嬌羞の睡蓮、一コマ一コマの画面が祖孫の二人の言葉で完璧に埋め込まれる。これらの自然風景は後天的に形成されたものではなく、先天的に石牟礼の骨に刻み込まれたものである。石牟礼は、人間よりも自然との付き合いを楽しんでいるのかもしれない。そのため、石牟礼は人間と自然の二分法を超えて万物を扱うことができる。

政治学者の岩岡中正は石牟礼の知は「全体の知、存在の知、共同の知、根源の知、再生と循環の知、感性の知」（岩岡、渡辺 2004：216）であると考えている。『苦海浄土』の編集者の渡辺京二は石牟礼の存在全体の捉え方について独自の見解を示した。彼は石牟礼が世

界を感じる媒介を「アンテナ」あるいは「触手」と定義する。石牟礼の世界認識の仕方は、無数の「触手」が小刻みに震えながら周辺の存在に触れるようなものである（同書 : 217）。これは、ハラウェイが示唆した無数の触手をもつクトゥルーの世界の感じ方とおおいに似ている。ハラウェイが提唱した万物のつながりを実現することは難しいが、ありがたいことに、物質主義の時代にそれを実現した人がいた。石牟礼道子である。

それだけでなく、石牟礼と周囲の存在との間には見えない「強固な膜」があり、石牟礼は「感覚的触手」を通して周囲の存在の中に潜り込んでいると渡辺は主張する（同書 : 217-218）。ここで注目すべきは、「強固な膜」が完全に閉じていないことである。この強固な膜を通して、石牟礼は他の存在と「相互浸透」している（同書 : 218）。つまり、「石牟礼さんの感覚的触手はそよいでいて、この世に存在するあらゆるものが送ってくるサインや兆候を全部取り込んでしまう」（同）。この相互浸透的な共存のあり方は、モートンがダークエコロジー思想の中で何度も言及していることでもある。モートンは「強固な膜」をフィルター（Morton 2010 : 36）と表現しているが、石牟礼と同じように、二人とも知覚のレベルで周囲の存在を考えている。さらにいえば、石牟礼は「視覚だけではなく五感のすべてを動員して」（岩岡、渡辺 2004 : 218）ものを認識している。明らかに、石牟礼は自分の時代を超えた世界の多様性を捉える方法を持っていた。

石牟礼の世界では、人間は他の自然界の生き物と変わらない。一九七二年の『苦海浄土 わが水俣病』の文庫版巻末に付された渡辺の解読にもあるように、「その世界は生きとし生けるものが照応し交感していた世界であって、そこでは人間は他の生命といりまじったひとつの存在にすぎなかった」（渡辺「石牟礼道子の世界」 1972 : 314）。石牟礼の言葉から、自然は人間と完全に切り離されて対立するものでも、登場人物を箔付けするための背景板でもなく、水俣の住民たちと織り成すものであり、お互いの存在を感じられるものであることが十分に理解できる。また、石牟礼は日本人が、自分の周りの人たちも含めて、万物には魂があると信じていることに言及した（石牟礼「今際の眼」 2004 : 34）。つまり、「人間だけが特別ではない」（同）ということである。石牟礼は『苦海浄土』の第三章「ゆき女きき書」で以下のシーンを語っている。

> 茂平やんの新しい舟はまたとない乗り手をえて軽かった。彼女は海に対する自在な本能のように、魚の寄る瀬をよくこころえていた。そこに茂平を導くと櫓をおさめ、深い藻のしげみをのぞき入って、
>
> 「ほーい、ほい、きょうもまた来たぞい」
>
> と魚を呼ぶのである。しんからの魚師というものはよくそんなふうにいうものであったが、天草女の彼女のいいぶりにはひとしお、ほがらかな情がこもっていた。（石牟礼 1972 : 130）

水俣に住む茂平と妻のゆきは、釣りで生計を立てているごく普通の夫婦である。彼らの生き様は、ほとんどの水俣住民の実像である。海は彼らの家であり、舟や魚は彼らの大切な家

族や友人である。魚がどれほどゆきにとって親切で愛おしいものかは、彼女の魚への挨拶の仕方からも明らかだ。自分が人間だからといって他の生き物を見下ろしたり、自然の広大さから他の生き物を見上げたりすることはなかった。ゆきは海と魚を水平な視点で見ており、彼らの相互作用は、まるで彼らが溶け合うために生まれてきたかのような、極めて平等で調和のとれた絵なのである。これも水俣病事件以前の美しい社会に対する石牟礼の深い愛と郷愁を表している。

Ⅱ 心を読める巫女

石牟礼の叙述には、特定の主人公や激しい非難はなく、むしろ海、魚、メチル水銀、加害者、被害者の物語を含んだ集合体の物語が描かれている。読者の共感を得るためにわざと被害者の苦しみを描いているのではなく、すべては石牟礼の本心から出たものだった。小説家の池澤夏樹は、石牟礼は患者ではないが、患者のことをよく知っていると述べた（池澤 2013：23）。それは、石牟礼は患者に非常に近く、患者に寄り添うことで「患者さんたちと接する行政の人たち、あるいはお医者さん」、「それから始まって研究者、官僚たち、国家」にも寄り添うことができるからである（同）。小説家の石井光太も「石牟礼という文学者がかならず描く対象の一番近いところに立って、まったく対等な視線で一緒に嘆いたり、苦しんだり、笑ったりする点」（石井 2013：110）は彼にとって魅力的なところであると考えている。石牟礼が描くのは「作家として外からのぞきこんだ世界ではなく、彼女自身生まれた時から属している世界、いいかえれば彼女の存在そのものであった」（渡辺 1972：315）。石牟礼は人道主義の旗を掲げたり、自然回帰の掛け声を叫んだりはしなかったが、ただ水俣の素朴な生活を描いている。

石牟礼は哲学者の宮本久雄との討議で、宮本が「水俣的乱」という言葉を使ったことに感謝し、水俣病事件よりも「水俣的乱」という表現を好んだという。というのは、「事件史なんて言い方がよくありますが、それでは内容はコチコチになってしまって個人のことはないがしろにされて、本来あるべき魂が意思あるものとして出てこられないよう」（石牟礼、伊藤、岩岡、宮本 2013：125）だからである。石牟礼は、大きな事件は個人の気持ちを無視するものだと考えており、絶対的な高みに立って吟味したり評価したり、一定の距離を置いて遠くに立って波瀾万丈な物語を描いたりすることを好まないのである。彼女は小さな平凡な命を書きたいと考えていた。より正確に言えば、石牟礼はあらゆる生命の魂を愛している。人間であろうと、動植物であろうと、自由な魂は浮世の桎梏を乗り越え、風の中で踊り、歌う。

石牟礼は水俣の生活を大げさに誇張せず、ありのままに表現している。しかし、このような文字が読者の心の琴線に触れ、まるで自分が石牟礼の描く瞬間にいるかのように、また、本の中に入り込んで、村人たちと一緒に笑い、一緒に泣き、不知火海の空気を吸い、村人たちと一緒に普通の一日を過ごす力を持っているかのように感じさせる。これは石牟礼文学

の一種の魔法ともいえるが、決して意図的なレトリックで狙ったものではない。石牟礼の描く水俣は確かに実在し、光と音楽が絶妙に調和する 4D 映画ではなく、日本史に刻まれた消すことのできないページであることは間違いない。

石牟礼はいつも水俣病患者と一緒にいたわけではないが、世間の苦しみを読み取ることができ、読心術を持っている巫女として生まれてきたとしか言いようがない。石牟礼の幼少期から、人情の冷たさ、世間の冷ややかな視線は彼女の幼い心に根付いていたのである。それが石牟礼の優れた観察力と浮世離れした関係をつくり、幼いころからの孤独感が水俣病患者の声を読む能力を生み出した。つまり、石牟礼は他人の物語を書いているが、同時にその物語は彼女自身のものでもある。石牟礼自身も文章を書くことはとても孤独だと言っている。そのため、「世間一切から訣別するという気持ち」を持っている石牟礼は「何か勘違いされて、水俣病闘争を促すために書いたように思われて、少しぐらいはなきにしもあらずですが、自分の孤独を書いているに過ぎません」（石牟礼「今際の眼」 2004：33）と述べていた。

石牟礼は、天地の精華を吸い取った精霊のように、人々の心の中で歌われる悲歌、自然の霊性と優しさを読み取った。想像に満ちた文章であっても、『苦海浄土』は膨大な事実に基づいたいのちについての作品である。本の中では、虚像と真実がしっかりと絡み合っており、おどろおどろしい地獄の光景と文字が描く詩的な浄土は強烈な対照をなしている。災害に直面した人間の強い生命力を肯定することが石牟礼の表現したいことである。したがって、石牟礼が水俣病患者の描写に架空の想像を織り交ぜたとしても、それは決して無病呻吟ではない。自然風景を擬人化して描いているが、それは決して誇張ではない。それは心から発する真摯な表現である。

第二節　非人間との共存は簡単なことであるのか？

Ⅰ 有毒物質を愛することは可能だろうか？

チッソ水俣工場が不知火海に大量のメチル水銀を排出したことで悲劇が起こった。海中で大量の生物が中毒死し、周囲の住民も汚染された魚を食べ、それが原因の病気で苦しんだ。『苦海浄土』では、病気になって痛みに苦しむ人々の姿が描かれている。患者自身の生への渇望や、亡くなった人への家族の呼びかけは、私たちに解決策を求めることを迫る。有機水銀の侵入は、生命の調和と美しさを破壊し、モートンの言う汚物のように、患者の身体と精神の深部にまで及んでいた。この汚物は逃れられない網のようなもので、患者たちを死の恐怖で包んでいる。この網は、モートンが描く非人間と同様に、感じることはできても直面することはない。石牟礼は、モートンと同様に、詩的な筆致で、身体の奥深くに根付いた逃れられない非人間的な存在を描き出す。

この企業体のもっとも重層的なネガチーブな薄気味悪い部分は〝ある種の有機水銀〟という形となって、患者たちの〝小脳顆粒細胞〟や〝大脳皮質〟の中にはなれがたく密着し、これを〝脱落〟させたり〝消失〟させたりして、つまり人びとの死や生まれもつかぬ不具の媒体となっているにしても、それは決して人びとの正面からあらわれたのではなかった。それは人びとのもっとも心を許している日常的な日々の生活の中に、ボラ釣りや、晴れた海のタコ釣りや夜光虫のゆれる夜ぶりのあいまにびっしりと潜んでいて、人びとの食物、聖なる魚たちとともに人びとの体内深く潜り入ってしまったのだった。（石牟礼 1972：124-125）

石牟礼は美しい自然を描きながら、現実の残酷さにも配慮した。彼女は加害者とされたチッソを激しい言葉で批判するのではなく、先の引用のように有機水銀が患者の骨の髄までしみ込んでいる痛みから、水俣病事件の冷酷さと残忍さを繊細に表現した。石牟礼は有機水銀が患者と絡み合う状態を「密着」と表現し、患者の体内や周囲の生活の隅々にまで有機水銀が広がっていることを強調した。皮肉なことに、患者は自分を殺した水銀と実際に会ったことがない。これは加害企業と患者の関係の状態にも似ていた。歴史学者である友常勉が述べたように、「患者たちが、自分たちが闘っている相手の正体は何であり、それによって侵された自分たちが、いったい何に生成変化したのかを知ろうとする権利は、常に阻まれた」（友常 2013：159）。水俣病事件が発生した一九五三年末から六五年四月まで、加害会社は一度も病院の被害者たちを見舞っていなかった（石牟礼 1972：124）。患者たちはこの企業と会うことはなかったが、加害企業がもたらす無限の苦しみが、患者たちの周りを病気の形でぐるぐる回っていた。

第一章の「奇妙なよそ者」についての議論に戻ろう。見えなくても病人と親しくなる有機水銀は、モートンが提唱する奇妙なよそ者だと思われる。モートンの説明では、奇妙なよそ者との関係は親密であるから、人間は見たことがないからといって恐れるのではなく、逆に人間は奇妙なよそ者を愛し、親密に共存するべきだという。モートンの考えが芸術的アンビエンスの観点に立っていることは明らかである。しかし、モートンは、現実には、このような共存は、より強制的なものであるとは考えていなかった。石牟礼の描写から、この共存が被害者にもたらす苦痛は限りないということがよくわかる。経済、法律、医療技術などの制約がある現実的な状況から、被害者は有機水銀との共存を選択せざるを得なかった。さらに、有機水銀の毒害や核汚染などの環境危機を放置すれば、人類はいつ絶滅の危機に陥るかという恐怖を考えると、「非人間との共生」を提唱するのは安易ではないだろう。これがダークエコロジーの最も「暗い」現実である。

ドイツの社会学者である U.ベックは近代化リスクに関する議論をしている。ベックは工業化の過程で、技術と経済の進歩が新たなリスク社会を創り出したと考えた。生産力の発展を過度に追求することはきわめて有害な副作用――環境汚染――をもたらした。ベックは、近代化した文明社会がもたらすリスクは、ほとんどの場合、五感では捉えられないと強調している。逆に、「今日の文明生活の危険は、通常、知覚できるものでない。むしろ化学や物

理学の記号の形でしか認識されないのである（例えば、食品に含まれる有害物質、原子力による脅威）」（ベック 1998：27）。換言すれば、近代化の副産物として、健康被害や環境危機などのリスクは裸眼に見えにくい。つまり、「放射線や化学物質による汚染、食物汚染、文明病などといった新しいタイプの危険は多くの場合人間の知覚能力では直接には全く認識できない」（同書 : 35）。ベックに言わせれば、現代社会において見えないし、感じることもできないリスクを取り上げることが増えている。場合によっては、汚染物質による身体的被害は、被害者が生きている間に副作用を生まないこともある。しかし、さらに恐ろしいのは、そのようなリスクが被害者の子孫にも及ぶということである。たとえば胎児性水俣病はそのような性質をもっている。胎児は母体の水銀を吸収したため、母親は発病しなかったが、さらに悲惨なことに、胎児は生まれてから他の子供と同じように健康に生きることができない。

有毒物質に対する恐怖を減らし、工業化を円滑に進めるために、科学者は有毒物質の生産に関する許容値規定を設定したことをベックは指摘した。ベックは許容値が「いんちき」であると考えている。科学者たちは自分が理解していないリスクや確定していないリスクを許容値で説明している。つまり、許容値は「わからないということの別の表現である」（同書 : 101）。ベックによると、許容値とは「大気、水、食品の中にあることを『許容される』有害かつ有毒な残留物の値である」（同）。ベックの考えでは、許容値の存在は、毒の存在を許容することになる。言い換えれば、許容値は産業化の汚染を弁解する口実である。科学者たちは、ごく微量の有毒物質が人体に何の影響も与えないことを数字で説明してきた。しかし、ベックは少量の毒害を許容する許容量を、発達した産業文明の消積的特徴をもった生物学上の倫理として風刺した。そもそも人間は毒されるべきではないのだが、許容値の規定はこの原則に反している（同）。ベックは有毒物質の生産は許容値の制定によって合理的かつ合法的になると指摘した。許容値の範囲内で毒物を生産している限り、他人を毒にしたことにはならないし、他人の健康に責任を負うことにもならない。完全に毒のない世界、あるいは毒を除去してほしいという要請はユートピア的な幻想になってしまった。すなわち、「今や文明社会には有毒物質や有害物質があふれているが、その文明の退却路が許容値である」（同書 : 102）。モートンは、毒物との絡み合った共存を否定しているわけではない。彼は消費主義による環境破壊に反対すると言っているが、毒物を除去したいという欲求に反対する姿勢は、許容値の確立に加担するものではないだろうか。どんな状況であれ、非人間的なものと共存したいという独断的な発想は工業化された無秩序な生産を正当化する理由になりやすいといわねばならない。

Ⅱ 理想的な均衡ではない共生

許容値は毒物による健康被害を許容していることを示唆している。許容値の設定も、有毒物質を生産する企業の従業員や汚染地域に住む人々を檻のように縛り付けている。言い換

えれば、水俣病の患者のように、汚染地域に住む人々は、自分たちの健康が損なわれていることを知っていても、簡単に故郷を離れることができない。

第一節の記述から、水俣病事件以前の水俣は、あらゆる自然と共存した平和な光景であったことがわかる。しかしチッソの進出によって、水俣は経済向上を第一にめざす工業化の犠牲となった。批評家の若松英補が述べたように、水俣は「近代の価値観によって侵されたともいえる。さらにいえば、水俣病は、経済至上主義による民衆の生活の侵略だったのではないか」（若松 2016：19）。具体的には、水俣人の価値観は、金や利益を主とする近代化文明の価値観とは統一されていない（同書：20）。石牟礼によれば、水俣で暮らすのは漁業を営むごく普通の村人である。彼らは一般的に天の恵みに頼って生きており、多くの収入はない。魚を主な食べ物としていた水俣の人々は、それゆえに深刻な被害をこうむった。しかし残念なことに、村人は魚が病気の原因かもしれないと疑っても、生きていくために食べ続けなければならない。このような結果は、意図的な選択ではなく、やむを得なかったものである。『苦海浄土』には次のような描写があると若松も指摘している。「水俣病は、びんぼ漁師がなる。つまりはその日の米も食いきらん、栄養失調の者どもがなると、世間でいうて、わしゃほんに肩身の狭うござす」（同書：23）。罪のない村人たちは、このような残酷な現実を受け入れざるを得なかった。水俣病で差別されても、我慢しなければならなかった。経済的困窮もさることながら、水俣の村民が苦しみに甘んじて耐えてきたもう一つの理由は、故郷への愛である。水俣病で一家の働き手が亡くなるケースも少なくない。しかし、水俣病は国から公害病として認められていなかったため、水俣病の疑いがある家族全員の人数を報告しない家庭が多かったのである（同書：34）。なぜなら、若松が解釈したように、「こうした民衆が抱いていた故郷への情愛は、現代に生きる私たちには理解が難しいかもしれません。被害を受けた者たちが、迷惑をかけてはならないという」（同）からである。言い換えれば、経済的な理由だけでなく、故郷への愛のために、被害者は苦難に耐えざるを得なかった。

モートンは『ハイパーオブジェクト』において、核物質と人間の共存について何度も言及している。モートンによれば、核物質はすでに人間の社会空間に組み込まれており、外部にとどまっているのではない（Morton 2013：121）。そしてモートンは、核物質が時間と空間の境界を超えて世界のどこにでも到達できることを指摘した。つまり、モートンはハイパーオブジェクトの性質である非局所性（nonlocality）を提出する。非局所性の意味をよりよく理解するために、モートンは核放射を例にして次のように述べる。

> 核放射は人間には見えない。チェルノブイリやフクシマのような原子力事故によって、何千マイル離れたところにいる生き物が見えないアルファ、ベータ、ガンマ粒子を浴びた。放射性塵が気流のうちに漂いヨーロッパや太平洋にまで広がったからである。何日、何週間、何年か後、人間が放射能の病で死ぬ。奇妙な突然変異した花が育つ。（ibid.：38）

ヨーロッパと太平洋から離れたところで核事故が発生しても、核物質は気流に乗ってヨーロッパと太平洋に到達する。モートンは、核物質は私たちが思っているよりもはるかに近くにあると指摘した。彼は核物質が自分の肉体の一部になっていると考えていた。さらに、福島災害発生の数週間後、東京で乗り継ぎをしたため、台北空港で水銀やその他の毒素を含む血液データをスキャンされたとモートンは語った（ibid. : 28-29）。モートンの議論は、核物質のようなハイパーオブジェクトが人間と共存していることを説明することができる。しかし、モートンはその共存が均衡状態でないことを見落としていたのである。彼は社会的権利の分配、経済や地理位置などの差異によるリスク配分の偏在を見過ごした。言い換えれば、モートンは人間を、経済的、文化的、政治的な意味を失った無情な有機体として捉えている。まるで人間の体内に均等に核物質が含まれているかのようだ。誰もが被爆後に受けた経済的、身体的、心理的なダメージを無視することができる。核物質と共存すればいい、水銀と共存すればいい。このような思考は、究極の独断に違いない。

ベックは科学の議論においてリスクを平均化することを批判した。平均してみれば、どの毒物も生命に害を及ぼさない。「『平均的には』地球上のあらゆる人間が食べ物に満ち足りていることとなる」（ベック 1998 : 32）。ベックはこれを「露骨に冷笑的（シニカル）な考え方である」と考えていた。というのは、「地球上の一部分では人々が飢えで死んでいく。それなのに、他の部分では飽食によって生じるさまざまな問題にどのように対応するかが食品の生産コストを決定する最優先の因子となっている」（同）からである。平均量は深刻な汚染がない地域と高度に工業化された地域の不平等を無視している。ベックが述べたように、「『平均』がいくらか問う時、その人が平均というだけですでに、社会的に危険状況が不均等に存在している事実を否定している。ひょっとすると『平均値から見れば心配ない』鉛の含有量であっても、それが致命的となる集団と生活環境があるかもしれないではないか」（同書：32-33）。一言でいえば、「環境と有害物質についてのバランス・シートをさまざまな社会階層別に分けてみるという考え方自体が欠けている」（同）。ベックによれば、平均値の確立は、環境問題を自然と科学の問題、あるいは経済と医療の問題に転化させる。リスクの大きさを平均値で測るというのは、とんでもない社会的思考の欠如にほかならない。ならばモートンの非人間との非調和的な共存という思考は行政・経済との断絶であり、社会的思考の欠如にほかならない。モートンはすべての人間が同じ程度の汚染の問題を被っていることを広く仮定して、彼らの年齢、教育背景、職業および身体の素質などを考えていない。簡単に言えば、汚染の広範な分布やその影響の深さだけを論じるアプローチでは、人々が受け入れている苦しみが完全に排除されてしまうのである。同じ有毒物質が人によって違う意味を持つ。特定の集団の人がより深刻な苦痛を受けていることや、その背景にある社会的・文化的な影響については平均値の範囲に入らない（同書：34）。

さらにベックが注目したのは、平均値および許容値の研究が動物実験で行われていることである。ベックによれば、「動物実験の結果からは、どのみち常に人工的な条件のもとで限定的な問題に対する解答が得られるにすぎない。また多くの場合、動物実験では反応が極

端に異なることがわかる。このような動物実践から人間がどこまで毒物に耐えられるかを言おうとすれば、千里眼のような才能が必要である」（同書：108）。ベックは、科学者たちは有毒物質が流通するまで、どれだけの有毒物質が人に害を与えるか知らないと指摘した。つまり、「人間への影響について信頼のおける研究をしようとすれば、結局人間を実験対象にしなければならない」（同書：109）。社会は巨大な実験室になった。しかし、人間の時々刻々の体の反応は科学者によって記録されることはない。具体的に言えば、人間は中毒初期に毒を少しだけ吸い込むだけで、体には何の変化もない。もちろんそのときの体調は記録されなかった。そこがもっと皮肉なところである。「目には見えないし、科学はこれを体系的に管理することもしない。データ収集もしなければ、統計もなく、相関関係が分析されることもない」（同）。つまり、「この実験で、実験動物である人間が、専門家が批判的にどんなに額にしわを寄せようとも、自らを救う運動の一環としてやらなければいけないことがある。それは毒物によって自分自身にどんな中毒症状が表れたかというデータを集め公認させることである。許容値の魔術師たちにしても現在ある疾病統計や森林の枯死の統計などだけでは、何かを言うためには不十分である」（同書：110）。この壮大な実験は実際には行われていない。しかし、水俣病事件の被害者は、この長期間の社会の実験に強制的に巻き込まれたのである。

宇井純は、水俣病の原因究明と被害者支援に生涯を捧げた環境学者である。宇井は大学卒業後、塩化ビニールメーカーに入社した。この会社も水銀を含んだ廃水を夜間に川に流していた。宇井は水俣病の話を聞き、衝撃を受けて辞職した。彼は企業と政府の利益を考える技術者から、被害者の立場に立って国民のために請願する公害学の専門家になった。宇井は水俣病が完全に解決したわけではないという。なぜなら、水俣病にかかった人がどれだけいたかは、今のところわかっていないからである。環境庁や県が出した答えも、千何百人程度の数字だった。不知火海沿岸に住む二〇万人の住民の中で中毒者が二万人程度と推定されても、最終的な解決策は一万人未満の被害者しか認めない（宇井 2014：167）。宇井は、被害者の数がわからない原因を、加害者と被害者の認識問題の二つの異なる基准で分析する。宇井によれば、科学技術者は加害者の立場に立って診断基準を作る（同書：170）。被害者の年齢に関係なく、一律に厳しい基準で被害者を認定する。水俣病患者の中には、高血圧や糖尿病を患っている人もいる。しかし、高血圧や糖尿病が検出されれば、水俣病ではないと判断される（同書：177）。加害者からすれば、認定基準は厳しいほうがいいし、金銭や名誉の損失は少ないほうがいいということは明らかである。さらに、ベックの言うように、個々の患者の状況が発症から記録されているわけではない。医師が病気を知るときも、身体の症状について話を聞くだけである。しかし、私たちは患者が生活の中で抱えているトラブルや差別をすべて把握できるわけではない。具体的には、有機水銀に奪われた生の権利及び良い生の権利は被害者にとっていつも関心のあることである。しかし加害者が気にするのは、被害者一人一人にどれだけの金額を賠償しなければならないかということである。加害者は被害者に価値をつけている。斎藤が論じたように、市場経済は自然に価値を与えることによ

って生産力を発展させていく。水俣病の被害者も、安価な自然[63]の一部になった。加害者は自分が認めた分だけ賠償する。政府の行政に期待をかけるべきなのか。宇井はそうは思わなかった（同書：173）。

宇井は、研究者らが不知火海全域の汚染を警告しているにもかかわらず、日本政府は不知火海全域で一度も健康診断を行っていないと指摘する（同書：174）。また、環境庁が設置した水俣病を担当する特殊疾病対策室の歴代室長が、宇井に水俣病のことを尋ねたことは一度もない。宇井が特殊疾病対策室に資料を調べに行ったときも、当時の市長は宇井に声をかけなかった（同書：175）。無関心な行政者や医療者は、水俣病の全体像をつかむことはできない。若松が言うように、「水俣病の原因をつくり出した人々は、学業的にはとても『優秀』な人たちだった。しかし、知性が、感情や道徳との関係を振り切って暴走するとき、どれほど悲劇的な出来事がそこに生まれ得るのか」（若松 2016：24）。若松は、水俣病に対する加害者の考えを語るとき、中村桂子の考えを引用している。中村は、チッソの当事者は有機水銀による人体へのダメージが大きいことを知っていたと指摘する。しかし、廃水は広い海に流れて希釈されれば、人体には害を及ぼさないと考えられている。工場の従業員は海をプールとしか見ておらず、海が生物に満ちていることを見落としてしまった。有機水銀は魚の体内に蓄積され、食物連鎖を通じて人の体内に達する。現実の世界は、人間が想像するよりもはるかに複雑で、つかみにくい（同書：24-25）。さらに、宇井は水俣病事件の原因について、「わからなくしてきたのが日本の行政であり、日本の医学であり、日本の政治であった」（宇井 2014：178）と述べていた。

水俣病被害者が有機水銀と共存していたことは、人間と有毒物質との共存が非常に複雑な問題であることを示している。しかし、モートンが非人間との共存を安易に語る際には、その複雑さを考慮していない。有毒物質との共存は本当に可能なのか。また、その場合、有毒物質の許容量はどのぐらいか。非人間と共存している人は皆、同じ身体状態、社会的背景、経済的条件の下で非人間と共存しているのだろうか。非人間は、それぞれの人間の体に均等に含まれているのだろうか。子どもと大人で、非人間の量が均等になっていてもいいのだろうか。また、非人間と共存している人間が受けるかもしれない苦しみや感情の傷も同じなのだろうか。モートンの思考には、こうした問題に対する配慮が欠けていることは明らかである。

第三節　末世に希望を見つけて

Ⅰ知性と感情

[63] アメリカの社会学者の J.W.ムーアによれば、一四五〇年以来、資本主義は自然を利益、権力、金銭と結びつけてきた。短期間で利益を最大化しようとする資本主義は、人間の一部も自然も、非常に低いコストで際限なく搾取できる天然資源とみなしている。つまり、資本主義は「安価な自然」の価値法則に従って生産力を向上させている（Moore 2016）。

宇井は、一人一律二六〇万円という最終解決策では、被害者の問題は解決していないと指摘する（同）。日本政府や加害企業は終始冷ややかな姿勢で無情な数字で患者一人一人の価値を測り、被害者たちの身体的、心理的な二重の苦しみを理解しようとする共感がない。石牟礼が敏感な触手で周囲を感知していることは、これまでの議論で明らかである。彼女はいつも被害者が語れない言葉を読むことができる。若松によれば、「感情的」とはもともと、「情＝こころ」が「感(うご)く」ことを意味する（若松 2016：28）。若松は「感情を否定するとはそのまま『情』が『感』くことを否(いな)むことになる」（同）と考え、「知性と理性だけでなく、『情』が『感』く世界をどう開いていくのかも大変重要なことなのではないでしょうか」（同）と指摘している。しかし、行政機関やチッソは、被害者たちが本当に必要としているものが何なのかよく分かっていない。水俣病患者の補償要求を無視し続けるチッソに対し、石牟礼は患者の怒りの言葉を『苦海浄土』に綴っていた。

> 「銭は一銭もいらん。そのかわり、会社のえらか衆の、上から順々に、水銀母液ば飲んでもらおう。（四十三年五月にいたり、チッソはアセトアルデヒド生産を中止、それに伴う有機水銀廃液百トンを韓国に輸出しようとして、ドラムカンにつめたところを第一組合にキャッチされ、ストップをかけられた。以降第一組合の監視のもとに、その罪業の象徴として存在しているドラムカンの有機水銀母液を指す）上から順々に、四十二人死んでもらう。奥さんがたにも飲んでもらう。胎児性の生まれるように。そのあと順々に六十九人、水俣病になってもらう。あと百人ぐらい潜在患者になってもらう。それでよか」（石牟礼 1972：300）

石牟礼は患者が語ったことは「死霊あるいは生霊たちの言葉というべきである」（同）と考えている。上記の引用文は被害者の怒りや憤りを表現している。しかし、実際に患者が加害者やその家族に水銀を飲ませることは不可能である。恨みの言葉は、被害者たちの家族、故郷、国、そして世の中のすべてのものへの愛を代弁している。家族を失い、美しい不知火海を失った被害者たちは、国から見捨てられた苦痛を甘受しなければならない。激しい言葉には真摯な感情が込められている。金銭的な補償も惜しむチッソが、被害者の痛みを理解することはできない。利益や金銭が感情や美徳の代わりになる。ある程度、加害者たちは利益に駆られて共感能力を抑圧することを選択した。石牟礼は晩年の作品『花の億土へ』(2014)の中で、資本主義の波が押し寄せ、みんなが勢いに乗って金持ちになろうとしていると指摘している（石牟礼 2014：109）。特にこの二〇年か三〇年、拝金主義がはびこっている。チッソの悪行をかばった日本政府が、悲劇の中でどのような役割を果たしたのか。若松は、国家のやることは非人格的だと考えている（若松 2016：44）。政府は、経済的に大きな成功を収めるための犠牲が必要だと考えている。水俣の村民は疑いなく生産力至上主義の犠牲者である。補償交渉は商品引出しのようなもので、命の値段を安く抑えたほうがいい。石牟礼はさらに東日本大震災に目を移し、被害者たちの生活状況を形容した。彼女によれば、

「家も失って土地も失って、身内を流されて相談する相手もいない、話し合える身内もいない。仮設住宅に運よく入れた人はいいけれど、仮設住宅ではいまから暑くなるのに耐えられないです。そういうことを訴える電話もない、テレビもない」（石牟礼 2014：111）。このような状況は、他の高度工業化国にも多いはずである。しかし、政府は満足な答えを出せずにいる。さらに、「まだ何一つ根本的な解決策はとられていません」（同書：112）と石牟礼はいう。なぜなら、「人間の社会ですから、どの階層にも差別や嫉妬や妬みや陰口やあるんです。それも何一つ解決されてない」（同）からである。石牟礼にしてみれば、「徳」、「仁愛」および「大義」を取り戻すことが急務である。

石牟礼によると、多くの被害者が補助交渉をしながら、親のような国が存在しないことに気づいたという。この点について石牟礼は、産業資本の発展の仕方が国の美と徳を捨てさせると考えていた。そのお金は、補償金というより口止め料に近い。言い換えれば、加害企業には、「本能的な連帯心」が欠けている。連帯心は義務ではなく、本能的なものだと若松はいう（若松 2016：45）。人が傷つくのを見ると、自分も傷つく。産業文明下の現代人にはそのような連帯心が欠けている。モートンは、われわれは非人間との連帯の中で生きている、と繰り返し述べている。しかし、私たちも人との連帯の中で生きていることは否定できない。つまり、連帯心は産業資本が捨てた美、義、徳を取り戻すために非常に重要である。若松は、失われていく連帯心について、次のような示唆に富む言葉を綴っている。

> 知性や理性が独走するとき、それはとても危うい。それらは本能と結びついてはじめて人間性に深く根差した働きたり得るのではないでしょうか。
>
> 世の中で起こっていることを沈着にとらえるのが重要であるのは言うまでもありませんが、そうした営みが苦しみと悲しみを無化してしまうのであれば大きな誤認だと言わなくてはならない。社会現象も現実ですが、一個の人間の心のなかで起こっていることもまた、重大な事実なのです。（同書：46）

金銭ですべてが解決するわけではない。水俣病の患者とそのご家族が一番望んでいるのは、以前のような普通の生活を取り戻すことである。しかし、その思いは、心と心のつながりがなければ理解されない。

Ⅱ 夢と希望

もしかしたら、この惨劇は救済に通じる出口がないのかもしれない。そのため、石牟礼は「加害者と被害者、自然と文化、そして心と身体の二元性」を超えた「和解」を求める物語を叙述していた（Allen 2016：5）。石牟礼は近代的な二元論的な認識から脱却し、あらゆる存在がつながっているダイナミックな世界を描こうとした。さらに言えば、石牟礼の文章は「絶滅」にも焦点を当て、未来への不安を表現している。

藤原書店社長の藤原良雄とのインタビューで、石牟礼はエコロジーの変化について語っていた。神話の世界のようだった海は死んだという。水銀だけでなく、枯れ草剤のような目に見えない化学物質が海の底にしみ込んでいることも多く、このままでは生態系に問題が起きかねない。彼女は思わず「このままだと、思ったよりは早く、どうっと悪い未来になるんじゃないでしょうか」（石牟礼、藤原 2004：15）と問いかけてしまった。魚と夜光虫の大量減少に、石牟礼は「海は死に瀕しています。人類もね」（同書：16）と嘆いた。また、「今際の目」で、石牟礼も自分が危機的な世界にいることを「絶滅に向かいつつあるこの生命の危機の中で」感じていたという。彼女は毒が科学技術の発展によって生み出されたものであることを明確にしながらも、人間こそが根本的な原因であることを悟る。彼女が言ったように、「科学技術から出てくる毒も当然ですが、人間そのものが、この生命世界に対して毒素となって働きかけつつある」（石牟礼「今際の眼」 2004：32）。

これはある程度モートンの考えと一致しているが、モートンが提唱する「根本的に奇妙で危険で、『悪』でさえあるもの」を愛することを実現するのは至難の業であろう。人新世には終末の息吹が無限に広がっているが、無知や無視、反省のない態度を取ってはならない。モートンのダークエコロジーが、自分と絡み合う非人間に注意を向ける時に、石牟礼は暗闇の中で希望と光を与えてくれる。『苦海浄土』は苦しみを訴えたり同情を求めるのではなく、希望を伝えるものである。石牟礼は『苦海浄土』の第一章「椿の海」で、山中九平という少年の姿を描いている。病院は少年の心の中ではすでに死の象徴となっていたため、山中は病院に行くことを拒否していた。少年は生きていたい、地獄の病院から離れ、野球場に足を踏み入れて自由に遊びに行きたい。第三章のゆきの描写には、「海の上はよかった」、「うちは海に行こうごたる」という言葉が何度も出てくる。海はゆきの故郷であり、夢の中の希望でもあるからだ。本章の最後は「うちゃぼんのうの深かけんもう一ぺんきっと人間に生まれ替わってくる」（石牟礼 1972：158）で終わるが、それはゆきの深い魂からの声なき叫びであり願望である。そういう願いが、想像の故郷にあり、患者たちの苦しい瞬間を支えているのかもしれない。石牟礼が言うように、「その密度の中に彼らの唄があり、私たちの詩（ポエム）もあろうというものだ」（同書：303）。

石牟礼は、水俣病患者の女の子の死に際の情景を描いたことがある。その女の子は、文句も悪口も言わず、ただ死ぬ前に桜を見たいと言っていた（石牟礼「今際の眼」 2004：37）。石牟礼は人が死ぬ前に美しいものを懐かしむので、その美しさを夢に託したいという。夢の中でこそ、昔の故郷に戻れるのかもしれない。しかし、美しい故郷への憧れを抱くことは、単に過去に戻ることではない。石牟礼は「ある程度後戻りして、もうちょっと不自由な生活、不必要なものを切り捨てて」と思っているんですけど、これがなかなか実行するのが難しい」（石牟礼、イリイチ 2004：254）と気づいていたからである。石牟礼は「私どもが生きている時代というのは、じつに荒涼とした時代で、いまいちばん気になるのは人間の精神が非常に衰弱していきつつある」（同書：255）ことであると指摘したが、自分の描く優しい世界を通して、読者が心の奥底にある憧れに立ち返り、いのちの力を感じてほしいと願ってい

る。美しい夢を抱くことはネガティブなフィクションではなく、石牟礼は人間の営みよりも、人間のイデオロギーの変革に関心をもっていた。

石牟礼によれば、現代人の場合、自分の魂がすでに飢えていることに気づかない人が多い（同）。これは石牟礼にとって非常に恐ろしいことだった。しかし、実は石牟礼は、多くの人が少しずつ変わってきていることを指摘していた。大量消費よりも、自然の中に入り込んで素朴な生活を味わいたいという人が多いのである。自分で畑を耕し、無農薬の野菜を食べに田舎に行く人も多い。これは確かに良い現象で、人間が自己を放棄しない気持ちの現れである。また、石牟礼は未来を見据えている。宮本は、光はすべての魂の世界に内在するものであり、それが私たちの未来を導く光になると考えている。石牟礼は人間が「滅び」に向かっているが、「絶滅」の向こうにこそ光があるのではないかと主張している。つまり、現代人である私たちが石牟礼の言う異世界に到達し、それを感じることは難しいが、未来の世代であれば可能かもしれないし、石牟礼もその時が来ることを願っている。

文筆家の五所純子によると、石牟礼は水俣病で患者の尊厳が奪われることに、人間としての深い悲哀と恥辱を感じながらも自暴自棄にはならない（五所 2013：154）。水俣病は、新しい世界への扉を開くきっかけになるかもしれない。石牟礼の作品には、涙を流さずにはいられないほどの痛みや苦しみがあるが、その苦しみの中で強い生命力が衰えることはなく、むしろ苦難が訪れることによって眩しい輝きを放っている。アレンの述べたように、「石牟礼氏は、絶滅の可能性を痛感しながらも、地球と一緒に生きていく喜びを持ち続けることで、強い現実的な希望を生み出すことができると語っている」（Allen 2016：6）。

石牟礼の創作する能「不知火」において希望が表現されている。主人公の竜神の姫である不知火は有機水銀に毒された海を救うために自ら焼身して天地万物を救い、弟の常若も次々と毒を浚うことで息絶えてしまう。隠亡さんの姿として現れた菩薩は二人が来世で夫婦になることを約束し、姉弟は最後に祝婚の舞を舞う。石牟礼は、常若と不知火が死ぬシーンを創作したのは、二人と先の世とのつながりを断ち切るためだったという。幸せに生きてはいけないけれど、幸せへの憧れを捨ててはいけない。いいかえれば、この世に背負っている苦しみがなければ、最後に訪れる幸福のありがたさを体現することはできない（石牟礼 2014：79-80）。随筆家の志村ふくみが述べたように、「決して暗い怨念や呪詛の世界ではなく、二人の死の祝婚は、何か復活を予感させ、照し出された光の奥に救済を感じずにはいられない。それはこの時代を共に生きるものの願いであり、祈りである」（志村 2004：234）。また、オーストリアの哲学者 I.イリイチが石牟礼との対談で語っているように、「ともかくも〔原注：たとえ輪廻があったとしても〕私は、この死が最後の死であるかのように一度生きよう」（石牟礼、イリイチ 2004：256）。

石牟礼は夢と希望という言葉を何度も口にした。彼女は強い生命力を美しいものだと考えている。したがって、最後の最後にも、必ず希望を持って死ぬ。石牟礼が述べたように、「最後の望みというのは、最後になっても諦めないで、あこがれて死ぬという、絶縁できないこの世で、それをかすかな希望として生きるほかないな」（石牟礼 2014：87）。私たち

も夢を持つべきである。すなわち、次世代の人々が水俣病の被害者たちのようなつらい体験をせず、楽しみとともに歩んでいくことを象徴する夢である。

第四節 埃の中に咲いた花

以上の議論に基づいて、筆者は、非人間を区別しない、全ての非人間との親密な共存を望むモートンの願いは、実現することができないと考えている。評論家の最首悟の語ったように、「体が不調なら心もどこか不調である」（最首 2013：60）。水俣病を研究する医者の原田正純も水俣病は病気ではなく殺人だと考えていた（石牟礼 2013：7）。では、どうすればそのような虐殺と戦わずに受け入れることができるのだろうか。

Ⅰ　失意の底から立ち上がる

チッソとの闘いの道で提示しなければならないのが川本輝夫である。川本も彼の父親も水俣病を患っていた。一九六五年に川本の父は錯乱状態のまま死去した。一九五五年、川本は手足のしびれ、頭痛、腰痛などの症状が出てくるようになった。彼は水俣の市立病院や保健所で検査を受けても、風邪や過労と診断されただけであった。川本は、治療が遅れただけでなく、医療費も多くかかってしまった。

一九五九年、チッソによって「子どもの命が三万円、大人の命が一〇万円、死者の命が三〇万円」（栗原編 2000：94-95）という「見舞金契約」が成立した。川本によると、補償金を受けられるのは、権威ある機関が認めた患者だけだという。そして将来、水俣病がチッソのせいだと判明しても、新たな補助は求められない。当時のチッソは、水俣病が工場廃水によるものであることを知っていたにもかかわらず、隠蔽を続けていた。社会も政府も沈黙している（同）。一九六八年、川本は新潟水俣病事件を契機に政府に水俣病認定を申請した。熊本県知事に「棄却」の結果を告げられ、一九六九年に二度目の申請を行った。しかし、二度の申請はいずれも却下された。

川本は、行政や医療学者などの知識人には頼れないと考えていた。つまり、彼は一人で戦い始めた。川本は水俣病被害者を訪ね、水俣病運動への参加を勧めた。そして水俣病を知るために独学で医学を学び、看護士の免許を取得した。次から次へと努力を重ねるうちに、川本の仲間に水俣病の被害者が増えていった。政府の「公害認定」を棄却された被害者らは、一九七〇年に行政不服審査を厚生省に申し立てた。結局川本は一年後に水俣病患者として正式に認定された。しかし、チッソ側は補償を拒否した。結局、川本は、一九七一年の一一月一日から七三年七月九日の補償協定書調印までの一年八カ月間、チッソの東京本社前に座り込みをした（同書：102）。最終認定者たちは年金と医療費の補償を受けた。

それでも政府に認められていない水俣病患者は多い。川本は水俣病事件で国家行政の責任を考えなければならないと指摘した。川本は次のように述べた。

私は今でも、どんな形であれ国や県に責任はあると思っています。ただそれを裁判の場で確定させることができなかったのが残念でしたが、これは一つには、水俣病事件に対する「支援の力学」が足りなかった。社会的に認知させる力が足りなかった。われわれの闘争のあり方やら経過も含めて、残念ながら認めさせることができなかったというのが正直なところではないかと思います。（同書：110）

川本は行政責任を裁定できない遺憾を表明した。より多くの無力な被害者が救済を受けることを求めるならば、私たちは協力してより包括的な被害者支援を行う必要がある。川本は、自分がチッソと戦ってきたことが、水俣病被害者の権利を取り戻すことだけでなく、その情報を世界に広めていくことであることを知っていた。川本は内心では、これ以上多くの人が不公平な目に遭ってほしくなかった。そのため、彼は自分の責任は重いと考えている。専門家とマスコミの責任も大きい。正確な情報が伝わってこそ悲劇を減らすことができる。「ごまかし、偏見、差別、脅し、弾圧、もういろいろな手で分断されてきたのが水俣病で、この社会的側面を考えないと、ただ単に有機水銀中毒ということだけではおさまらないもんですから、ぜひ私は、医学、社会学、政治学、宗教学、そういう多方面から見た水俣病事件の診断書を書いてもらって、いまだに解明し尽くされていない水俣病をなんとか明らかにするということをぜひやって欲しいと思っています」（同書：111-112）と川本は提唱している。

Ⅱ やむをえない妥協

水俣漁師の杉本栄子は幼い頃から網元である父のもとで漁を学び、海に対して独特の深い愛情を持って育った。杉本にとって海は肉親のような存在で、家族や自分が持っているものはすべて海が自分に与えてくれた恵みなのだ。だから彼女の父親も彼女に「のさり」の道理を教えた。「のさり」は「天からの贈り物」という意味の水俣の方言である。漁師として多くの魚を獲れるのは、海が自分に与えてくれた「のさり」なのだ。水俣病は水俣病患者にとっても「のさり」である。一九五九年に二一歳だった栄子の母は水俣病で隔離病棟に入って治療を受けていた。水俣病のことを知らない村人たちは、栄子の母親が感染症にかかったと勘違いし、杉本一家を遠ざけ、差別し、罵倒するようになる。その後、栄子の父は水俣病で亡くなり、栄子と夫は水俣病で何年も病院を往復していた。栄子家族は発病以来、仲間はずれにされたり、いじめられたりする生活を送ってきたと言っていい。しかし、栄子の父はかつて「どうせ死ぬとなら、人ばいじめて死ぬよりもいじめられて死んだほうがよかがね」、「人様は変えならんとやっで（変えられないから）、自分が変わっていけばよかがね」（同書：136）と語った。栄子の心には恨みがあったが、父の忠告に従い、人をいじめることはしなかった。それからの長い歳月の中で、栄子は父が自分に与えてくれたものがいかに貴重

なものであるかを、ますますはっきりと認識するようになった。栄子は「私たちは母が人様より早くに病気にかかったためにいじめにおおたけれども、そうでなければ水俣ではいじめる側に立たされたです」（同書：141）と述べた。栄子は強大なチッソと日本政府の前でも、自分の苦痛を報復という形で他人に転嫁することを選択しなかったという。逆に栄子は、両親や村の人々に感謝し、かつて自分を虐げていた人々も亡くなったことを伝えた。惨劇に襲われたとき、絶対的な加害者も被害者もいなかったが、何より水俣病は私たちに何を与えたのか。栄子は水俣病を「のさり」ととらえ、二度と水俣病のような被害がないよう、多くの人に真実を伝えたいと願った。「一人一人が生きていくために、自分の命の大切さ、人さまの命の大切さをわかる人間になってくれよという伝え方をしたいと思うとですよ」（東島 2010：47）と栄子はいう。

二〇世紀アメリカの現代写真ジャーナリストの巨匠である E.スミスの最も有名な作品『水俣』の中で世界の注目を集めた一枚の写真「入浴する智子と母」は、水俣病に苦しむ人々の人間性の輝きを訴えている。胎児性水俣病の智子は不運な運命をたどったが、智子を抱いて入浴する聖母マリアのような母の姿は光るようで、見る者一人一人に親心への賛美を抱かせる。智子の家族は智子が母体内の水銀をすべて吸収し、その後生まれてくる子供たちを病気から救ってくれたことに感謝し、智子を心から愛していた。智子の母は「智子はわが家の宝子ですたい」（山口 2013：92）と言った。水俣病はこの家族に限りのない苦難をもたらしたに違いないが、この家族の感情をさらに濃厚にさせた。兄弟姉妹の間でもお互いを大切にし、団結し、命の尊さを知っている。水俣病は被害者に過酷な宿命を与えながら、貴重な財産を残したのかもしれない。

漁師の緒方正人は水俣病の被害を受け、最初はチッソを憎んで戦ったが、彼はその恨みの中で、自分も「『もう一人のチッソであった』ということに気がついた」（緒方 2013：38）。彼は「自分の内側にもチッソを発見したんです。すると不思議とチッソの人たちを愛おしくさえ思えるようになった」（同）と感嘆した。

緒方の父親は水俣病で緒方の幼少期に他界しており、緒方も幼少期に水俣病のことを知っていた。緒方の甥や姪も胎児性水俣病で生まれたときから水俣病に苦しめられた。緒方一家は水俣病の被害者である。緒方は水俣病の責任者がチッソであることは子供の頃から知っているが、加害会社を見たことはないと語っている。自分の家族は農村で魚を捕って暮らしていて、自分で育てた野菜を食べていたので、お金のことは考えていなかった。そのため、緒方は兄弟姉妹とは違う。というのは、彼は「幼児期に、あまりにも異様な親父の姿を見てしまって受けとめようがなくて、チッソという会社を見たこともなく、そして金の値打ちもほとんど知らない」（栗原編 2000：186）からである。緒方は幼いころから、自分だけでなく、近所にも「固有の水俣病」があると思っていた。これは、水俣病が緒方にいかに大きな影響を与えたかを示している。そのため、緒方はチッソに天然の敵意を持っている。彼は一九七四年から水俣病認定申請患者の運動に参加していた。しかし、十年に及ぶ戦いの中で緒方は疑問を感じていた。彼は、加害企業がどのようなものかはっきりと分かったことはな

く、熊本県や日本政府、そして闘争で責任を回避したチッソから心からの謝罪を聞いたこともなかった。何年も戦って、何年も苦しんでいるのに、自分の敵が誰なのかわからないというのは、非常に皮肉で滑稽なことである。結局、闘争の失敗と挫折を繰り返す中で、緒方は自分の敵が実は巨大な「システム社会」であることを悟った。

法律、制度、近代化の価値観が複雑に絡み合ったシステムにおいて、誰もが閉じこめられ、抜け出すことができないように見える。緒方によれば、「私たちの生きている時代は、たとえばお金であったり、産業であったり、便利なものであったり、いわば『〝豊かさ〟に駆り立てられた時代』であるわけですけれども、私たち自身の日常的な生活が、すでにもう大きく複雑な仕組みの中にあって、そこから抜けようとしてもなかなか抜けられない」（同書：195）。簡単に言えば、緒方が言ったように、彼は車を買って運転し、冷蔵庫やテレビなどを使って過去の人生を過ごしてきた。この一連の商品はすべてチッソの化学材料で作られており、自分の長年の闘争は事実の前に水の泡になってしまった。緒方は自分を深淵に突き落とす加害者からの脱出を求めていたが、自分は豊かさと発展を求める「システム社会」の一部になっていた。認定申請も補償金要求も、近代化社会に操られたものであり、水俣病事件はこのままでは終わらない。被害者である緒方は抗争の初期、当然のことながら自分の苦しみに対する補償と謝罪を求めていた。しかし、彼は自分も近代化された「システム社会」が主導する巨大な陰謀の共犯者であり、チッソはただもう一人の自分にすぎないことに気がつき、常に自分を狂わせている憎しみを手放していく。緒方は役柄の転換も試みている。自分がチッソの社員だったら、あの人たちと同じようになっていたかもしれない。

ここで筆者はチッソの社員の例を取り上げたい。荒川速男はチッソ水俣工場で四〇年近く働いていた作業員であった。病床で取材を受けていても、彼は窓からチッソ工場を眺めていた。水俣病に罹っても、荒川は水俣という土地に対するチッソの重要性を否定しなかった。荒川によると、「チッソに勤めなければ水俣には仕事がなかった。チッソだけが我々の働く道だった」（東島 2010：217）。彼のチッソに対する未練が依然として感じられる。結局、被害者と加害者の間をさまよう荒川は、病状の悪化からチッソを提訴した。チッソと対立することは荒川にとって辛い決断であった（同）。近代化された「システム社会」において、荒川のように、加害者と被害者の間で苦しんでいる人は多くいるはずである。

真の敵は「システム社会」であると自覚した緒方は、過去の傷にこだわるのではなく、どこに帰れば魂が救われるのかということに焦点を当てている。この後、緒方はチッソの正門前で半年に及ぶ座り込みを行った。彼はチッソの責任を追及しに行くのではなく、「ある意味で自分の自白もしたかったし、私はチッソを責め立てに来たんじゃないという武装解除の姿を座り込みで表したかった」（同書：85）。最後に緒方が「私は、チッソや行政の人たち、あるいは水俣病被害が拡がっていく当時、特にチッソ擁護に加担したといわれる人たちを含めて、ともに救われたいと思います」（栗原編 2000：201）と述べていた。反抗は被害者の一人一人が必ずしなければならない過程かもしれないが、時間が経つにつれて、心の和解こそ苦痛から解放される道かもしれない。緒方のように、自然に回帰する自分は、愛され

ていると感じる自分、生きていると感じる自分である。ここでの自然回帰とは、受容、つまり、あらゆる感情を受容し、善悪を受容し、愛憎を受容することである。「ここに、善と悪、加害と被害の別を超える未踏の人間の倫理への問いが生まれている」（栗原 2004：231）。

杉本も緒方も水俣病の被害者だが、加害者を許すことを選んだ。石牟礼はこの結果に驚いたという。しかし、苦しみを背負おうとせず、水俣病と付き合っていくことを望まない被害者たちは、ただ普通の人と同じように暮らしたいと思っていた（石牟礼 2014：48-49）。つまり、「許し」は杉本と緒方の選択だった。そこで平成七年、緒方は石牟礼らと被害者たちの心を救うための「本願の会」を立ち上げた（東島 2010：85）。

このような和解はおそらくモートンが求めた非人間との平然で親密な共存であったのかもしれない。しかしモートンはこの中のいくつかの悲しみと抗争を無視した。ある人は最後まで戦うことを選び、ある人は自分を傷つけるすべてを許すことを選ぶ。いずれにしても、いのちの尊厳を守るための道は茨の道であり、痛みを伴うものである。しかし、希望を失ってはいけない。

第五節 『苦海浄土』はロマン主義文学作品なのだろうか？

モートンは、ロマン主義文学において自然を描くためにレトリックが用いられていることを痛烈に批判しているが、筆者が強調したいのは、水俣病の状況を知れば、たとえ煉獄にいる患者の声が著者によって脚色されたとしても、それは決して傍観者の作り話ではないことがわかるということである。『苦海浄土』とロマン主義文学には共通点があることは否定できないが、筆者は『苦海浄土』がロマン主義文学に属するかどうかの判断は、実際には人によって異なると考えている。

例えば、岩岡は「石牟礼さんの思想はロマン主義として位置付けることができる」（岩岡、渡辺 2004：215）と指摘し、彼は「文明批判」の立場で石牟礼の作品を読み、「石牟礼さんの場合、近代批判ということが直接政治に対する発言としては出て来ませんが、文明批判として出てくる」（同）と考えている。なぜなら、岩岡は、石牟礼の作品は近代化によって崩壊した共同体への不満や、洗練された詩性など、ロマン主義に通じるものがあると考えたからだ。岩岡によれば、石牟礼には、下層民の利益を犠牲にして発展をはかる近代政治経済システムへの深い絶望から、しだいに無力な喪失感が出てきた（岩岡 2007：47）。この喪失感が石牟礼に絶滅を連想させた。そのため、岩岡は、『苦海浄土』は近代の既成体制への対抗と怒りを反映して、自然万物が相互につながっている世界へ帰ることを提唱した著作だと認定した。 彼は石牟礼の思想を「ロマン主義的再生論」（同書：111）と定義した。石牟礼の作品を読んだ人のほとんどが、チッソを責め、岩岡と同じような思いを抱いたことは否定できない。

渡辺は石牟礼の作品を環境問題や現代文明への告発と捉える人が多いことを指摘する。また、『沈黙の春』と『苦海浄土』を並べて評価するのが、石牟礼作品を読む際の主流の思

考様式になっている。渡辺によると、多くの人は石牟礼の文学作品そのものから彼女を認識したり、石牟礼個人の視点から彼女の作品を理解したりしていないという。多くの人は、石牟礼を水俣病患者の代弁者、あるいは環境運動、現代批判などの活動の主役として見ている。つまり、石牟礼に対する大衆の評価は、文学作品の位相とはかけ離れ、社会的属性という名のもとに、石牟礼を語ることが多かったのである。渡辺はこのような状況に理解を示し、このような状況が起こるのには根拠があると考えた。確かに石牟礼は、日本近代が自らの発展と引き換えに下層民の利益を犠牲にしてきたという事実について発言している。渡辺は、石牟礼は「棄民という言葉もよくお使いになります」（渡辺 2004 : 176）と指摘した。また、石牟礼の「評論風な文章には、左翼市民主義者やラジカルエコロジストがなじみやすい論理や発想がみられることは事実ですし、彼女の左翼ジャーナリズムでの人気は、そういう両者の共通点に支えられている」（同）と渡辺は語った。このような状況に直面して、渡辺は非常に遺憾であり、極めて不適切かつ困惑したことだと判断した。彼は「そういうとらえ方も間違いではないが、本質から言うなら皮相なとらえ方だと思います」（同書：216）と述べていた。渡辺は石牟礼にとって文学創作は、より深い意味を持つべき思想的な仕事であると指摘する。つまり、石牟礼の伝える精神は、単に環境保護運動の標語とするのではなく、世界のあらゆる存在の「関係性」、「復雑性」、「多様性」に注目した新しい知として捉えるべきなのである。ここで渡辺は、石牟礼が描いた世界は二次元の意識の中の地図のような世界ではなく、立体的で多元的な宇宙であることを示した。渡辺は次のように説明していた。

> 私たちが住んで経験している世界は、水平に拡がる並列的な多様性ではなく、生きている自己を中心として構成される同心円的な統合です。大地に立つ自分をとりまき、自分の心音となって鼓動する万象、つまり家族・交友といった限られた人びと、建物や町並、そして吹く風、香る花々、とりわけ樹木たち、遠くに望む山脈、空にきらめく星辰、そのような具体的で統合された森羅万象の世界を私たちは自分の生きる世界と感受しているのです。そのような世界を仮にコスモスと呼んでおきましょう。（同書：181）

渡辺にとっては、石牟礼が自らに与えたショックも未曾有のものだった。彼は石牟礼が「これまでの日本近代文学とか日本の近代知識人とかそういうところとまったく違うところから出てきた人」（渡辺 2013 : 14）だと指摘した。というのは「農民ではなく漁民ですけれども、文字の世界に生きていない、日本の近代のマージナルなところにいる生活者、コスモスの層の民話的なものも含めた豊かさというものがあって、それを文学表現にもたらしたのは彼女が初めてだった」（同）からである。渡辺は石牟礼への賞賛を惜しまず、「現代日本文学できわめてユーニーク〔原文ママ〕な作家」という重みのある言葉で石牟礼の素晴らしさを語っている（渡辺 2004 : 176）。石牟礼の作品が社会大衆の目線だけで捉えられているとしたら、それは彼女の作品を誤解するものであり、悲しいことである。

岩岡と渡辺は、社会的影響と文学的価値の両方の観点から、それぞれの見解を述べている。しかし、若松は、石牟礼は自分の創作について別の定義を持っていると指摘した（若松 2016：46-47）。石牟礼は新聞紙の対談で次のように語っている。

> 近代詩というのがありますね。古典的な詩もあります。それらとは全く違う、表現が欲しかったんですよ。水俣のことは、近代詩のやり方ではどうしても言えない。詩壇に登場するための表現でもない。闘いだと思ったんです。1人で闘うつもりでした。今も闘っています。（「新潟日報」二〇一六年三月二十七日）

石牟礼は詩を武器に、近代産業文明との戦いを挑んでいる。彼女の作品を詩だけで定義するのは短絡的である。しかし、彼女は自分が時代の代弁者であるとも思っていない。渡辺が言うように、石牟礼は水俣病のすべてのいのちを、絶対的に平等な目線で描いている。石牟礼の作品は、彼女自身が言うように、全く新しいジャンルの産物である。彼女の作品には被害者の悲しみがあり、加害者の恥知らずな行為への憤りがあり、魂への慰労があり、希望の追求がある。そのため、石牟礼の作品を既存の文体で定義するのは難しい。彼女は人生をかけて水俣の物語を書き、敵と戦っている。

池澤もまた『苦海浄土』は「大変苦しい小説であり」（池澤 2013：21）、基本的にこれは「フィクションの技術を非常に巧みに駆使したルポルタージュ」（同書：23）であると考えている。彼が『苦海浄土』を非常に高く評価していることは、この書を「世界文学全集」に収録しようとしていることからも明らかである。また、次の池澤の言葉は『苦海浄土』がいかに異質なものであるかを示している。池澤は「歴史家と文学者、あえて分ける必要はない」（同書：21）とし、『苦海浄土』を後世に残す歴史の記録のように感じているとし、「水俣病の苦痛というのは世界中の人間にとって大事な財産なんですね」（同書：29）と述べている。

社会学者の見田宗介は、石牟礼の作品は文学でも政治でもなく、人の心を癒す医術だと考えている。見田によれば、「石牟礼の『文学作品』が、近代主義的な個体の自己表現としての『文学』とは逆立する位相をこそ本質とすることをとらえなければ、政治主義的な矮小化とはべつの方向にこれらの作品を、いわば文学主義的に矮小化することになる」（見田 2004：165）。それは、石牟礼の作品が、絶対的な政治や文学の領域の産物ではないと見田が考えているからだ。

石牟礼が意図的に政治や文学の分野に向かって創作したことはなく、現実に向かって、崩壊しつつある宇宙感覚に向かって、自分の孤独感に向かって、魂の貧しさのために自発的に創作したとも考えられる。さらに、石牟礼の作品は、産業文明の背後にある闇と全身全霊で戦う勇気と決意の表現である。

第六節　小括

モートンが言及したエコミメーシスの修辞技法が石牟礼の文章の随所に現れていることは否定できないが、彼女はわざとらしく見せびらかしたり、幻の妄想をしているわけではない。石牟礼が表現したものは素朴な世界像である。しかし、石牟礼の作品には、まるで魔法のように読者を共感させる不思議な感染力がある。このような石牟礼の作品から読者の身体に入ってくるものが、ちょうどモートンの環境思想の発端の一つ「アンビエンス」である。石牟礼の作品に表れる自然風景の霊性、水俣の鳥のさえずりと花の香り、そこに暮らす村人たち、すべてがつながっている。文字を見ているだけなのに、石牟礼の作品からは何か得体の知れないものが溢れ出て、私たちの感情の中に広がっている。石牟礼は、モートンが指摘するような偽善の仮面をかぶった環境保護者でもない。モートンの考えでは、環境保護も資本主義システムの一環にすぎない。しかし、石牟礼は明らかにそうではない。

石牟礼の作品には想像があり、現実があり、加害者への問いがあり、万物の魂への畏敬がある。彼女の作品集は文学、哲学、宗教学、歴史、そして産業文明に対する考えと反省が一つになっている。従って、石牟礼自身が言っているように、彼女の創作は、産業文明の背後にある暗部との、一人での戦いである。さらに石牟礼も被害者と彼らの骨の髄まで浸透する有機水銀との極めて密接な関係を探究した。これは近代の高度経済成長期に石牟礼が感じたことである。モートンとは違って、石牟礼はその関係の複雑さと悲惨さを見ていた。つまり、石牟礼は、人間とあらゆる自然との調和的な共存を示すと同時に、人間と有毒物質との苦痛に満ちた共存をも示しているのである。

モートンのダークエコロジーは、人間と非人間の二つの観点から批判的に分析できる。まずは非人間的な観点からである。モートンは、いかなる非人間が人間と共存できるか、いかなる非人間が人間と共存できないかを厳密に指摘していない。モートンは、身体から汚染物質を取り除くことは誰にも不可能だと考えている。すなわち、彼は放射線や有機水銀などの猛毒を人間と共存できる範囲に入れた。ベックの言葉のように、有毒物質を完全に排除することは現代社会では贅沢なことである。しかし、他人を傷つけない、毒を飲まないというのは正当な要求ではないか。一歩譲って、有毒物質と人間の共存が不可逆的な事実になったとしても、モートンが提唱した共存はどこまで実現するのだろうか。世界の平均的な許容範囲という意味では、モートンは問題の複雑さを見落としていたのかもしれない。モートンはすべての人間が微量の毒を飲んでいると思い込んでいるようである。しかし、発展途上国や重工業国の人々および工場周辺に暮らす人々は、微量の毒薬を服用しているわけではない。体内の有毒物質が異常に多い人たちはいつ死ぬかわからない危険を負っているのである。体内に残っている有害物質の量には個人差がある。年齢、性別、職業などによって身体の許容量は異なる。水俣病患者の体内の有機水銀は「奇妙なよそ者」ではなく、「骨髄までしみ込んだ疽」と呼ぶべきである。

次は、人間の観点からである。また、モートンは、人の間にもさまざまな違いがあることを見落としている。地理的な位置の違い、経済的な収入の違い、住んでいる地域の法律行政

の違いなどから、人それぞれ異なるレベルのリスクに遭遇する。同時にモートンは本来あるべき連帯心を失った。彼は被害者たちにも感情があることを見過ごした。被害者や遺族は、病の苦しみを抱えている。この苦しみは体の痛みだけでなく、金銭的な損失でもある。何よりも被害者たちは、差別と陰口の中で尊厳のない生活を送っている。家族、故郷、国への愛にあふれた被害者たちだが、何度も何度も国家から棄てられる。貧しい水俣病患者が病に苦しんでいるときに、モートンが人間と非人間との不調和な共存を唱えていたと聞いたら、何を思うだろうか。モートンは非人間と共存し、来るべき闇と出会うことを主張する。何もせずに死を待つことは本当に可能なのだろうか。そうであるならば、モートンと、知識と理性だけに導かれた石心鉄腸の加害者たちとの違いは何なのだろう。そして、水俣病事件で露呈した政府、社会、医療の問題および、高度に発達した産業文明による利益本位の価値観も無視できない。これは、水俣病事件の教訓でもある。モートンのダークエコロジーにおける「ダーク」とは、汚染物質が世界の隅々まで行き渡り、綺麗な世界がもはや存在しないことを指している。しかし、筆者はそのように考えてはいない。筆者は、ダークエコロジーにおいて最もダークなのは、産業社会が常に無限の金銭と利益の追求に耽っていることだと考えている。数え切れないほどの罪のない人々が、工業文明の刃の下で死霊と化している。このままでは、人類の絶滅も冗談では済まなくなるだろう。これは、ダークエコロジーの最も暗い意味である。

第五章　生物多様性と文明の進路

これまでの議論で、人間と非人間との共存という複雑な問題に対するモートンと石牟礼の見解の相違点が明確になった。人間と非人間との共存を唱えるモートンは非人間をより重視している。モートンの思想の枠組みにおいては、非人間には動植物だけでなく、人間的尺度を超えた汚物に似たハイパーオブジェクト、具体的には地球温暖化、核放射線のような人間には視覚的に見えない様々な有害物質も含まれる。このような非人間は、石牟礼が提唱する人間と非人間との共存の対象にはならないことは言うまでもない。

現在深刻な環境問題の中で最も無視できないことは種の絶滅である。というのは、人間の衣食住はさまざまな生き物に由来しているからである。たとえば、私たちが食べるさまざまな食べ物、身に着けるさまざまな素材の衣服、家を建てるのに必要な木材やコンクリート、そして石油や石灰は、地球のさまざまな生物から生み出されたものである（本川 2015：15-19）。つまり、生物多様性を維持してこそ、人間の豊かな生活を維持することができるのである。現段階では一九〇万種の生物が確認されている。多くの生物種が発見されていないため、地球上には五〇〇〇万から一億の種がいると推定されている（長谷川 2010：4）。しかし人口の激増、消費主義の流行、温室効果ガスの排出などにより、この一〇〇年で一万種あたり約一〇〇種の生き物が絶滅している。未確定種を含めると、人類による絶滅の速度は、化石記録から計算される自然状態の絶滅の速度の一〇〇倍から一〇〇〇倍になる[64]。そこで本章では、「生物多様性」という非人間との関係において最も顕著な問題に着眼し、生物多様性の重要性、種の大量喪失の科学的事実、過去の公害事故の教訓を提示しながら、生物多様性の保全の意義を解説し、文明のあり方を模索していく。本章は四節で構成される。

第一節では、生物多様性の意味、生物どうしのとてつもなく複雑なつながり、および生物多様性保全の意義を説明する。人間は、人間以外の生物と深く関わっている。生物多様性の激減により、生態系が回復せず、残された種が次々と絶滅する可能性がある。したがって、生物学者の多くは、生物多様性を保全するのは人間の責任であると考えている。

第二節では、生物多様性の重要性を具体的な事例によって説明し、生物多様性が失われる原因を分析する。まず、熱帯雨林を例に、生物種の複雑な共存関係と、熱帯雨林の森林が大量に消失する原因について考えてみたい。そして足尾銅山事件や文明のあり方に対する議論を通じて、生物多様性の保全においても、個人の意志に注目する必要があることを提唱する。

第三節では、生物多様性の保全のあり方について探求していく。多様性保全の実現には、あらゆる分野の力を結集することが必要である。新しい政策規制、新しい経済発展様式、真実を語る科学者や作家、価値観の転換、地域市民団体の協力などが不可欠である。そして、

---

[64] 生物種の絶滅についての情報は環境省のホームページ https://www.env.go.jp/guide/info/ecojin_backnumber/issues/18-05/18-05d/tokusyu/2.html#main_content を参考にした（2022.5.1 閲覧）。

持続可能な発展を実現するための活動についても紹介する。
　第四節では、これまでの内容を総括する。

第一節　生物多様性―人間と人間を除く生き物がつながる網の中で生きている

Ⅰ　生物多様性とは何か？

　生物多様性とは、簡単に言えば、生物間の差異により、生態系が豊かになることを意味する。しかし、それぞれの生物学者によって、生物多様性の定義は異なる。保全生物学者である長谷川明子によれば、「生物多様性とは、生態系、種、遺伝子が豊かなことで、生き物自身とそれを取り巻くすべてに違いがあり、それら多くの生き物たちがつながって、命を支え合っているということ」（長谷川 2010：2）である。『生物多様性と地球の未来――6 度目の大量絶滅へ？』において、生態学者の J.シルバータウンらは生物多様性を「生物が変異に富んでいること」（シルバータウン編 2018：7）と定義している。具体的には、私たちが目にするあらゆる生物種と、改良されたさまざまな品種が生物多様性に含まれる。種の相違はあっても、すべての生物は共通の祖先を通して相互につながっており、相互依存の関係にある。動物も植物も人間も微生物も、三五億年以上前に共通の祖先から進化してきた。つまり、人間や人間以外の生物は、「網の目のように複雑な、生物間のネットワーク」（同）の中で生きている。環境科学者の D.タカーチは、数十名の生物学者へのインタビューを通じて、生物多様性の定義を次のようにまとめている。ごく少数の生物学者は、生物多様性を単に種の多様性の領域だけに限定している。多くの生物学者は「〈生物多様性〉という用語で、生物学的階層の多数のレベル――遺伝子、個体群、種、群集、生態系、そしてこれらのレベル間の相互関係と、それらを生み出しているプロセス――を表現している」（タカーチ 2006：72）。しかし生物多様性は、人間の文化的多様性をも表している（同）。
　人間と人間以外の生き物は、相互に関連した生態系ネットワークの中で生きている。地球上には、さまざまな生態系が存在する。生態系が何種類あるかは誰も知らない。生態系は相互に関連する生物の生息地として厳密に区別することもできない。生態系は、生物とその周囲の無機的環境から構成されている。無機的環境には、生物多様性を維持するためのさまざまな元素が含まれている。例えば、大気、光、温度、水、無機栄養物などである。生態系の生物群集の機能は、生産者、消費者、分解者の三つの陣営で捉えることができる（池田 2018：78-79）。例えば植物は、太陽光のエネルギーを利用して、二酸化炭素や土中の水を糖類のグルコースに変え、葉と木部の成長を支えている。光合成の際に酸素が放出される。エネルギーを取り組む植物は生産者である。植物を食べる小型動物と、小型動物を食べる大型肉食動物は消費者である。大型肉食動物を処理・分解するスカベンジャー、菌類などは分解者と呼ばれる。これらの残骸は、微生物によって分解され、植物の肥料となる（シルバータウン編

2018：67-73)。残骸が分解されると、新たな生物のサイクルが始まる。つまり、「生態系を構成する物質は生産者→消費者→分解者→生産者と循環し、一般に生態系から失われることはない」(池田 2018：79)[65]。生産者、消費者、分解者は、生態系におけるエネルギーの移動を担っている。

哲学者の品川哲彦は正義の立場から、アメリカの哲学者であり生態学者である A.レオポルドの土地倫理を解釈している。レオポルドは「エネルギー循環回路全体」を「土地」と呼んだ。土地がなくなれば、そこに生きている生き物もいなくなる。品川は、レオポルドの考えでは、土地の維持が善で、土地の破壊が悪だと指摘している(品川 2015：231)。そのため、その土地を維持するすべての構造要素を整備することが必要である。したがって、品川によれば、土地にさまざまな種を適切に維持することは、生物種における分配的正義の実現である(同)。さらに重要なことは、人間は土地の一員として、その土地を破壊してはいけないということである。したがって、「他の生物種と違ってただ人類のみにできることは、生態学の知識にもとづいて意図的に土地の維持に貢献することです、土地倫理に従えば、それこそが人類の果たすべき役割です」(同書：232)。

しかし、水俣病事件や福島の原発事故は、生態系の安定に大きな役割を果たす海洋を破壊した。海の植物プランクトンは、陸の植物と同じように、太陽光のエネルギーを使って二酸化炭素を吸収し、酸素を放出している。植物プランクトンは、多様な微生物の集合体である。海中での光合成は、一般的に藻類が行っている。植物プランクトンは、陸の植物と同じように小さな動物に食べられている。小さな海洋生物は、大きな海洋生物に捕獲される。食物網のピラミッドの頂点に立つ人間は、魚を食べたり、販売することで生存している。植物プランクトンの寿命は陸上の植物と比べると非常に短い。植物プランクトンが死ぬと、体内に蓄えられた炭素が二酸化炭酸ガスの中に戻ることもあれば、死んだ細胞が海底に沈み、海底の堆積物に埋まれることもある(シルバータウン編 2018：73-74)。つまり、海洋の植物プランクトンを保全することで、二酸化炭素の排出量を減らすことができる。石牟礼の考えでは、核廃棄水および有機水銀の排出は毒の実験である。炉心溶融によって放出された毒素は、食物、環境、皮膚を汚染している。日本人はそんな実験にさらされている。石牟礼は、次世代の人々と他の生き物たちのために、このような実験は早めに止めるべきだと考えている(石牟礼 2014：102)。石牟礼は次のように述べていた。

> もう五十年ぐらい前からですが、絶滅種というのが植物でも鳥でもいわれはじめました。いままで生えていた植物もなくなってくる、飛んでいた鳥たちもいなくなるって。それで呼び戻そうとしているけれども、なかなか呼び戻すことはできません。いまから無数にそういう種の全滅と

[65] ここで述べた生態系の構築はあくまで現在のものであり、すべての時代の生態系に適用されるものではない。三八億年前の地球には、化学合成細菌しか生息しなかった。つまり、この時の生態系は、生産者とされる独立栄養細菌のみであったのである。光合成生物も、動物も、植物もまだ存在しなかった(池田 2018：80)。

いうのは出てきます。毒物が消えないうちに、生きているものたちが先に死ぬと思います。(同)

時間的には、ある放射性物質は人間の尺度を超えているものである。半減期とは、放射性物質の放射性が半減するまでにかかる時間を指す。半減期は放射性物質によって異なる。例えば、福島第一原発事故では、セシウム 134 とセシウム 137 が大量に環境に放出された。セシウム 134 の半減期は二年、セシウム 137 の半減期は三〇年である。つまり現在セシウム 134 の放射性はかなり減少している。しかしセシウム 137 の場合、半分以上の放射性を維持している（Kazashi 2021 : 68)。つまり、福島原発事故の被災地は、短期間では元の状態に回復することはできない。しかし、汚染地域が回復できないわけではない。そのため、科学的な観点から見ると、「昔に戻ることはできない」および「毒素が抜ける前に生き物が先に死ぬ」という石牟礼の見方は、あまりにも悲観的である。しかし、一定期間において、農林水産業で生計を立てている住民たちは、大きな収入減少に見舞われることになる。また、放射性元素を多く含む魚介類と農産物の摂取は、人間の健康に影響を与える可能性がある。そのため、毒素の排出を止めることで、生態系の安全を最大限に保つことができる。石牟礼は次のような言葉を綴っていた。

私が考えているのは、人間だけの歴史ではないんです。それを能に直接表すわけでないけれど、「十万億土」ということばがあります。仏教からきたことばで、十万億土へ行くとか、十万億土には極楽もあるし、地獄もある。いま私たちが住んでいる地球を人間が意識する。私も意識するけれど、地球といえばなんだかコツンとしたような感じがして。あらゆる生きものたちが、草木も、獣たちも、虫たちも含めて、呼吸しあっている……。（石牟礼 2014 : 153）

石牟礼は地球よりも十万億土という言葉を好んでいた。彼女は、生命は無から有を生み出す過程を経ると考えた。宇宙には億土が生まれた。私たちの祖先は、十万億土に草のように生まれた。土は、万物を生んだ元祖の細胞のようなものである（同書 : 154)。つまり、石牟礼の考えでは、人間も他の生き物もすべて同じ祖先である土から来たということである。

Ⅱ 生物多様性の価値

第一章において明らかにしたように、モートンは自然を否定することによって、人間と汚染物質の不可分性を主張している。自然を原始的な状態に戻すことはできない。つまり、自然とは人間によって作られた概念なのである。モートンの提唱する人間と非人間との混合状態は、自然の否定に基づくものである。モートンは地球環境は元に戻せないと考えている。これは本当に意味があるだろうか。モートンは著書『エコロジー思想』(2010）において、人間は生物種のひとつに過ぎず、特別な存在ではないことを指摘している。しかし、なぜモートンは「人新世」という概念を支持しているのか。非営利団体「生物多様性センター」

の事務局長であるK.サックリングが述べたように、「私たちが自然との一体感を感じられるようになったのは、私たちが自然の中で最も強力な力を持っていると判断した瞬間からなのはなぜだろうか。もし、人間と自然という区分けが基本的に常に成り立たないのであれば、なぜ、自分たちが超生物ではなく、種たちの中の種であると信じていたもっと早い時期に、自分たちの自然性を受け入れなかったのだろうか」[66]。もちろんサックリングの発言には、一部の宗教思想、原住民たちおよびアジアの一部の国の自然観は含まれていない。しかし、人間が自然に介入したからこそ、他の生物種の絶滅が加速したのである。ならば、自然を否定することは、人間の自然破壊を放任することと解釈してもいいのだろうか。

生物学者は、生物多様性に対する社会の認識を高め、自然を保護するための政策決定において自分の意見が重視されることを望んでいる。生物多様性は、私たちの衣食住に関わるだけでなく、多くの価値を持っているものである。

タカーチは、生物多様性には科学的価値、生態学的価値があると指摘している。「生物学の研究の素材としての生物多様性は、科学的研究が防げられることなく継続するために不可欠である」（タカーチ 2006 : 227）とタカーチは考えている。具体的には、「生物多様性は生物学の『生きた図書館』であるだけでなく、『より広い営為にインスピレーションを与えることができる』」（同）。筆者は多くの事例は生物多様性の科学的価値を証明することができると考えている。例えば、米航空宇宙局（NASA）をはじめとする米国の研究機関や大学の研究者たちは鳥の飛び方を真似て高性能な無人航空機の開発を進めている[67]。生物多様性は科学者のインスピレーションの源である。また、生物多様性を保全するためには、生物多様性の研究が不可欠である。生態系の価値とは、生物多様性が生態系の安定を維持する能力である。生態系は抵抗性と回復性を備えている。生態系は人類活動の影響に対して抵抗力がある。森林が伐採されたとき、森林は自ら調節して被害を防ぎ、機能し続ける。森林がすべて伐採されると、以前の木に代わって新しい木が生まれ、森林の生態系が回復する。具体的には、いくつかの種は別の種に置き換えることができる。これは余剰性の問題につながる。種の数が多い場合、その生態系は余剰性が高く、代替可能な種が多い。これは生態系の回復力が高いという意味でもある。しかし、人間活動が生物多様性を急激に減らせば、生態系は人間の攪乱に耐えられなくなり、その回復力も失われてしまう（シルバータウン編 2018 : 80-81）。食料と森林がなければ、将来、資源危機に起因する戦争や気候変動など、計り知れない危機に直面する可能性が高い。つまり、生物多様性は地球のエネルギー循環を維持することができる。換言すれば、生物多様性は人類にとって大きな価値を持っている。例えば、オオカミのような食肉類動物たちは「害獣ではなく、自然を安定させ、バランスを保っている

---

[66] Suckling, Kieran. “Against the Anthropocene”, In: *IMMANENCE: ecoculture, geophilosophy, mediapolitics*. 2014.（http://blog.uvm.edu/aivakhiv/2014/07/07/against-the-anthropocene/において 2021.5.20 閲覧）。

[67] Sandhana, Lakshmi.「鳥を手本に『羽ばたき』や『翼の変形』を目指す、新型航空機開発」、平井眞弓・高森郁哉訳、『WIRED』、二〇〇四年五月二〇日。（https://wired.jp/2004/05/20/鳥を手本に「羽ばたき」や「翼の変形」を目指す/において 2022.5.21 閲覧）。

繊細な網の一部となった」（タカーチ 2006 : 234）。そのため、タカーチによれば、多くの生態学者は、「復元生態学」は価値があると提唱している。

タカーチによると、生物学者である D.エーレンフェルドはより多くの人々に自然を直接体験してほしいと願い、非人間中心主義的な解釈で自然保護に取り組んでいる（同書 : 48）。しかし、エーレンフェルドは生物多様性保全をより多くの読者たちに理解してもらうためには、生物多様性の意味を経済的価値のアプローチで解釈することが避けられないということも認識している。例えば、「熱帯雨林（あるいは深海、農地の土壌、廃棄した土地でもいい）がさまざまな化学薬品、繊維、樹脂、酵素、遺伝子などの宝庫であり、われわれはそれを加工し、抽出し、交配し、精製し、殴りつけることで、病気を治し、飢えを満たし、富をもたらすような製品をつくり出すことができるということだ」（同書 : 237）。自然が莫大な利潤をもたらすからといって、自然を軽視していいというわけではない。むしろ、長期的な経済的利益のために、環境保全と開発推進のバランスを図るべきである。タカーチは、生態学者の N.マイヤーズが『沈みゆく箱舟』の中で生物多様性の化学的、医学的、工業的価値に言及していたことを指摘する（同書 : 238）。そしてタカーチは生態学者の S.J.マクノートンが語ったアスピリンの例も挙げている。アスピリンは最初に植物から作られた製品であり、頭痛や腹痛のときにヤナギの枝を噛む民間療法に由来するものである（同書 : 239）。また、生物多様性がもたらす景観の美しさや、ストレスを癒す面での価値も見逃せない。

タカーチは、レオポルドが自然を資源として否定することは偽善であり、自然がもたらす心身の欲求を満たす能力も重要であると考えていたことを指摘する。自然保全については、レオポルドは科学技術と自然との距離を保ちながら、自然がもたらす詩的な美学に没頭した。レオポルドは道徳と宗教の啓示を生態学および進化学に見出した。彼は、無神論者でも自然の神秘によって信念が揺らぐと考えた。生物が互いの制約の中で競争することは、個人の自由と集団の協力という倫理的な関係にも啓示を与える。すなわち、生物がもたらす信念や情愛の価値は、科学では十分に説明できない（同書 : 33-36）。一方、モートンは、あまりにも美しい自然に注目することを望まなかったとしても、イギリスの詩人 S.T.コールリッジによって書かれた『老水夫行』（*The Rime of the Ancient Mariner*）の中で、海蛇という「おぞましいもの」に神聖さを見出した（Morton 2010）。これも生態学者の C.S.エルトンが提示した「美学的で知性的な」ものである。タカーチはエルトンの環境倫理観を解読して、自然は芸術家や詩人の霊感の源であり、創造力の源でもあるということであると提示している（タカーチ 2006 : 40）。同時にタカーチは、エルトンの言説はプラグマティストを納得させられないのかもしれないと考えている（同）。したがって、生物多様性の保全をいかに実現するかという問題は、多くの学者を悩ませてきた。タカーチが語ったように、生物学者たちは「自然界をどのように提示すればその運命についての理解を共有できるかで苦闘してきた」（同書 : 27）。環境保全者たちは、私的なイデオロギー的には自然を非人間中心主義的に扱うべきだと主張しているが、公的な実際には科学技術に屈服せざるを得ない（同）。具体的には、一方では、環境保全者は、自然に対する私的な愛から、人間と自然の平等をイデオロギ

ー的なレベルで主張する。言い換えれば、人間は他の生物と比べて特別な存在ではない。しかし一方で、自然を保護しようとすれば、人間の力、すなわち科学技術の進歩に頼らざるを得ない。これは、環境保全者の非人間中心的な立場に逆らうものだと思われる。しかし、いずれにせよ、環境を保護するために技術をうまく活用することは、環境保全者の希望である。

Ⅲ 人間の責任

モートンは自然の否定や地球環境の回復不能を断言している。しかし、モートンは、これは歴史の終わりではなく、歴史の始まりであり、より正確に言えば人々の思考の始まりだと主張した。モートンは『エコロジー思想』の最終章で次のように述べている。

> 環境主義はしばしば黙示的である。それは世界の終わりについて警告し、それを回避しようとする。レイチェル・カーソンの『沈黙の春』（*Silent Spring*）の本のタイトルがそのことをすべて物語っている。しかし、事態はそんなふうではない。要するに、世界の終わりはすでに起こってしまったのである。私たちは DDT を散布した。私たちは原子爆弾を爆発させた。私たちは気候を変えた。世界の終わりの後とはこういうものである。今日は歴史の終わりではない。私たちは歴史の始まりに生きている。エコロジーの思想は、前向きに考える（thinks forward）。この思想は、夢から覚めたばかりの人のように、私たちがちょうど始まったばかりであることを知っているのである。（Morton 2010：98）

モートンはいつも、もっと大きく考える（thinking big）ようにと励ましてくれる（Morton 2010）。大きく考えることとは簡単に言うと、人間の尺度内の世界だけを考えるのではなく、人間は人間の限界を超えた世界で生きているということを認識すべきだということである。つまり、人間とハイパーオブジェクトは分離できない。人間がいなくなっても、地球も、宇宙も、核放射線もなくなるわけではない。人間はちっぽけで有限である。つまり、モートンは人間がいない世界を考えることを促すのである。これがモートンの立場である。斎藤はモートンの立場を認めず、次のように述べていた。

> 私は全然違って、人間がいるからこその世界を考えようというスタンスです。マルクス主義者はヒューマニストであり、人間の自由な発展のためにどうすべきかを考えます。冒頭でも述べましたが、そのための大分岐がこれからの一〇年で、前例のないような試みが必要となる。例えば、脱成長の理論がいままた海外では盛り上がっています。ヨハン・ロックストローム自身も主張しているように、「プラネタリー・バウンダリー」の問題を考えると、脱成長的な方向に向かわざるを得ない。そこで問題となるのは、いかにしていままでの近代主義的・資本主義的な発想を改めていくかということです。つまり、もし人間が生き残ろうとするのであれば、どういう政治的・

経済的な枠組みを世界的に作っていくべきか。

もう一つには、「もしこの気候危機を防げなかった場合にわれわれはどういう対応をすべきか」という問いがあります。もし資本の力が強すぎて、あるいは人類が愚かすぎてこのまま気候変動が悪化し続けたとき、どう対策をとるのか。何億人規模での環境難民が出るという予測もあります。いまの枠組みが成り立たなくなったとき、賠償や資源配分をどうするのか。そういった政治経済的な問いに思想は答えなくてはなりません。

気候変動は人間が引き起こしていることなので人間しか究極には解決できない。そこでつねに中心にあるのは人間ですが、人間のために何でもしていいということには当然なりません。人間が生き延びることが同時にほかの生き物も生き延びることにつながる。だからダーク・エコロジー的な発想に共感できないんですよね。（斎藤、篠原 2020：167）

斎藤に言わせれば、世界がひどく汚染されているという事実を受け入れるよりも、その状態を変えることが今やるべきことなのである。斎藤は、人間が環境問題について何の努力もしないで死んでいくことを受け入れられない。人類が自然を破壊し続ければ、私たちの子供の世代はさらに大きな危機に直面する可能性があると斎藤は考えている（同書：172）。ここで見逃してはならないのは、経済的にも時間的にも人間の差異によって不平等があるという事実である。たとえばリスクに直面した場合、南側の貧しい国の人は北側の先進国の富裕層よりも多くの損害を被る可能性が高い。あるいは我々の子孫が我々の過失のためにもっと大きな代価を払わなければならない。モートンの地球環境の回復不能に関する発言は、貧しい国の人々や将来の世代の利益を犠牲にして発したものであろう。品川は J.ロールズの正義論を参照しながら、運に左右される配分は公正ではないと指摘する（品川　2015：156）。品川は、現在世代が自分たちの利益のために未来の世代の利益を犠牲にしているかもしれないと考えている（同書：228）。しかし、世代間に存在する時間の不可逆性は、世代間の平等を難しくする。そのため、品川は、哲学者である H.ヨナスの責任原理を採用して世代間の平等に新しい視点を提供することは可能であると考えている。品川によると、世代間の時間的な差異により、x が y に対して責任を持つときには、両者の関係は対等ではない。つまり y の生死は x が握っているということである（同書：227-228）。ヨナスの責任原理は人間だけに限定されるものではなく、他の生物種に対する人間の責任をも含んでいる（同書：228）。品川は、ヨナスの考えでは、価値は相対的であり、善は相対を超えるものであると考えている（同）。どんな生物も生き続けることを目的としているため、それを実現するのが善である（同）。大量の生物種を絶滅させたのは人類である。しかし、ヨナスによれば、責任を自覚できるのは人間だけである。そのため、人間は他の生物種に責任を持ち、すべての生物が生き続けるために変化を起こすべきなのである（同書：229）。

一方、人間と共存する非人間的な範囲に自然物と人工物を統一するモートンのやり方にも、斎藤は異議を唱えている。斎藤によれば、「ジオ・エンジニアリングや原子力発電といった、いろいろなかたちでのアースシステムに対する介入を肯定するという『エコ・モダニ

ズム』の発想に繋がっていってしまうという危惧があります」（斎藤、篠原 2020：164）。斎藤のみならず、高木も放射線エネルギーへの危惧について発言していた。高木は放射能の問題は原子力だけの問題ではなく、放射性廃棄物の問題にもつながると指摘した。これらの廃棄物の中には微量だが毒性の極めて高い成分（例えばダイオキシン）が含まれている。毒性は慢性的で数世代に渡る。そしてこれらの人工物は自然の循環の中で分解されることはない。このような物質を大量に生産し蓄積することは最終的に極めて悪い結果を招く。従って、エネルギー・産業政策の調整、脱原発社会の構築が必要である。これも真剣に考えなければならない問題である（高木 1999：218）。

科学的な事実として、一度エネルギー循環に組み込まれた汚染物質は、生物から排泄されることはない。その代わり、生物濃縮により生体内に蓄積される。また、化学物質が集水域の底に沈殿し、生物に大きな被害を与えることもある。生き物に害を及ぼす化学物質の中には「内分泌撹乱物質」がある。「これは工業や農業に使われる多種多様な化学物質で、『性差をあいまいにする』働きがあり、動物のホルモンや生殖能力をかき乱し、ほとんどの場合、オスのメス化を引き起こす」（シルバータウン編 2018：110）。批評家の若松英輔が唱道したように、「壊したのが人間であるなら、可能な限り再建するのも人間の責務なのでしょう。それは自然を守るためだけではありません。自分たちのいのちを維持し、つないでいくために自然との関係を結び直さなくてはならないのではないでしょうか」（若松 2016：82）。人間は環境保全の重責を担い、破壊された自然を健康な状態に戻す努力をすべきである。

第二節　野蛮と並行する文明―生物多様性の喪失

Ⅰ　自然の破壊

種多様性が最も高い陸上の生態系は熱帯雨林である（本川 2015：59）。陸上種の半分は熱帯雨林に生息する。熱帯雨林も世界の森林の五～六割を占めている（同書：50-51）。さまざまな樹木が階層構造をなし、多様な動物に利用されている。

階層構造は熱帯雨林の大きな特徴である。木の先端部に生えている葉が冠のように木を覆っている。連なった樹冠が森全体を包み込んで林冠を形成している。三〇メートルから四〇メートルの高木が林冠を形成しており、ここは高木層と呼ばれる。より高い木は突出木層を形成する。高木層の下に亜高木層、低木層、草本層がある。この五つの階層はそれぞれ異なる環境条件を形成する。つまり、階層ごとに異なる種類が生息しているのである。たとえば、木の幹の高い位置に着生植物が生えていたり、林冠の位置に甲虫が棲んでいたりする（同書：62-64）。また、熱帯雨林の生物多様性を生み出す要因として、多様な生物間の共生関係が挙げられる。熱帯雨林の被子植物は、鮮やかな花を咲かせて昆虫に受粉させ、その実は鳥やコウモリなどに食べられ、糞などの形で森林のいたるところに撒かれる。多様な被子植物、多様な昆虫、多様な鳥などの動物が熱帯雨林における高い生物多様性に寄与してい

る。二つの生物の間には、互いに利を得て共生する関係がある。植物と昆虫は送粉共生、植物と鳥などは種子散布共生の関係にある。そしてこの二つの関係が植物の成長を促している。つまり植物と昆虫と鳥は繁殖共生の関係にある。植物は他の生物にも栄養を与えている。熱帯雨林の生物は、さまざまな繁雑な共生関係の中で生物多様性を維持している（同書：66）。言い換えれば、生物間の関係は多様な生物の進化に関係しており、生物の多様性にとって重要な役割を果たしている。しかし、人間活動による生物間の関係の激変は、生物多様性に大きな危機をもたらしている。熱帯雨林における森林の消失は、生物多様性の喪失を意味する。生物学者の本川達雄によると、「熱帯林の伐採により、一日に一〇〇種以上が絶滅している」（同書：99）。

熱帯林の生物多様性の喪失は、木材の市場需要、人口過剰、不合理な農業発展という陳腐な理由だけによるものではない。生態学者である J.H.ヴァンダーミーアと I.ペルフェクトは『生物多様性〈喪失〉の真実：熱帯雨林破壊のポリティカル・エコロジー』において、熱帯林の消失が巨大な「因果関係のネットワーク」を明らかにしたとしている。

まず、ヴァンダーミーアとペルフェクトは技術と環境保護の側面から熱帯雨林破壊の原因を説明する。彼らはコスタリカの熱帯雨林を例として挙げる。コスタリカ政府は対外債務を返済するために、多国籍企業が熱帯雨林に土地を買って牧場や農場を建設することを許可していた。実際、二〇世紀初頭には伐採事業で多くの木を伐採し、運搬の便宜を図っていた。その後、特に一九九〇年代初頭にバナナの需要が急増したため、多くの大手のバナナ会社が熱帯雨林の土地を購入して大規模なバナナの栽培を始めた。コスタリカの大西洋岸の土地は、生物保護区と小作農の耕作地を除くほとんどがバナナ・プランテーションに覆われている。コスタリカのバナナ生産者組合（CORBANA）によると、コスタリカの大西洋岸の地域のバナナ作附面積は一九八五年の二万ヘクタールから一九九七年には四万六五五七ヘクタールへと拡大した（ヴァンダーミーア、ペルフェクト 2010：6-11）。酸性度の高い熱帯雨林の土壌は作物に十分な栄養を与えることができないため、農業事業者や農家などは伐採した木や植物などを燃やす。そうすれば、植物が燃焼によって放出した栄養素を農作物が吸収できる。しかし、この方法では一年目の収穫しか確保できない。そこで農家は、より多くの熱帯雨林を農地として開発して行くことになる。また、同じ作物を大量に栽培すると、病虫害の問題も多くなる。熱帯雨林には人類の知らない無数の植食者が潜んでいる。これらの植食者は数日で作物を食べ尽くす（同書：53-54）。そして、大規模な農薬や化学肥料が熱帯雨林をさらに悪化させる。バナナのプランテーションを設置するためには、土壌を平らにならし、排水溝を整備する必要がある。この一連の行為によって、土壌の物理的性質が変化した。そして、大量の殺虫剤を散布することで、植物に大量の残留殺虫剤が蓄積されることになる。長い目で見て、どのような結果になるかはわからない（同書：85-87）。つまり、熱帯雨林の農地転用が森林破壊の大きな原因となっている。単純な木材伐採であれば、熱帯雨林はある時期が過ぎれば回復する。しかし、農地の開墾は森林の回復を遅らせ、被害森林の悪化に拍車をかけている。しかし、これは理由のごく一部に過ぎない。ヴァンダーミーアと

ペルフェクトは、熱帯雨林の破壊の最も根本的な理由は、食の不安定と貧困だと考えている（同書：17）。

さらにヴァンダーミーアとペルフェクトは国際的な政治・経済の側面から、熱帯雨林の破壊の理由を説明する。「つまり、国際的な銀行制度、各国政府、アメリカ政府その他先進国の政府、そして、先進国の消費者と投資家らすべてが重要な役割を演じている」（同書：244）。まず、社会経済的な観点から見ると、熱帯雨林の森林破壊は輸出作物の市場価値と連動している。バナナやゴムなどの作物の市場価値が下がると、地元の貧しい労働者が大量に失業し、小作農に戻らざるを得なくなる。土地の所有権を持たない貧しい農民は、熱帯雨林に土地を求めるしかない。すべての元凶は、国際政治の展開にある（同書：115）。その要因は、国際政治の動きと関係している。大衆の不安を解消し、世界経済の低迷を回避し、世界経済システムの安定を守るため、一九四四年のブレント・ウッズ会議では、国際通貨基金（IMF）と世界銀行（国際復興開発銀行）が創設された。ところが、この二つの国際組織は、南側諸国に壊滅的な影響を及ぼしている。財政赤字国への緊急支援を標榜した IMF が、不良融資で経営が悪化した銀行の後ろ盾になることもある。ヨーロッパと日本の振興を支援しようとした世界銀行は、南側諸国を主な出資対象にした。その結果、南側諸国の対外債務の増大は、現地の人々をさらに貧困に追い込んでいる。また、イギリスやアメリカは第三世界の国々を弾圧する。例えば一九五一年にイランの首相に選ばれたムハンマド・サモデクは、イランの石油資源を再び支配しようとしたが、イギリスの情報機関 MI6 とアメリカの CIA の干渉によって失脚した（同書：136-140）。中央アメリカ諸国の政府はフルーツ会社の投資を拒むことができなかった。ヴァンダーミーアとペルフェクトは、世界貿易機構（WTO）の設立も、グローバル化の過程でアメリカが貿易制裁を行うためのツールの一部になっていると考えている（同書：147）。北部の豊かな国と南部の貧しい国の貧富の格差は、歴史の流れとともに悪化してきた。世界の八三パーセントの貧窮人口が地球資源の三〇パーセントしか占めていない（同書：149）。このような資源の不平等な分配は社会正義と道義に反する。従って、肝要なのは、「北側の豊かな国と南側の貧しい国という（かつてもそうだったし、いまも変わらない）固定された構造の世界システムに全面協力することは拒否する」（同書：143-144）、ということである。

したがって、熱帯雨林の破壊問題は、多くの要因が相互に作用した結果である。木材の伐採、農業の発展、化学肥料への依存などの技術的・環境的要因や、国際的な経済・政治情勢の変化が、熱帯雨林の破壊に拍車をかけている。すなわち、熱帯雨林の喪失という問題を完全に解決するためには、新しい農業開発技術、社会的公正、貧困撲滅が根本的な方法であることをヴァンダーミーアとペルフェクトは示している。

Ⅱ 文明のあり方の模索

文明の進歩は、犠牲という言葉と切り離せないようである。斎藤が言うように、富裕国は

周辺の国々を犠牲にして発展してきた。資本主義も、ムーアが議論したように、自然を極めて安価でコストのかからない資源と見なし、人間の一部を自然の領域内に包含させることで、急速な発展を遂げたのである。日本の近代産業の躍進は、この事実を物語っていると見られる。日本の公害の原点とされる足尾銅山鉱毒事件[68]や水俣病事件は、近代産業の急速な発展の代償であった。これらの残酷な事実は、残虐行為に直面する文明がいかにもろいものであるかを示している。

第一節で示した生物多様性の定義から、生物多様性には多様な文化や個人の意志を尊重することも含まれることがわかる。文明の進歩ための犠牲は、自然の生物多様性の激減だけでなく、個人意志の無視を意味するのである。アウシュヴィッツという非人道的な事件が人類の歴史に起こったとき、ドイツの哲学者 D.W.アドルノは文化批判のあり方を考察した。『プリズメン』（*Prismen －Kulturkritik und Gesellschaft* 1955）において、アドルノは「アウシュヴィッツ以降、詩を書くことは野蛮である」（アドルノ 1997：36）という身の引き締まるような一文を書いた。この一文は、以下の文章に登場する。

> 社会がより全体的になれば、それに応じて精神もさらに物象化されてゆき、自力で物象化を振り切ろうとする精神の企ては、ますます逆説的になる。非業の宿命のもっとも鋭い意識でさえ、単なるお喋りに堕すおそれがある。文化批判は、文化と野蛮の弁証法の最終段階に直面している。アウシュヴィッツ以降、詩を書くことは野蛮である。そしてそのことがまた、今日詩を書くことが不可能になった理由を言い渡す認識をも侵食する。絶対的物象化は、かつては精神の進歩を自分の一要素として前提したが、いまそれは精神を完全に呑み尽くそうとしている。批判的精神は、自己満足的に世界を観照して自己のもとにとどまっている限り、この絶対的物象化に太刀打ちできない。（同書：36）

アドルノにとって、ナチスのユダヤ人虐殺という残虐行為の後に詩を書くことは、あまりに残酷で偽善的なことだったのである。そんな人間の醜い、汚い面を前にして、どうして詩歌で万物を美化することができるだろうか。社会の発展によって、私たちの精神は物象化されている。この完全に物象化された精神を通して表現される言葉は間違いなく偽善的である。このような詩は、良心への裏切りであり、人類の犯罪を美化し、隠蔽しているのである。

---

[68] 栃木県の足尾銅山は、一六一〇年（慶長一五）に発見された。一七世紀末には、この銅山で約千五百トンの銅の産出量があったことで知られている。しかし、江戸時代末期には、その生産量は次第に減少していった。明治時代になると、新しい炭鉱技術の導入により、一八八一年（明治一四）に再び大きな鉱脈が発見された。日本の銅の産出量の四分の一が足尾銅山で生産され、「東洋一の銅山」と呼ばれた。しかし、銅の大量生産に伴い、鉱毒の問題が深刻化した。鉱毒は、渡良瀬川の中・下流域を汚染し、土地を汚してしまった。栃木から群馬にかけた流域では、漁業だけでなく農業も大きな打撃を受けていた。さらに、足尾銅山から排出される亜硫酸ガスによって、多くの樹木が枯れ、周辺住民の健康も損なわれた。一八九六年（明治二九）九月、渡良瀬川で大洪水が起こり、周辺地域はさらに深刻な中毒症状に見舞われた。胎児や乳幼児の死亡率は、以前の二倍以上と判明した。鉱毒被害地となった松木村は一九〇二年（明治三五）に廃村となった（NHK 取材班 2012：157-164）。

ナチスが鎮圧された後、命の尊さを讃え、ナチスを非難する詩が無数に生まれた。しかし、そのような詩は、国家や国民には何の意味もない。人類の野蛮と罪悪を皆が見なければならない。アドルノが詩を書くことを否定することは、少し極端に思われるかもしれない。しかし、文明と野蛮の弁証法的な関係こそが、アドルノの究極命題であった。つまり美と純潔の詩は自己省察の要求に達しない。一方、石牟礼の詩は、アウシュヴィッツ以後、詩を書くことを諦めてはいけないということを、アドルノに語っている。水俣病事件は、詩が世界に伝えるべき人間の醜さと美しさのすべてを映し出している。同時に、石牟礼は水俣病事件への痛烈な反省も行っていた。石牟礼は『花の億土へ』において次のように語っていた。

> 美とは悲しみです。悲しみがないと美は生まれないと思う。意識するとしないとにかかわらず、体験するとしないとにかかわらず、背中合わせになっていると思います。そしてあまり近代的な合理主義では、悲しみも美もすくいとれないです。美も退化の一路を辿っていると思う。悪のほうは増えていると思います。暗黒のほうは気がつかない。表情がなくなってきました。たとえば都市のつくり方も、大地の表情も見えない。コンクリートで生き埋めにしてるから。（石牟礼 2014：162）

石牟礼にとって、美と悪は表裏一体である。どちらかを失うと、もう一方は存在しなくなる。水俣病被害者たちの苦しみは、美しい文章の中に体現された。そして、『苦海浄土』における加害者の悪さこそが、いのちの美しさを輝かせているのである。若松が述べたように、「かつて『かなし』は『悲し』、『哀し』だけでなく、『愛し』、『美し』と書いても『かなし』と読んだ、と書きました。悲しみの底には、悲しみを生きる者を哀れと思い、深く憐憫（れんびん）を感じる心があり、悲しみとは、自分が愛する者を深く認識する契機であり、その経験の奥には底知れない美の世界が広がっている」（若松 2016：39）。つまり、「『苦海浄土』は、悲しみの記録です。しかし、それは先人たちが『かなし』という言葉に込めた意味の深みに根差した『かなしみ』の歴史だったのです」（同）。筆者は、石牟礼の詩はアドルノに強力な反撃を与えるかもしれないと考えている。アドルノは『否定弁証法』（*Negative Dialektik, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main* 1966）で、「アウシュヴィッツ以降、詩を書くことは野蛮である」という考えを修正していた。アドルノは次の言葉を綴っていた。

> 強制収容所のなかでサディストたちは彼らの犠牲者に対して、「明日になればお前は、煙となってあの煙突からゆらゆらと天に上って行くんだぞ」と言ったが、これは一人一人の生命がどうでもいいものになっていることを告げるものである。そして歴史はこの方向に進んでいる。すでに形式的自由が与えられていたときにも一人一人は代替可能であり、取り換えることができた。その点では、抹殺者たちの足蹴にあう場合と同じことであった。この世界の法則はどこでも普遍的に個人的利益そのものであり、そうした世界のなかで一人一人は、どうでもよいものになってしまった自我以外にはなにも持っていない。そうである以上、慣れ親しんでいたこの形式的自由

が持つ傾向を最後まで遂行するならば、身の毛のよだつほどの恐ろしいこととなる。この枠組みから脱出させてくれる可能性がないに等しいのは、収容所の、電流のとおった鉄条網の塀の外に出られないのと同じことである。

永遠につづく苦悩は、拷問にあっている者が泣き叫ぶ権利を持っているのと同じ程度には自己を表現する権利を持っている。その点では、「アウシュヴィッツのあとではもはや詩は書けない」というのは、誤りかもしれない。だが、この問題と較べて文化的度合いは低いかもしれないが、けっして誤った問題ではないのは、アウシュヴィッツのあとではまだ生きることができるかという問題である。偶然に魔手を逃れはしたが、合法的に虐殺されていてもおかしくなかった者は、生きていてよいのかという問題である。彼が生き続いていくためには、冷酷さを必要とする。この冷酷さこそは市民的主観性の根本原理、それがなければアウシュヴィッツそのものも可能ではなかった市民的主観性の根本原理なのである。それは殺戮を免れた者につきまとう激烈な罪科である。（アドルノ 1996：440-441）

アドルノの考えでは、資本主義の発展とは社会が絶対的統合に向かって発展することである。このような構造では、異なっている自由が抑圧される。それはすなわち、アドルノのいう非同一性の破滅である。一方、死は、行政管理によってアウシュヴィッツでの同一性となった。価値交換を志向する資本主義文明は間違いなく個人の意志に無関心である。そのため、アドルノは「生きた個々の人間を度外視することなしには、交換は不可能であろう」（同書：431）と考えていた。だからこそ、個人の意志を表現する必要があるのである。被害者たちの痛みを歴史に刻み込まなければならない。その裏にある卑劣な罪業を、一部の人が助かったことで覆い隠すのではない。石牟礼は文明が野蛮に勝つことを願った。彼女は 3.11 の東北大震災に見舞われた東北地方の人々に、徳の復興の可能性を見出した。石牟礼は、東北地方では農作物や海産物が都会の人々に栄養を与えてきたと指摘した。しかし、災難が起きた東北地方では暴動は一度もなかった[69]。彼女はこれを神様の試練だと考えていた。このような時機こそ、美しく、可愛く、そして優しい人間の名を歴史に残すべきである。従って、石牟礼は「人類は明らかに絶滅のほうに向いていますから、それを日本人が止めてみせるのかなと思ったりして。そういう思いやりでもって。もっともよい人間として蘇るというか、蘇ってみせるというか、そのお試しにあっているんじゃないかという気がします」（石牟礼 2014：118）と述べていた。石牟礼に言わせれば、文明の「絶滅と創成とが同時に来た」（同書：124）。世界は、相次ぐ環境危機によって、より混沌とした状態に陥っている。しかし、石牟礼は、混沌が文明の回復の障害になるとは考えていなかった。石牟礼によると、「絶滅するにしても、一種、純情可憐な他者のことを思いやる心で結ばれていく部分を抱きなが

[69] 3.11 東日本大震災以降、地震や原発事故の影響を受けた、あるいはそれに便乗した犯罪や問題行為は発生したことがある。「物質不足で被災地の盗難増加　ガソリンや食品など被害」という記事において、東日本大震災から六日が経過し、被災地の一部では窃盗などの犯罪が相次いでいることが報告されていた。（この記事の詳細は https://www.asahi.com/special/10005/TKY201103170165.html において 2022.6.26 閲覧）。

ら、絶滅するならいっしょに絶滅してもいい」（同）。この一文は、石牟礼の文明喪失への憤りとともに、徳の復興への切望を示唆している。そのため、石牟礼は「純度の高い徳義みたいなものを抱きながら、心の手を取り合って死ぬことができたら、それもいいかな」（同）と述べた。

それでは、真の文明とはどういうものか。足尾銅山鉱毒事件に生涯を捧げた田中正造がその答えを提示してくれる。田中は「真の文明は、山を荒らさず、川を荒らさず、村を破らず、人を殺さざるべし」という言葉を亡くなる前年の日記に書き残している（NHK 取材班 2012：177）。田中は、一八九〇年（明治二三年）に衆議院議員に当選し、その後、足尾銅山の鉱毒事件を国会に持ち込んだ。しかし、田中は、国会のあいまいな態度に失望した。結局、田中は一九〇一年（明治三四年）に衆議院を辞職し、その年の一二月に明治天皇に直訴することを決意した。直訴は失敗に終わったが、国民の注目を集めることになった。政府は世論に押され、鉱毒事件の解決策を打ち出すことになった。政府が設置した調査委員会は、この毒害を洪水によるものと結論づけた。そこで、政府は洪水を防ぐために「遊水池」を作ることにしたのである。しかし、これは渡良瀬川下流域に鉱毒水を溜め込んでいるだけで、問題の根本的な解決にはなっていない。そこで、田中は鉱毒問題の中心地の谷中村に移住して、遊水池建設の反対運動をすることにした。谷中村において、田中は「水の思想」を理解するようになった。田中は、治水策は水の哲学に沿ったものであり、人間の意志で左右されるものであってはならないと指摘する。さらに、政府は経済発展のために地域の人々や自然を犠牲にしてはならない。すなわち、「治水は『天理』に即すべきものである、つまり自然を壊さないことが一番大切なのだ」（同書：178）。熊本大学の教授である小松裕によれば、自然理性を冒涜する手段は、「人造の文明」である。「『人造の文明』は、本当の利益を人間にはもたらさない。『真の文明』とは、山を愛し、川を愛し、村の自治を大切にし、人の『いのち』を守っていくものである」（同書：177）。田中の思考は人間中心主義から離れている。彼は、人間は自然に比べて特別なものではないと考えた。人間と自然は相互依存的な共生関係にある。谷中村の住民たちも、そのような思いで暮らしていた。だからこそ、真の文明は水俣病事件や足尾銅山鉱毒事件のような悲劇を許してはならない。

第三節　文明の進路

Ⅰトップ・ダウンの力

モートンに言わせれば、自然は健康な状態に回復することはできない。しかし、スウェーデンの環境学者である J. ロックストロームは、自然は健康を取り戻すことができると信じている。ロックストロームは他の約二〇名の研究者とともに、科学誌『ネイチャー（Nature）』の二〇〇九年九月号に「人類にとっての（地球の）安全な機能空間（A Safe Operating Space for Humanity）」という論文を発表した。この論文において、「プラネタリー・バウンダリー

（地球の限界）」という概念が紹介されている（ロックストローム、クルム 2018：2）。ロックストロームは、継続的な計測や監視を通して、重要な自然システムの境界を理解したいと考えている。なぜなら、地球の気候や生物多様性などの閾値の境界がどこにあるのかを理解してこそ、人間は災害につながる自然の転換点への到達を回避することができるからである。ロックストロームによると、「新たな科学的な研究や論争によって、プラネタリー・バウンダリーという視点が必要であることが証明された。安全な限界の範囲内で、気候システムや成層圏オゾン、海洋酸性化や現存する森林などの重要なシステムを管理し、河川や陸地の淡水域を十分に確保し、生物多様性を守り、大気汚染や化学物質の放出を防止する限り、これから何世代にもわたって繁栄する未来を確保できると科学的に確認されたのだ」（同書：3）。

ロックストロームは地球には回復力があると語った。気候が安定し、空気の質が良好で、植生率が高く、生物多様性が豊かなとき、地球は外部からの影響をうまく抑えることができる。しかし、過去の人類の過度な搾取によって地球は回復力を失っていた。つまり、地球は生物物理学的な回復力を用いて外乱を軽減することはできない。人間の破壊の度合いが重要なシステムの閾値を超えると、地球のフィードバックは擾乱を抑制する状態から擾乱を強化する状態へと転換する（同書：61-63）。石牟礼が語ったように、「人間は有限で、地球も、宇宙も有限だろうと私は思っています。いますぐではないけれども、先々、人間は自滅する要素ももっている」（石牟礼 2014：228）。しかし、ロックストロームは、人類の発展をプラネタリー・バウンダリーの文脈で真剣に考える人が少ないことを指摘している（ロックストローム、クルム 2018：65）。ロックストロームによると、化学や大気汚染について、政策立案者は通常、地域ごとに目標を設定して、「限界負荷」、「最低基準」または「許容限度」などを定義している。しかし、これらの基準は、人体がどれだけ耐えられるかを決めた上でのものである。ロックストロームが提案したプラネタリー・バウンダリーの範囲内発展は、この妥協から抜け出そうとするものである（同）。バウンダリーを定義するのは、非常に困難である。しかし、ロックストロームは、リスクの判断は、現時点で得られる最良の知識に基づいて行うことができると考えている。ロックストロームの研究によると 地球の状態を決定するのは、気候システムと生物多様性である。従って、この二つの「中核的限界値」が健全な状態であることを確認する必要がある。森林や土地などの境界線を配慮しながら、二酸化炭素の排出量を削減する。そして、食物連鎖の頂点に立つ捕食者の保護を強化する必要がある（同書：72）。

そこでロックストロームは、新しい経済と政治のパラダイムを提唱し、新たな政策の手段が後に続くことを期待している。具体的には、「エネルギーや食料、健康、そして都市開発の領域で多くの技術を発展させる最善の道は、長期的かつ野心的な政治的目標を設定することである。それには、持続可能性の確保につながる技術革新の展開に対して限界条件を設定する規制の枠組みとインセンティブ政策を、適切に結び付ける必要がある」（同書：152）。そして、「回復力があり、正しく機能する地球システムを求める権利を各個人がもつことを

国際的に認めるなど、新しい法規制や規範、価値観が必要だ。また、協働で取り組みを進めるための効果的な法令遵守の仕組みも求められる」（同書：165）。同時に、「地球規模の持続可能性に向けた新たな戦略を策定する必要がある」（同）。斎藤は資本主義の社会システムに矛先を向けて、新しい発展戦略を提唱する。彼は資本主義が利益を最大化するために安価な労働力を奪取し、自然を無限に消耗するという生産原理を批判した。斎藤にしてみれば、モートンのように日常を気にしない思想は「現状を維持したい資本にとって非常に好都合」（斎藤、篠原 2020：170）である。この危機をどう生き抜くかの答えを求めて、斎藤はマルクス主義に新たな注解を施した。斎藤はマルクスの思想が一八六八年以降、大きく変わったと指摘している（斎藤　2020：171）。具体的にいえば、マルクスは生産力至上主義を脱し、脱成長コミュニズムに移行した。斎藤の考えでは、マルクスは青年期に経済的発展を追求していた。しかし、その後の研究の中で、マルクスは資本主義が進歩をもたらすのではなく、むしろ自然への貪欲さが社会の停滞をもたらすことに注目した。斎藤はマルクスが平等を基礎とする共同体を望んでいたことを指摘している。共同体では、土地、家屋などはすべて公有財として平等に分配され、売買は許されない（斎藤 2020：183）。いいかえれば、共同体が資本主義と最も異なるのは、生産力の向上を目指さないことである。つまり、共同体は持続可能な循環経済を発展させる。このような生産方式が実現できるかどうかにかかわらず、脱成長という開発目標は、多くの政策決定者にとっての選択肢となり得るものである。しかし、プラネタリー・バウンダリーの範囲内で開発を進めることは容易なことではない。ロックストロームは次のように語っている。

> プラネタリー・バウンダリーの範囲内で、安全に機能する豊かな未来を築くには、地球レベルと地域レベルの両方で、大胆かつ新しいガバナンスを作っていく戦略が必要である。地球レベルで変革を起こすには、関係諸機関や実施組織、国際司法制度、国際的協力関係、新たな貿易協定、地球規模の規制といった「トップ・ダウン」の力だけでは十分ではない。また、地域レベルの変革も、草の根活動家や地域リーダー、ビジネス・イノベーター、教育関係者、官民協力による「ボトム・アップ」の効果的な取り組みだけでは十分でない。どちらのアプローチも必要となる。「トップ・ダウン」と「ボトム・アップ」の両方を結び付け、協働させる必要があるのだ。（ロックストローム、クルム 2018：162-163）

そのため、経済発展様式、政策決定機関、価値観、ライフスタイルを大きく変える必要がある。そして、このような大きな変革には、政治家、企業経営者、一般市民などの社会のあらゆる分野の人々の協力が必要である。また、ヴァンダーミーアとペルフェクトは、熱帯雨林の生物多様性保全を実現するためには、伐採、植林、農業のあり方を変えていく必要があると指摘した。彼らは自然保護区の保護だけでなく、保護区と保護区の間にある農地などにも目を向ける必要があると提唱している（ヴァンダーミーア、ペルフェクト 2010：211）。生物多様性の保全は、開発前に計画に盛り込むべきである。例えば、大面積の単一栽培を停

止し、いろいろな作物を栽培することである。あるいは、熱帯雨林の土壌の種類によって、さまざまな作物を植える。しかし、このような保全計画は、政治的な行動なしには成り立たない。つまり、小作農の土地所有権の確保、労働者の雇用確保、新しい政治勢力の指導、地域団体との連携などが必要である。

Ⅱ ボトム・アップの力

第四章の議論を参照すると、近代産業の発展がもたらす副作用の安全基準を判断する上で、知性で判断する専門家と、個人・家族の感情で判断する被害者の間に大きな乖離があることがわかるだろう。水俣病事件は、「何が安全か」という問題を分析する際に、専門家が社会や人々の生活から切り離されていることを露呈している。彼らは、副作用の影響を数値だけでなく論理的に測定することにも慣れている つまり、専門家たちは、被害をもたらしている企業の論理で考えているようなのである。一般市民が被害を受けることは、金銭や数字だけで測れるものではない。有機水銀の毒によって、生きる権利、健やかに生きる権利が奪われてしまったのである。さらに残酷なのは、死んだ大切な人が生き返らないことである。専門家たちは、これらの要素を考慮に入れて意思決定をしているわけではない。専門家と市民の溝は、日本の化学物理学者である高木仁三郎が専門家の使命を問う契機にもなった。

宇井純と同じように、高木は自分の生涯において重要な転換を経験した。敗戦で激変した日本のイデオロギーを、高木は七歳の時に経験した。高木の回想によると、一九四五年の夏休みまで、日本の天皇は神で、英米は鬼畜のようなものである、と小学校の先生は語っていた。ところがその夏のあと、先生たちは、天皇は神ではなく、英米こそ文明の象徴だと語っていた（高木 1999：25-26）。従って、高木はイデオロギーは常に変化しているから信用できないと考えていた。つまり、高木は「イデオロギー的なものよりも、事実や科学的法則性として確実に感得できるものを好む傾向が強くなった」（同書：43）。化学を専攻した高木は、大学卒業後、一九六一年に日本原子力事業株式会社（NAIG）に入社した（同書：72）。四年間の勤務中、高木はほとんど全身防護で放射能の実験をしていた。しかし高木は、科学者としても放射能の恐怖を払拭することはできなかった。高木によると、「プルトニウムやプロトアクチウムなどとなると、微量でも毒性は強く、ちょっとでも吸いこんだり手を汚したりしないよう細心の注意が必要だが、これらアルファ放射体は、ふつうのガイガーカウンターではなかなか検知しにくい」（同書：79）。高木は実験に熱中しているうちに、放射線の怖さに慣れていった。だが、高木が復雑な放射性物質をすべて知っているわけではないことは認めざるを得ない。言い換えれば、放射性物質がどのような条件下で完全に安全なのか誰も確認できない。結局、高木は極度の矛盾した状態に陥り、仕事を辞めた。その後、高木は東京大学の原子核研究所に入り、元素がどうしてできるのかを研究した。研究を続ける中で、高木は人間が作った放射能がどこでも検出されることに驚いた。この研究は世間離れした仕

事だと思っていたが、高木にこの世に浄土はないという重い事実を告げた。それは高木にとって大きな衝撃だった。万物が生息する場所は、核放射物質に満ちている。科学者としてではなく、一人の人間として、高木は微量の放射性物質が安全だと言い切ることに違和感を感じたのだ（高木 2012：31）。

同時に、高木は大学の学者と企業の立場の違いがないことに気づき、市民の側から科学者になることを選択した。高木の考えでは、プルトニウムのような核放射性物質は危険なだけでなく、核兵器の材料として簡単に利用できる（高木 1999：146）。そこで高木は、一九七四年末から反原発の市民運動に顔を出し、一九七五年に「原子力資料情報室」を立ち上げた。高木が述べたように、「すなわち七〇年代初めには、私は原発は人類と共存できないと確信するようになっていたから思想的には反原発になっていたといえる」（同書：199）。さらに、チェルノブイリ原発事故によって、原発の安全神話は打ち砕かれた。

高木は、市民運動に参加する中で、それまで科学が教えてくれなかったことを、地元の住民たちから多くを学んでいることに気づいた。高木のみならず、アメリカの政治哲学者である F.フィッシャーも市民参加の重要性を認識した。フィッシャーは科学技術の急速な発展により、非常に複雑な情報化社会の中で、市民が政治の意思決定過程に関与することが少なくなってきていると指摘した。専門家の知見に依存する政策が多くなり、専門家は市民のニーズというよりも、関連する利益団体の意思を代弁しているのが実情である。このようなジレンマに直面し、私たちは市民と専門家の間に新しいタイプの関係を見出す必要がある（Fischer 2000）。すなわち、市民が意思決定に参加することがフィッシャーの考えでは重要なのである。フィッシャーは次のように述べていた。

> まず、市民参加とその規範的根拠、熟慮は、民主主義に意義を与えている。バーバー（1984）が言うように、「強い」民主主義を真剣に考えるならば、すべての市民は自分たちの生活に影響を与える決定について、少なくともある程度の時間、熟慮する必要があるのである。第二に、市民参加は政策立案と実施の正当化に規範的に寄与する。そして第三に、最も重要ではあるが、市民参加は専門的な調査に貢献することができる。参加型調査の形態は、ここで見られるように、抽象的な実証的手法ではアクセスできない新しい知識、特にローカルな知識を提供する可能性を持っている。（Fischer 2000：2）

フィッシャーは市民参加によって、政策立案者に現地住民の生活状態に適する、より革新的な知識を提供することができると指摘している。高木の経験も、市民参加の重要性を物語っている。高木は「人間の基本的な生き方」、「志の問題」および「専門の営みはどうあるべきか」を現地の住民から学ぶことになる（高木 1999：205）。住民が電力会社に土地を売ろうとしないのは、土地が金銭で測れるものではないからである。先祖が残してくれた土地も、子孫への贈り物である。つまり、土地は住民にとっての血統の継承である。それが住民の生き方でもある。住民も原発が農業、漁業ひいては日本の将来を損なうことを懸念してい

る。命を守るという志の高さに高木は感動した。感情から出発した住民から原発の安全性についての質問を受けた高木は、方程式ではうまく説明できないことに気づいた。だからこそ高木は、電力会社が定めた安全指標を見直し、これまでになかった問題点を発見した。例えば、電力会社のシミュレーション計算は正しかったのか、政府が方針を決める際に不確実性を隠していたのか、などである。そのため、住民たちは高木に科学者とは違う知恵を与えた（同書）。

高木は、科学者に原子力の発展をより包括的に理解させるため、未来の教育に期待をかけた。高木はライト・ライブリフッド賞の受賞を機に、「高木学校」という人材育成プロジェクトを始めた。というのは、高木は専門性を持ちながらも、一般住民のための思いやりのある市民科学者を育成したいと考えていた（同書：230-231）からである。これは宇井純の願望でもある。宇井純は青年期、科学技術で生活が豊かになると思っていたと述べた。しかし、その思いは水俣病事件によって打ち砕かれた。彼がいくら懺悔しても被害者たちの苦痛を和らげることはできない。宇井は「一技術者の悔恨：一九七〇年を振り返って」において科学教育の養成方法に対する失望に言及した。

> せめてできることと言えば、私が身につけてきた科学と技術なるものを裸にして、それが公害に導く必然性を誰の目にも見えるようにはっきりさせ、私の三〇年歩んだ道を今後くり返させないようにすることだろうか。今大学で相も変らず進められている〔原注：大学紛争後の〕「正常化」をあばき出し、何が「正常」なのかをはっきりさせることが、いくらかでもこの方向に役立つことだろうか。
>
> しかし、東大の中ではこの叫びはごく少数の耳にしかとどかない。無理もないことだ。学生とその家族が、出世のために東大を志望することを決めたとたんに、かつての私の道をえらびとったことになるからだ。私の悔恨と叫びをよそに毎日、工学部では（全学部でも）下らぬ「学問」の植えつけが進行している。かくして告発の会の青年たちのあせりと苦しみを私も共有することになる。（宇井 2014：31-32）

宇井は、自分のこのような道を後輩に歩ませたくないと考えている。葛藤の中で自分の仕事を問い直すのは苦しいことである。かつての夢の喪失と立場の移転は、どちらも宇井と高木が経験した事実である。だからこそ、教育に希望を託し、科学技術をより立体的に捉えることのできる科学者を輩出することが、今後の大きな課題となっているのである。

Ⅲ　進行中の活動

高木は、未来の文明のあり方について、次のような構想を抱いていた。

> (1) 人と人、人と自然が相互に抑圧的でないような社会であること

(2) 平和的な暮らしが保障されること

(3) 公正な社会であること

(4) このような世界が持続可能的に保障されること　（高木 1999：239）

高木は、人間と自然の共生、多様な文化・人種の間の共生が持続可能な発展の鍵であり、現代世界のキーワードであり、理想主義者の課題であると指摘する。平和とは、戦争の廃絶だけでなく、現代の科学技術が不安と破壊をもたらすべきではないということを意味する（同書：240）。高木にしてみれば、「理想主義は今や、絵に描いた理想の王国を追い求めることではなく、人類の生存のための最も現実的な原理となった」（同）。

幸いなことに、近年、多くの人々が持続可能な開発の必要性を認識している。ロックストロームは「気候変動は単なる環境問題でなく社会経済的な問題でもあることを、世界のリーダーたちがようやく認識した」（ロックストローム、クルム 2018：4）と指摘している。変革者も続々と登場している。例えば、ロックストロームによると、イケアは、再生可能エネルギーによる発電を積極的に行っているとしている。発電用の風車は約一四〇基、自社ビルには五五万枚以上の太陽光パネルが設置されている。再生可能エネルギーへの投資は莫大だが、イケアの創業者であるF.I.カンプラードは正しいことだからやるべきだと表明していた（同書：25）。多くの企業が持続可能性を成長戦略の中心に据えている。シルバータウンなどの学者たちは持続可能なビジネスモデルへの転換にも言及した。このような転換は、環境負荷を少なくするだけでなく、企業の持続的な成長にもつながる。また、持続可能性は生物多様性保全の鍵でもある（シルバータウン編 2018：168）。というのは、「生物多様性には価値がある。したがって、その金銭的な価値を明示し、市場で、価値ある商品の持続可能な供給が保証されるように期待するのも、種を保全するひとつの方法である」（同）からだ。つまり、生物多様性を維持し、資源の無駄を減らすことも価値を生み出すということである。世界最大のアメリカ合衆国の総合電機メーカーであるゼネラル・エレクトリック（GE）は二〇〇五年以来、エネルギーと水の使用量削減により三億米ドルを節約し、環境負荷を低減する技術により一六〇〇億米ドル以上の収益を上げている（ロックストローム、クルム 2018：26）。

また、多くの国において、自然の原理に則った解決策の実行が始まっている。その一例が、世界最貧国の一つであるニジェールである。土地は生産性が極めて低く、十分な雨量が得られない。しかし、この地域の農家は一九九〇年代から、窒素を固定することができる樹木や作物を植える森林農業システムを採用している。その結果、少なくとも二五万ヘクタールの質の悪い土地が改善された。生物多様性が高まり、災害に対する抵抗力、回復力も高まっている。同時に、地域の年間収入も一世代あたり一〇〇〇米ドル増加した（同書：211-212）。

第四節　小括

これまでの考察により、生物多様性の意義・価値、そしてその重要性が明らかになった。まず、生物多様性の保全は人々の生活の豊かさにつながる。次に生物多様性の保全は人類の経済、科学、医療などの発展につながる。それだけでなく、生物多様性は人間に美学、哲学の啓発を与えてくれる。人間も他の生物も、互いに関連している複雑な網の中で生きている。生態系が異なれば、生物同士の共存関係も異なる。生物多様性は非常に複雑であるため、不明なことが多くある。しかし、確実なことは、人間の過度の搾取が自然破壊を引き起こしていることである。本来あるべき姿に復元することができるはずの自然が、人間の持続的な大規模な深刻な破壊のために、その回復の時間が徐々に長くなって、回復能力さえ失ってしまった。消失する生物種は増え、そのスピードは加速している。これはすべて人間の責任である。従って、人類は適切な解決策を見つける必要がある。世代間倫理、正義の実現、責任原則の観点から、人類は自然に対する過度な搾取を停止するべきである。自然破壊に直面しながら、自然を元に戻すための行動を起こさないことは、公正と正義の原則に反し、次世代が私たちと同じように世界の豊かさを享受し、他の生き物が生き続ける権利を奪うことになる。

次に、深刻化する環境危機を改善するための解決策を採用しなければ、南北格差はますます広がる。これは、南側諸国の人々をより貧困に陥れるだけでなく、個人の意志を無視した、文明のあり方に反するものである。生態系の多様性が失われることは、動植物にとってだけでなく、熱帯雨林の森林が大量に失われた事実や、過去の公害事件の見直しからもわかるように、人類にとっても悲劇である。文明の発展の中で、弱い立場にある人々の一部は動植物と同じように迫害されてきた。したがって、生物多様性の保全は、人間以外の生き物の保全ということだけでなく、社会正義の実現、貧富の差の縮小、多様な文化を尊重した社会構築のための取り組みでもある。現在の世界秩序において、環境正義と社会的公正を実現することは困難であるが、多くの賢明な開発プロジェクトが実施され、より多くの組織やグループが環境保護運動に参加していることは心強いことである。

政治学者の丸山眞男の言葉を借りて、生物多様性の保全事業への期待を表明したい。国際政治学者である坂本義和は理想主義に言及した。坂本は、「丸山先生は『核時代には、理想主義こそ現実主義である、と言い切るのは苦しかった』と私に言われたが、こうした内面的苦闘こそ、あの文章が多くの人に訴えた力の源泉だったと私には思われます」（坂本 2011：160）[70]と述べた。この言葉は、生物多様性の保全に直接結びつくものではない。しかし、丸山が言及した理想主義は、保全事業を実現する上でも同様に当てはまる。多くの人は、自然

[70] 第二次世界大戦後、世界は再び米ソ冷戦と核戦争という二重の危機に陥った。さらに、一九五〇年には朝鮮動乱が勃発した。このような混乱の中で、日本は東アジアにおいてアメリカの最前線としてどのように身を置こうとしているのだろうか。続いて「警察予備隊」の再軍備とアメリカ主導の講和について、労働組合などを中心に反対運動が起こった。しかし理論不足のせいで丸山眞男は『世界』の五〇年一二月号に「三たび平和について」を発表した（坂本 2011 を参考にした）。この文章は「政治的現実そのものの可塑性と可変性を強い説得力をもって訴えた論考」（坂本 2011：160）である。坂本は「平明なこの文章のもつ迫力は、むしろ筆者の知的苦闘の所産だった」（同）と考えている。

の回復をユートピアの理想と考える。というのは、既存の経済・政治構造のもとでは、自然を本来の姿に復元することは困難だからである。私たちはそのような事実に屈服して、他の可能性を無視することを選択してはならない。生物多様性の保全が困難に直面しても、私たちは環境復元に努めなければならない。

終章　人間と非人間との錯綜した関係

本論文では、人新世を背景として、主にモートンのダークエコロジー思想と水俣病事件に関する議論を切り口に、人間と非人間との錯綜した関係を検討してきた。

第一章では、モートンの唱えるダークエコロジーに主眼が置かれていた。モートンは、自然を取り去ることによってのみ、人間と非人間との関係について真に思考することができると考えている。それは、モートンが自然という概念を、芸術およびネイチャーライティングの観点から考えているからである。モートンにとって、芸術作品は極めて重要なものである。ネイチャーライティングが描写する自然は、読者が実際に体験する自然ではない。しかし、修辞技法によって描写された自然は、読者と絡み合うアンビエンスを生み出す。つまり、真実らしい自然のようなアンビエンスは、モートンが非人間を認識するきっかけになるのだ。モートンの考えでは、非人間的なものは不安定で脆弱で把握しがたいが、人間とは切り離せないものである。モートンは文学における美しい自然に対して極めて批判的である。工業化の発展と消費主義の影響で、もはや自然は商品化されている。また、自然へのイメージも、環境汚染の深刻化によって、純粋さや偉大さとは切り離されたものになっている。自然という概念の不確かさから、モートンは人間と非人間との関係を自然の排除に基づいて再検討することにしたのである。思弁的実在論およびOOOの影響を受けて、モートンの非人間の定義は、アンビエンスから奇妙なよそ者、そしてハイパーオブジェクトへと三段階を経ることになる。ハイパーオブジェクトとは御しがたい巨大な諸存在を指す。具体的には、地球温暖化や核放射線だけではなく、「生命圏」「進化」「電磁気」など、きわめて広い範囲に偏在するような存在者もハイパーオブジェクトに含まれる。モートンは、核放射能のように目に見えない化学汚染物質と関連した有毒物質の多くも、人間と共存する非人間的な領域に入れた。つまり、モートンは、人間と自然との調和的な共存ではなく、人間と非人間との非調和的な共存を促したかったのだろう。

第一章においてモートンの思想の系譜を明らかにした上で、第二章では、「人新世」の概念を取り上げた。ダークエコロジー思想が誕生した背景である人新世は、モートンが強く擁護する概念である。モートンの考えでは、人新世とは、人間の力が地層に深く影響を及ぼした時代を意味する。さらに、人新世という時代において徐々に自覚されてきたのは、非人間的なもののある種のとらえがたさである。モートンは、人新世の環境危機の元凶は人間であると断言する。しかし、人新世の始まりの時期を探求すれば、事態がそれほど単純でないことは明らかである。モートンは、人新世の起源は新石器時代にあると信じている。ラディマンは五〇〇〇年前からの農業の発展が大気にも影響を与えていると考えている。クルッツェンを代表とする学者たちは、人新世は産業革命の時代に始まったと主張している。そして近年、多くの学者たちは人新世の始まりを一九五〇年代の大加速時期と指摘する。これらの議論は人新世が単なる人間に関する地質学的な専門用語ではないことを示している。むしろ、人新世は、歴史、文化および社会の移り変わりと深く結びついている。このような観点

から、第三章では、ハラウェイによるクトゥルー新世およびムーアによる資本新世を用いて、人新世という概念に疑問を投げかける必要があることを主張した。ハラウェイは、人新世は人間の力を過度に強調し、人間と人間以外の種が相互につながっているという事実を無視しているという。絶対的な力を持つ人間はクトゥルー新世には存在しない。ハラウェイにしてみれば、すべての生物は大地（Terra）に帰る腐植（humus）である。ムーアは、人新世の環境危機は一四五〇年以降に成長した資本主義体制によって引き起こされたと主張している。人間の力を強調しすぎると、社会的・歴史的要因と人新世との関連や、資本主義的生産様式が自然を組織する方法を見失ってしまう可能性が高い。環境危機にすべての人が責任を負わなければならないというモートンの発言は、先進国だけでなく、世界の上位に立つ少数の富裕層の責任を覆い隠している。さらに言えば、資本主義が一部の貧困層の人々を搾取可能な自然の範疇に入れて、資本、技術および資源との複合作用によって環境を犠牲にして短期的な利益の最大化を追求することも曖昧にされている。このことを踏まえ、第四章と第五章では、水俣病事件や生物多様性の保全を通じて、人間と非人間との共生の複雑さについて論じた。

第四章では、第三章の資本新世に関する考察を受けて、人間における差異の問題を提起した。経済、行政、医療、地理、年齢、性別及び職業などによって人々が直面するリスクは異なる。同様に、状況によって人間はリスクへの対処能力が異なる。水俣病事件のような公害事件の被害者たちは、有毒物質との共存を強いられたと断言できる。このような不本意な共存による被害者の健康被害、精神的な圧迫、差別による心の傷は無視できない問題である。一方、工業発展に伴う副作用、すなわち有毒物質の許容量の問題は、科学的な問題であり、しかし同時に倫理的な問題でもある。有毒物質の許容量を設定することは工業汚染の正当性を知らず知らずのうちに黙認することになる。しかし、ベックは許容量の設定がリスクの存在を隠蔽していると考えている。ベックによると、「科学的に認められない限り危険は『存在』しない」（ベック 1998：113）。「少なくとも法律的、医学的、科学技術的、社会的には危険は存在しないのである。したがって、防止されることも、処置されることも、補償されることもない。これに対しては集団を恃（たの）んで戦いを挑んでも嘆いてみても無駄である。科学しかないのである」（同）。科学、知性、理性を標榜する許容量の設定は、被害者の個人的な感情や意志を配慮していない。水俣病事件で浮き彫りになった政府、社会、医療の問題についてはさらに深く考える必要がある。第五章では、生物多様性をテーマに、生物多様性の役割、価値、生物多様性の大量喪失の事実から明らかになった環境保護技術の欠如と国際的経済・政治的不均衡による食の不安と貧困問題について考察し、生物多様性保全の必要性を主張した。

モートンは汚染から脱出するのではなく、汚くて有毒なハイパーオブジェクトと共存することを提唱している。彼は人間と非人間の親切な共存を唱道している。彼の提出した親切（being kind）は「親－類（kind-red）との連帯の中にある存在なのである」（Morton 2017：137）。モートンは、環境危機に対する解決策を提示するよりも、純粋な自然がなくなってし

まったという事実を受け入れるべきだと唱えている。彼は次のように語っている。

> 「木々は、すてきなくらい暗く、そして深い」（ロバート・フロスト「雪の降る夕べ、木々のそばで一休みする」）。だがダークエコロジーは自然の問題への解決ではない。なぜならそれは生よりはむしろ亡者と多くの共通点をもつからだ。自然は何度も戻ってくるもので、不活性的で、恐怖を引き起こす現前であり、機械的な反復である。環境主義には環境の喪失を嘆き悲しむことはできないが、なぜならそれはその喪失を受け入れるというだけでなく、象徴的な形ではあってもそれを殺すことになるからである。なすべきは死者を埋蔵することではなくそこに加わることであり、亡者に噛まれて亡者になっていくことである。（モートン 2018：388）

モートンに言わせれば、自然を本来の姿に戻そうとする一連の試みは徒労に終わっている。汚染から解放されたいと思っていた私たちは、何度も何度も汚染の深みにはまってしまう。これがモートンの提唱する人間と非人間との関係である。ハイパーオブジェクトに比べれば、人間の能力は有限である。ハイパーオブジェクトは目に見えない重力場のようなもので、逃れようとする私たちを閉じ込めてしまう。モートンは、生と死は重要な問題ではなく、有毒物質との残酷な共存を受け入れるべきだと主張している（同書：390）。つまり、「死んでいく状況、もうすでに汚染された大変な状況というものを否定せず受け入れていく」（斎藤、篠原 2020：172）。しかし、水俣病事件や熱帯雨林の生物多様性の喪失は、自然災害とは根本的に異なる人為的な災害であることは無視できない。モートンは汚染された自然は回復不可能なものだと言い切った。しかし、科学の事実に照らし合わせると、自然が強力な回復力を持っていることは明らかである。リスクを地球に押し付けているのは、長年変わらない資本主義の生産様式である。人間が自然に対して行っている残虐行為を止めないことは、社会正義を無視し、個人の感情や意志を踏みにじるだけでなく、南北間の経済格差の拡大を容認し、さらに多くの人々を貧困に陥れることになる。これこそがダークエコロジーの中で最もダークなところである。そのため、自然の原理に基づいた持続可能な開発戦略の実行が必要である。

水俣の環境は国、関係県、原因企業および市民などの努力で元に回復していた。循環型経済の採用、自然ベースの技術革新および解決策の広範な応用が次々と出現している。とはいえ、「『持続可能な開発』という概念にはもともと、人類間の平等と同時に、生物多様性の保全も含まれていたが、いまだに本格的には実行に移されていない」（シルバータウン編 2018：95）。最後に、この点について簡単に検討して、本論文を締めくくりたい。

斎藤は、人間がこのまま環境破壊を放置すれば、ますます絶滅の可能性が高くなると指摘している。さらに、絶滅の議論は、資本主義に新たな投資機会を提供することになる。火星への移住や人類のサイボーグ化はビジネスチャンスになっている（斎藤、篠原 2020：168）。従って、「新自由主義的なグローバリズムの在り方から、別の豊かさを求めるようなより公正な社会、つまりある特定の人々――貧しい人、グローバル・サウスの人、将来の世代――

だけに責任や被害を押し付けないような社会をどうすれば作れるのか」（同書：173）ということが今の課題であると斎藤は考えている。この課題に立ち向かうために、現在の経済的・政治的構造を根本的に深く反省する必要がある（同）。

ロックストロームによると、「非常に効率的かつ持続可能で魅力的な自然ベースの解決策がもっと広がらない理由は、それらが実際に機能する証拠がないためではない。むしろ、それは私たちの社会にある不適切なインセンティブや明確な規制の欠如のためである」（ロックストローム、クルム 2018：212）。また、ヴァンダーミーアとペルフェクトは持続可能な開発に対して悲観的な見方を示していた。彼らは次のように述べた。「発展の持続可能性は、熱帯雨林を救うために必要ではあるが、現在の世界秩序のもとでは、それは短期の発展の場合の制約としては受け入れがたいことであるようだ」（ヴァンダーミーア、ペルフェクト 2010：193）。しかし、ロックストロームによると、人間の進歩を測るより良い方法、つまり脱成長社会への移行、GDP を超える総合的指標が必要であることはますます明白になってきている（ロックストローム、クルム 2018：191）。「地球規模の持続可能性、公平性、回復力、そして幸福などが、人類の新しい発展を定義する重要な要素でなければならない」（同）。だからこそ、即座に行動を起こし、制度や生活様式などを根底から変革していく必要がある。ヴァンダーミーアとペルフェクトも、悲観的な評価を出しつつも、光の兆しを見出していた。彼らは次のように語った。「労働団体と環境団体とが団結して強力な同盟を組むのも目撃した。そして、農業開発とエネルギー使用に対する賢明なアプローチの気運も高まってきた。要するに、社会的正義、環境の公正のための新たな地球規模の運動が歴史的な勝利をおさめる機運が整ってきたように思えるのだ。かりにそのとおりなら、いまも残っている熱帯雨林は、この先も生き延びつづけるかもしれない」（ヴァンダーミーア、ペルフェクト 2010：195）。

環境危機を乗り越えようとすると、未だ取り組むべきことが多くあると言わざるを得ない。一方、モートンは環境危機の深刻さを認識している。環境危機の元凶が欧米の一部の富裕層であったとしても、経済のグローバル化や消費主義の浸透により、環境危機の責任は誰もが負うことになるとモートンは主張した。工業化・近代化の発展に伴い、その副作用によるリスクは高まっている。人新世では、これらのリスクの多くは不可視で知覚することができないものである。また、これらのリスクは国境を越えて地球規模のリスクとして広がっている。リスクの地球規模化の影響下で、無垢な自然はもはや存在しないとモートンは考えている。さらに、モートンは、汚物と人間的尺度を超えたハイパーオブジェクトにより関心を寄せている。より簡単に言えば、モートンのダークエコロジーは、滅びゆく世界と人間の共存を強調している。つまり、「私たちは死につつある世界と一緒にいたい」（モートン 2018：357）とモートンは唱えている。「今は、悲嘆が世界中で続き、鳴り響く時代である。現代の文化は、悲嘆をどうしたらよいものか、まだあまりよくわかっていない」（同）。モートンは、環境保護主義が人々に環境問題の深刻さを認識させたのではなく、むしろ環境保護活動などの推進が環境問題を沈静化させたと論じている。「もしも私たちが悲嘆をあまりにも早急

に除去してしまうのであれば、私たちがまさに救おうとしている自然そのものをも放逐することになる」（同）とモートンは発言している。モートンは、人々が滅びゆく世界に生きているという事実を強調することで、環境問題への関心を喚起したいと考えている。環境危機の解決を急ぎすぎると、非人間的な汚染物質に対する関心が希薄になるかもしれない。これは、自然界の回復には寄与しない。しかし、死にゆく世界は、ダークエコロジー思想の好機でもある。モートンは、人々が思想や論理のレベルで変革されることを望んでいる（Morton 2016：159）。非人間との非調和的な共存は、モートンが一貫して提唱している主題である。人間は非人間と連帯した関係で生きている。そのようなつながりは見落とされがちである。地球温暖化や放射能汚染などによって、人間は非人間との関わりを改めて意識するようになる。さらに重要なことは、人間が自分の有限性を認識することで、人間中心主義から脱却し、人間的尺度を超えた世界を考えることができるようになることである。これこそが、モートンのダークエコロジー思想の意義であると筆者は考えている。

しかし他方で、筆者は水俣病事件や熱帯雨林の消失を手がかりに、環境問題を放置すれば、さらなる悲劇が起こる可能性があることも事実であると考えている。水俣病事件や熱帯雨林の大規模な消失は、多くの環境問題のほんの一例に過ぎない。しかし、筆者はさまざまな環境問題には共通点があると信じている。人間と非人間との関係を思考する際に、人間間の差異、非人間間の差異を考慮しなければならない。ベックは次のように述べた。「世界は等しく危険状況に曝される。しかし、それだからといって、危険に巻き込まれた場合、その内部で新たな社会的不平等が生まれていることを隠すことはできない。とりわけ国際的な規模で階級状況と危険状況が重なり合うところに、不平等が見られる。世界的にみると、危険社会の無産階級の居住地は、第三世界の工業地帯にある煙突の林立した場所や、精錬所や化学工場の近辺へと移動している」（ベック 1998：60）。物質的な貧困は、リスクの増大を可能にする。貧しい地域の人々は、物資不足による飢餓よりも、工業化の副作用に耐えることができる。しかし、大規模な化学汚染事故が発生した場合、法律の不備や利害関係のもつれにより、被害者は何の手立ても打てない状況に陥る。被害者は心身ともに深刻な傷を負っている。環境問題の悪化を放置し、リスク管理を怠れば、リスクにより利益享受者と被害者の対立は益々激しくなる。しかし、SDGs のような持続可能な発展を求める一連のプロジェクトが、再び資本主義的発展のためのビジネスチャンスとなるのかどうか、検討する価値があるのではないだろうか。

人間と非人間との錯綜した関係の中で、持続可能な開発戦略をどのように機能させるかは極めて難しい問題である。環境危機のジレンマを乗り越え、社会的公正を実現できるのはいつになるのか、現段階ではさらに確実ではない。しかし、筆者は、環境危機の真の解決には、政府、国際機関、法律、企業、地域団体、メディア、医療、教育などの努力が必要であると提言した。歴史の変遷の中で、人間と非人間との両義的関係は非常に複雑である。人間と人間以外の生き物、そして人間と有毒物質との関係はどうあるべきか、深く考える必要が

ある。さらに、筆者は現在の経済的・政治的構造を反省しながら自然の回復をどのように実現するかは、人新世が私たちに与えた課題であると考えている。

補論

Ⅰ　核放射線との共存

モートンが唱える汚染物質と関連する非人間との共存を考察するために、筆者は震災後の「被災者の生活状態」と「見えない非人間との共存」に焦点を当て、二〇一八年三月一〇日から一四日にかけて、3.11 東日本大震災後七周年を迎える宮城県の石巻市および原発事故により避難指示が出ていた福島県の浪江町・飯舘村においてフィールドワークを行った。

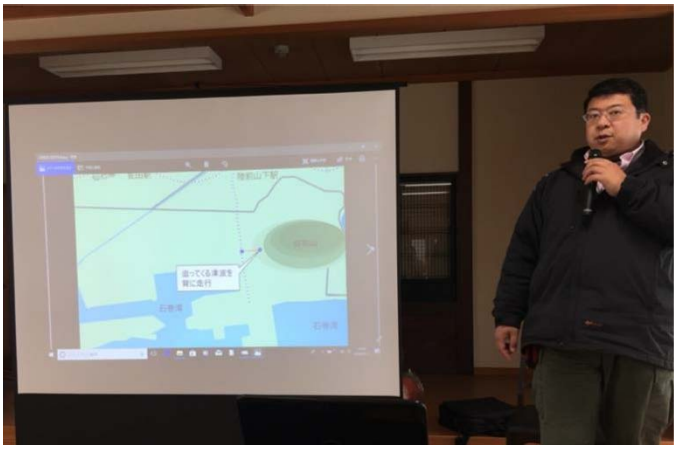
三月一一日、震災の経験者であり 3.11 未来サポート公益社団法人の語り部である高須賀正忠さんと石巻市に在住した研究員である奥堀亜紀子さんの案内で当時甚大な被害を受けた石巻市を訪問した。ここは深刻なダメージを受けた都市だともともと知っていたからだろうか、この都市に到着した途端、その寂しさが感じられた。日本の少子化問題がますます深刻になっているからか、または震災後多くの人が故郷を離れたからか、都市中で人気がなく、道路で見られるのはほとんど高齢者である。

日和山から石巻の景色を眺めると、震災の受難者を追悼するための献花も見られた

高須賀さんの話によると、震災の時、彼は日和山[71]へ避難し、山頂では引き続き逆巻いてくる津波以外に何も見えなかった。慣れ親しんだ家が津波の巨大な威力に飲み込まれた時、

[71] 日和山は宮城県石巻市中心部の丘陵地帯にあり、旧北上川河口を眺める名所である。（https://www.city.ishinomaki.lg.jp/cont/10452000b/-kanko/-kankomap/d0050/20130224152525.html において

彼は死への恐怖と絶望だけでなく、深い無力感を感じたといった。災難の残酷さと無情はもはや見えないものの、この都市のいたるところでも災難の痕跡が見られる。この感覚は第一章で述べたアンビエンスのように体内に蔓延している非人間の存在を示している。震災から何年も経っているが、目の前にある瓦礫が伝える雰囲気は、その悲惨さを物語っていた。筆者は同日午後、石巻で行われた 3.11 追悼イベントに参加した。参列者たちは「がんばろう！石巻」と書いてある木製看板の前で黙祷した。彼らの心には死去した家族への追悼や故郷への眷恋もあれば、未来への期待もあるだろう。最後、参列者たちは手で取っていた風船を空中に飛ばし、風船が彼岸まで飛ぶのを見送った。参列者たちの秘密や、悲しいこと、 残念なこと、またはうれしいこと、これから頑張っていくことなど、一番言いたいことはすべて風船であの世の人に伝達された。

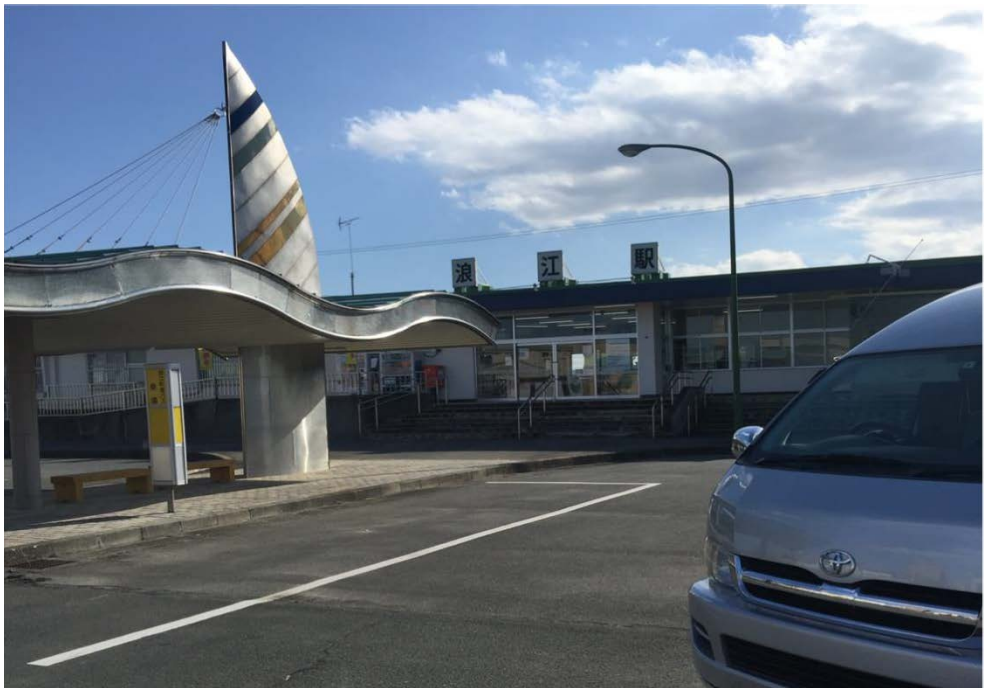


高須賀さんによる震災の時の状況の説明の様子

2022.6.4 閲覧）。

3.11 追悼イベント

三月一二日と一三日、大震災直後から福島で取材したフォトジャーナリストである豊田直巳さんの案内で福島県の浪江町・伊達市・飯舘村に行き二日間見学した。最初に到着したのは福島県の浪江町である。大震災から七年経っても、浪江町に向かう道で、車窓からこの町が原発事故によって深刻な被害を受けたことが依然として感じられた。老朽化した空き家は生い茂る雑草に覆われ、廃棄された自動販売機には当時の飲み物がまだ残っている。除染の現場に除染廃棄物を詰めた黒いフレコンバッグが山積みになっている。浪江町から多くの住民が離れたとはいえ、街中で高齢者をたまに見かけた。



浪江駅

人気のない商店街

帰還困難区域

一三日の朝、筆者は伊達東仮設住宅に入居されている飯舘村の避難者を訪問した。ここに暮らしているのはほとんど高齢者である。私たちが到着したころ、入居者たちはちょうどラジオ体操をしていた。誰もが微笑んでいて、悲しみは一切見えない。とはいえ、これらの狭い仮設住宅はいずれも住民たちがかつて受けた被害を訴えており、あの災難を裏付ける最も有力な証拠である。一方、住民たちはここでの生活に慣れており、新しい仲間もできているが、仮設住宅が解体されたら、住民たちはどうしたらいいだろうか。実際、住民たちは政府が新築する復興住宅に引っ越す気はないという。まず、復興住宅が安全か否かは断言できないからだ。また、広々とした立派な復興住宅周辺のインフラが整備されておらず、生活の不便さや心の孤独感からも、仮設住宅を離れる気になれないからである。そのため、政府がどのように復興作業を着実に進めていくかは依然として複雑な問題である。他方で、見えない非人間との付き合いについては、モートンが提唱するような非人間との親密的な共存はできないのではないかと、筆者は身をもって感じていた。浪江町から飯舘村に向かう途中、穏やかな漁港、生い茂る木々や愛らしい馬たちが見える。放射能は全く見えないし、聞こえないし、匂いもしない。しかし、路上にあるモニタリングポストは筆者の周りに核放射線があふれていることを思い出させてくれた。

ドイツの社会学者であるU. ベックは科学的な手段で解明しなければならないリスクがあることは認識している。ベックによれば、「危険を危険として『視覚化』し認識するためには、理論、実験、測定器具などの科学的な『知覚器官』が必要である。本人には感知できない放射線によって遺伝子が変化することはその良い例であろう」（ベック　1998：35-36）。また、アメリカの科学技術哲学者である D.アイディもテクノサイエンスの発展が現代世界にとって革命的であることを指摘している（Ihde 2009：45）。具体的には、例えば天体望遠鏡、脳 CT などの技術が人間の知覚に新たなインパクトを与えているとアイディは指摘する。テクノサイエンスは、目に見えないものを見ることができるということだ。

浪江町前のモニタリングポスト（二〇一八年三月一二日一四時五〇分の測定結果）

浪江町前のモニタリングポストでは 0.232μSv/h という数値が見られた。私たちはこの数値が何を意味するのか知らないかもしれない。国際放射線防護委員会（ICRP）は一九八五年のパリ声明で一般公衆の年間追加被ばく線量限度を 1mSv と宣言した（今中 2020 : 54）。環境省の換算説明によると、年間追加被ばく線量 1mSv は一時間あたり 0.23μSv/h に相当する[72]。このような線量限度を踏まえると、浪江町の環境汚染は安全な基准を満たしていない。しかし年間 1mSv の被ばく線量にも相応のリスクはある。原子力工学者の今中哲二によると、ICRP 一九九〇年勧告の付属文書では、「生まれたときから年 1mSv の被曝が続くと生涯の積算がん死率は 0.4%になると見積もっている」（今中 2020 : 55）。今中は二百五十人に一人が被ばくしてがんになるという基準は公衆にしてみれば納得しにくいと考えている。つまり、今中が述べたように、「1mSv の被曝には 1mSv なりのリスクがあります」（同書 : 56）。ICRP は二〇〇七年の勧告で、「緊急時被爆状況」（Emergency exposure situation）と「現存被曝状況」（Existing exposure situation）という二種類の被爆線量の参考基準を導入した（同書 : 55）。緊急時被爆状況とは、原発事故が発生した際に、予測できない悪い結果を避けるために、政府当局が緊急の避難対策を採用する必要がある場合をいう。その被爆線量基準範囲は 20〜100mSv/年である。現存被曝状況とは、原発事故の復旧期に住民が汚染地域で生活しなければならない場合、参考レベルを 20mSv/年以下に設定した状態をいう[73]。ここで触れ

[72] 環境省による年間の追加被ばく線量 1 ミリシーベルト（mSv/年）と、空間線量率毎時 0.23 マイクロシーベルト（μSv/h）の関係については https://www.env.go.jp/chemi/rhm/h30kisoshiryo/h30qa-02-20.html において 2022.4.10 閲覧。

[73] 環境省による防護の原則：被ばく状況と防護対策

なければならないのは、福島の避難対象区域の多くが ICPR の現存被爆状況に基づいて避難指示が相次いで解除されていることである。福島では「年 20mSv 以下は安全・安心です」というキャンペーンも行われた。今中にしてみれば、これは「幻のようなキャンペーン」（同書：57）である。今中によると、ICPR は被爆の影響を評価する際に「直線・しきい値なし（LNT）モデル」を用いる。このモデルは被爆影響の大きさが被爆量に比例することを示している。しかし、LNT モデルは放射線防護のために安全面で仮定したものであり、専門家からは不確定なものとされている。ICPR は 1mSv/年、20mSv/年、100mSv/年の三つの基準を選定する際に、明確な根拠を示していなかった。さらに、専門家は「年 20mSv 以下は安全・安心です」と明確に説明していない。環境省や自治体が行う「年 20mSv 以下は安全・安心です」というキャンペーンは、今中にとって幻のような、信用できない活動である（同）。

しかし一方で、放射線防護の観点から低線量域のリスクを推定するために、LNT モデルが導入された。低線量の被ばくの影響については専門家の間でも十分に解明されていないが、影響があると考えた方が無難である。問題は、微量の被ばくであっても、LNT モデルによるリスク評価は人々に放射線に対する不安感や恐怖感を与える可能性がある。また、LNT モデルの妥当性については、専門家の間でまだ合意が得られていない。専門家が低線量放射線の影響の不確実性をどのように解釈するかによって、異なる結論が導き出される[74]。

モニタリングポストを見て自分が放射線という非人間と共存していることに気づいた時、筆者はモートンの言うように放射線のような非人間を愛することができなかった。たとえ被ばく線量が健康に大きな影響を与えない微量であると記されていたとしても、愛することはできなかった。なぜなら、十分な量の放射線を被曝した場合、放射線のような非人間を愛することは生命の代価を払うことを意味するからである。しかし、上記の感想は、単なる筆者の個人的な視点によるものである。現地で生活し続けることを選択せざるを得なかった人々にとって、リスクの危険性を過度に強調することは、福島の復興・再建に対する障害になりかねない。このような観点から、人間と有毒物質といった非人間との共存という問題について、さらに複雑な要因が関与していると想定できる。筆者は、福島の復興と未来に向けて奮闘されていた飯館村の酪農家である長谷川健一さん[75]の宅を訪ねた。原発事故によって、原産地が福島だと書いてある製品は必ず冷遇される。それゆえ、長谷川さんも事業が停滞し、避難によって家を出なければならなくなった。しかし、彼は大好きだった故郷を離れるのではなく、畑に生い茂った雑草を処理して蕎麦を育てることを選んだ。それは無駄のように見えるかもしれないが、自分を支えていく理由でもある。すべてを失った被災者は失っ

（https://www.env.go.jp/chemi/rhm/kisoshiryo/attach/201510mat1-01-135.pdf において 2022.3.20 閲覧）。

[74] 環境省による LNT モデルをめぐる論争（https://www.env.go.jp/chemi/rhm/h29kisoshiryo/h29kiso-04-01-06.html において 2022.6.29 閲覧）。

[75] 二〇二一年一〇月二二日に長谷川健一さんが六八歳で亡くなった。長谷川さんは、原発事故後、村の生活、風景、村人たちの日常をビデオカメラで記録した。彼は全国各地で自分の体験および原発事故による悲劇の真相を語ってきた（長谷川 2012）。

てはいけないものを知っている。いのちの尊厳を失ってはいけない、生きていく希望を失ってはいけない。それよりも、長谷川さんは、今後、人々は放射線による苦痛を受けずに生きられることを願っていた（長谷川 2012）。

Ⅱ 神戸における地エネと環境の地域デザイン事業

筆者が関わった持続可能な開発に向けた地域経済の活性化に関する二つのプロジェクトを紹介することで、持続可能な開発政策の意義に少し触れたい。

筆者は二〇二〇年一〇月から二〇二一年三月までの半年間、神戸新聞社メディアビジネス局のイノベーション・パートナー部で研究型インターンシップを行い、その中で、神戸地域における地エネと環境の地域デザイン事業[76]に関する調査に協力・企画し、神戸地域経済の持続可能な開発状況について研究した。

兵庫県唯一の地元紙である「神戸新聞」は神戸新聞社が発行するものである。神戸新聞社は印刷物やインターネットの発信力を通じて、神戸地域の経済の持続可能性、地域問題の解決、神戸市民の幸福の増大を推進している。地域共生プロジェクト、防災マスターおよび大学との連携などは神戸新聞社が取り組んでいる問題である。筆者が所属したメディアビジネス局は、新聞広告に加えて、地域経済のプロモーションと広告を支援し、エネルギー循環の観点から持続可能な開発目標（SDGs）に積極的に応え、企業、自治体と広告主と地域の将来のための地エネと環境の地域デザイン協議会の設立と運営を行っている。

提示しなければならないのは二つの項目である。まずは「地エネの酒 for SDGs プロジェクト」である。このプロジェクトは日々の食事を出発点として、エネルギーと栄養に富んだ生ゴミや家畜のふん尿を利用し、熱と電気を発するバイオガスを生産し、バイオガスの副産物である消化液で山田錦という酒米を育て、「地エネの酒　環（めぐる）」という日本酒を醸造する。このプロジェクトは膨大な廃棄物を減らすだけでなく、化石燃料の燃焼をバイオガスに置き換えて地球環境への負荷を軽減する。このプロジェクトは一酪農家、三山田錦生産者、四蔵元による小規模なスタートで、バイオガス事業が日本で広く普及したわけではない。しかし、プロジェクトのメンバーたちは、自分たちの理念をより多くの人に伝えるために最善を尽くしている。強調したいのは、このプロジェクトでは除草剤や殺虫剤などの農薬や化学肥料をほとんど使用していないということである[77]。

---

[76] 地エネと環境の地域デザイン事業を説明する。地エネとは地域のエネルギーを指す。自然エネルギーを活用した地域づくりが、兵庫県全域で進められている。エネルギーや環境の視座から地域資源を見直すことは、地域の課題解決や持続可能な発展に寄与する。これらの取り組みから得られた知見を共有し、柔軟な自立性を持った地域づくりを推進するため、地エネと環境の地域デザイン事業が発足した。地エネと環境の地域デザイン事業についての情報は https://www.kobe-np.co.jp/info/chiene-kankyo/を参考にした（2022.6.22 閲覧）。

[77] 地エネの酒 for SDGs プロジェクトについての情報は https://www.kobe-np.co.jp/info/chiene-kankyo/sake/を参考にした（2022.5.5 閲覧）。

消化液

消化液で育った野菜

二〇二一年二月二五日に、JR 三ノ宮駅前再開発の暫定利用地のストリートテーブルで地エネの日本酒の先行販売が実施された。販売の過程では、神戸新聞社の記者や販売スタッフたちが早くから売り場に集まり、お客様一人ひとりに地元の日本酒の製造技術を紹介し、資源のリサイクルを通じて経済の持続可能性を達成し、地場産業を振興するというブランドコンセプトを伝えていた。このお酒は「環」という名前として簡潔なデザインに包装されるものである。「環」は「循環」を意味し、持続可能な産業に取り組む神戸地域の人々の決意を表している。結局、日本酒は即日完売し、売上は一〇万円以上に達した。

地エネの日本酒

長年に渡って地エネの事業を広めてきた神戸新聞社の論説委員の辻本一好さんとの対談で、筆者は「神戸で一番有名なのは何だと思いますか」、と質問されたことがある。筆者は

思わず「神戸牛」と答えた。この答えを聞いて、彼は笑って、「神戸のイメージは牛肉とバスケットボール選手のコービーという人が多いそうですよね。でも、兵庫の海鮮と山田錦も美味しいよ」と語った。筆者はその時の彼の笑顔を今でも覚えている。それは神戸人としての誇りである。辻本さんは入社以来、農林水産業など地域問題の解決に携わってきたと述べた。しかし、二〇一一年三月の東日本大震災と福島原発事故は、エネルギーの大切さを考えるきっかけとなった。二〇一一年四月に辻本さんは東北の被害地に入った。取材を終えた夜に余震で大規模な停電が発生した。辻本さんは人間の脆さ、原発の脆さを痛感し、かつて経験したことのない絶望に戦慄した。この経験は彼に人間と自然の関係についての理解を深めさせた。このまま自然破壊を繰り返して、このような脆弱な原発発電などの技術に依存しては、必ず滅亡を招く[78]。対談の最後に、辻本さんは森の中で執筆活動をするのが好きで、家ではかわいい猫を飼っているといい、定年後は大学に入り、持続可能性の必要性を多くの人に説いていきたいと語った。

余生を資源循環のために捧げようとする辻本さん、およびバイオガス事業に取り組んでいる弓削牧場（神戸市北区）の代表取締役である弓削忠生さんの姿を想起するときに、彼らは、モートンや斎藤が批判した、利益のためだけに出発した偽善的なグループの一員ではないと筆者は考えている。彼らは神戸大地震を経験してから更に自分たちの家を大切にするようになった。山田錦の話をしたり、消化液を使って育てた野菜の話をしたりするときの彼らの誇らしげな笑顔は、大好きな故郷を少しでも長く持ち続けたいだけだと教えてくれていた。彼らはこのような行動で持続可能な地域産業の振興という決心を日本に、さらに世界に向けて発信しようとしている。

二つ目は森林環境譲与税を活用した六甲山危険木聞き取り調査である。「森林環境税及び森林環境譲与税に関する法律」はパリ協定の枠組みの下で、森林の安定的な開発を促進し、温室効果ガスの削減や災害の予防を図るため、二〇一九年三月に導入された。「森林環境税」（二〇二四年から課税）および「森林環境譲与税」（二〇一九年から譲与）が創設された[79]。神戸市は二〇一二年に策定された六甲山森林整備戦略に基づき、森林環境譲与税を活用したプロジェクトを推進している。具体的には、市域全域で森林の持続的整備、人材育成、木材活用、市民意識の向上に取り組んでいる[80]。神戸新聞社は神戸市から依頼を受け、六甲山で住民にアンケートを配って危険木ヒアリング調査を行っていた。意外なことに、都会より山奥に住みたいという人は多くいる。六甲山の住民にとって、薪と炭は一般的なエネルギー源である。神戸市は、六甲山住民の生活に支障をきたす危険木を活用したいと考えている。

---

[78]「地エネと環境の地域デザイン」事業に対する辻本一好の考え方の変遷は北摂里山地域循環共生圏のホームページに掲載されている。（その詳細は https://hokuces.jp/2019/10/20/kobenews/において 2022.5.6 閲覧）。

[79] 森林環境譲与税制度の詳細は林野庁のホームページ https://www.rinya.maff.go.jp/j/keikaku/kankyouzei/kankyouzei_jouyozei.html において 2022.5.6 閲覧。

[80] 神戸市の森林環境譲与税を活用した森林整備実施計画の詳細は https://www.city.kobe.lg.jp/a19183/bosai/shinrinseibi/shinrinkankyoujyoyozei.html において 2022.5.6 閲覧。

そうすれば被害を減らすだけでなく、資源の無駄使いを避け、地域経済を活性化させると同時に、電気やガスによる環境汚染を減らすことができる。二〇〇九年の東北大学の研究によると、薪ストーブ一台を使うことで、ハイブリッド車五台分、太陽光発電パネル三六畳分のCO_2削減ができるそうである[81]。神戸市でも、住民の暮らしぶりや危険木活用への意欲などを把握したうえで判断したいと考えている。住民たちは台風や土砂災害の際、危険な木があれば伐採業者に連絡して処理している。筆者が聞き取り調査の中で、神戸市が危険木の活用を計画していることを住民たちに知らせた際、住民たちは喜びと期待を寄せていた。

Ⅲ　水俣の環境復元事業

筆者は、水俣の環境の現状を把握するために、二〇二二年五月一〇日に水俣市を訪れ、水俣の環境復元の取り組みについて考察した。水俣市の環境回復のために、国、関係県および原因企業において環境復元事業への支援、二〇一〇年四月から「水俣病被害者の救済と水俣病問題の解決に関する特別措置法」に基づく救済措置の実施、地域再生などの施策が進められた（水俣市立水俣病資料館 2016）。

例えば、工場排水の規制と魚介類対策が実施された。一九六六年六月、チッソ水俣工場は完全循環方式の完成により、メチル水銀の排出を停止した。一九七〇年一二月には新たな水質汚濁防止法が制定され、水銀などの有害物質の排水基準（総水銀 0.005mg/l、アルキル水銀定量限界 0.0005mg/l）が全国的に導入された。熊本県は一九七四年、国民の不安を解消し、魚価の暴落を収拾するため、水俣湾の河口に汚染魚を封じ込める仕切網を設置した。この仕切網は一九九七年に全面撤去された。一九七五年から一九九〇年まで水俣市漁協は水俣湾内での操業を禁止していた。操業禁止期間中、チッソは漁協に総額約九億円の漁業補償を行い、熊本県は総額三三億一五〇〇万円の補償を行った。

多くの施策の中でもとりわけ費用がかかるのが、水俣湾公害防止事業である。水俣湾には、チッソ水俣工場の排水期間に七〇～一五〇トンの水銀が流れ込でいた。海底に堆積した 25ppm 以上のヘドロの総量は約 151 万 m^3、面積は約 209 万 m^2、湾の奥部では厚さが 4m に達することもある。熊本県は一九七七年に総水銀 25ppm 以上の水銀を含む堆積ヘドロの処理を決め、ヘドロ浚渫・埋立事業を開始した。熊本県は、工事期間中、二次公害を防ぐために、厳重な監視体制を設置した。水質や魚類を丹念に調査するとともに、専門家や地元代表からなる熊本県水俣湾等公害防止事業監視委員会を設置し、監視の結果や工事の状況を毎日公表した。この事業は一九九〇年、総工費四八五億円の費用をかけて完了した。現在、この埋め立て地は、健康と環境をテーマにした公園（エコパーク水俣）になっている。

---

[81] 記事：「薪は自然な再生可能エネルギー」（https://www.aplusinc.jp/woodstove-guide/firewood/renewable_energy/において 2022.5.6 閲覧）。

エコパーク水俣

現在の百間排水口（二〇二二年）

水俣病事件のような不幸な出来事を二度と起こさないために、水俣市は一九九二年一一月に市民の行動方針として「環境モデル都市づくり」を宣言し、その目標に向かって進むための環境モデル都市づくりを推進している。同時に、自然環境保護への意識を高めるため、熊本県では、講演会や地域復興に関する交流、福祉事業を行う「もやい直しセンター」を開設している。水俣市では一九九二年から毎年五月一日にエコパーク親水護岸で慰霊祭を行い、犠牲になられた方々のご冥福をお祈りするとともに、環境被害について反省している。

水俣病慰霊の碑

水俣メモリアル

また、水俣市は一九九二年に環境保全・再生に多くの人々が参加できるよう「環境水俣賞」を創設し、一九九三年には水俣市立水俣病資料館を通じて水俣病事件に関する資料や書籍を提供し、国内外からの訪問者に環境保護への関心を喚起している。水銀による人間の健康や環境への影響を低減するため、国連環境計画は二〇〇一年から、地球規模の水銀汚染を規制する計画の設置に取り組んでいる。二〇一三年には「水俣条約」の採択・署名のための「水銀に関する水俣条約外交会議」が熊本市で開催され、日本や EU を含む九二か国以上が署名

した。二〇一六年二月に日本が二三番目の締結国として批准された[82]。

水俣市立水俣病資料館内のポスター

水俣の環境は、行政や市民、さまざまな団体の努力によって回復してきた。エコパークにはさまざまな種類の花や木が植えられ、澄んだ海を海鳥が飛んでいた。芝生の上でピクニックをする人たちもいれば、海岸で釣りをする人たちもいた。海や草花の香りが風に乗って漂ってきた。このような感覚を身をもって体験することによって、環境保全の重要性を理解することができる。生物学者であるD.エーレンフェルドが語ったように、「他の種類の保全は、少なくとも多様性の意味をまだ体験したり感じたりしたことのない人に対しては、書いたもので説明したり正当化したりすることが難しい」（Ehrenfeld 1972 : 55）。現在の水俣は、環境保全事業が可能であり、環境の復元も可能であることを説明している。つまり、水俣の圧倒的な真実は保全の価値を擁護している。水俣の環境復元事業は、先進科学技術による汚染地域の再生だけでなく、人間と自然の関係修復にも力を注ぎ、人間の傲慢を拒絶し、自然を尊重し、いのちを大切にすることを、過去の教訓を通じて世界に発信している。

[82] 水俣条約は、五〇か国以上が批准して九〇日後に発効することになっている。水俣市の環境復元・再生事業の詳細情報やデータなどについては、『水俣病：その歴史と教訓 2015』（水俣市立水俣病資料館 2016）を参考にした。

親水護岸の魂石[83]

エコパーク親水護岸から不知火海を眺める

[83] 親水護岸に並んでいる石像は、水俣病事件を通じて生き方を探った「本願の会」のメンバーが、水俣病によって犠牲になった万物の霊を慰めるために彫ったものである。

初出一覧

本論文は、次の二つの論考をもとにしている。

「人新世における人間と非人間との関係 ―ティモシー・モートンにおける「ダークエコロジー」をめぐって―」、『環境思想・教育研究』第一四号、二〇二一年、九二～一〇一頁。

「廃墟の中で協力を求め―ダナ・ハラウェイのクトゥルー新世を中心に―」、『愛知』第三二号、神戸大学哲学懇話会、二〇二二年、一一二～一三一頁。

補論の「Ⅰ 核放射線との共存」は次の論考をもとにしている。

"Seven Years after the Triple Disaster in March 2011: A Report of Fieldwork in Northeast Japan"（張凌霄・章博文・王小梅と共著）、『21 世紀倫理創成研究』第十二号、神戸大学人文学研究科倫理創成プロジェクト、二〇一九年、一〇七～一二〇頁。（第二節 "The Situation in Ishinomaki and Fukushima" 担当、一〇八～一一一頁）。

参考文献

本文の中で直接に言及できないものを含め、執筆にあたって参考にした主な文献を掲げた。

Ⅰ ティモシー・モートンの著作

ティモシー・モートン『自然なきエコロジー　来たるべき環境哲学に向けて』、篠原雅武訳、以文社、二〇一八年。

――――――――― 「涙にくれ、異国の畠中に立ちつくした：アグリロジスティックスを通して考える」、小川緑・篠原雅武訳、『現代思想』第四三巻一三号、青土社、二〇一五年、一四四～一六七頁。

――――――――― 「この美しいバイオスフィアは私のものではない」、小嶋恭道訳、『現代思想』第四五巻二二号、青土社、二〇一七年、一五二～一六七頁。

Morton, Timothy. *The Ecological Thought*. Harvard University Press, 2010.

――――――――― *Hyperobjects: Philosophy and Ecology after the End of the World*. University of Minnesota Press, 2013.

――――――――― "How I Learned to stop Worrying and Love the Term Anthropocene" In: T*he Cambridge Journal of Postcolonial Literary Inquiry* **1**(2), 2014. pp.257-264.

――――――――― *Dark Ecology: For a Logic of Future Coexistence.* Columbia University Press, 2016.

――――――――― *Humankind: Solidarity with Nonhuman People*. Verso, 2017.

――――――――― *Being Ecological*. Pelican Books, 2018.

Ⅱ ティモシー・モートンに関する文献

Boulton, Elizabeth. "Climate change as a 'hyperobject': a critical review of Timothy Morton's

reframing narrative" In: *WIREs Climate Change* **7**(5). 2016. pp.772-785.
Schmids, Mario. & Koddenbrock, Kai. "Against Understanding: The Techniques of Shock and Awe in Jesuit Theology, Neoliberal Thought and Timothy Morton's Philosophy of Hyperobjects" In: *Global Society* **33**(1). 2019. pp.66-81. p.79-80.
篠原雅武『複数性のエコロジー　人間ならざるものの環境哲学』、以文社、二〇一六年。
――――『人新世の哲学　思弁的実在論以降の「人間の条件」』、人文書院、二〇一八年。
――――『人間以降の哲学　人新世を生きる』、講談社、二〇二〇年。
篠原雅武・斎藤幸平「ポスト資本主義と人新世」、『現代思想』第四八巻一号、青土社、二〇二〇年、一六一〜一七四頁。

Ⅲ 石牟礼道子の著作

石牟礼道子『苦海浄土　わが水俣病』、講談社、一九七二年。
――――『石牟礼道子全集・不知火 椿の海の記ほか』(第四巻)、藤原書店、二〇〇四年。
――――『石牟礼道子全集・不知火 おえん遊行ほか』(第八巻)、藤原書店、二〇〇五年。
――――　「今際の眼」、『不知火　石牟礼道子のコスモロジー』、藤原書店、二〇〇四年、三二〜三七頁。
――――「原田先生のご遺言」、『石牟礼道子　魂の言葉、いのちの海（KAWADE 道の手貼)』、河出書房新社、二〇一三年、六〜八頁。
――――『花の億土へ』、藤原書店、二〇一四年。
石牟礼道子・伊藤洋典・岩岡中正・宮本久雄「たましい（魂・anima）への旅」、『石牟礼道子　魂の言葉、いのちの海（KAWADE 道の手貼)』、河出書房新社、二〇一三年、一二二〜一三一頁。
石牟礼道子・佐多稲子・土本典昭「原点を書く」、『石牟礼道子　魂の言葉、いのちの海（KAWADE 道の手貼)』、河出書房新社、二〇一三年、六三〜七九頁。
石牟礼道子・藤原良雄「〈インタビュー〉鎮魂の文学」、『不知火　石牟礼道子のコスモロジー』、藤原書店、二〇〇四年、八〜三一頁。
石牟礼道子、イバン・イリイチ「『希望』を語る【小さな世界からのメッセージ】」、『不知火　石牟礼道子のコスモロジー』、藤原書店、二〇〇四年、二四四〜二五六頁。

Ⅳ 石牟礼道子に関する文献

Allen, Bruce. & Masami, Yuki. *Ishimure Michiko's Writing in Ecocritical Perspective*. Lexington Books, 2016.
岩岡中正『ロマン主義から石牟礼道子へ　近代批判と共同性の回復』、木鐸社、二〇〇七年。
栗原彬「草の声そして人間への問い【新作能『不知火』を読む】」、『不知火　石牟礼道子のコスモロジー』、藤原書店、二〇〇四年、二二九〜二三一頁。
見田宗介「〈医術〉としての作品【『天の魚』を読む】」、『不知火　石牟礼道子のコスモロジー』、藤原書店、二〇〇四年、一六一〜一六五頁。
五所純子「毒をふくんで言葉で殺す」、『石牟礼道子　魂の言葉、いのちの海（KAWADE 道の手貼)』、河出書房新社、二〇一三年、一四九〜一五四頁。
高田宏「森林なる人【『常世の樹』を読む】」、『不知火　石牟礼道子のコスモロジー』、藤原書店、二〇〇四年、二一一〜二一三頁。
最首悟「いのちはいのち：石牟礼さんを読む」、『石牟礼道子　魂の言葉、いのちの海（KAWADE 道の手貼)』、河出書房新社、二〇一三年、五五〜六二頁。

志村ふくみ「救済への祈り【新作能『不知火』を観る】」、『不知火　石牟礼道子のコスモロジー』、藤原書店、二〇〇四年、二三二〜二三七頁。
若松英輔、『石牟礼道子　『苦海浄土』―悲しみに真実を見る』（NHK テキスト「100 分 de 名著」）、NHK 出版社、二〇一六年。
石井光太「姉の目線と、芸の言葉」、『石牟礼道子　魂の言葉、いのちの海（KAWADE 道の手貼）』、河出書房新社、二〇一三年、一〇九〜一一二頁。
大岡信「生命界のみなもとへ【『椿の海の記』を読む】」、『不知火　石牟礼道子のコスモロジー』、藤原書店、二〇〇四年、一六六〜一七三頁。
池澤夏樹「水俣と言葉の力」、『石牟礼道子　魂の言葉、いのちの海（KAWADE 道の手貼）』、河出書房新社、二〇一三年、二〇〜三三頁。
渡辺京二・岩岡中正「石牟礼文学をどう読むか【ロマン主義としての石牟礼文学】」、『不知火　石牟礼道子のコスモロジー』、藤原書店、二〇〇四年、二一四〜二二八頁。
渡辺京二「石牟礼道子の時空【『あやとりの記』『おえん遊行』を読む】」、『不知火　石牟礼道子のコスモロジー』、藤原書店、二〇〇四年、一七四〜二〇〇頁。
――――「生命の痛々しい感覚と言葉」、『石牟礼道子　魂の言葉、いのちの海（KAWADE 道の手貼）』、河出書房新社、二〇一三年、一〇〜一九頁。
友常勉「マルスとヴィーナス：石牟礼道子と水俣病闘争」、『石牟礼道子　魂の言葉、いのちの海（KAWADE 道の手貼）』、河出書房新社、二〇一三年、一五五〜一六六頁。

V　その他の関連文献

Altvater, Elamar. “The Capitalocene, or, Geoengineering against Capitalism’s Planetary Boundaries” In: Moore, Jason W., eds., *Anthropocene or Capitalocene: Nature, History, and the Crisis of Capitalism*. PM Press, 2016. pp.138-152.
Chakrabarty, Dipesh. “Postcolonial Studies and the Challenge of Climate Change” In: *New Literary History* **43**（1）, 2012. pp.1-18.
――――――――― “The Climate of History: Four Theses”, In: *Critical Inquiry* **35.** The University of Chicago Press, 2009. pp197-222.
Clynes, Manfred E. & Kline, Nathan S. “Cyborgs and Space” In: *Astronautics*. 1960. pp.26-27. & pp.74-76.
Colebrook, Claire. *Death of Posthuman: Essays on Extinction, Vol.1*, Open Humanities Press, 2014.
Corlett, Richard T.. “New Approaches to Novel Ecosystem”, 2013. In: *Trends in Ecology & Evolution* **29**（3）. Elsevier, 2014. pp.137-138.
Crist, Eileen. “On the Poverty of Our Nomenclature” In: *Environmental Humanities* **3**（1）. Duke University Press, 2013. pp.129-147.
Crutzen, P.J.. “The ‘Anthropocene’”, In: Ehlers, Eckart, & Krafft, Thomas, eds. *Earth System Science in the Anthropocene: Emerging Issues and Problems.* Springer, 2006. pp.13-18. Available at http://ndl.ethernet.edu.et/bitstream/123456789/74935/1/Eckart%20Ehlers.pdf#page=25.
de la Cadena, Marisol. “Uncoming Nature” In: *E-flux*, August 22nd, 2015. Available at http://supercommunity.e-flux.com/authors/marisol-de-la-cadena/.
Ehrenfeld, David W.. *Conserving Life on Earth*. Oxford University Press, 1972.
Ellis, Erle C.. *Anthropocene: A Very Short Introduction*, Oxford University Press, 2018.
Fisher, Frank. *Citizens, Experts, and the Environment: The Politics of Local Knowledge.* Duke University Press, 2000.
Haraway, Donna J.. *Staying with the Trouble: Making Kin in the Chthulucene*. Duke University Press, 2016.
――――――――― *When Species meet*, University Of Minnesota Press, 2007.
Ihde, Don. *Postphenomenology and Technoscience: The Peking University Lectures*, SUNY Press, 2009.
Jensen, Jon. “Cutting Nature at the Seams: Beyond Species Boundaries in a World of Diversity” In: Brown, Charles. & Toadvine, Ted. eds., *Nature’s Edge: Boundary Explorations in Ecological*

Theory and Practice. SUNY Press, 2006. pp.61-82.
Latour, Bruno. *Facing Gaia: Eight Lectures on the New Climate Regime*. Translated by Catherine Porter, Polity Press, 2017.
―――――― *Politics of Nature: How to Bring the Sciences into Democracy*. Translated by Catherine Porter, Harvard University Press, 2004.
―――――― "Waiting for Gaia: Composing the common world through arts and politics" In: Yaneva, Albena, & Zaera-Polo, Alejandro, eds. *What Is Cosmopolitical Design? Design, Nature and the Built Environment (1st ed.).* Routledge, 2015. pp.21-33.
Lewis, Simon L.& Maslin, Mark A.. "Defining the Anthropocene" In: *Nature* **519**, 2015. pp.171-180.
Mcbrien, Justin. "Accumulating Extinction Planetary Catastrophism in the Necrocene" In: Moore, Jason W., eds., *Anthropocene or Capitalocene: Nature, History, and the Crisis of Capitalism*. PM Press, 2016. pp116-137.
Nobuo, Kazashi. "Bio-Politics over Radiation: From Hiroshima, Chernobyl to Fukushima" In: Nobuo, Kazashi, & Mariotti, Marcella, eds., *New Steps in Japanese Studies: Kobe University Joint Research* **5**, 2017. pp.175-184.
―――――― "Thaumazein at the Nuclear Anthropocene: The Life and Thought of Jinzaburo Takagi as a Citizen Scientist" In: *Philosophy and Global Affairs* **1**(1), 2021. pp.61-71.
Ruddiman, William F.. "The Anthropogenic greenhouse era began thousands of years ago" In: *Climatic Change* **61**. Springer, 2003. pp.261-293.
Steffen,Will; Grinevald, Jacques; Crutzen, Paul; & McNeill, John. "The Anthropocene: Conceptual and historical perspectives", In: *Philosophical Transactions of The Royal Society A Mathematical Physical and Engineering Sciences*. Royal Society, 2011. pp.842-867.
Stengers, Isabelle. *In Catastrophic Times: Resisting the Coming Barbarism*. Translated by Andrew Goffey, Open Humanities Press in collaboration with meson press, 2015.
Swanson, Heather Anne. "Anthropocene as Political Geology" In: *Science as Culture* **25**(1), 2016. pp.157-163.
NHK 取材班編著『日本人は何を考えてきたのか　明治編：文明の扉を開く』、NHK 出版、二〇一二年。
アルド・レオポルド、『野生のうたが聞こえる』新島義昭訳、講談社、一九九七年。
アンドレアス・マルム、アルフ・ホアンボー、「人類の地質学？：人新世ナラティヴ批判」、西亮太訳、『現代思想』第四五巻二二号、青土社、二〇一七年、一四二～一五一頁。
ウルリヒ・ベック、『危険社会：新しい近代への道』東廉・伊藤美登里訳、法政大学出版社、一九九八年。
カンタン・メイヤスー、『有限性の後で　偶然性の必然性についての試論』千葉雅也・大橋完太郎・星野太訳、人文書院、二〇一六年。
―――――――――― 『亡霊のジレンマ　思弁的実在論の展開』千葉雅也序、岡嶋隆佑・熊谷謙介・黒木萬代・神保夏子訳、青土社、二〇一八年。
キャスパー・ブルーン・イェンセン、「地球を考える　『人新世』における新しい学問分野の連携に向けて」、藤田周訳、『現代思想』第四五巻二二号、青土社、二〇一七年、四六～五七頁。
クリストフ・ボヌイユ、ジャン＝バティスト・フレソズ『人新世とは何か〈地球と人類の時代〉』野坂しおり訳、青土社、二〇一八年。
グレアム・ハーマン、『四方対象　オブジェクト指向存在論入門』岡嶋隆佑監訳、山下智弘・鈴木優花・石井雅巳訳、人文書院、二〇一七年。
―――――――――― 『思弁的実在論入門』上尾真道・森元斎訳、人文書院、二〇二〇年。
ジェイソン・W・ムーア、『生命の網のなかの資本主義』山下範久・滝口良訳、東洋経済新報社、二〇二一年。
ジョン・H・ヴァンダーミーア、イヴェット・ペルフェクト、『生物多様性〈喪失〉の真実：

熱帯雨林破壊のポリティカル・エコロジー』新島義昭訳、阿部健一解説、みすず書房、二〇一〇年。
ジョン・ロールズ、『正義論』（改訂版）川本隆史・福間聡・神嶋裕子訳、紀伊國屋書店、二〇一〇年。
ジョン・ロック、『統治二論』加藤節訳、岩波書店、二〇一〇年。
ジョンナサン・シルバータウン編、『生物多様性と地球の未来 ―6 度目の大量絶滅へ？』太田英利監訳・池田比佐子訳、朝倉書店、二〇一八年。
ダナ・ハラウェイ、『犬と人が出会うとき――異種協働のポリティクス』高橋さきの訳、青土社、二〇一三年。
――――――――　「人新世、資本新世、植民新世、クトゥルー新世：類縁関係をつくる」、高橋さきの訳、『現代思想』第四五巻二二号、青土社、二〇一七年、九九～一〇九頁。
――――――――　『サイボーグ・ダイアローグズ』高橋透・北村有紀子訳、水声社、二〇〇七年。
――――――――　『猿と女とサイボーグ―自然の再発明』高橋さきの訳、青土社、二〇〇〇年。
――――――――　『伴侶種宣言――犬と人の「重要な他者性」』永野文香・波戸岡景太訳、以文社、二〇一三年。
チャールズ・C・マン、『1493―世界を変えた大陸間の「交換」』布施由紀子訳、紀伊国屋書店、二〇一六年。
デヴィッド・タカーチ、『生物多様性という名の革命』狩野秀之・新妻昭夫・牧野俊一・山下惠子訳、岸由二解説、日経 BP 社、二〇〇六年。
デオドール・W・アドルノ、『否定弁証法』木田元・徳永恂・渡辺祐邦・三島憲一・須田朗・宮武昭訳、作品社、一九九六年。
――――――――　『プリズメン』渡辺祐邦・三原弟平訳、筑摩書房、一九九七年。
トーマス・クーン、『コペルニクス革命』常石敬一訳、講談社、一九八九年。
ハンス・ヨナス、『責任という原理――科学技術文明のための倫理学の試み』加藤尚武監訳、東信堂、二〇〇〇年。
ブルーノ・ラトゥール、「人新世の時代におけるエージェンシー」、久保明教・小川涌司訳、『現代思想』第四五巻二二号、青土社、二〇一七年、五八～七五頁。
――――――――　『地球に降り立つ　新気候体制を生き抜くための政治』川村久美子訳、新評論、二〇一九年。
ヘンリー・デイヴィッド・ソロー、『ウォーキング』大西直樹訳、春風社、二〇〇五年。
ミシェル・セール、『自然契約』及川馥・米山親能訳、法政大学出版社、一九九四年。
ヨハン・ロックストローム、マティアス・クルム、『小さな地球の大きな世界：プラネタリー・バウンダリーと持続可能な開発』武内和彦・石井菜穂子監修・谷淳也、森秀行ほか訳、丸善出版株式会社、二〇一八年。
ラルフ・ワルド・エマーソン、『自然について』斉藤光訳、日本教文社、一九九六年。
レイチェル・カーソン、『沈黙の春』青樹築一訳、新潮社、一九七四年。
安藤礼二『熊楠：生命と霊性』、河出書房新社、二〇二〇年。
伊藤詔子『NHK カルチャーラジオ　文学の世界　はじめてのソロー　森に息づくメッセージ』、NHK 出版、二〇一七年。
宇井純、『原点としての水俣病（宇井純セレクション 1）』藤林泰・宮内泰介編集、新泉社、二〇一四年。
奥野克巳「明るい人新世、暗い人新世：マルチスピーシーズ民族誌から眺める」『現代思想』第四五巻二二号、青土社、二〇一七年、七六～八七頁。
河野哲也『いつかはみんな野生にもどる　環境の現象学』、水声社、二〇一六年。
橋爪裕人「巨視的視点で捉えた惑星の運命」『談　人新世と未来の自然学』一一九号、水曜社、二〇二〇年、四～八頁。

栗原彬編『証言　水俣病』、岩波書店、二〇〇〇年。
高木仁三郎『科学の原理と人間の原理―人間が天の火を盗んだ　その火の近くに生命はない』、方丈出版社、二〇一二年。
――――――『市民科学者として生きる』、岩波書店、一九九九年。
今中哲二「年 1 ミリシーベルト基準の由来と低線量放射線被曝のリスク」、『学術の動向　特集：福島原発災害による放射線被ばくとその健康影響の評価をめぐって』、二〇二〇年、五二～五九頁。（https://www.jstage.jst.go.jp/article/tits/25/3/25_3_52/_pdf/-char/ja において閲覧可能）。
斎藤幸平『人新世の「資本論」』、集英社、二〇二〇年。
――――「人新世のマルクス主義と環境危機」、『現代思想』第四五巻二二号、青土社、二〇一七年、一三二～一四一頁。
坂本義和『人間と国家（上）：ある政治学徒の回想』、岩波書店、二〇一一年。
山口由美『ユージン・スミス　水俣に捧げた写真家の 1100 日』、小学館、二〇一三年。
山本太郎『感染症と文明――共生への道』、岩波書店、二〇一一年。
緒方正人「三十八億年の生命の願い」、『石牟礼道子　魂の言葉、いのちの海（KAWADE 道の手貼）』、河出書房新社、二〇一三年、三六～五四頁。
松居竜五編『南方熊楠の謎：鶴見和子との対談』、藤原書店、二〇一五年。
水俣市立水俣病資料館編集・発行、『水俣病：その歴史と教訓 2015』、二〇一六年。
池田清彦『ウソとマコトの自然学：生物多様性を考える』、中央公論新社、二〇一八年。
中村桂子、「『人新世』を見届ける人はいるのか」、『現代思想』第四五巻二二号、青土社、二〇一七年、四二～四五頁。
張凌霄「ティモシー・モートンの「ダーク・エコロジー」思想における人間と非人間との関係」、『愛知』第三〇号、神戸大学哲学懇親会、二〇一九年三月、一五三～一六六頁。
長谷川健一『原発に「ふるさと」を奪われて：福島県飯舘村・酪農家の叫び』、宝島社、二〇一二年。
長谷川明子『生物多様性：私と地球を元気にする方法』、技報堂出版株式会社、二〇一〇年。
東島大『なぜ水俣病は解決できないのか』、弦書房、二〇一〇年。
飯田麻結・北野圭介・依田富子「誰が人新世を語ることができるのか：人新世・人文学・フェミニズム」『現代思想』第四五巻二二号、青土社、二〇一七年、一一〇～一二一頁。
品川哲彦『倫理学の話』、ナカニシヤ出版、二〇一五年。
本川達雄『生物多様性：「私」から考える進化・遺伝・生態系』、中央公論新社、二〇一五年。
野田研一『交感と表象　ネイチャーライティングとは何か』、松柏社、二〇〇三年。

Ⅵ 中国語の関連文献

冯丽妃. 迎接“人类世”，你准备好了吗？：定义新地质时代在争议中前行［J］. 中国科学报，2019 (3).（馮麗妃「人新世を迎える準備はできているのか？ 議論の中で進む新しい地質時代の定義」『中国科学報』（第三版）、二〇一九年。http://news.sciencenet.cn/sbhtmlnews/2019/8/348903.shtm において閲覧可能。）
王韬洋. 有差异的主体与不一样的环境“想象”—“环境正义”视角中的环境伦理命题分析［J］. 哲学研究，2003 (3):27-34.（王韜洋「差異がある主体と違う環境「想像」—「環境正義」の視点における環境倫理命題の分析」、『哲学研究』第三期、二〇〇三年、二七～三四頁。）

Ⅶ インターネット上の資料

de Vrieze, Jop. “Bruno Latour, a veteran of the ‘science wars,’ has a new mission”. 2017. （https://www.sciencemag.org/news/2017/10/bruno-latour-veteran-science-wars-has-new-mission2022.6.24 閲覧）。
Gilebbi, Matteo. “Antonio Stoppani and the teleological interpretation of the Anthropocene”. 2017. （https://www.academia.edu/32673194/Antonio_Stoppani_and_the_Teleological_Interpretation_of_the_Anthropocene2021.5.18 閲覧）。
Humans versus Earth: the quest to define the Anthropocene. 2019. （https://www.nature.com/articles/d41586-019-02381-22021.12.23 閲覧）。
Issberner, Liz-Rejane, & Lena, Philippe. *Anthropocene: the vital challenges of scientific debate.* UNESCO Courier, 2018. （https://en.unesco.org/courier/2018-2/anthropocene-vital-challenges-scientific-debate2021.5.19 閲覧）。
Moore, Jason W.. “From Object to Oikeios: Environment-Making in the Capitalist World-Ecology”. 2013. （http://citeseerx.ist.psu.edu/viewdoc/download?doi=10.1.1.691.5540&rep=rep1&type=pdf2021.11.1 閲覧）。
OXFAM. *Carbon emissions of richest 1 percent more than double the emissions of the poorest half of humanity.* 2020. （https://www.oxfam.org/en/press-releases/carbon-emissions-richest-1-percent-more-double-emissions-poorest-half-humanity2021.10.31 閲覧）。
Sandhana, Lakshmi. 「鳥を手本に『羽ばたき』や『翼の変形』を目指す、新型航空機開発」、平井眞弓・高森郁哉訳、『WIRED』、二〇〇四年五月二〇日。（https://wired.jp/2004/05/20/鳥を手本に「羽ばたき」や「翼の変形」を目指す/2022.5.21 閲覧）。
Suckling, Kieran. “Against the Anthropocene”, In: *IMMANENCE: ecoculture, geophilosophy, mediapolitics.* 2014. （http://blog.uvm.edu/aivakhiv/2014/07/07/against-the-anthropocene/2021.5.20 閲覧）。
Turk, Victoria. 「エコバッグやマイカップは本当に環境に優しいのか？ 「エコ」な行動に隠された 6 つの真実」、『WIRED』、二〇一九年一月二日。（https://wired.jp/2019/01/02/climate-change-myth-busting/2022.2.6 閲覧）。
Wallace, David Rains. “The Nature of Nature Writing” In: *The New York Times*（Section 7）. July 22,1984.（https://www.nytimes.com/1984/07/22/books/the-nature-of-nature-writing.html 2022.1.28 閲覧）。
World Economic and Social Survey 2009: *Promoting Development, Saving the Planet*. UN, 2009. （https://www.un.org/en/development/desa/policy/wess/wess_archive/2009wess.pdf2021.11.10 閲覧）。
「アムステルダム宣言」に関する情報（http://www.igbp.net/about/history/2001amsterdamdeclarationonearthsystemscience.4.1b8ae20512db692f2a680001312.html2021.11.5 閲覧）。
「地エネと環境の地域デザイン」事業に関する辻本一好の考え方の変遷は北摂里山地域循環共生圏のホームページに掲載されている。（https://hokuces.jp/2019/10/20/kobenews/2022.5.6 閲覧）。
「日本チェーンストア協会の環境問題への取り組み」（https://www.jcsa.gr.jp/topics/environment/approach.html2022.2.6 閲覧）。
エリザベス・コルバート「『人新世』が動物たちを追い詰める　人間を中心とする時代がもたらしてしまうものとは」、二〇一九年九月二七日。（https://natgeo.nikkeibp.co.jp/atcl/news/19/092400547/2021.12.27 閲覧）。
ダナ・ハラウェイ、サラ・フランクリン、「マニフェストと共にとどまること　―ダナ・ハラウェイを迎えて―」逆巻しとね訳、二〇一九年。（https://hagamag.com/uncategory/42932022.1.5 閲覧）。

ピジョンブログ（Pigeonblog）についての情報
（https://nideffer.net/shaniweb/pigeonblog.php2021.11.1 に閲覧）。
環境省：『IPCC「1.5℃特別報告書」の概要』、二〇一九年七月。
（http://www.env.go.jp/earth/ipcc/6th/ar6_sr1.5_overview_presentation.pdf2022.6.24 閲覧）。
環境省による LNT モデルをめぐる論争
（https://www.env.go.jp/chemi/rhm/h29kisoshiryo/h29kiso-04-01-06.html2022.6.29 閲覧）。
環境省による生物種の絶滅についての情報
（https://www.env.go.jp/guide/info/ecojin_backnumber/issues/18-05/18-05d/tokusyu/2.html#main_content2022.5.1 閲覧）。
環境省による年間の追加被ばく線量 1 ミリシーベルト（mSv/年）と、空間線量率毎時 0.23 マイクロシーベルト（μSv/h）の関係
（https://www.env.go.jp/chemi/rhm/h30kisoshiryo/h30qa-02-20.html2022.4.10 閲覧）。
環境省による防護の原則：被ばく状況と防護対策
（https://www.env.go.jp/chemi/rhm/kisoshiryo/attach/201510mat1-01-135.pdf2022.3.20 閲覧）。
記事：「薪は自然な再生可能エネルギー」（https://www.aplusinc.jp/woodstove-guide/firewood/renewable_energy/2022.5.6 閲覧）。
記事：「物質不足で被災地の盗難増加　ガソリンや食品など被害」
（https://www.asahi.com/special/10005/TKY201103170165.html2022.6.26 閲覧）。
産業革命以前と産業革命後の大気中の二酸化炭素の含有量の変化に関する資料
（http://gis.geo.ncu.edu.tw/gis/globalc/chap0304.htm2021.5.18 閲覧）。
森林環境譲与税制度の詳細は林野庁のホームページ
（https://www.rinya.maff.go.jp/j/keikaku/kankyouzei/kankyouzei_jouyozei.html2022.5.6 閲覧）。
神戸市の森林環境譲与税を活用した森林整備実施計画の詳細
（https://www.city.kobe.lg.jp/a19183/bosai/shinrinseibi/shinrinkankyoujyoyozei.html2022.5.6 閲覧）。
総務省：「レジ袋有料化について」
（https://www.soumu.go.jp/kouchoi/substance/chosei/rejibukuro.html2022.2.6 閲覧）。
大阪健康安全基盤研究所「有機塩素系殺虫剤 DDT の歴史と未来」、二〇一七年三月三一日。（http://www.iph.osaka.jp/s010/030/020/040/010/20180107112000.html2022.5.17 閲覧）。
地エネと環境の地域デザイン事業についての情報（https://www.kobe-np.co.jp/info/chiene-kankyo/2022.6.22 閲覧）。
地エネの酒 for SDGs プロジェクトについての情報（https://www.kobe-np.co.jp/info/chiene-kankyo/sake/2022.5.5 閲覧）。
朝日新聞「『人新世』地球の限界を考える」、二〇二一年八月二日。
（https://www.asahi.com/articles/DA3S14996013.html2022.1.7 閲覧）。
日和山に関する資料（https://www.city.ishinomaki.lg.jp/cont/10452000b/-kanko/-kankomap/d0050/20130224152525.html2022.6.4 閲覧）。
陈静. 人人都是赛博格的未来，性别有没有可能真的会消失?.2019.（陳静「誰もがサイボーグになった未来では、性別が消滅する可能性もあるのか？」、二〇一九年。
https://new.qq.com/omn/20190725/20190725A07JJI00.html2021.10.31 閲覧）。
【新聞智庫】地球進入人類世. 2020.12.11.（記事：「ニュースワイズ：人新世を迎えた地球」
https://news.now.com/home/international/player?newsId=416255&catCode=125&topicId=552&main=y2021.11.10 閲覧）。

謝辞

本研究を遂行するにあたり、多くの方々の丁寧なご指導とご支援を賜りました。はじめに、博士前期課程、博士後期課程および研究全般においてご指導を頂き、絶えず励ましてくださった指導教官、嘉指信雄教授に心より深く感謝いたします。嘉指教授は二〇一九年三月に退官されましたが、筆者の研究に終始一貫して注目してくださっています。本研究はテーマの選定から論文作成に至るまで、すべて嘉指教授のご指導とご鞭撻の下で行われました。厚く感謝申し上げます。本論文の作成過程において指導教官、主査の中真生教授の温かいご指導とご助言により、本研究をより磨き上げることできました。心より感謝申し上げます。また貴重なご意見を頂いた、副査の茶谷直人教授、副査の原口剛准教授及び安倍里美講師に心より感謝いたします。先生方にご助言を頂いたことを通じて、自身の欠点に気づき、本研究にいっそう深く取り組むことができました。また、研究の過程において多くのご支援を頂いた研究室の仲間に感謝いたします。特に、大家慎也先輩には、論文の日本語のネイティブチェックなどについてご支援とご助言をいただきました。感謝の意を表します。福島でのフィールドワークにおいて、ジャーナリストである豊田直巳さん、3.11 未来サポート公益社団法人の語り部である高須賀正忠さんと石巻市在住の研究員である奥堀亜紀子さんを始め、多くの方々にお世話になりました。ありがとうございました。神戸における地エネと環境の地域デザイン事業に関する考察に際しては、神戸新聞社メディアビジネス局のイノベーション・パートナー部に所属している三宅秀幸さん及び神戸新聞社の論説委員の辻本一好さんに様々なご協力をいただきました。深くお礼申し上げます。最後に、いつも無条件に筆者を支え、見守り、どんな状況でも励まし続けてくださった母に、心から感謝します。